

明治三十七年十一月十五日定期増刊（毎月一回五日發行）
明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可

女學世界冬期增刊

# 家庭十二ヶ月

第四巻第十五号

博文館発行


東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕るべく候尚註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置き候に付き御立寄り御縦覧被下度様
奉希上候

女學世界冬期增刊

# 家庭十二ケ月

目次


人生觀……二

戀愛華厳の瀑……白雲行者

家庭錦嚢……讀書人

春の人事
冬の天然……

家庭十二ケ月……一三

都門の四季……∧△∧

消息十二ケ月……∧△△

家庭暦……

四季の出ある記……ゆかり女史

四季の衛生……糸左近

東都四季だより……菊のや

十二ヶ月循環社會暦……

田舍の四季……笑門

四季物語……

(春)捕虜の母親……

(夏)負傷兵……

(秋)世界漫遊者……

(冬)陣中の名物……

四季進物一覧……

音物贈答の心得……

名家年中行事……一記者

我家の小暦……白井俊子

魚類十二ヶ月……

野菜十二ヶ月……

四季の庖厨(魚類の部)……

四季の庖厨(野菜の部)……

料理十二ヶ月……鶴の屋

四季の挿花……

西洋交際の手振……

諸國名所舊跡案内……

各地物產名物一月……

小天地……一五三

貧乏女學生の一年記……藤村さだ子

新世帯日記……若き細君

育兒一ヶ年の經驗……松山俊子

家庭談叢……一八四

錢の足……双美作

雛祭人形天皇……乙女記者

衣食住の由來……考古博士

詞藻……一九九

和歌(菊、秋行路、天長節)

女學界彙報

女子大學秋季運動會……

支那留學の女生徒……

蝦茶袴の時様……


口繪


紅葉　着色畫……宮川春汀筆

山茶花　仝……市川秀方筆

▲あるかなきかのとげ……

▲滿洲富豪の婦人……

▲浦鹽斯德の女學生……

▲木陰……

▲都の春……

▲銀世界……

▲春のたより……

▲櫻花滿開……

▲皐月の空……

▲避暑旅行……

▲小春日和……

▲歲の暮……

表紙家庭十二ヶ月……三宅克巳

理學士 山崎直方先生
理學士 佐藤傳藏先生
共編

# 大日本地誌

文學士 齋藤龍三君
理學士 大日方順三君
文學士 大塚久君
田山録彌君
補輯

裝幀

全部十卷菊判總紙數約八千餘頁
脊皮金模様金文字入頗高尚優美

## 卷參 中部 近刊

第一編 地文
第一章 地形
第二章 海河並に海岸線
第三章 地質
第四章 氣象

第二編 人文
第一章 沿革
第二章 政治宗教
第三章 産業

第三編 地方誌
靜岡縣、長野縣、愛知縣、岐阜縣

我邦空前の大著たる大日本地誌は、既に第一關東、第二陸羽の二卷を刊行し、今又爰に其第三中部の卷の發刊を見るに至りぬ。夫れ中部の地たる海岸線は關東陸羽に比して及ばざるも火山糵の形狀、河流の壯大頗る研究に價すべきものあり、殊に此の地方には中京名古屋の如き乃至は靜岡長野の如き繁盛なる都會を有するが故に、人文發達の上に注目すべき事多く、沿革はまた德川時代の爭鬪史に富み産業は工業、鑛業、林業に於て他地方に卓越し、政治、宗教、敎育、地方誌に關して記すべき事甚だ多し。今此篇を編むに當つて、著者は凡て最近の材料に依り、勉めて詳細にまた努めて簡明ならん事を期しぬ。其の如何に苦心經營の結果に成りたるやは、本書を繙く人の必らず首肯する所ならん、地形地質圖及び寫眞版皆共に精巧無比。

既刊
第一卷 關東 正價二圓五十錢 小包送料十五錢
第二卷 陸羽 正價二圓五十錢 小包送料十五錢

續刊
第四卷 近畿 第八卷 九州
第五卷 北陸 第九卷 北海道
第六卷 中國 第十卷 臺灣琉球
第七卷 四國（以上）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

紅葉

宮川春汀筆



# 山茶花



市川秀方女史筆

あるかなきかのとげ



（白馬會出品和田英作氏筆）

（記事參照）

東京博文館印刷

滿洲宮家の婦人



浦鹽斯德の女學生



（露西亞の女學校生徒）

木蔭



（白馬會出品小林萬吾氏筆）

# 美術繪葉書

日本葉書會發行

**第一編** 海戰之部（第一輯） 木曜會圖案

●石版極彩色（六枚） 正價十五錢

目次
日の出の我軍艦 露艦の沈没
露艦の火災 旅順港内敵艦の自仭
舷頭日章旗飜 露艦の敗竄

**第二編** 陸戰之部（第一輯） 木曜會圖案

●石版極彩色（六枚） 正價十五錢

目次
征露義戰紀念 軍人の精神軍旗
騎兵の奮闘 步兵の射撃
露營 赤十字事業

**第三編** 旅順之海戰 山中古洞畫

●寫眞彩色（拾二枚） 正價十二錢

目次
旗艦三笠と東郷司令長官 軍艦初瀬と梨羽司令長官
軍艦朝日と山田艦長 軍艦敷島と寺垣艦長
軍艦富士と松本艦長 軍艦八島と阪本艦長
軍艦出雲と上村司令長官 軍艦磐手と武富艦長
軍艦淺間と八代艦長 軍艦常盤と吉松艦長
軍艦日進歡迎と大井上艦長 軍艦春日歡迎と竹内艦長
附錄 旅順海戰之軍歌

**第四編** 在韓之我陸軍 日本葉書會撰

●寫眞彩色（拾二枚） 正價十二錢

目次
入韓先鋒 月尾島上陸
皇師無敵 仁川停車場
軍曲緋々 鐵騎嚮々
懸軍萬里 雪中進軍
一視同仁 大使参内
輸送船來 文士觀戰

此葉書購求者へは岡部文學士作討露軍歌無代進呈

**第五編** 海戰之部（第二輯） 渡邊審也畫

●石版極彩色（六枚） 正價十五錢

**第六編** 陸戰之部（第二輯） 和田英作畫

目次
敵砲臺を燒く 露艦の全滅
水雷の發射 敵艦器械水雷に觸る
水雷艇の爆發 氷上の鐵道

●石版極彩色（七枚） 正價十五錢

目次
步哨 偵察
夜營 騎兵の突進
突貫 負傷
日本刀

●旅順陷落紀念 中村不折君畫

●石版金銀極彩色（六枚） 金十五錢

目次
大和魂 猛鷲の殺戮
騎兵の格闘 ペトロパウロウスク爆沈
金州城占領 艦上敵將と戰ふ

（千部限）再版せず……賣切ぬ内購求を望む

●東京名所繪葉書 上下各六枚一組

●コロタイプ彩色刷頗美麗 定價十三錢

上目次
宮城二重橋 上野公園の櫻
四ツ目牡丹 日比谷公園
不忍の蓮 隅田川端艇競走

下目次
芝公園靈廟 龜井戸の藤
堀切の菖蒲 淺草公園凌雲閣
團子坂の菊 兩國川開

●今樣美人はがき 六枚一組

●コロタイプ彩色刷頗婉麗 定價十三錢

目次
洗ひ髪 女學生
秋波 彈曲
洋裝 令孃

近刊

花鳥繪葉書 野口小蘋跡見花蹊女史筆
遼陽占領紀念 太田南岳君圖案
時局漫畫はがき 北澤樂天君畫
花と女 寺崎廣業君筆
女學生 武内桂舟君筆
日本美人 水野年方君筆

發賣元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（甲の二）

（甲の三）

# 少年工藝

石井研堂君著

## 第十三編

### 陶器の巻

少年陶山氏は窯業熱心の人にて陶土、火力、窯、燒成、釉藥等一切の答辨詳審、如何なる素人も陶器の何物たるを知り得べし。

## 第十四編

### 漆器の巻

漆塗法を學理的に說明しその實驗をすゝむるは少年七木氏なり本書を讀みて後、潤美滑澤の漆器を見ればその趣味一層深かるべし。

## 第十五編

### 時計の巻

大小各種の時計を製造する所の工業は頗る趣味多く又人類に大幸福を與ふるものたり。少年來間氏之を說きてまた遺す所なし。

## 第十九編

### 煙草の巻

煙草殊に紙卷煙草の工業的奇觀を仔細に知らんとするものは、少年八雲氏の本書について學ぶべし思ひ半ばに過ぎん。

## 第二十編

### 砂糖の巻

內外砂糖の原料、製造法、製造機械、砂糖と人類の關係等を一讀瞭然たらしむるは本書の主旨にして、少年五味氏の研究にかゝる。

## 第廿一編

### 釀造の巻

和洋酒類發酵の原理より工業的釀造の方法まで反覆說明之を掌上に指す如し、少年三輪氏特得の解說法にて精密至れり盡せり。

發兌元　東京市日本橋區

(甲の六)

# 文庫完成

正價一冊十五錢六冊八十五錢十二冊一圓六十五錢全部三圓廿錢郵稅一冊四錢

## 第十六編

●マッチの卷

一本のマッチを心なく費す人は多けれども之を製造する法を知らざる人多し。少年新火氏は大マッチ通にて所說觀るが如し。

## 第十七編

●織物の卷

織田組子女史木綿平織より絹の紋織に至るまで說くと平易流暢順序あり、殊にジカード機の說明の如きかゆき所に手屆けり。

## 第十八編

●染色の卷

日本固有の法は勿論西洋人造染料染法まで其理論と實際と染色法の一般を明にせるは、少年染田氏の說につきて見るを要す。

## 第廿二編

●石油の卷

人家每日必要の石油に就て採掘より精製までの實況を詳明し北越油田地方を紹介せるもの本書なり。少年石田氏の擔任とす。

## 第廿三編

●機械の卷

工業上必要の諸機械類につき少年幾田氏能く其運轉の妙用を自得し解剖說明人をして車響煤烟の間に在る想あらしむ。

## 第廿四編

●建築の卷

和洋建築一切に關するその術と珍談奇說を併せ錄し、建築の何者たるやを知らしめたるものなり。少年手置氏萬丈の大氣焰。

本町三丁目　博文館

(甲の七)

# 中學課程 數學講義錄

每月一回 十五日發行　主筆 竹貫登代多君　十一月十五日發行

## 算術ト三角 —(第七號)—

第一學年（課程 約數ノ性質ト素數並ニ問題）（解義 問題第貳拾ヨリ第貳拾四）
第二學年（課程 複利法ト問題）（解義 問題第八ヨリ第拾）
第五學年（課程 二ツノ角ニ關スル公式ト問題）（解義 問題第七）
補習科（課程 試驗問題ヲ以テ之ニ代フ）（解義 試驗問題解義ノ欄ニ揭グ）

## 代數學 —(第七號)—

第二學年（課程 割リ算ト問題）（解義 問題第九、第拾）
第三學年（課程 最大公約數ト問題）（解義 問題第七、第八）
第四學年（課程 等差級數ト問題）（解義 問題第拾六）
補習科（課程 試驗問題ヲ以テ之ニ代フ）（解義 試驗問題解義ノ欄ニ揭グ）

## 幾何學 —(第七號)—

第三學年（課程 圓ノ定理ト問題）（解義 問題第四）
第四學年（課程 比ト比例ノ定理）（解義 問題第貳ノ續キ）
第五學年（課程 立體平行直線ト平行平面）（解義 立體幾何學問題第參）
補習科（課程 試驗問題ヲ以テ之ニ代フ）（解義 試驗問題解義ノ欄ニ揭グ）

---

研究資料
文部省檢定本試驗問題
算術解義　淨土宗中學校教授 出野淺治君
文部省檢定本試驗問題
代數學解義　攻玉社中學校教頭 鈴木長利君
文部省檢定本試驗問題
幾何學解義　攻玉社中學校教授 飯田與三君

答案之部
文部省檢定試驗問題　算術六問
文部省檢定試驗問題　代數五問
文部省檢定試驗問題　幾何五問
東京商船學校無試驗入
學志願者選拔試驗問題　數學六問
同校入學豫備試驗問題　算術三問
同校入學豫備試驗問題　代數三問
同校入學豫備試驗問題　幾何三問
同校入學豫備試驗問題　三角三問

問題の部
文部省檢定本試驗（第十六回）問題
陸軍士官候補生試驗問題
海軍機關學校入校試驗問題

**正價**
各種共一冊……金拾錢宛
三ケ月分……金貳拾九錢宛
六ケ月分……金五拾七錢宛
一ケ年分……金壹圓拾錢宛
△外に郵稅……每冊壹錢宛

---

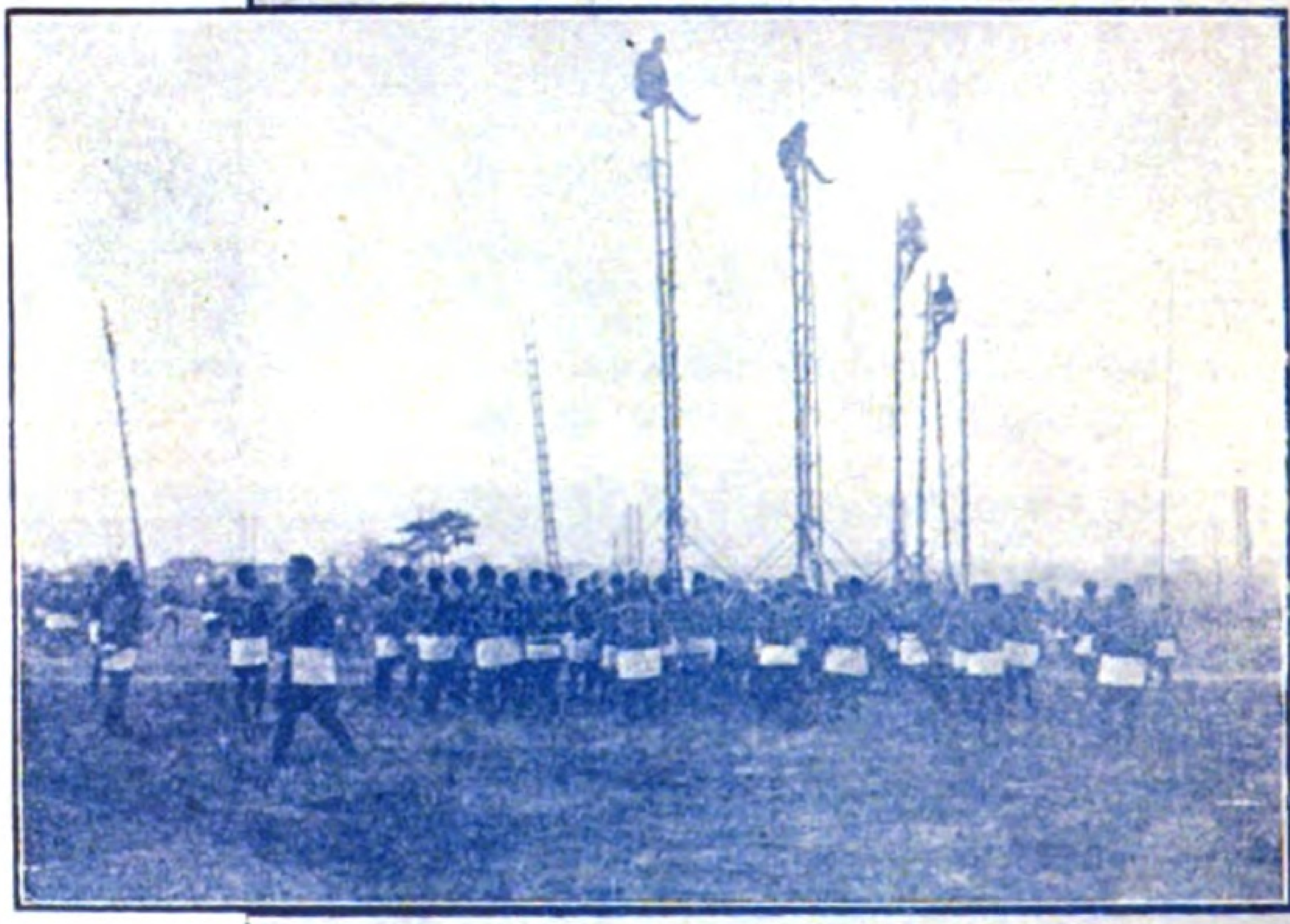
發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(甲の八)

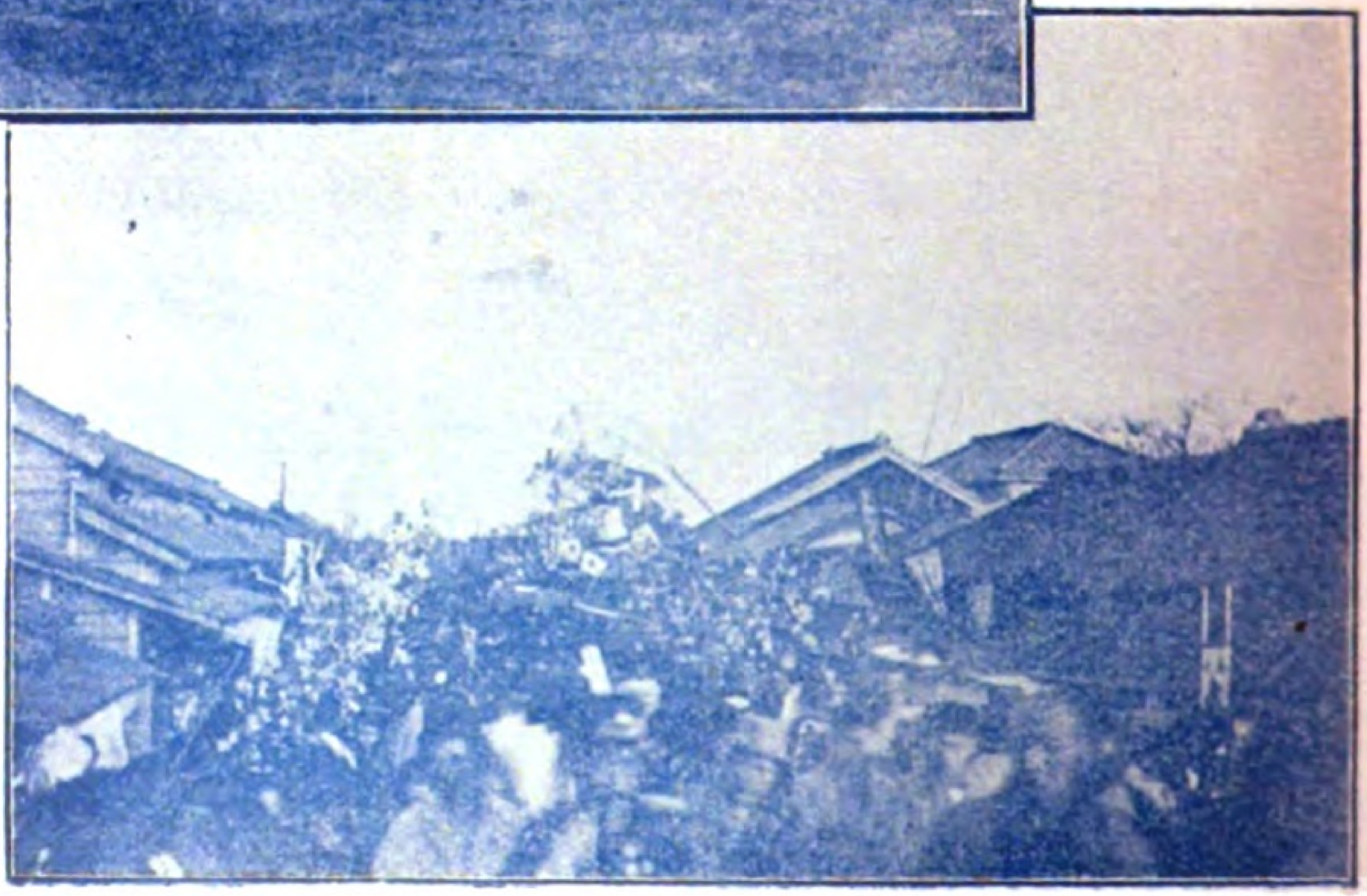
# 都の春
## (一月)



元旦の二重櫓



消防出初の式



初卯詣

# 銀世界

（一月下旬より二月中旬まで）



上野公園忍ヶ岡の降雪



同公園動物園前

# 春のたより

（二月上旬より三月上旬まで）（立春）



江東梅園



嵯峨野の摘草



木下川の梅園

# 櫻花滿開

（三月下旬より四月中旬まで）



上野公園の櫻



吉野山一目千本の櫻



開盛山の櫻花

わきが特効劑
防臭芳香液

○試用分五拾錢
○小瓶入壹圓
○中瓶入貳圓
○大瓶入參圓
▲郵稅各拾錢宛

本品は獨逸にて輓近發明せる透明の液にして佳香を放つその特色は極めて強よき殺菌作用を具有するにあり故に如何ほど劇しき腋臭も一回用ふれば直ちに臭を除き速用僅かにて容易に根治し勿論身體に障害なく衛生上交際上日常欠くべからざる最良新劑なりされば腋臭に限らず多血性局部發汗過剩惡臭に膩む人の必携すべき要劑なり速かに試用あつてその効顯を知り賜へ

東京市日本橋區本石町三丁目角
合資會社 博愛堂藥店
（電話本局二八六番）

五大軍醫合議製劑

藥價 五週分壹円、三週分六十五戔、二週分四十五戔、一週分二十五戔、二日半分十戔




本舖 東京銀座壹丁目
出張所 大阪南久寶寺町堺筋東
山田安民

全國各藥店にて取次販賣す

▲軍國文壇の大偉觀

萬朝報記者 松井柏軒先生新著

# 冷語熱語

全壹册

定價金四拾錢 郵稅六錢

目次

皇室篇 滿韓問題 戰局觀
政事論 經濟觀 風俗觀 雜篇

直言憚まず。暢達なる文を遣るに勁健なる思想と明晰なる論理とを以てす。冷罵熱嘲。權姦巨豪を戰慄し震慴せしむ。其の滿韓問題を解釋するや議論正大にして一世を警醒し。海陸の戰局を批評するや。評說明晳にして群論の宗たり。本書の特色は玆にあり。殊に時務を識らんとする有爲なる讀書家の精讀を求む

發兌元 東京京橋區弓町 三松堂

（その一）

天地開闢の昔より金甌無缺、敢て外侮を受けぬ國と歌はれし我が日の本は今や世界に新たなる光を放ちて二十世紀の一大雄國となりぬ。これ實に千載一遇の好機會にして何人も手を空うするの秋にあらず、我が『女子文壇』は實に此の好機會を以て、發刊の第一聲を揚げんと欲す。智德を磨かんと欲する婦人は來れ、才能を開かんと欲する婦人は來れ、良家庭を作らんと欲する婦人は來れ、處世の方便を得んと欲する婦人は來れ、舊き生涯を捨て、新らしき運命を開かんと欲する婦人は來れ、請ふ明治の才媛、二十世紀の淑女は來つて我が『女子文壇』の素志を成さしめよ。

▲▲（第一號への投稿〆切は十一月三十日迄到着分）




## 每月一回（一日）發行

**定價** 一冊（大判百餘頁）金拾錢〇六冊前金五拾七錢〇十二冊同壹圓八錢〇外郵送料一冊壹錢宛〇郵券代用必ず壹割增〇爲替京橋南傳馬町局振込〇注文は一切前金

▲第壹卷 **第壹號** 三十八年一月一日發兌（每號鮮麗寫眞口繪數葉挿入）

江湖名流の佳什と賢婦、才媛の手になる錦心繡膓は、千朶萬朶の花の如く、燦然として光を放つものは實に我が女子文壇の特色なり

## 特色 寄書歡迎

才媛の手になる◉和歌（半紙一枚三首限）◉新體詩（半紙一枚十句以內）◉小說（短篇讀切廿四字詰百行以內）◉俳句（新舊各端書一枚一句宛）◉消息文（廿四字詰二十行以內）◉寫生文及び雜文（廿四字詰四十行以內）◉投書は斯界名家の親切丁寧なる校閱を經て本誌に掲載す◉每號新案の奬學賞品法あり…細詳は本誌第一號に就て知るべし、

**發行所** 東京市京橋區大鋸町拾壹番地 **女子文壇社** 社主 野口竹次郎

市內特約大賣捌 東京堂。東海堂。北隆館。良明堂 其他全國各地新聞雜誌書店

（乙の四）

本會總裁小松宮妃殿下御辭退の處今度新に伏見若宮妃殿下を本會名譽總裁に戴き奉る

# 女學通信教授 會員募集

●本會の目的は世の女子にして種々の事情に支へられ小學卒業後進んで高等女學校に入學する事を得ざる者の爲に講義錄を配布し居ながら女子必須の諸學科を講習せしめ廣く一般女子の人格を高むるに在り

●本書は忠實に女子敎育に貢獻する事玆に十年會員既に三萬餘人に及ぶ

●諸學科の講義は第一流の名家之を擔當し輕佻の風を避け實益を旨とし嶄新高尚なる學說をも平易懇切に講述し假名を振り傍訓を加へ初學者にも解し易からしむ

●講習者の學力に應ぜん爲に講義錄を高等と簡易との兩科に別つ會費は簡易科一ヶ月貳拾錢高等科同四拾錢とす

●ハガキにて申込あれば直に詳細なる會則を送呈すべし

東京市麴町區下二番町三七 **大日本女學會** （電話番町千三百三十番）

（乙の八）

阪本隆哉君著 小峯大羽君寄書入

# 衛生食物調理法

全壹册 和製本

▲正價參拾錢 ＝ 郵税金六錢

## 目次

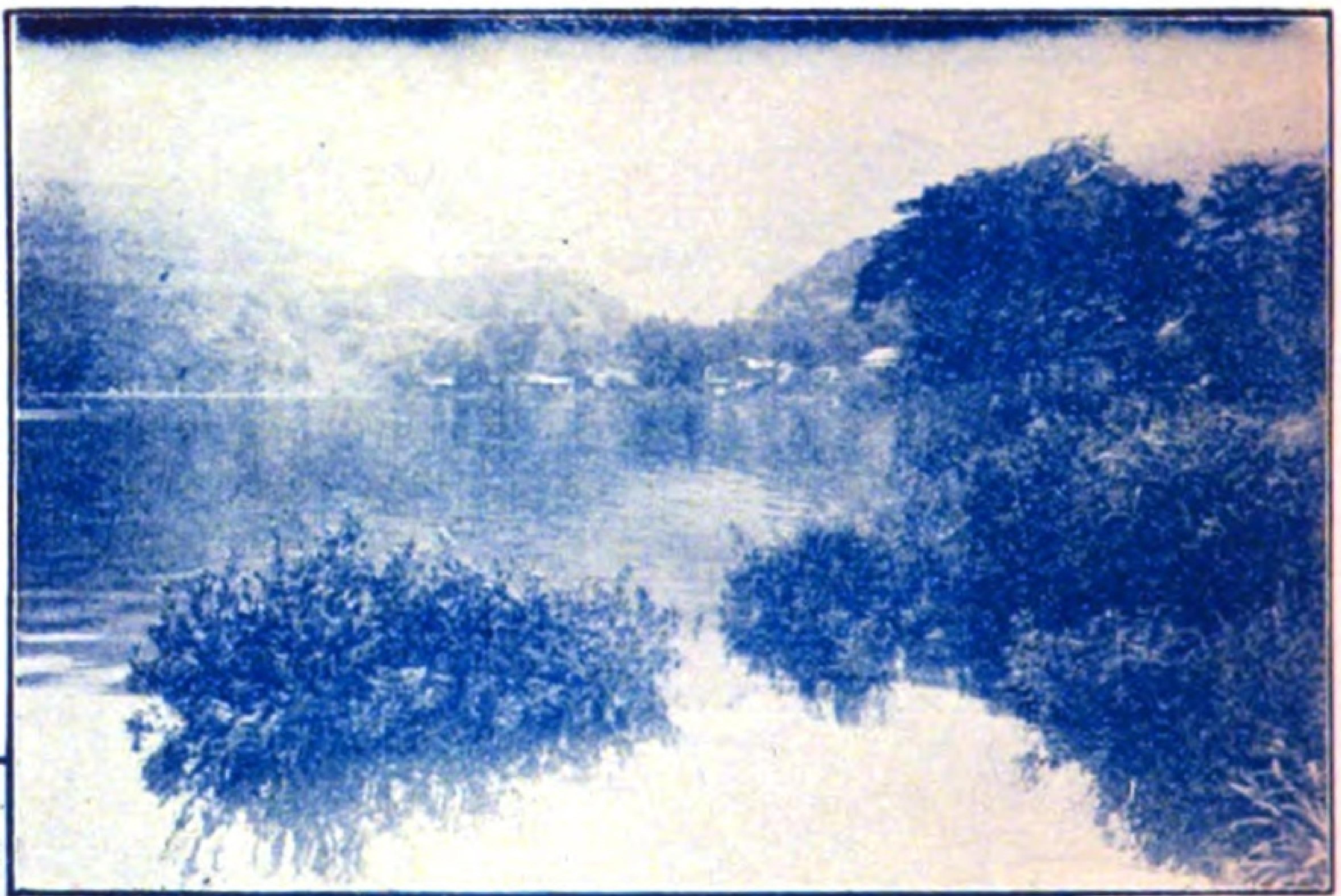
(一)調理に就ての心得(二)金と時間の經濟(三)器具(四)色素類(五)飲料水(六)中毒(七)魚、鳥、米、野菜の鑑別(八)調理の方法(九)香味料と嗜好品(十)庖刀の切り方(十一)食物調理の便宜方法(十二)出し汁(十三)注け酢、注け醬油、注け酒、附味噌、混味噌の製法(十四)刺肉及膾類(十五)汁類(十六)羹物及蒸物類(十七)煮物類(十八)炙物類(十九)和物類(二十)浸物拵樣(二十一)揚物の仕方(二十二)鮨の製法(二十三)寄せ物類及蒲鉾、はんぺん、しんじよ(二十四)調理雜集(二十五)人体營養の事(二十六)食物の消化吸收の事(二十七)小兒營養の事……

本書は從來の料理法より其衛生に叶ひたるものを撰擇し其調理法を最も平易に述べたり故に日常の膳椀に上るべき食物も此書によりて調理すれば滋味多くして人体を加養すべし例へば章魚は皮を去り奴豆腐は沸湯を注ぐなど其外野菜の洗方切り方煮方又は炙り方食物の着色中毒物又は飲料水の選び方器具の清潔小兒の食物など逐一說き示したり家庭衛生として日用料理の師冊として各家是非一本を備へらるゝの必要あることを知るべし。

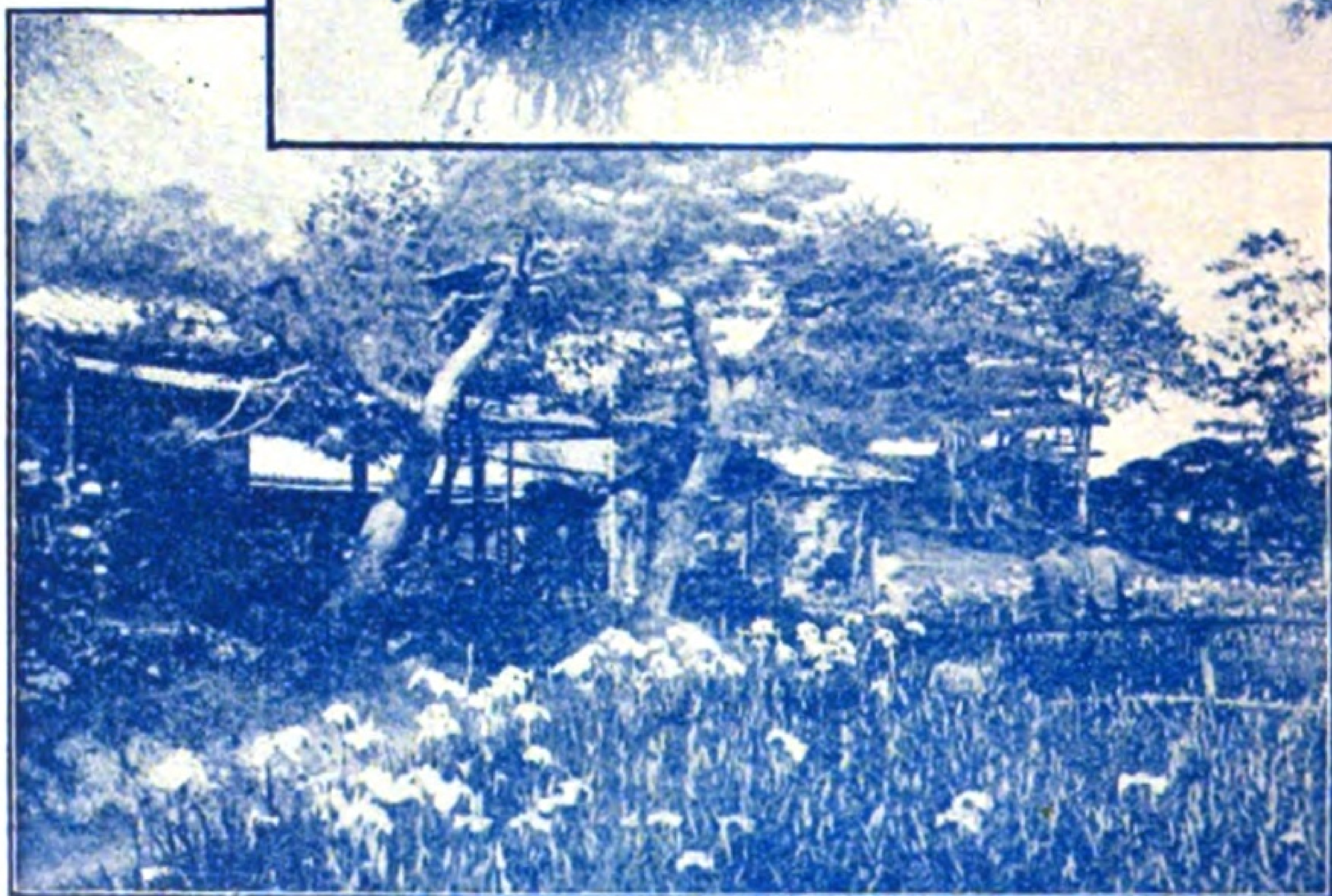
發兌元 東京本町 **博文館**

# 皐月の空

（五月上旬より六月下旬まで）



箱根湖畔の緑陰



堀切の花菖蒲



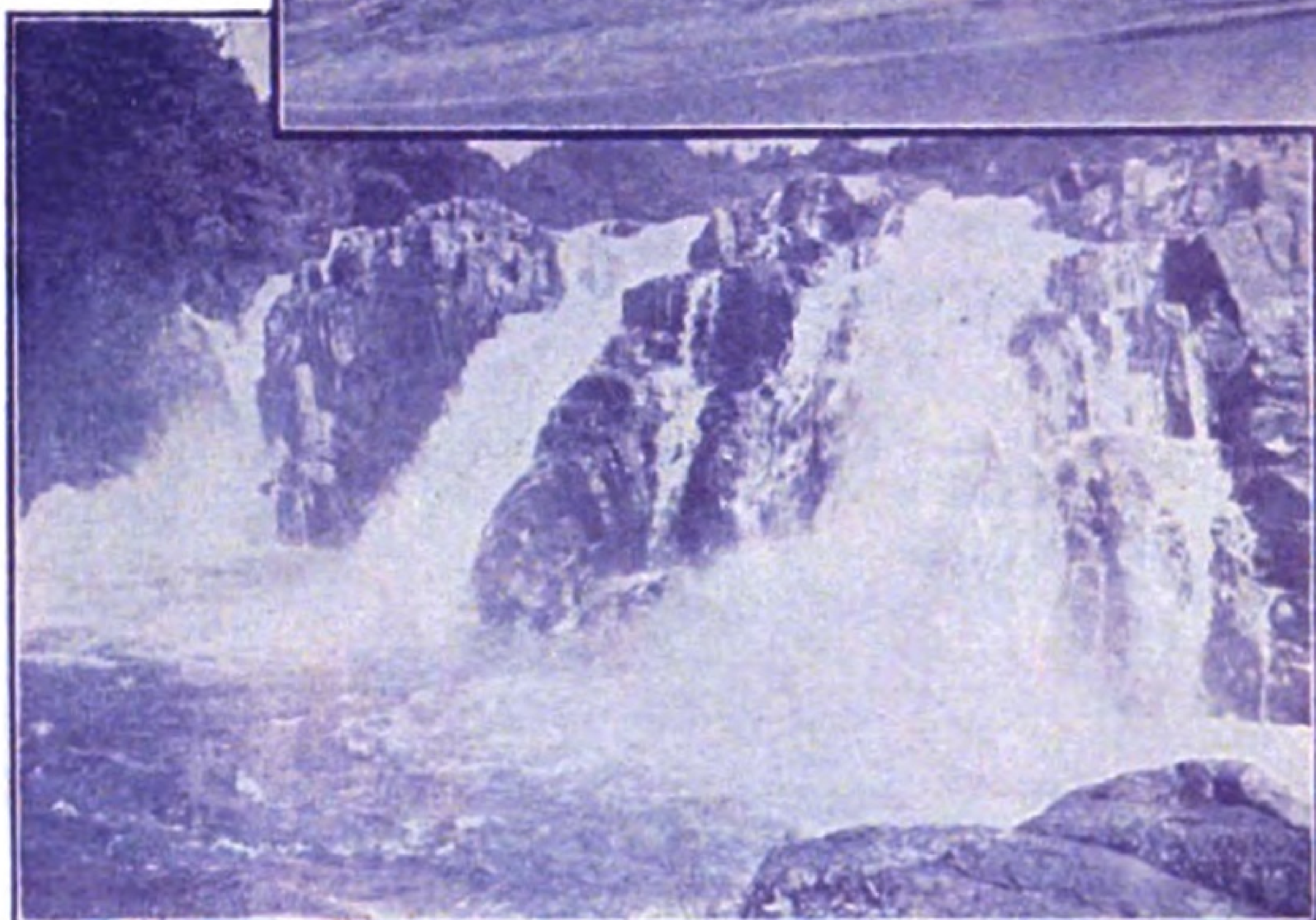
熊野新宮の田植

# 避暑旅行

（七月上旬より九月下旬まで）



名所松島



豐後魚住の瀑



鎌倉由井ヶ濱

# 小春日和

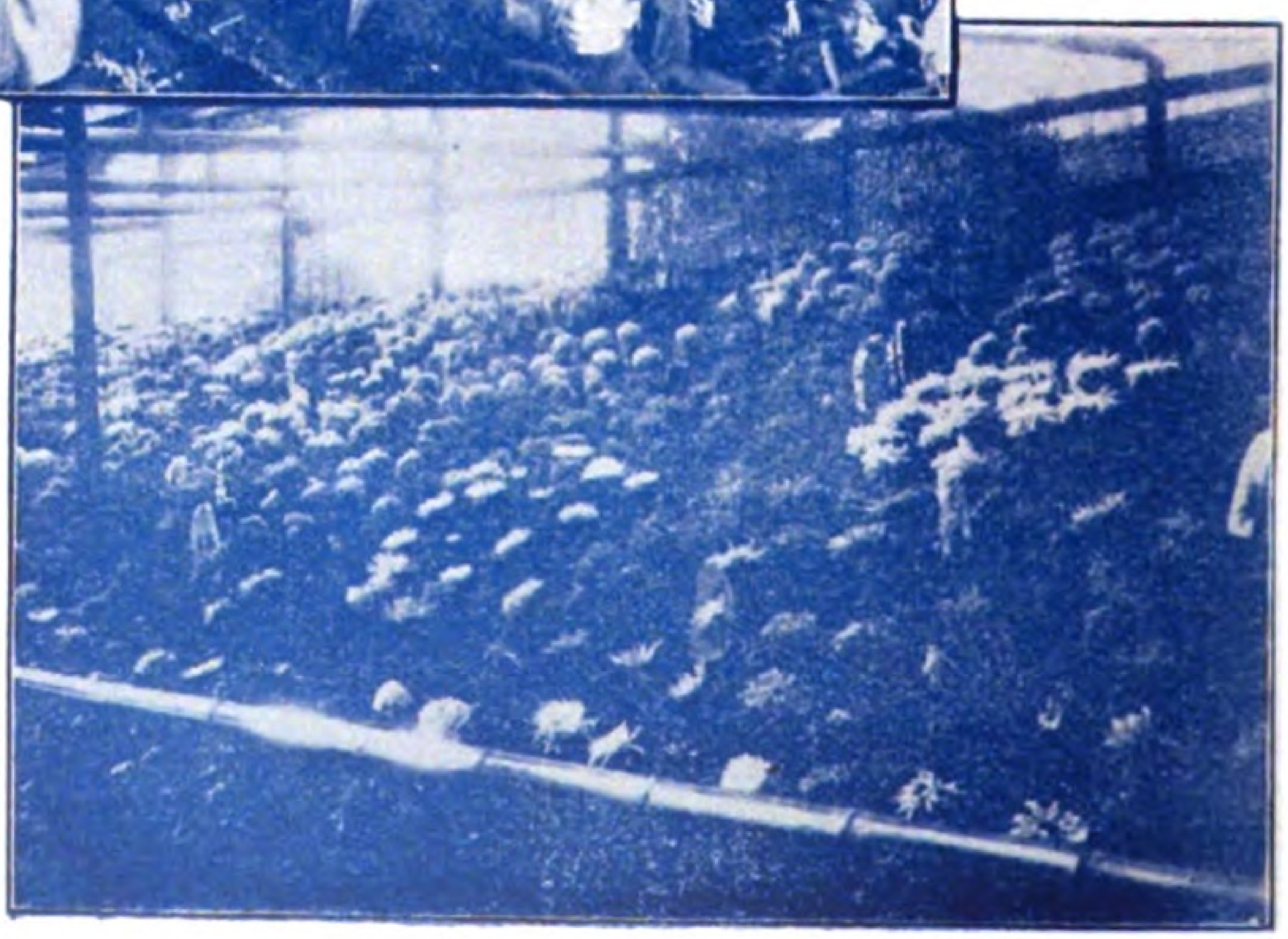
（十月上旬より十一月中旬まで）



日光の紅葉

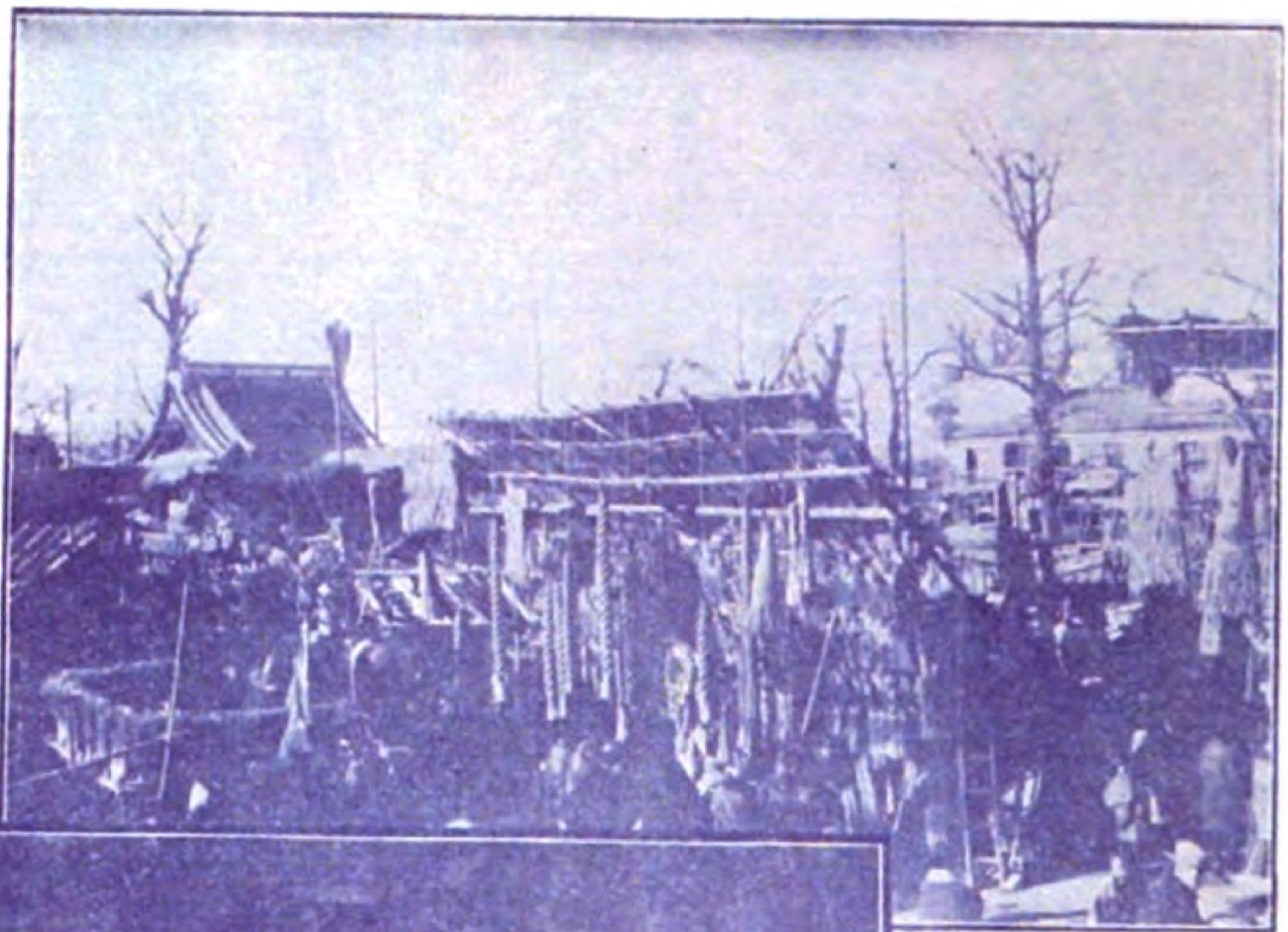


天長節の朝



團子坂の菊花壇

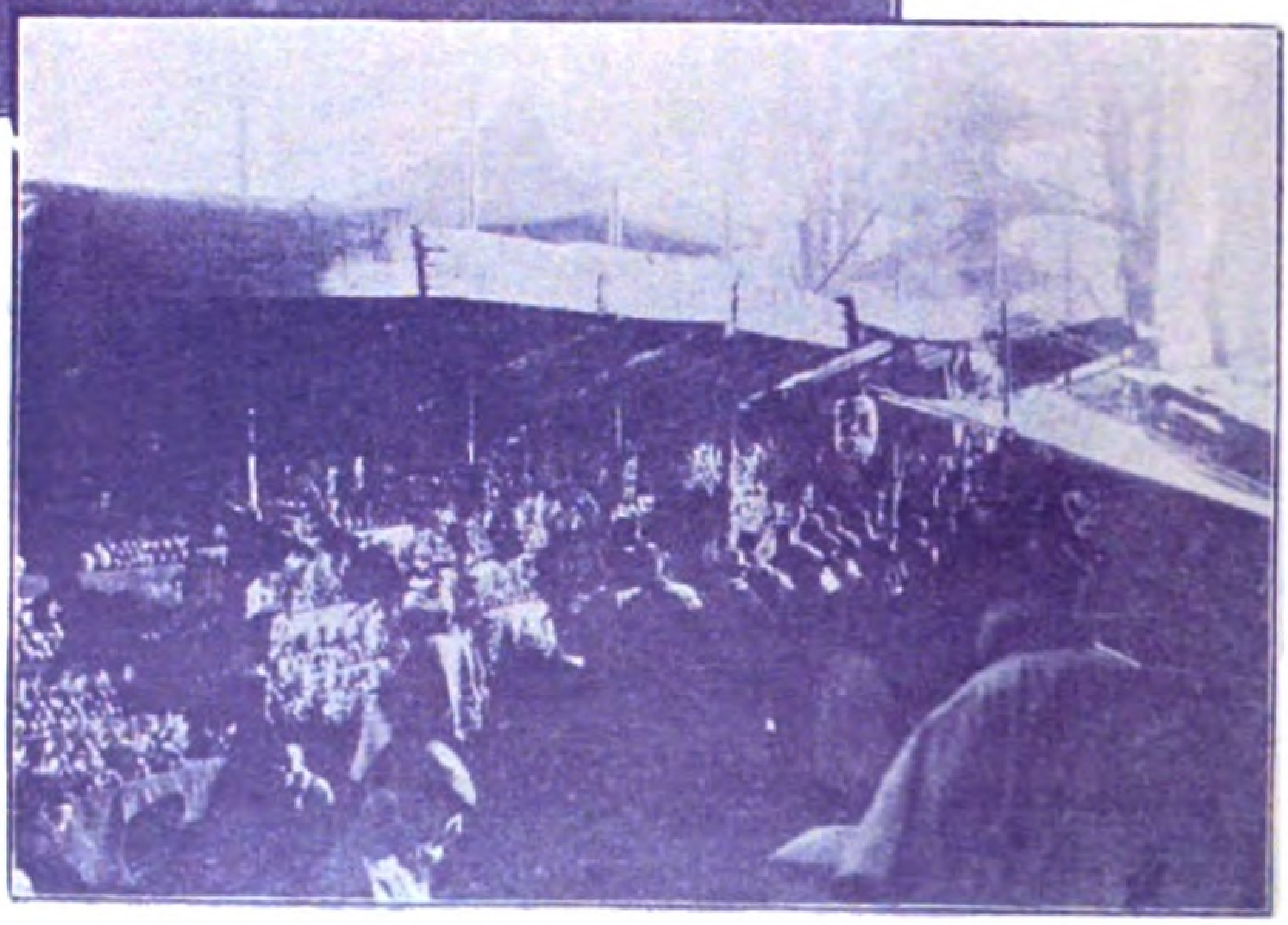
# 年の暮
（十二月）



浅草公園の年の市



歳暮の獲物



大晦日の夜

# 醫學新書新刊

醫學博士 土肥慶藏君序文

醫學士 旭憲吉君著（製本既成）

# 泌尿生殖器病學

着色石版寫眞銅版西洋木版數百個入

全壹册

洋裝上製背皮金字入美本
紙數九百卅頁
正價金四圓
小包送十五錢

醫學書の新著日に新に月に盛にして汗牛充棟啻ならざるも、未た純粋なる泌尿生殖器病學の刊行あるを見ず、而して事實は男女の如何を問はす此疾病に呻吟するもの豫想外に夥しく慢性淋病患者の如き終生不治の疾患たるものと自棄し敢て療養を加へずして忍苦放却するものあり、之れ元より患者の愚たるに出づと雖、醫士も亦與て其責を頒たざるべからず、之を要するに泌尿生殖器病科の我國に專門獨立せるは僅かに數年にして今日も其大部分の患者は外科若くは婦人科に於て處置しつゝある に過ぎず、從て其治療の不完全不適當なると勢免れざる所なりとす、本館玆に見る所あり斯學の專門家旭學士に托し本書を發行す、

本書は先つ大體を總論各論に大別し總論に就ては泌尿生殖器の圖解をなし次に尿の組織的細菌的理化學的及臨床的檢査の四章を詳細に記述し、各論に於ては泌尿器病、生殖器病、泌尿生殖器黴毒、花柳病性潰瘍及泌尿生殖器官能障害の五章とし其記述は務めて實地應用を目的としたるを以て繁簡其宜しきを得精粗皆適切を極め實際外科的技術を要するものは之を省略し秘尿器病に於ては淋病及膀胱病を詳かにし腎臟病にして多くは外科に屬するものは簡潔明快を旨とせり其他「ブーシー」挿入法及尿道鏡膀胱鏡檢査及使用法等皆圖解を附して懇切に說明せるの外挿圖百有余にして讀者をして一目瞭然たらしむ、之を坐右に於て熟讀參考せば其治療上稗益する所蓋し尠少ならざるべし

## （醫學新書既刊書）

醫科大學敎室助手 醫學士 石原弘君著（全一册）

### ●藥物學

正價金貳圓
小包送料貳拾錢

王子精神病院長 門脇眞枝君著（全一册）

### ●精神病學

正價金貳圓
小包送料貳拾錢

醫科大學敎室助手 醫學士 石原弘君著（全一册）

### ●人體解剖學

上卷

正價金參圓
小包送料拾五錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

# 帝國百科

## 第百拾五編

理學士 吉田弟彥君著

# 地文學

（製本既成）

上製 五十五錢 郵税十錢
並綴 四十錢 郵税八錢


第一編 總論 地球星學
地球の成因●大陽系●地球の形狀及大さ●地球比重の測定●地球の重力の測定●地熱●地球內部の狀態●地磁氣●地球の運動●經緯度●晝夜の長短●四季及五帶●日蝕及月蝕●地圖（以上十四章）
第二編 氣圈學
大氣●氣溫●氣流●大氣中の水分●氣圈に於ける光の現象●天氣及氣候（以上六章）
第三編 海洋學
海の分布●海水の性質●海水の溫度●海泉●海底●海水運動（以上六章）
第四編 陸圈學
陸地の分布●陸地を構成する石●地史原統●地層の排置●陸界の種類●平原及臺地●山嶺及溪谷●河川●海岸線●陸界の變動（以上十章）
第五編 生物編
生物の分布●生物の移動及變動●地球上に於ける人類の位置●日本の文明と天然の關係●地球上人種の分布（以上五章）


## 第百拾六號

文學士 高木敏雄君著

# 比較神話學

（製本既成）

上製 五十五錢 郵税十錢
並製 四十錢 郵税八錢


第一章 （一）神話學の概念及其由來（二）比較神話學說……
第二章 （一）太陽神話（二）天然物素諸神（三）天地開闢神話……
第三章 （一）罪惡の神話的說明（二）人文神話（三）死と火との起原……
第四章 （一）支那洪水神話の英雄（二）洪水說話の比較……
第五章 （一）英雄成功神話（二）勇者求婚說話（三）怪物退治說話（四）動物說話……
第六章 （一）神婚神話（二）白鳥處女說話（三）仙所淹留說話——餘論


發兌元 東京日本橋區

（丙の二）

# 全書新刊

## 第百拾七編

文學士 久保天隨君著

# 日本儒學史

（製本既成）

「戰國時代朱學の泰斗桂庵玄樹禪師、示寂の後正に四百載、南信兜城の處士久保天隨、其稀世の學德を追慕するの餘り謹んで此書を撰し、聊か蘋藻の勇に代ふ」これ著者が本書卷頭に題せし辭にして其用意の周到なるを知るべし、一卷三百餘頁、先づ「應神以前漢籍傳來の有無に起し、王朝の學者を傳し、次いで五山戰國に及び、禪林俊髦の事蹟を審にし、「藤原惺窩の南航」「南學の弘布及革造」に至る、敍述詳悉、考證精確、從來尋常史家の困却せし隱伏せる事實を抉剔すること極めて夥多、まことに破天荒の一大撰述たるに負かず、本館特に請ふて本叢書中に收むる所以、固より徒爾ならざるなり。

上製 五拾五錢
郵稅 拾錢
並製 四拾錢
郵稅 八錢

## 第百拾八編

彥根第三佛敎中學校敎頭 文學士石原即聞君著

# 日本佛敎史

（製本既成）

佛敎の初めて我國に傳來せしは今より一千三百五十二年の昔の事なり、其間時に弊害なきにあらざりしも我國の精神的幷に物質的の文明に貢献せし處實に尠しとせず、斯く我國の文明に多大の關係を有する一大宗敎の傳來起原若くは敎義の研究に心を用ゆるは少くとも現代學者の義務なり、彥根第三佛敎中學校敎頭文學士石原即聞君夙に茲に着眼し今や本書の著あり、由來我國佛敎史に關する書少からずと雖其多くは專門家の手に成り、一般人士の解しがたきもの多し、然るを本書は此缺陷を補ひあらゆる諸書を參酌して沿革的系統を立て最も平易に其變遷を敍述せられたれば日本佛敎の歷史を知らんには無比の良書なり

上製 五拾五錢
郵稅 拾錢
並製 四拾錢
郵稅 拾錢

本町三丁目 博文館

（丙の三）

最も高評なる
最も正確なる
最も便利なる
最も經驗ある

卅八年
博文館・當用日記・懷中日記

發賣廣告

# 明治三十八年 當用日記

●紙數 中形大形共五百四拾餘頁 小形五百卅餘頁

大形 菊判 上製（舶來洋紙總クロース金字入） ●正價金五拾錢 郵稅拾四錢

中形 四六判 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入） ●正價金五拾錢 郵稅拾貳錢

中形 四六判 上製（舶來洋紙總クロース金字入） ●正價金三拾五錢 郵稅拾錢

小形 菊判半截 上製（舶來洋紙總クロース金字入） ●正價金三拾錢 郵稅八錢

## 特色

用紙（何レモ海外製紙會社ヘ特ニ注文漉製セシ特別上等紙ヲ用ユ）

印刷（秀英舍新規鑄造セシ活字ヲ以テ注意印刷ス頗ル鮮明ナリ）

製本（弊館ガ特ニ歐洲ヨリ輸入セシ新機械ヲ以テ堅牢美麗ニ製本ス）

趣向（當用日記）日々欄ニハ過去同月日ノ重要歷史、七曜、干支等ヲ錄シ天氣、寒暖、受信、發信等ヲ記入スベキ欄ヲ設ケ、普通記入部ニハ細罫ヲ附シ秩序アル記錄タラシムルニ適セリ」附錄トシテハ紙數十二頁ノ補遺金錢出納

(丙の四)

# 明治三十八年 懐中日記

**新形**（船來洋紙顛美本總クロース 金文字入細長形携帯至便）●正價金貳拾錢 郵税二錢

**上製**（船來洋紙顛美本總クロース金文字入紙數三百餘頁）●正價金拾八錢 郵税二錢

**並製**（船來洋紙總クロース表紙 金文字入紙數三百餘頁）●正價金拾貳錢 郵税二錢

## 體裁 ◎

表、收支一覽表、友人住所錄、最新重要統計及日常必須ノ諸規則ヲ網羅セリ

（懐中日記）毎月ノ初ニ當月ノ行事、食品月令、遊覽案內、陰曆氣節等ヲ掲ケ日々欄ニ過去同月日ノ歷史、七曜、干支、天氣、寒暖ヲ記スル等當用日記ノ如ク、卷末ニハ金錢出納錄アリ又日常有用ノ事項諸税則及最新重要ノ統計表ヲ附セリ

弊館出版の懐中當用兩日記の正確堅牢にして實用に適するは玆に喋々するの要なし今回用紙印刷體裁製本に至るまで尙一層の改善を加へ殊に本年調製の新形懐中日記はポケット挿入に至極便利にて附錄には重要規則類あり又名刺代用の切取線付の白紙あり、又當用日記は舊に倍して一層優美に裝釘し尙趣向の改良を加へて記入の便を計り小形外の三種には農學博士横井時敬君の農家年中行事及幸田露伴先生の旅行の心得某醫學士の衛生の心得等を掲け尙ほ伊東祐穀氏の嚴格なる調査に係る最新の統計及座右必需の重要諸規則は漏らさず收めて網羅せり之を舊年の日記に比すれば材料愈よ豐富記事愈よ正確にして江湖坊間の日記と同視すべからざるや論なし請ふ續々御愛購あらんことを

●賣捌所は全國各地（書籍雜誌店及紙類文具店等）到る處にあり

●取次望みの方は種類部數等御申込次第精々御便利に御相談可仕候

**發兌元** 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

（丙の五）

# 工業叢書

工學士 若目田利助君著

## 電話機及電話交換

第一章●緒論
第二章●電流の性質
第三章●磁石電流機の原理
第四章●受話器
第五章●送話器
第六章●電話用一次電池
第七章●蓄電池
第八章●呼出裝置
第九章●電話機の内部接續
第十章●保安裝置
第十一章●自己誘導及び容電量
第十二章●電話線路
第十三章●電話交換
第十四章●復式交換機
第十五章●市内中繼
第十六章●電話交換
第十七章●市外電話
第十八章●諸種の電話交換方式
多重電話法及電話
第十九章●双信法

（製本既成）
全壹冊
洋装總クロース製
正價金七拾錢
郵税金八錢

工學士 野津正之助君著

## 計算尺原理及使用法

（製本既成）
全壹冊
洋製總クロース製
正價金六拾錢
税郵金六錢

人智の發達に伴ひ、生存競爭愈々劇甚となり、短少の時間を以て多大の事業をなさんとするの傾向を來し、生活の百方面に向て續々勞力節減、機械の發明表はるゝに至れり、Slide Rule 即ち計算尺も其一にして尺度の組合せにより種々の計算を容易に遂行し得べし計算尺晩近本邦に輸入せられし以來、其構造の簡短にして實用の諸計算を爲すに當りて頗る迅速に且つ其使用に熟達するに隨て益々其妙味を感せしむるを以て漸く世に知らるゝに至れり然れども未だ廣く用ゐらるゝに至らす是れ大に遺憾とする所なり、著者茲に見るあり本書に於て詳細に且つ平易に其基礎原理を述ぶることに勉めたり、且つ學術上の諸例題として計算尺の應用を示し殊に多くの例を工學上の計算に取りたるを以て工業上の諸計算を爲すに當り最も便益を得らるゝなり

發兌元　東京市日本橋區

（丙の六）

# 新刊廣告

工學士 市川俊雄君著

# 燃料及測熱法

（製本既成）

全壹册 洋裝總クロース製 正價金六拾錢 郵稅金 六 錢

抑も大規摸の工業として滊機、滊罐を備へさるものなく隨ひて之を運轉せしむるに燃料を要せさるものなきや論を俟たず而も燃料採擇の當否及之を焚用する方法の如何は直に以て工學の成敗に關すべきものなりといふ市川工學士夙に玆に見る所ありて遂に本書を著述せり其說く所素より各種の燃料に及べりといへども就中現下の實行問題たる液体燃料に至りては善く之を詳悉して亦遺憾なし尙本邦に於ては未だ以て公衆に紹介せられざりし高熱計に就きても其要を記されたり誠に本書の如きは時世に適切なる好著といふべし苟も世の工業家技術家其他學者たる人は勿論其他工業學校の教員生徒に缺くべからさる參考書なりとす

專門技師大見鐐一君 在大學院工學士淺川彰一君共著

# ペイント製造及檢査法

全壹册 洋裝總クロース製 正價金 郵稅金

**第一編** 第一章―原料に對する準備(一)乾式碎粉法(二)濕式碎粉法 第二章―ペイント製造器及裝置(一)ペイント混合機械(二)ペイント練磨機械(三)鉛白の練磨裝置(四)亞鉛華の練磨裝置(五)酸化物より成れるペイントの練磨裝置(六)黑色ペイントの練磨裝置 **第二編** 第一章檢査法第一―(一)器具及試藥の說明(二)油及ワニシの抽出(三)白ペイント及顔料(四)黃色ペイント及顔料(五)綠色ペイント及顔料(六)青色ペイント及顔料(七)赤色ペイント及顔料(八)褐色ペイント及顔料(九)黑色ペイント及顔料(十)油製ワニシ(十一)アルコール製ワニシ(十二)亞麻仁油(十三)ボイルド、オイル(十四)的列亞油 第二章檢査法第二―(一)標本(二)顔料の色彩(三)顔料の着色力(四)顔料の被覆力(五)顔料の不透明度(六)顔料の可混性七顔料の粉末度(八)顔料の比重(九)顔料がペイントの乾燥性に及ぼす作用(十)顔料の耐久度(十一)硬練ペイント(十二)調製ペイント及エナメル(十三)油製ワニシ(十四)アルコール製ワニシ(十五)ドライヤ(十六)亞麻仁油(十七)的例亞油 **第三編** 雜錄―ペイントの使用に就て外八項

本町三丁目 博文館

(丙の七)

(丙の八)

太陽臨時增刊　十一月二十日發行

# 日露海戰史

正價三拾錢　郵稅三錢

▲評論 海戰に關する内外評論家及軍人の諸説を掲ぐ皆是剴切の文字讀み來つて端なく痛快と絶叫せしむ

▲本紀 海戰の開始より**最近の戰況**に至るまで最も趣味多く叙述し一讀人をして**戰場**を**親睹**するの感あらしめ

▲史傳 海軍將校の列傳を掲げ精忠貫日の勳功を詳叙す

▲雜纂 海戰に關する**軍器軍艦の説明**より**地理**に至るまでを掲げ我海軍の大捷を搏するに至れる所以を知らしむ

▲地圖 鮮明精確の圖を以て海戰の狀況を明示す

▲日誌▲**其他海戰に關する事項一切を網羅す**

砲火一たび黃海の一角に轟きて茲に日露の大戰は開かれ我艦隊の嚮ふ所粉碎せざるなく仁川沖の大捷となり旅順口の封鎖となり浦港艦隊の追窮となり數日にして制海權を我に收め數旬にして敵艦隊を殲滅し日露戰爭の大勢は此大勝と共に其第一齣を告げ全勝の我に歸する旣に炳然たるに至りぬ今や敵は猶數隻の殘艦を有するも再び其舵を東する能はずして全滅將さに朝夕を圖られざらんとす是れ殆んど海戰の終焉をなせしものにして我海軍の絕大なる力を世界に發揮して遺す所なきものたり本館是に於て『日露海戰史』を編し凡そ今回の海戰開始より最近の戰況に至る細大の事實を網羅し以て此偉蹟を千載に傳へんとす啻に軍國人民の紀念に充つるのみならず又世界海戰史上最も壯烈痛快なる記述として世人の必讀を要するものなり

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館



女學世界冬季増刊

第四巻第拾五號

# 家庭十二ヶ月

## 十二ヶ月解題

△都門の四季は東京の年中行事
△四季の出あるきは東京の遊覽案內
△田舍の四季は天然の美を描きし物
△消息十二ヶ月は言文一致體の書牘
△四季物語は時局に因める好話料
△料理十二ヶ月は來年中の重寶
△交際の手振は佛蘭西流の女禮式
△女學生一年記は苦學女生の實驗記
△新世帶日記は世帶の日常雜事



# 戀愛華嚴の瀑

## 人生觀

白雲行者

白雲山巓を抽いて出づ、蓊勃として半天を蔽ひ、夕陽これに映じて五彩を成す、この時の美景言語に絶す、眞に宇宙の壯觀となすに足るべし。陽入ッて雲色暗淡、天地また寂寥に歸す、戀愛は恰もこの雲に似たり。

戀愛は人生の色彩なり、倘し人生より戀を除かば、人生は恰も沙漠の如く何の希望なく、何の意味なく、又何等の價値もなかるべし。人生に戀愛あるは恰も食に味あるが如く、以て甘むべし、以て味はふべし。この如くして人生は大なる希望と價値との存する處となるなり。

上下五千載、萬乘幾億、人誰れか戀の經驗を有せざるものあらん、其の尊貴なるは玉餐錦歯の皇帝より下は賤民奴隸の卑しきに至るまで凡そ男女間の情事に就てこの苦き經驗を有せざるものなし。白髮の老媼も曾て一度はその爲めに滿身の熱情を捧げしことあり。妙齡、靑春の男女は今將にこの微妙なる情けの網に罹りつゝあるなり。

西洋の諺にいへり、戀は痲疹のごとし、何人も一度びは必らずこれに罹り、これに惱まさる、然かも遂に二度罹ることなしと、彼等一度この網に罹る時は智慧ある者も愚に返り、聰明なるものも又その心目を覆はる、甚だしきは發狂者に等しき狂態を演じて而して自から之れを知らざるなり。彼等はこの苦境に陥りつゝ自から

その苦を知らざるなり。

戀に煩悶する者の中には一夜を森林の中に明すことあり、彼等は又繁華なる人事を避けて獨り自から深山幽谷の境に彷徨ふことあり、彼れの心中には唯一人あるのみにして絶へず其の一人を懐へり。彼れはこの一人を解釋せんが爲めにすべての世界を犧牲にせんと欲しつゝあるなり。

戀は一種の病なり、人一度この病にかゝるや心性の變化は驚くべきものなり、彼れが情の働らきは、外面の不活潑なるに反對して尤も鋭敏となり、尤も危險となりて今にも如何なる事を仕出來さんかと思はるゝばかりなるも、而かもその身は常に易く、其の行爲は常徑を失せざるこそ寧ろ不思議といふべし。

又諺に戀は曲者とあるがごとく、少年男女の初戀ほどその心狀の奇怪不可思議なるはあらじ、彼等は、自から罪惡を犯さずして人を恐れ、自から惡事を爲したる事なきに他人の面前を憚るなり、彼等は其の戀人を見ること、恰も太陽の如く、彼は其面前に其人の在るを知るも眼を正うして仰ぎ見ること能はざるなり。

彼が平常の雄辯もその戀人の前には舌動かざるなり、彼れが不斷の才智もその人の前には才智施すに由なきなり、富貴、力量、學問、地位、あらゆる勢力も亦遂に何の爲す處なくして、唯沈默、不能、恰も嬰兒と等しく策の出る處を知らざるに至るこそ寧ろ不思議といふべし。

されどこの如く青年男女がその戀人に對する時の狀態の不活潑なるに拘はらず、其の内心に於ては恰も噴火山の燃ゆるが如く、一道の火柱は常にその心頭に迸りつゝ寸時も熄む時なし、彼等は暗中に世界をヒックリ返すがごとき事を考へ、途方、途徹もなき空想を浮べつゝあるなり。若しこの際に於ける彼等の心相を遠慮なく描き出さんならば世の人は必らず駭目して驚嘆すべし。如何なる大文章家も、如何なる妙畫家も未だ彼等の心狀を明ら樣に畫きたるものなし、否決して描くこと能はざるなり、若し眞にこれを描き得たらんには、以て世界

を驚かすに足るべし。

妙齡男女の戀に對する心狀の奇怪なるそれこの如し、而してその戀に失望したるもの丶狀態は如何、眞に是れ慘憺の極と稱すべし。予に一人の知已あり、彼れ自ら戀の失敗を語れり曰く彼の女は一たび戀して既に情網の中の虜となれり。彼女はその煩悶を脫せんと欲して、滿身の力を鼓するも遂に能はざりしなり、彼女の戀人は他に約束ありて早晩婚姻の式を擧ぐる塲合となれり、彼の女の心情は如何なりし、而かも彼女は一朝にして其望みを捨つること能はざりしこそ悲慘の極なれ、彼女は猶希望を屬しつ丶獨り月を踏で小路に彷徨ひあるけり、斯くして彼の女はその情を遣れり、彼の女は堪へ兼ねて再び足を其の戀人の家の傍に向けつ丶萬一の希望を倖僥せり。而して遂に希望は空となれり、彼の女は深夜人定まりて後戀人の我が身の爲めに最後の一瞥を與れもやせんと墓なき事を賴みとして、そこに佇みつ丶あるなり。

彼女は遂に失望して深山幽谷に入れり、然かも猶その戀人を忘る丶能はざるなり。彼の女は懸崖絕壁を攀ち上りて遂にその絕巓に達せり、白雲は茫々として其の身を包めり、而かも彼女は猶その戀人を忘る丶能はざるなり、彼女は斯くして直下三百尺の懸崖、白雲の蒸騰する如き大澤の巖頭に立てり而して彼女は謂へらく嗚呼人生は無意味なり、我れは最早この世に望みなし、この人生は我が爲めに何等生存を托するの價値なしされど永遠悠久なる世界に於て我は我が戀人と活きんと。斯くして彼女は、瞑目、合掌しつ丶その永遠悠久なる世界へ戀人の聖き魂を携へつ丶走らんとせり。刹那に聲あり。「無分別」！

飜然として悟れば、彼女は既に神の救ひの手に抱かれつ丶あるなり、斯くして彼女は無難に家に歸りたるなり。これ彼女が戀の絕望の時に起りし尤も苦き經驗の一なりき。時として彼女は早川の流れを上りて急湍の淵に臨みし事ありき、然れども彼女は決して身を誤らざりしなり、又時として彼女は船の舳に立ちて千尋の底を

眺めし事あり、然れども彼女は決して逆巻く波に身を沈めざりしなり。

この如く彼等が戀の失敗は其戀人が他と嫁すべく定まりたる時に無慘の極を窮め盡したるものなり。彼等は其窮極の苦痛に遭ひ乍ら、猶その身を慰めて今日を安ふせり。彼等は生來知らぬ熱鐵の苦を嘗め、昔時の大罪人が磔付の仕置に遭ふよりも猶辛き境遇にあひながら、猶其の苦しみを、生の親にも知らさず、兄弟にも知らさず、善惡共に心を明し合ふたる朋友にも知らさずして獨り自から苦しむなり。彼等は實に慘憺の極を盡して自から其の苦を味はへるなり。而して彼等は自から思へり、譬へ天地が崩るゝ時もあれこの思を果さでや置くべき、タトエ、千年万年かゝるとも、海は涸くとも、山は裂けるとも、此の戀遂げずに置くべきかと、彼女の心は實に清姫のごとし、タトエこの身は蛇に成ッてもと。彼女の心狀實に恐ろしといふべし、若しエッキス光線の如きものありて人の心を照らす事出來得べくんば彼女の全身は一道の大火柱となりて焰々天を衝くを見るべし。戀の失望は此の如くして彼女を猛り狂はしめぬ、されど時日の經過は實に泰山を崩して平野となし、蒼海を干して桑林となすべし。彼女が狂ひに狂ひしその心の狂瀾怒濤は何時しか靜まりて鴎眠る春の海のごとく平波漾漾の姿となるなり。斯くして彼女の心は恰も死灰のごとくなり。昨日の戀人は今日の路傍の人、相見て何の不思議を感ずる事なし、これ一般戀の狀態なり。不思議といふも愚ならずや。世俗哲學者はいへり、若氣の無分別と、この如くして一旦戀病に罹りたる者は恰も天然痘に罹りし患者の如く、其病患の劇烈なれば劇烈なりし丈け、それ丈け、病後の身体は極めて健康にして、終生再びこの病患に惱まさるゝ事なし、中には初戀の苦痛を深く記臆に存じて、今一度びあの苦痛をして見たしと望む者あるも、一旦去りたる戀慕の情は恰も弦を離れし箭の如く、天涯萬里の彼方に去つて終生歸り來ることなし。是れ豈天帝が人間を愚弄せんと欲して試みたる惡戯の甚だしきものにあらずや。

泰西の學者戀を解釋して曰く戀情は恰も煙火のごとし、一たびは天に向ッて其光りを放ッも、消ゆれば忽ち痕跡なしと、煙火は流星のごとく瞬時の間光輝燦然たる火焔を發して大地を照さん、然れども光輝去れば四邊は忽ち暗黒の夜に復して灰燼だも殘さゞるなり。

我友お雪孃は曾て春雄の君を戀ひ慕ひぬ。而して其戀情の熾んなるに當ッてや、春雄の君の一擧一動はお雪孃の心頭に異樣の響を與へて、朝夕其の姿を垣間見るを唯一の樂みとして日を消しぬ。彼女は如何にかして我が赤き心の一端を其の戀人に知らしめんと欲して百方心を碎きつゝ其機會を竢てり、或日雨甚だしく、道濘みぬ、恰もよし我が戀人は雨泥を衝いて道急ぐ際、躓づきて其の一足を泥に塗しぬ、戀人は當惑して途上に立てり、お雪孃がその心を敵に通せんと欲する絶好の時機は今なり、この好機會を外にして又あるべからず、然るに彼女は何の憚かる處ろありてや、唯路上に佇つゝ空しく戀人の過ぎ行くを茫然として見送りたりき。彼女は戀人が其塲を去つて影を見失ひし時、始めて我れに歸りし如く、遽々然として空しく時機を失ひし事を悔悟して止まざりき。

彼女は其の朋友が春雄を嘲する毎に常に一種の嫉妬を以て之れを聞けり、而して人の已れに其戀人の事を聞かるゝや、常に其人の欠點を擧けて之に答へたりき。お雪孃の口より出づる春雄の評はいつも惡評のみにして其の男は欠點だらけなりき。彼女は何故にその惡評する男にこの如く熱心せしか、蓋しその心は人の競爭を靜めて我が手に落さんとの野心なりしか、この心未だ解すべからず。

我友武雄は曾て其姻戚の娘なるお花孃に戀せり、而して其の戀の到底成功し難きものなるを知るや、煩悶して一時毒を呑まんと欲したる事ありき。幸に救ひの神の耳に囁やくものありて彼れはその無分別を思ひ止りしが程なくして、一夕大雷雨あり、家爲めに震動せんとす、彼れは突然身を脱して其戀人の家のほとりに彷徨ひつ

つ今しも荒ぶる雷神に向ひ、冀くはこの家を破壞して家人を殺し、お花孃のみ一命を脫して我手に歸せよと祈りたりき、少年、少女の戀は眞に傍若無人の極なり、曲者なり。

酒屋の樽拾ひなる三五郎は朝夕御用を聞くべき其華主の令孃佐夜子を慕へり、然かも遂にこれ高峯の花なりき。彼れは戀せざりし以前其の華主の門內を俛ぐるの時、何の畏懼る處ろもあらざりしが、一たび其令孃を戀ひするに當ッてや、每に一種の懼れを感じて自から罪を犯せしもの丶如く人の咎を蒙らんかと危ぶみたりき。而して其戀情の溢れし時に當ッては、獨り天に向ッて其の非望を祈りたりき、而してその冀ふ處ろは、火事騷動にても起れかし、其時こそ我れ踏み込んで猛火の中より彼女を救ひ出さん、彼の女の爲めに冀くは我が身大火傷を受けたし。大火傷を受けて少しは彼の女に憐愍の情を起させたし、以て我が望みは足れりと、嗚呼眞に戀は無分別の極なるかな。

この如く靑年男女の戀は傍若無人にして實に又危險千萬のものなり。而かもこの傍若無人、危險千萬なる處ろが、戀愛の價値のある處ろにして、清淨無垢、純粹無雜、その聖火の熱する處ろ、あらゆる浮世の塵埃、汚穢、不潔物を燒き盡すに足るべし。

戀の極は神なり聖なり、鬼神も又避く、戀愛の前には何物をもなし、これを遂げんとする際には如何なる障害物をも除かんと欲す。若し金城鐵壁あッてその前面に橫はらんか、彼等は愛の聖火を以てこれを溶かすべし。若し劍の山、槍の柵あらんか、彼等は愛の手を以て容易くこれを拔き取るべし、若し火の雨降り、彈丸の霰落ちて行く手を妨げんか彼等は飛行の術を以てよくその間を乘り超すべし。要するに戀の前には如何なる障害も寸効を奏せざるなり。然れども戀其者は、風の如く又煙のごとし、手を觸るれば旣に形なし、捕へんと欲して捕ふる事能はず、唯僅かに陽炎の如くに見へ、麝香の如くに匂ふのみ。人は其間にあッて唯惋くのみなり。

然りながら、少女よ懐へ、若しも汝の戀が形體的に成功したる時は汝の戀情は既に其の終りを告げたる時なることを。汝等相愛せる一對の男女相逢ふて夫婦となる是れ決して戀の成就にあらずして唯一對の夫婦の成功したるのみ、汝が聖なる戀は既に已に去ッて痕なきなり、孃等よ曾て男女の情死を見しことあるや、彼等若しその心中を思ひ止まッて一對の夫婦とならんか、こは戀情の成功にあらずして單に一夫婦の成功を見たるまでなり。劍に伏して相共に斃る、即ち神聖なる戀はこゝに始めて成立つものにして死の一瞬間は即ち大なる戀の成就なりと知るべし。若夫れ彼の男女が愛の敵を失ふて巖上に登りし時は即ちその情の極點に達せし時にして遙かに千仭の底を見おろしつゝ巖頭の感を思ひ浮べし時は、即ち神聖なる戀の成功に達せんとせし時なり。斯くして彼れは大なる天地と同化し、遙かなる幽冥と契りつゝ其の戀人の魂を携へつゝ身を白雲に任せつゝ悠々然として無何有の鄕に遊ぶなり。是に至つて始めて戀の大成就といふべし。この外に戀てふものなし、彼の肉體相抱き、心情相語るものいまだ以て戀とは稱すべからざるなり。懐へ青春の孃等よ、戀は決して孃等が想像するごとき快美なるものにはあらざるなり。

## 家庭錦嚢

讀書人

△一家主母あれば、豪奴悍婢敢へて弱子と抗せず。

是れは唐代の名家蘇老泉の言葉です。世の母親たるもの丶德不德が一家の盛衰に關係するの大なる事以て知るべしである。

△犬の汝に尾を振るは汝に振るにあらずして食物に振るなり。

これは西洋の格言です、世の中は皆こうしたもの、思へば富者を尊敬するのも富者其人を尊敬するのではなくて、唯富その物を尊敬するのです、誠に北風は穀物を生ぜず、貧人は朋友を生ぜずです。嗟！

△賢妻は時に眼なき事あり、又耳なき事あり。

同じく西洋の諺です、聞いて聞かぬ振、見て見ぬ振り、大抵の小過は宥免して置く、これが人を召使ふ者の最良秘訣です。併しそうはいつても寛大に過ぎて人に馬鹿めらるゝのとは大違いです。似て非なる處が賢妻の賢妻たる所以であります。

△美花は永く路傍に在らず。

西洋の諺です、美くしい果物は永く樹に居ず、美人は久しく家の裡に引込では居ません、何人かの眼に止つて早く飛んで行くといふ意なのです。

△金儲する人の後に浪費する人現はる。

これも西諺です、親が苦勞して子の樂をするといふ意にも取れますが、浪費する人の背後には必らず金儲する人が控へて居るのが世上の狀態でせう。

△水の海に注ぐが如く貨幣は富人の手に落つ。

富人は信用あり、信用ある人の處でなければ金は行きません。

△主人の一眼は從僕の四眼よりも多くを見る。

我が物と思へば氣をつけて塵一片も疎略にせず、損得は主人のものと思ふより、萬事につけて疎略となるなり、こんな心では何時までも主人に睨つけられる、何でも自分の物と思つて勉强せねばならぬ。

△人の過失ある、其の父兄にあらざれば誰か敢て誨へん、其の契愛にあらざれば誰

か背て諫諭せん、泛然の相識は背後窃に之を議するに過ざるのみ。

これは世範の中にある詞です、世の中は全くその通り、苦言諫言するものは我が骨肉でなければいけない、他人は面と向つては追從を言ひ後ろへ廻つては指さして笑ふ。(契愛とは夫婦の事です)。

△人皆自家に在ては帝王なり。

九尺二間にも天子あり、裏店にも山の神あり。

△辛苦の事は卓絶の才に進むべき道路なり、絶妙の地位は辛苦の人の獲可き恩賞也。

これはレーノルヅといふ人の詞です、艱難は汝を玉にすとの諺もあります。天下の英才ともいはれるほどの人物は皆いづれも辛苦艱難から出たもので、決して偶然にえらくなつたものではありません。如何なる人でも辛苦せなければ高き地位には登れぬものであります。

△自身を信用せざるものは敏捷に事を爲し難し。

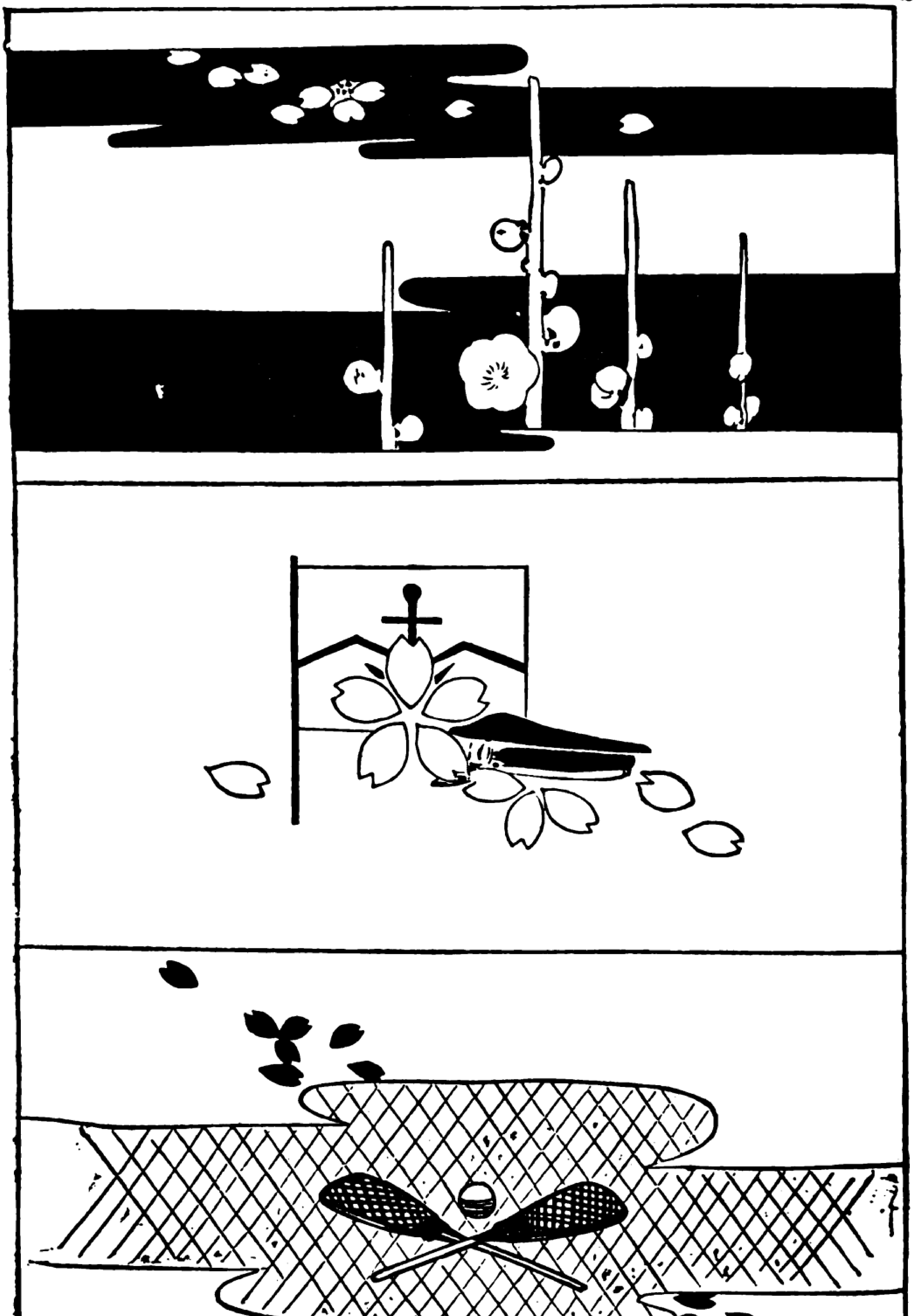
西哲スマイルスの詞です、自信の厚いものは事に當つて迷ひません。敏捷に事を成すものは自信の厚いものでなければ出來ません。

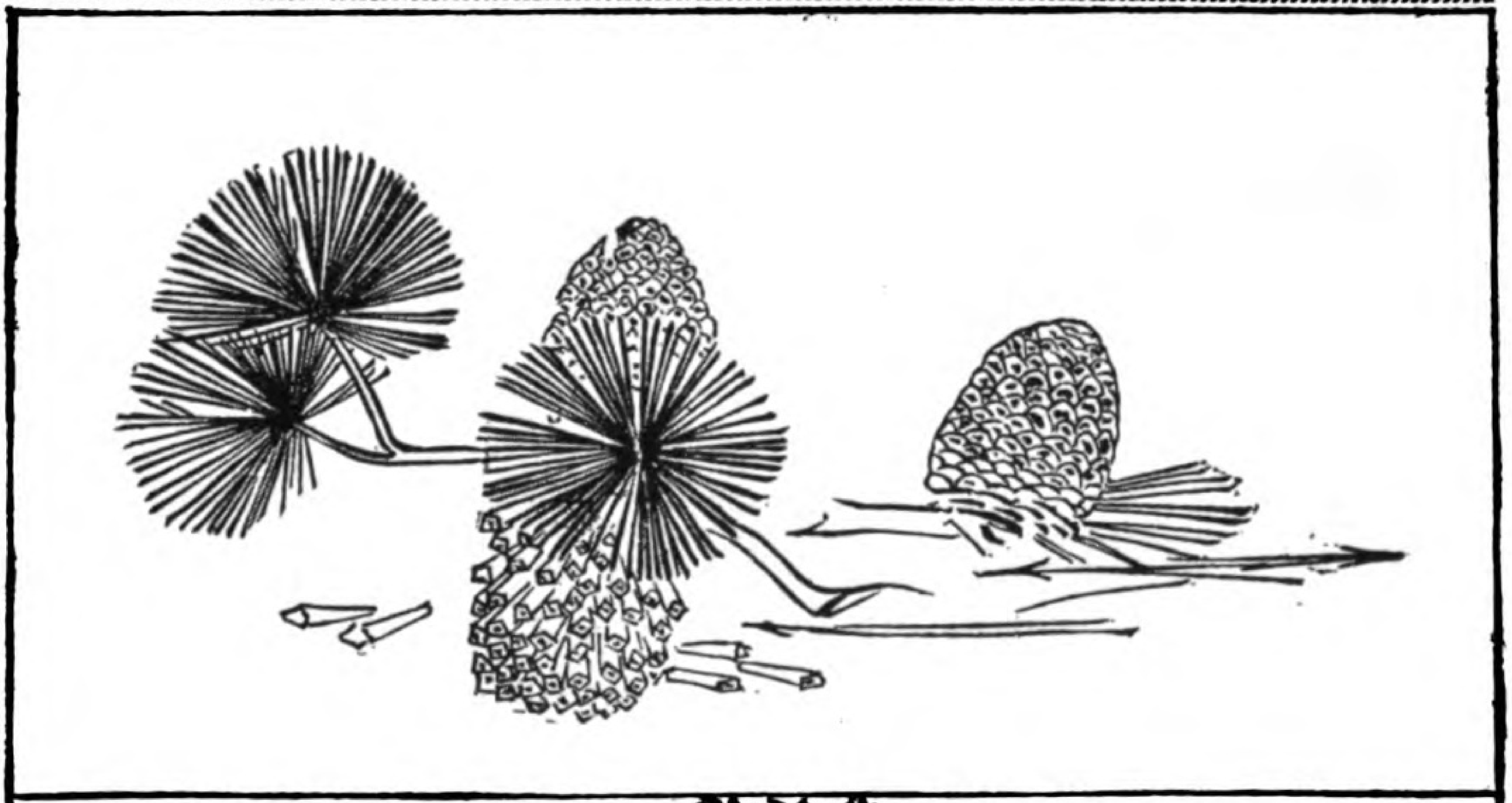
△名を成すは常に窮苦の日に在り、事を敗るは多く得意の時にあり。

傳家寶といふ立志篇に在る格言です。困苦して業を修めば人必らず世に出でますが、得意の境界が續いて運命が順境になれば、人に持囃されて自然に心に油斷が出來て遂に事を破るやうになります。諺に曰く勝つて兜の緒をしめよと、智言です。

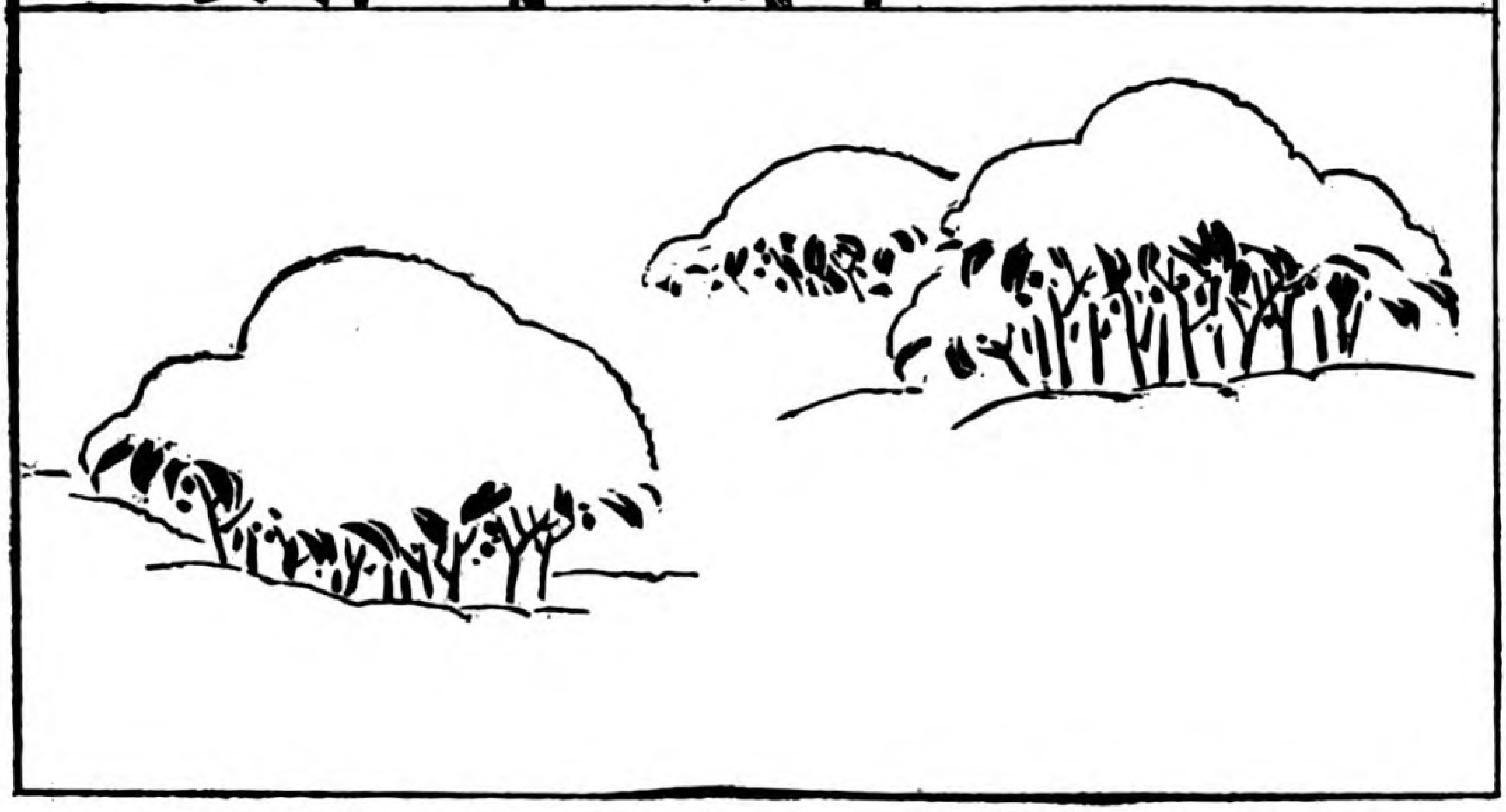
△裁判は動もすれば財布の引力強き方に傾く。

西諺です。昔しは恩惠と贈賄で、隨分非を是にした事もありましたが、今日法律の精神は元より神聖であるけれども之れを取扱ふものは有情の人間ですから、矢張り財布の引力には動かされ勝なものです。









# 家庭十二ヶ月

# 都門の四季

△　△　△

## 一月

△元日――宮中に四方拜の儀式行はせらる、金モールの大禮服を朝日に輝かして參内する官人相前後して。二重橋の畔、車馬絡繹たり俗間には初日の出を拜せんとて未明に起き出で、上野、山王臺、九段坂、湯島天神境内、愛宕山などの高臺、洲崎、高輪の濱邊に集ふもの多し、又惠方詣とて歳の吉方に方れる神社に詣でて一歳中の幸運を禱るもあり、また七福神詣とて七福神を祀れる神社佛閣を尋ねて巡拜するあり。

一日より三日に至るまで、各家々にては朝毎に若水を汲みて雜煮餅を煮て喰ふ、雜煮餅には國々によりて煮方いろ〳〵あれど東京にては芋、蘿蔔、人參、小松菜などを加へ角切餅を燒きて煮るなり、又御節と唱へてだいこん、にんじん、牛房、八ツがしら、蒟蒻、燒豆腐、切昆布、田作など煮たるものを喰ひ、鹽引鮭を膳に供し、屠蘇酒を飲むを習ひとす。屠蘇酒は、多く味淋を用ひ、屠蘇散を浸す。年賀の回禮は大概一日より三日までの間にす、家々の玄關門口などに名刺受を備へて賀客を待つを習ひとす、又商家などは年玉とて手拭、摺暦又は品物などを配りて顧客の家を廻るもの多し、市中は各戸の軒頭日の丸の旗、春風に翩々として門々の松飾いと賑々しく年賀の客年玉配り、三河萬歳、獅子舞などの往來、羽子突く少女の振袖姿、紙鳶を飛ばす小兒の勇ましげなる、孰れか初春の景色ならざる。

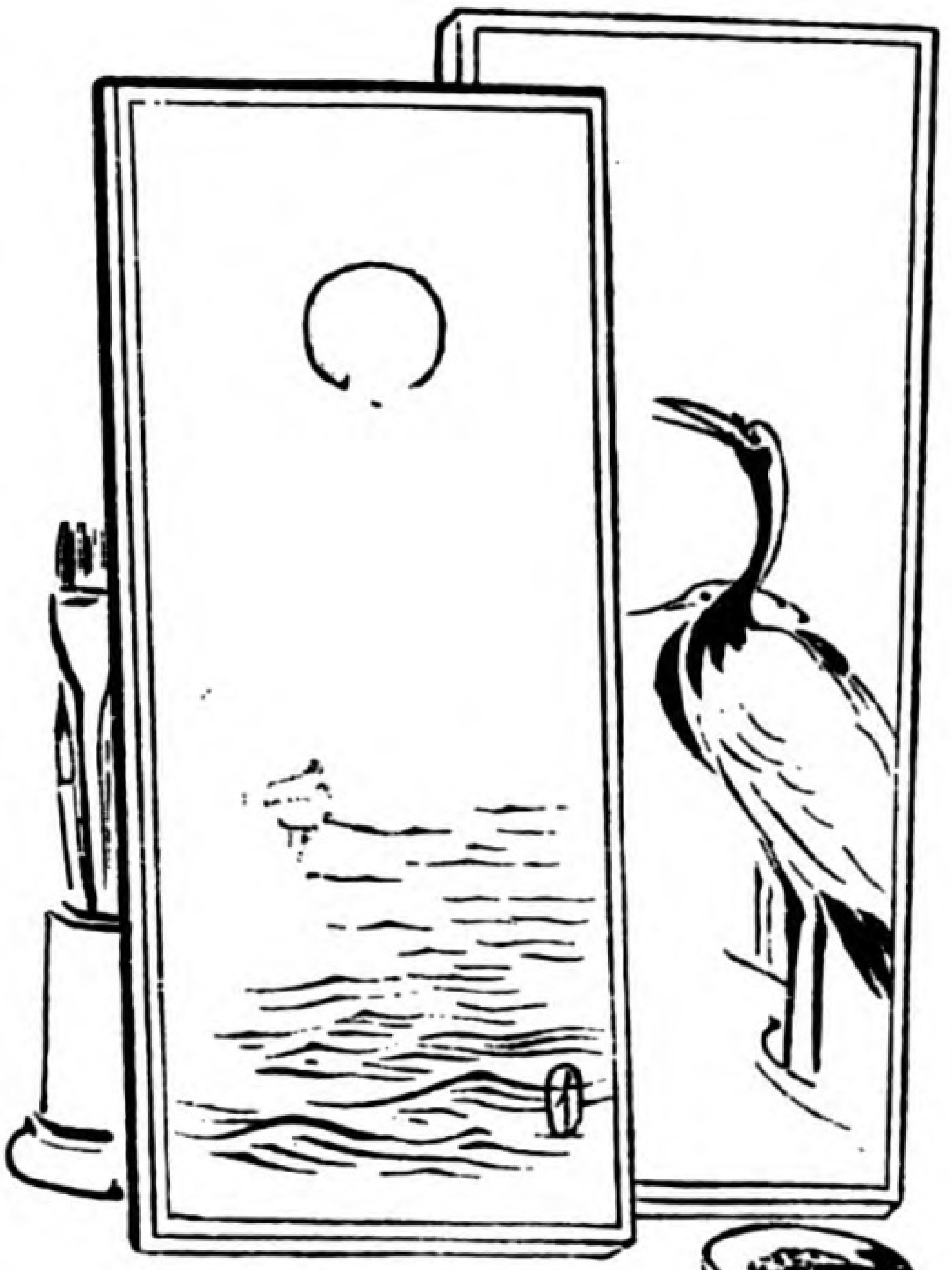
△松の内――商家は二日に初荷賣始を行ふ、夕暮よりお寶〳〵の呼聲かしましく寶船を賣りあるく、三日は元始祭、六日消防出初式、元日より七日までは松の内とて市中の賑ひ元日に異ならず、此間家庭の樂しみは家族相集ひ、親戚朋友を招きて双六、かるたとり、トランプの勝負を爭ふ、殊にかるた取には睡を忘れて夜を更すもありて、興なか〳〵に深し、六日夜は鳥追七

日は七種の節句とて戸々若菜粥を煮て食す。

△籔入――十六日は閻魔の賽日とて市中商家は丁稚、下女に一日の暇を與ふ、芝、淺草の兩公園上野廣小路常樂院、新宿大宗寺、等の閻魔に參詣するもの多し。

△一月中の遊覽所――淺草觀音境内の各觀せ物は新年遊覽の客を集へて一入の賑はひなり、市中各所の神社佛閣にも一年最初の賽日には初詣と稱へて信徒の參拜夥しくいづれも群集を極む、就中賑はしきは蠣殻町の水天宮、茅場町の藥師、虎の門の琴平神社、龜井戸の天神。

△季節――寒風凜烈、膚を刺す、されど多くは晴天にして降雪なし、生物皆冬の中にありて、虫類深く蟄に入り、生意なし獨り早梅、春に魁けて開く、花は水仙、福壽草、椿、郊外枯野を見るによろし。



## 二月

△節分――此日厄落しの爲とていり豆を齡の數ほど紙に包みて身中を撫で三ッ角の辻へ捨つる習ひなり、又當夜一の暗みに(薄暮)福は内鬼は外と唱へ、いり豆を撒きて惡鬼を攘ふ。

△紀元節――こは三大節の一とて市民業を休みて祝意を表す、宮中には皇族、勅任官の拜賀あり、上野、淺草、芝などの公園遊覽の客多し、梅花東風に魁けて開き始め、龜戸、木下川邊、雅客の林を曳くものあり。

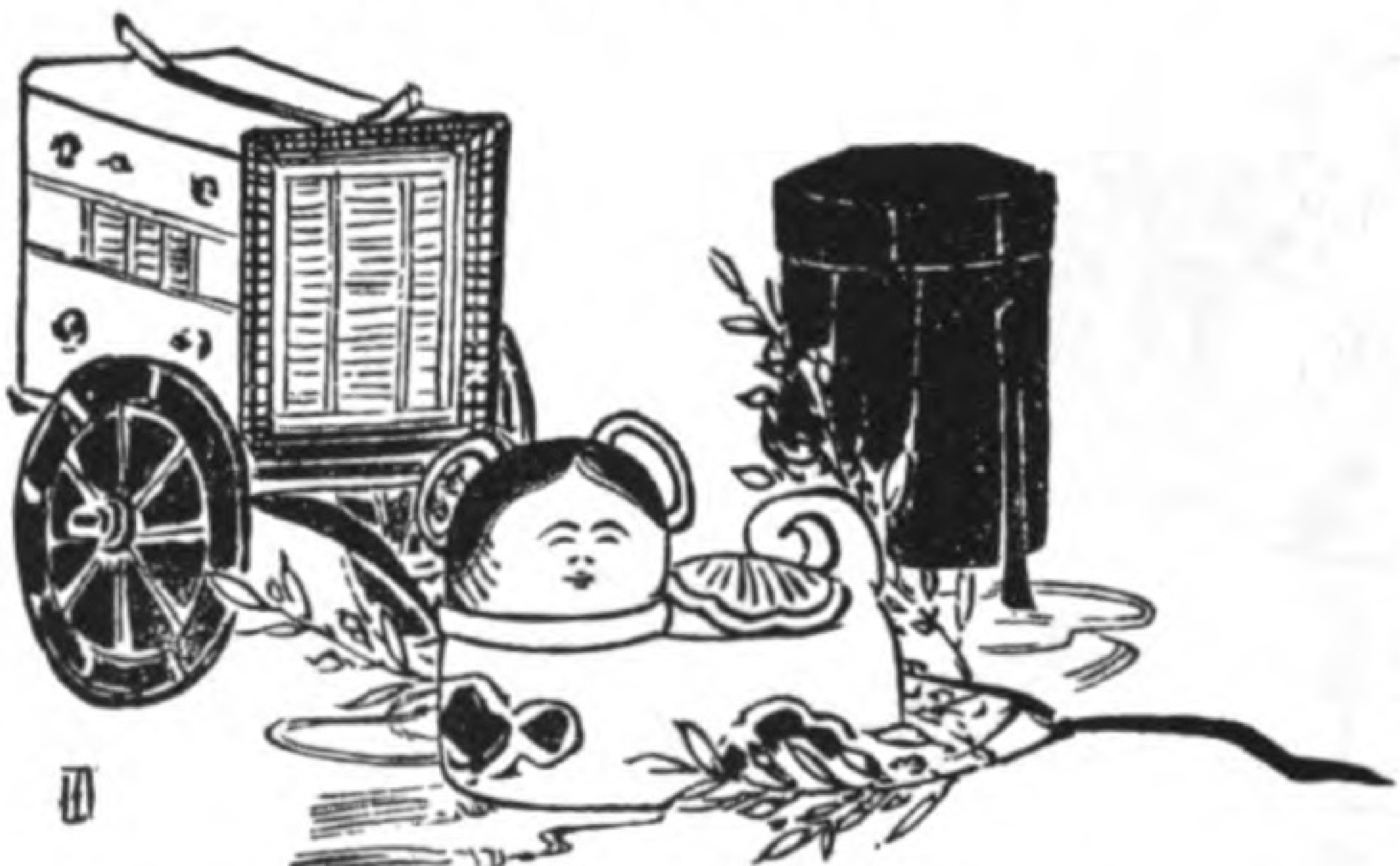
△季節――立春、梅花綻びそめて、春心稍々催ふすされど餘寒猶酷だしく人は概ね厚衣を襲ねて爐邊に親

しむ。この月下旬雪屢々降る、山瘠せて小禽、野獸の肉市に鬻かる、魚類には比目魚、むつの季節。

## 三月

△雛祭――女兒の節句とて女の子を持てる家々にては五六日前より座敷に雛飾をなす、雛壇は段を設けて赤毛氈を布き繪屏風を繞らし、雛人形を飾るなり、雛壇は紫宸殿へ擬らへたるものにて、内裡雛、親王雛、隨身、官女、五人囃子等いろ／＼ありて、いと嚴かなり、供物には菱餅。熬豆、白酒、榮螺、蛤を供ふ、親しき人々を招きて赤飯を炊き白酒をすゝめなどして待遇すもあり。

△彼岸――春の彼岸は春分の日を中日として前後三日づゝ七日の間をいふ、其初の日を彼岸の入と唱へ終の日を明といふ、此間家々にて寺詣をなし彼岸の供養と



稱へてお萩の餅、團子、精進鮓などを造りて佛に供へ又親戚知音におくる、春季皇靈祭は彼岸の中日に當りて各所の遊覽場賑ふ、節は春風名殘なく都門に入りて、郊外の梅花既に梢を辭し、紅雪地に敷きて春泥深く、墨堤の櫻花未だ蕾を發せずと雖も、山王臺の彼岸櫻は今將さに朱唇を開かんと欲し、各所の桃林、梢をいろどりて遠く眺むれば紅の霞のごとし。

△季節――春風氷を解き梅花爛熳、百草新芽を抽て郊外は摘草によろし、摘草は蕗の薹、鶯菜、つくし、よもぎ、田芹。

## 四月

△觀櫻――四月は花の月なり、一年四季の中陽氣尤も盛んにして人心を蕩するものはこの月なり春色駘蕩として百萬の人家忽ちにして花の中にあるが如く上野

公園、芝山內、墨田堤の賑ひは更なり、各所の櫻花今を盛りと咲きそろひ、行人をして一時花の美に醉はしむ此の月又交際季節として富豪、權貴の邸內にては園遊會、觀櫻會の催ふしあり、花の名所は向島の長堤、櫻樹路を挾んで白雲紅霞の洞窟をなす、眼下に隅田の緩流あり、都鳥は暖波の上に眠り、晩春、人、花と混亂し、花は飛び人は狂す、又上野は向島より花少しく早く四月上旬を以て滿開の季節とす、開花の候滿山花ならざるはなく殊に屏風坂の吉野櫻、兩大師前の糸櫻、清水堂の秋色櫻 其名最も高し、上



野に少し遲れて飛鳥山の櫻あり、高臺の眺望、眼を放てば彌望千里の郊野は、脚下に開き、遠く日光、筑波の諸山霞を籠めて春の夢のごとし、郊外には小金井の櫻又名高し、數千株の吉野櫻、多摩川上水一里餘の間を挾み、彌望一色宛然白雲の連れるがごとし。

△汐干狩 ―都人士が春の遊樂は櫻見と汐干狩なり、汐干狩は舊曆三月より四月に至る間（三月三日、十五日大汐）を季節とす品川臺場の邊、子女紅裙を飜へして海中の珠貝を摘り船中紅白の旗翩々して宛から源平船いくさのごとし。

△季節――櫻花滿開、千草萠へ出で、野色絢爛の好季節となる、郊外の散策を試むる尤も妙、諸學校の運動會催さる。

筍やうやく市に上る、早蕨、獨活よし、魚類にはめばる櫻鯛。

## 五月

△菖蒲節句――五月五日は菖蒲の節句とて男の子ある家にては胄人形坐敷幟を陳ねかざる、胄人形は、神功皇后、武内宿禰、八幡太郎、日本武尊、さては、關羽張飛の勇者、金時、牛若丸など多し屋外には紙鯉、吹流し、又武者繪の大幟などを樹つ、又此日は菖蒲と蓬とを束ねて家の擔端に挿む市中湯屋にては菖蒲湯を設け、女子供は菖蒲の葉を箭の形に切りて頭にかざす。



△季節――新綠目に鮮やかにしていづこに行くも天地の新たなりしが如き心地す、日は暖かにして萬物生意の氣をあらはす、郊外は麥稍く色づきて告天子冲天に自然の樂を奏す、村孃の草刈、野童の牛追ひ時に壠圃に麥笛を聞き、又森蔭に水車の旋るを見るなど好個の畫題なり都門の遊覽は龜井戸の藤、四ッ目の牡丹、大久保のつゝじ。

食品は櫻鯛、星がれい、筍、莢豌豆。

市中は稗蒔賣の呼聲のどかにして金魚また緣日の夜見

世にあらはる

## 六月

△諸社の大祭――この月俗に祭月といふほどにて市中諸社に大祭を執行す就中五日より八日までの神田明神五日の日枝神社、最も賑ふ、氏子中山車、屋臺を出して盛んにす、日枝神社は舊幕の頃將軍の上覧ありたれば俗に天下祭と唱へ神輿渡御の際には市中の老若皆下坐して拜し、若者共の此祭儀に與りて神輿を擔ぐが爲めに妻女の身を賣りてさへ其費を辨じて勤めしほどなりしといへど今はさる馬鹿氣たる事なし。

△季節――梅雨連月、陰雲朦々、年中氣色の揚らざる時なり、疾病に罹るもの多くして衞生に注意すべき時なり、されど目に青葉、山ほとゝぎすの好風物の雅懐を動かすものなきにあらず。緑陰深き處ろに、愛讀の



書を繙き、清流に臨んで碁を弄ぶなど尤も妙ならん、若夫れ俗中の俗境に入りて其好む處ろを語らんか、布子を質に典じて初鰹を賞する又千金の樂しみにして王侯の榮にも代へ難きものならん

この月上旬の頃より新蠶豆膳に上る、若鮎、甘鯛の白燒、贅澤家の食思を動かす。遊覧は堀切尾高園の花菖蒲 紫の色いとうるはし市中は胡瓜、茄子の苗、賣聲ののどかなり。

## 七月

△盂蘭盆――十三日より十五日に至るまでを盆と稱へ親戚知音に中元の祝儀とて、砂糖、寒晒粉、菓子、索麪、其他品物を贈りて迭みに見舞ひまた精靈祭の用意先祖の墓詣などす

十一二日の兩日は草市とて諸所に市を開きて精靈祭の

供物及び飾物などを賣る、精靈棚とて佛壇の前に眞菰を敷き索麪、粟穗、玉蜀黍などかざり瓜、茄子に木箸をさして牛馬となし、精靈の乘料にす、十三日の夜は迎火とて苧がらを燒、十四日は精靈の逗り玉ふ日とて種種の供物をなし、白强飯を蓮の葉につゝみて供へ、又僧を招きて棚經を讀ましむ十五日の夜は精靈の還らせ給ふとて送り火を焚く、かくて精靈棚を撤し、一切の供物を菰に包みてこれを川に流すなり、十六日は雇人の藪入、市中の賑ひ、閻魔堂の參詣、正月に同じ。

△季節――梅雨稍く霽れて炎威將さに熾ならんとす、各學校概ね休暇す、學生歸



省するもの多く、寄宿舍一時に寂寥となる、さあれ、夏時の景物は都人士をして其好尙を開却せしめず、この月下旬には兩國に川開きの催ふしありて盛觀は流石に東京の名に恥ぢず、火光一發中天に紅紫燦々の星火を飛ばす處ろ、眞に豪華の極といふべし、都門納凉の地は、角筈十二社、廣尾、目黑、王子等、又海水浴は芝浦、大森、さては湘南の地一時に都人士女の雜沓を見る。

## 八月

△月待――陰曆七月廿六日の夜は二十六夜待と稱へ、上野、神田、湯島、九段坂、愛宕、さては高輪、洲崎

道灌山等の高臺には深更を厭はず月の出づるを待ちて人の群集するあり。

△季節――暑中休暇、閑日月ある人、足ある人、羽ある人は槪ね、旅行を企つ、海水浴、登山、修學旅行、されば各鐵道會社にては近縣避暑地方へ出遊の客に往復切符を賣り出して旅客の便宜に供ふ、家政は土用干、都門の遊覽は上野不忍池畔の蓮見、入谷の朝顔、向島の百花園等よし、この月海產は槪ね不漁にして、茄子、胡瓜、南瓜、鷄卵等獨り庖厨に跋扈す。

## 九月

△彼岸――九月廿日前後より二十五六日頃に至る七日間彼岸なり、寺詣、親戚知音への配り物春季に同じ。

△季節――驕陽去つて金風稍く至り秋氣肌に適すの好時節となる、秋草今を見頃とし、向島の百花園に人群集す、晴夜明月を賞するは又この月なり、郊外は虫の音冴へて秋意切々道灌山、日暮里、關口等雅客を誘ふ葡萄、柿始めて店頭に顯はる、この月又釣の好時節なり、品川沖の海邊にては鱚釣、ボラ釣、鯊つり尤も收穫多し、此月初旬貿易風あり、强烈なる暴風雨の襲來して家屋を破り、塀を毀つことあり、高臺の家破害多し。

## 十月

△夷講――十月二十日は商家にて夷講と唱へて福德神を祭る、家法によりてそれ〴〵儀式祝宴の催ふしあり其前夜は日本橋人形町邊に市を開き宮、夷子、大黒、掛鯛、淺漬大根などを賣る、俗にこれをべつたら市といふ。

△季節――稻田黃熟して郊外一望黃金の波を湛はすがごとし、日光、塩原の紅葉この月下旬を見頃として遊覽に出掛くる雅客あり、市中各所の菊園よし、靑物店頭に紅柿累々、柘榴、林檎、京都の松茸今出盛りなり魚は鹽鯖、いわし、鯵、市中呉服店冬物賣出始まる、家々は衣服冬物仕立にいそがし障子の張かへよし。

## 十一月

△天長節――この日天皇青山練兵場に臨幸して觀兵式を行ひ給ふ、季節は恰も小春時の事なれば、市中遊觀に尤もよく、上野淺草芝等の公園盛に賑ひ、團子坂の菊人形一しほの盛況なり、此夜外務大臣夫妻主人となりて皇族大臣を始めとして內外の官吏民間の紳士を帝國ホテルに招請して夜會を催す。

△酉の市――十一月の酉の日には淺草田甫の大鷲神社に大祭を執行す、俗にこれを酉の市といふ、熊手、芋頭を賣る。

△季節――紅葉霜に飽いて正に灼爍、王子瀧の川、品川海晏寺、上野、芝公園の楓樹、千反の錦を懸けたるごとし、房州冲の秋刀魚、北海道の初鮭魚棚に上る遊獵季に入り無益の殺生するもの多し。

## 十二月

△歲の市――小春二十日の好季節を過ぎてこの月に入れば寒氣稍く身に逼りやがて歲の暮に近けば、百萬の人家皆越年の用意に忙がはしく市中の景氣何となく騷騷しげに見ゆ、十四十五の兩日に深川八幡社內に歲の市を開く、次で十七八の兩日、淺草觀音境內に、次で十七八の兩日神田明神社內にそれより愛宕神社、平河天神、湯島天神と取次に市を開き、歲暮、年始に用ふる家具を始め勝手道具一切を賣鬻ぐ、都人之れを購ふて用ふるを例とす、其品は注連繩、飾海老、橙、裏白を始めとして三寶、手桶、俎、雑煮箸、神酒口、鐵網、塵取など賣る店相列なり、華美を好む女子は押繪細工の羽子板賣る店に集ふて一枚に、數十金を吝まざるもあり、二十七八日の頃より市中諸商店概ね歲末賣出の招牌を掲げ屋號を記せる高張提灯を立て品物を軒外まで張出して專ら景氣をつくる、家々にては煤掃ひをなし年越の用意に急しく、米屋、菓子屋など賃餅を仕出し門松賣の呼聲、太神樂の笛の音いそがしく、かくて大晦日とはなるなり、三十一日には宮中にて大秡の神事を行はせらる。

△季節――初冬の凩風身に徹して女は御高祖頭巾に男は外套面深に身を包む時となる。鹽鮭、鱈、鴨、青鷺

雁、水鳥、市に上る、三河島菜、店頭に畑をつくる、蜜柑色美く枯野見るによろし。

# 消息十二ヶ月

△ △ △

## 一月 かるた會の翌日

昨夜は春雄樣をよく御貸下さいましたね。お蔭樣で近頃にない面白い遊びを致しましたよ。誠にお元氣のよいお子供だと皆の者がおほめ申して居まする、この次の日曜日にも是非御一緒に遊びたいとさわいで居ります。春雄樣は早くお歸り遊ばしたい樣子でありましたのを猶少し、も少しと無理にお引留申して到々十二時まで引ばりました、お宅では何時もお定まりの時刻にお寢みでせうのに、嘸まアお眠むかつたで御ざいましたらう、昨夜のかるた會は大勢樣御集り遊ばしたので仲々の盛會で近頃の大激戰でしたよ。其節春雄樣の懐中時計床の間にお取置遊ばしたのを私お預り申しお歸の節お渡し申そうと存じながらつい忘れてしまひ、唯今簞笥の上で見出しましたから御屆申します、どうぞ御受取なすつて下さい、私が無言で御預り申した事ですから若や途中でお取落遊ばした事と御心配なすつて被居るだらうと、いよ〳〵申譯がございません、まづお詫旁々春雄樣によろしく御傳下さいませ。

右返し

わざ〳〵お人で時計御遣はし下され恐れ入りました悴こそ毎度お邪魔に上ては御厄介に成り、昨夜もお送りまでして頂き私方よりお禮申上ねばなりません。マアどんなに面白い方々でしたらうか、春雄が歸りましてから床に這入ましても御噂、誰樣に幾度負けたの、彼れ樣のおずるい遊ばし方のと繰り返〳〵申しつゞけて居りました。時計の事はとんとわすれまして唯今御使で始て氣が附いた位です、何共早恐れ入ました、近頃の御盛會と承るほど定めし皆樣方へ失禮いたした事でせうね、どうかよろしく、其内一と晩私方へも御寄

合下さい、お待受申して居ります。

## 二月　梅見のお誘ひ

俄かの思ひ立で御都合は如何とは存じますがこの四五日曇り勝の天氣も今朝は快く晴れまして鶯の聲耳に懐かしう聞へそめました。どうでせう葛飾邊の梅林へ出懸けましては、私方では兄と娘に私の三人、御存じの隣の娘も誘ひました、あまり早急ですが、貴女様に御差支がなければ至極の好都合と存じます。

右かへし

マア嬉しい思し召、何は扨置きお供を願ひたいものです、丁度唯今髪結が參つて居りますから取上ましたら直ぐに參上いたします。



## 三月　花見のおさそひ

いつぞや仰しやいました小金井の櫻、境の停車場に居ります友人から今朝ほど便りがございまして花はこの二三日が盛りとの事です、日曜は人の出が大層で汽車の上下がおつくうでせうから、常の日がよからうとの事でいよいよ明日に取極ましたが御都合は如何でせうか先達ては乾度參るとの仰せでしたが、御兄様の御祝儀があつて間もない昨今、御多用の折柄、如何とは存じますが、

兎に角申上ねば何だか物足らぬ心持が致すものですから一寸お知らせ申します、お出下さればどんなに嬉しいか、私共では母に妹、それから伯父も參るつもりで御坐います。

右かへし

小金井の花見明日との御手紙有難う私はまだ彼處を知りません、何時も人樣の御話が出る度に羨ましくて、是非この春は御一行に加はりたいものだと願ふて居りました、殊に叔母樣、常子樣、又あの面白い御氣質の伯父樣も御出とあらば、まアどんなに賑やかな事でせう。早速母に申して許しを乞ひましたところ、それはよい折柄であるから用事を荒々片付けてお仲に加はる樣にと申し御刻限など委しく承つて置けとの事でございますから、御返事旁々下婢をさし上ました故萬事御指圖の程を願ひます。

## 四月　汐干がりおさそひ

春とはいへ此頃のお天氣のよい事、どなたにも御花見のお催しが御在ませう、この頃の新聞で見ますると品川邊の汐干狩、明日は大汐との事でございますから定めしお臺場あたりまでも干あがるでせう。幸い日曜の事なり主人が留主して呉れる筈で子供達みんな連れて參るつもりでございます。同じ事なら貴女樣にも御出を願つて一日ゆつくりと遊び度いと存じます、御都合は如何、若御差支がありませんければ明早朝宅迄御出下さい、舟や辨當の事は總て手前共で用意させて置きますお召物は成可くお惡いのが宜しう御在ますよ。

右かへし

汐干狩にいらつしやるとの事、御誘下すつて弟などは大喜び何事はさし置てもお供致したいと大騒でございます、御遠慮なく御言葉に甘へ大勢めし連て參上致しますから宜しい樣にお取計らひ願ひます。

## 五月　蠶豆を人におくる

田舎の人に成りましてから都の手ぶりとんと忘れて仕舞ひ、花よ蝶よといふ春をも麥生の青々しきに慰めて

日を暮して居ります、景色を申せば此頃の若葉の蔭に初ほとゝぎす、けれど此の邊の人々は早稲田の植つけは何日頃からかなど言ひ合ふて待ち喜んで居ります。僅か十里も隔てない處ですが東京といへば大層遠い處の樣に思ひましてつい御無沙汰を致しました、貴女樣いつもお變なく御壯健で又旦那樣も段々御出世の御事と蔭ながら喜んで居ります。私共良人も兼々御心配を頂きました腦病も近頃は大きに薄らぎまして、此方で氣任せに勤めを致して居りまして暇のある時は手馴れぬ鋤鍬など持ち出して子供の樣な事をして居りますそれゆゑ唯今では都會へ出て花やかに暮そうとの希望もございませず、唯長閑を取柄に身の養生を致して居ります、又私も手拭をかぶり、桑摘などに出て朝夕の仕事全くの田舍女と成り果せました。扨今朝ほど實家から人が參りました故序に蠶豆を少し持たせましたこれは私の手を掛けたものですから自慢心にさし上ます、粒は小うございますけれども土性によく合ひました所爲か味は此の邊で一等の名物だと人々の話でございますからめし上つて下さい、も少し御近い處に居らつしやれば斯な物は折々は御覽に入れる事も出來ますけれど、少々御遠方なのが憾です。

右かへし

御實家樣からの御使を引とめて唯今田園生活とやらの御住ひの樣子を細々と承はりました、頂戴いたした御籠の品、あれは貴女が御手づから莢をおむきになつた物とか、まアそんな事にまで御馴れ遊ばしたかと御使から承はつて嬉し涙が溢れました、御良人樣の御鄕里ですから御引籠りについては萬事御都合のよい事と存じます、殊に田舍住居の御氣樂さ、誠に御羨ましい事ではございますが、前途有望の御身を何時まで埋木におさせなさつては惜しい事、當分はまづ病院に居らつしやる御つもりで十分御養生遊ばしてお健康におなり遊ばしたらば再び御出京遊ばして都會生活をなさる樣おすゝめ申します、御籠の品、八百屋から持參致すものとは大層な相違で實に新らしく風味も一しほでございませう、此方の有樣は取分けて申上るほどの事も御

坐いません相變らず俗な暮らしを致して居りますが仕合と皆壯健でございます。

## 六月

故郷の母へ

此頃の暑さ、搗て丶惡い病氣も流行致す折柄、私の身の上に就て樣々御心配下すつて度々御手紙有難う存じます、衛生上の事はよく守つて三度の食事其他の事注意專一に致して居る所爲か何事もなく健かに暮らして居ります。扨暑中休暇は今一週間の後でございます故、即日直ぐに出立しやうかと存じましたが恰ど隣村から參つて居る同級生の人がございますのでそれと同行の約束を致しました、この人始めての歸省故少く土產物調へるとか、それこれの都合で豫定の日限より四日ばかり遲れませう昨今の一日は十年のやうで早く御膝下に參りたう存じますけれど約束に背きましては宜しくないから其御含願上ます、御誂らへの御菓子だけは私持參致しますが、親類の方へ差上げる土產物其他は今日行李で差出しましたから御受取下さいませ



右かへし

御出しの郵便昨夜つきました、暑中休みに御連立の都合で少々遲るゝとの事、御交際としてそれは御待合の方が宜しいですよ唯當地鎭守の祭禮今年は例年に似合ず賑かといふ趣向で明後日から五日間の賑ひ、それを見せないのはいかにも殘念

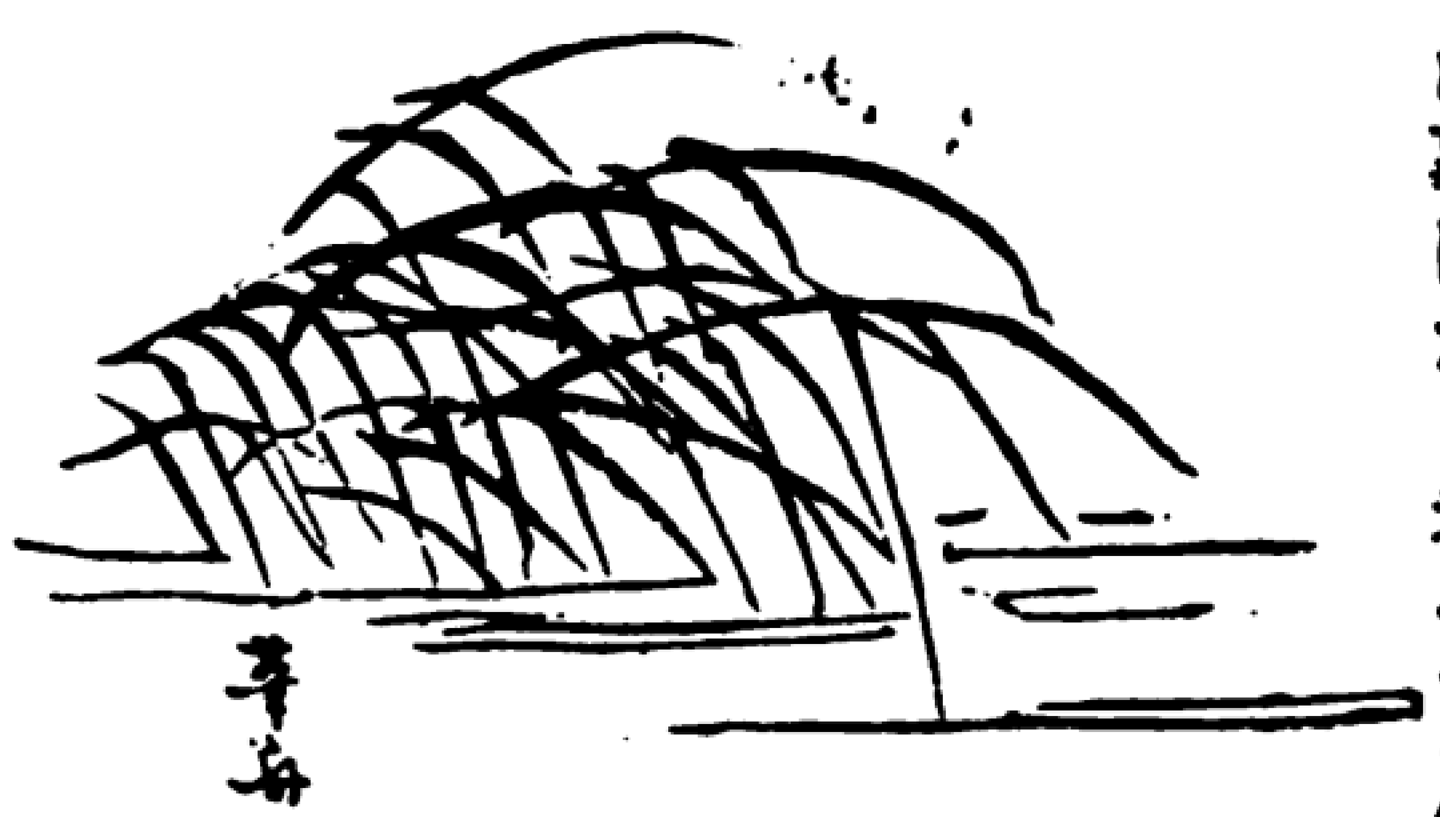
です、東京でいくらも面白いもの見馴れては居るでせうが田舎は又田舎の風情があつて兄弟ども一同それを御身へ御馳走の一つに數へて居ましたから手紙を見てから大そう力を落しました隣村から參つて居られる方ならば同じ連合の祭だから其の人のお宿許でも定めし待つて居られるでせう、一應この事をお話してせめて二日も早く歸られる樣にしたいものです、父上にそんな事を申してやるには及ばぬと申されたのですが、母は其折引つれて親類廻りもさせたいと思つて斯の事一寸申して置きます、猶此の暑さにお障のない樣道中は格別に注意してお歸りなさい



## 七月

### 暑中見舞

今日は寒暖計が九十度を越しました、いかゞ御暮しです私共では手水鉢の水が湯のやうに沸き、草も木も枯れる樣な暑です、こんな時に氷の柱でも建てたらばなぞ下らぬ事ばかり考へて居ます、貴女のお宅はお廣い上に天井も高く、私共とは違ふて御凌ぎのよい事と存じます、御樣子如何、暑中御尋のしるしに葛素麺一重御覽に入ます、最寄の菓子屋から整へさせましたから出來はどうか知れませんが、砂糖蜜一瓶さし添へて上けました折からのお暑さくれ〴〵もお厭ひ下さい。



右かへし

暑さの御見舞に大好物のお品を戴き有難う御禮を申上ます、私宅皆々格別の障りもなく、唯暑い〳〵を言つづけ日を送つて居ります、御說の通り少々廻りは廣う

ございますが、西東をうけた家で朝夕共隨分さびしいものです、當年はどちらへか御避暑なさいますか、御思召がございましたらば御伴を致したうございます。

## 八月　誕生日に友を招く

こと〴〵しく文もて御招き申すほどの御馳走もございませんが明日は私の誕生日でございますから例年の通り心祝の小豆の飯に手料理の粗末なもので充分にお遊び申したいと存じますから朝から御出下さい、御妹御樣も御一緒ならば猶結構です。餘興はいろ〳〵ありますよ。兄など大分凝つて居るやうですから。

右かへし

あすの御誕生日かねてから指折りして御待申して居りました妹も何かおもしろい御祝物をと考へ出し御褒めに預りたいなど申して居りますから持參して御目に懸けませう、尤も朝からの御招きですが伯母から頼まれました用事が少々ございますそれを片付て正午ごろから參上いたしませう。

## 九月　殘暑の見舞

當年は格別に殘暑が烈しうございます、秋とは申せまだ日々氷を命に暮して居ります、貴女の方には御老人やお小供達も皆御變りもございませんか、御總領はもう學校が始まりましたらう、御通學の道嘸かしと存じます、夏以來引つゞいて流行した例のいやな病この頃いよ〳〵烈しい勢ださうですが御宅などは御手廣ですし、空氣の流通もよし、いつも御奇麗にお掃除がゆき屆いて居る上に皆樣御養生家で入らッしやるから、別に御心配はありますまいが、御外出の方には御用心が肝要です、あつい〳〵と申しても、今暫らくの間ですどうぞ御厭ひなさいませ、暑氣拂ひの料にもと泡盛二瓶持參いたさせました。

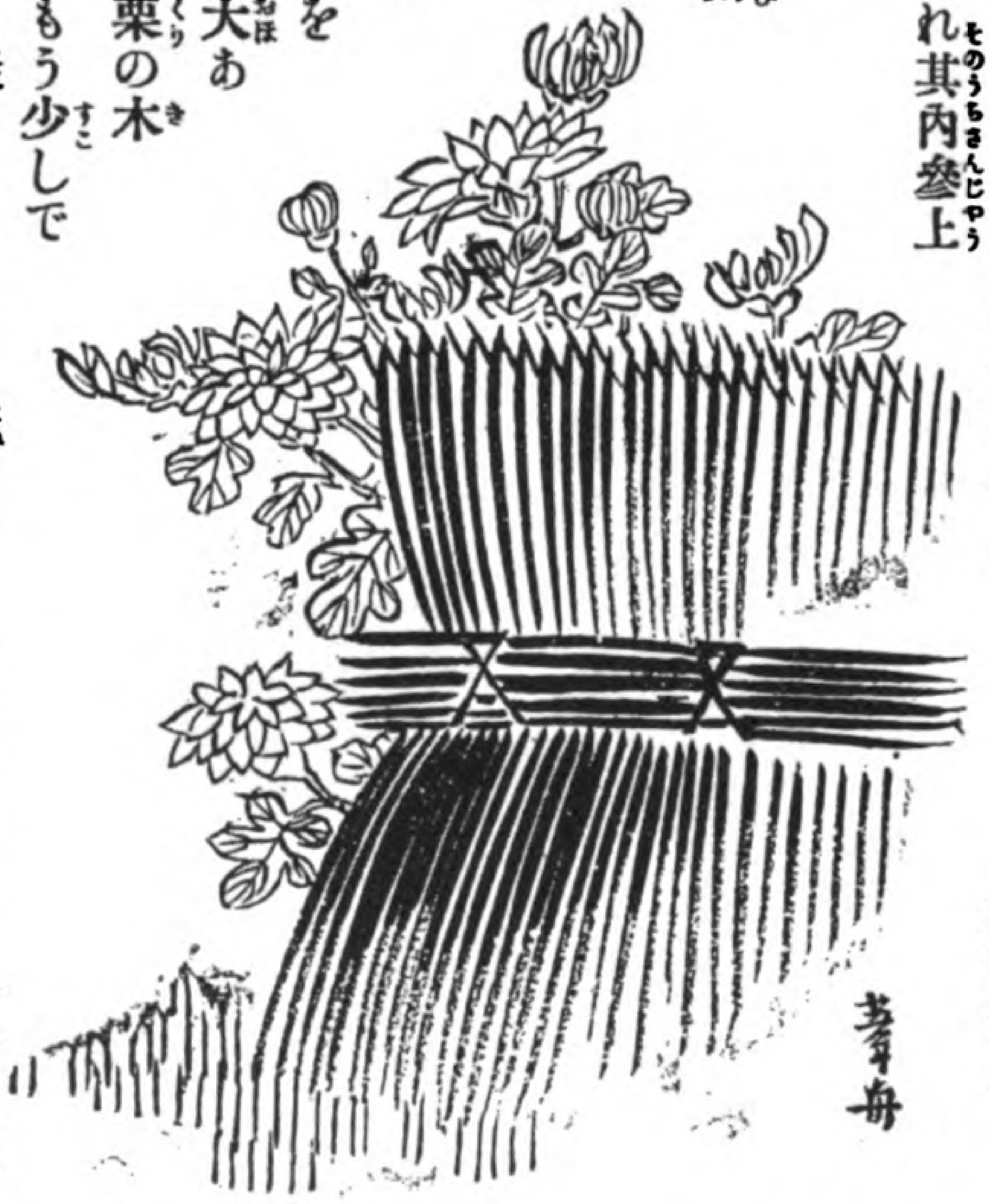
右かへし

御懇の御見舞文ならびに暑氣拂ひにとの思召の二瓶有難く頂戴いたしました、仰のとほり名のみは秋に入ながら猶團扇はしばしも放されません今日此頃の暑さ、

手前共一同幸に殘暑のさわりもなく老人達いたつて健壯でございます故、乍憚御安心下さい、御案じ下された總領も平常あまり丈夫といふ方でございません故今暫時學校を休ました方がと存じて澁谷の實家へ當分遊びに遣つておきます、いづれ其內參上萬々御禮申上ます。

## 十月　野分見舞

昨夜の大あらしはいかゞで御坐いました、御障りも御在ませんでしたか、今朝雨が上りましたのを見てやつと胸を鎭めました、實に近頃にない大あれでした、私宅の裏に有つた栗の木は二本の根を逆さにして仆れもう少しで離れの屋根に覆ひ掛らうとする處ろをあぶなく免がれましたのは幸でした、烈しい時は丁度家內中が舟にでも乘つて居る樣な心地でございました、貴方樣は高臺の二階造り、嘸ぞ酷かつた事だらうと存じます、定めし御傷みの個所も多からうとあやぶまれまして一寸御伺いたします。



右かへし

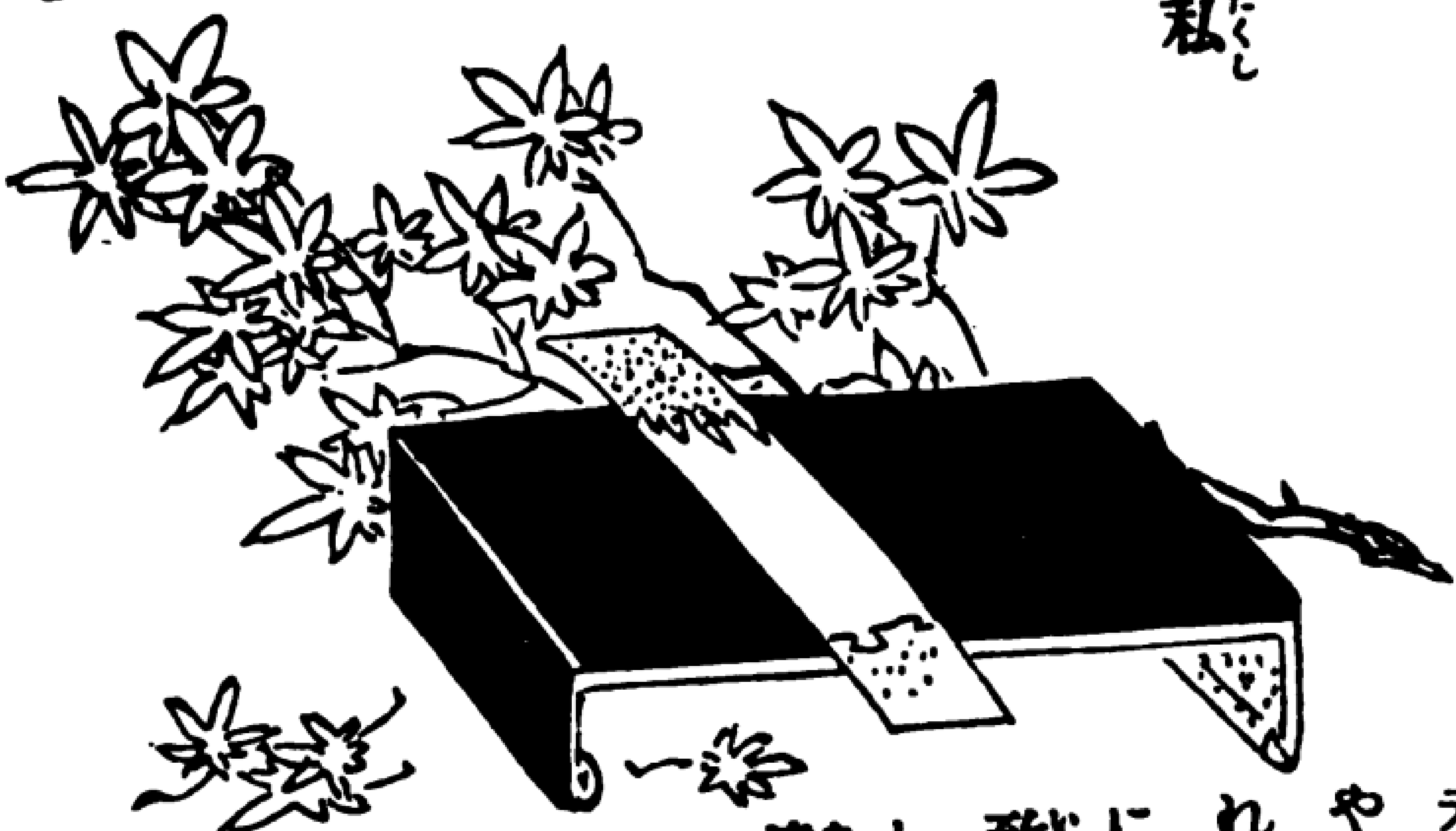
早速御尋にあづかりまして有がたう、仰せの通りゆふべは生た心地は致しませんでした、一時は戶障子の響き、塀の仆るゝ音、屋根も柱も引ぬかれるかと思ふ位でした、今朝見ますと仆れましたのは廻りの塀と垣ばかりで門前の長屋も裏の物置も破損と申すほどの處はなく却つて驚かされた位でございました、御宅の栗の木も折れましたとやら惜しい事を遊ばしました、私宅では良人が大自慢で今年花が咲きましたらば御夫婦樣へ御入を願はうとお約束をし

てきました菊畠が折れた木の下になり散々の體になりましたこれ丈が殘念でございます。

## 十一月

### 仕立物の手傳をたのむ

急にお寒くなりまして平常心掛のわるい私共では大きに驚ろきました、御存じの通り家内多でありながら働らく人は少く、七草よ菊よとうかうかするうちに早昨今の寒さ、多勢の人々に同じ樣に着せねばならぬのを兎角手廻しが惡く後れ勝ちで困ります、尤も不斷着の方はどうやらこうやら間に合せましたが晴衣の方が何分廻り兼ねて大困りを致して居ります誠にお恥かしい事ですが御心安立の御願羽織三つ重ね物二組ほどお稽古に參つて居られる御子達の中で御縫ひ下さる事が出來ますまいか、粗末な品ですから御叮嚀には及びません、御聞届下さらばお持たせ致そうと存じます。



右返し

御手紙拜見嘸かし御縫物にお追れ遊ばす事でせう、御老人の世話といひ、御子達も大勢居つしやる事ですから御道理でございます、それですのに、いつもいつも御手づから御間に合せなすつて御奇麗にお出來のを拜見致し私共の若い物皆んなが感心致して居ります、御申越の事稽古に參つて居る娘達が聞きましたら大喜びて御引受致すでせうが、私も隱居で仕事の致し方なく母屋の物は大かた縫ひ終りまして只今手あきに困つて居る折ですからお差支なくば私拜借して致したう存じます故、どうぞ御遠慮なく御つかはし下さいませ。

## 十二月

### 新海苔を故郷の親族へ送る

あなたの方では舊暦を御用ひなされませうから今霜月のさし入でまだ中々正月には日がございませう。東

京の方では何だか忙かしくてもう年の市も立そめました、今年の景氣は一体に引立まして私の店など下職も引足らぬ位でございます、これは近年にない珍らしい事と喜んでをります、新年へかけて猶此の景氣か續きましたらば來春は伊勢參宮をかねて久し振りに御地へ參る事も叶はふかと今より樂しみにして居ります、いつもさし上ます新海苔が今年は少々肉か薄いやうではありますが、味はこの方がよろしいと存じまして少々づゝですけれど、むかし御世話になつた御醫師樣と學校の先生へも御上なさつて下さる樣別々に包で一行李に納めました、およろしくは又仰やつて下さい、唯新海苔といふので、いそいで御覽に入れたばかりです、あるじから御手紙さし上るのですが商用でいかにも忙かしく筆取る暇もございませんので私かはつて皆樣へよろしく御無沙汰の御詫までに申上ます。




右返し

お心を籠めて賜はつた御行李昨日着きました、いつも乍ら御厚意の頂戴物有難う存じます、御手紙の通りいづれへも配付いたしました處ろ皆樣大喜び銘々よりもお禮は申上るけれど御序の節厚く申して呉れとの事でした、扨御文によれば東京も上景氣でございますとか、御店の御繁昌蔭ながらお喜び申上ます、一昨年の暮でしたか御商運も思はしからぬとやらで、當方では樣々と氣を揉みました事もござりましたが、それに引かへ昨今の御繁昌を承りまして胸の開いた心地がいたしました、どうか來春參宮の思召立もございましたならば前以て一寸御知らせ下さいませ、そうすれば御待受の用意をそれ〲致して置きます、御歳暮ではございませんが、小包で太織一疋さし出しました、これは私の手織でいかにも見つきはわるうございますが、色持もよく御德用の品と存じますから御夫婦樣の御不斷着にして下さい。

紀元二千五百六十五年

明治參拾八年乙巳

# 家庭曆

西曆一千九百五年

## 前半期

| | |
|---|---|
| 元旦祝會 | 一月一日 |
| 仕事始 | 一月四日 |
| 節分 | 二月三日 |
| 初午 | 二月七日 |
| 紀元節 | 二月十一日 |
| 涅槃會 | 二月十五日 |
| 桃花の節 | 三月三日 |
| 春期彼岸會 | 春分日 |
| 灌佛會 | 四月八日 |
| 觀櫻筵 | 四月中旬 |
| 汐干狩 | 陰暦三月三日 |
| 摘草 | 四月下旬 |
| 端午の節 | 五月五日 |
| 地久節 | 五月廿八日 |
| 花の祭 | 六月三日 |
| 半期整理日 | 六月三十日 |

## 後半期

| | |
|---|---|
| 星祭 | 七月七日 |
| 靈祭 | 七月十三日 |
| 納涼筵 | 八月中旬 |
| 觀月筵 | 陰暦八月十五日 |
| 重陽 | 九月九日 |
| 秋期彼岸會 | 秋分日 |
| 孔子生誕祭 | 陰暦八月廿七日 |
| 茸狩 | 十月中旬 |
| 天長節 | 十一月三日 |
| 七五三の祝 | 十一月十五日 |
| 紅葉狩 | 十一月下旬 |
| 煤拂 | 十二月十三日 |
| 翌年計畫日 | 十二月廿三日 |
| 聖誕節 | 十二月廿五日 |
| 大祓 | 十二月卅一日 |
| 除夜會 | 十二月卅一日 |

## 特別曆

祖先祭
考妣祭
誕生日
家族祭
起業紀念日
結婚紀念日
親戚會議
苦難紀念日

| | |
|---|---|
| 四方拜 | 一月一日 |
| 元始祭 | 一月三日 |
| 孝明天皇祭 | 一月卅日 |
| 神武天皇祭 | 四月三日 |
| 神嘗祭 | 十月十七日 |
| 招魂祭 | 十一月五日七日 |
| 新嘗祭 | 十一月廿三日 |

## 小曆

| | |
|---|---|
| 七種 | 一月七日 |
| 鏡開 | 一月十一日 |
| 賽日 | 一七月十三日 |
| 更衣 | 五十月一日 |
| 蟲干 | 七月十五日、 |
| 爐開 | 十月一日 |
| 煤拂 | 十二月十三日 |
| 決算 | 十二月卅日 |

## 日曜表

| | |
|---|---|
| 一、八、十五、二十二、二十九 | ▲二、十月 |
| 二、九、十六、二十三、三十 | ▲四、七月 |
| 三、十、十七、二十四、卅一 | ▲五、十二月 |
| 四、十一、十八、二十五 | ▲六月 |
| 五、十二、十九、二十六 | ▲二、三、十一月 |
| 六、十三、二十、二十七 | ▲八月 |
| 七、十四、二十一、二十八 | ▲九月 |

松山俊立案

# 四季の出ある記

ゆかり女史

私は女の癖に散歩好の物見高い性分で御在ますから初めて見る東京の物珍らしさに、今年は始終歩いて許り居りました。日曜といはず祭日といはず、ちつと暇さへあれば……否え、自分で暇を作つてまでも、出て歩くのを何よりの楽みと致して居りました。今日は夫れ何處に何があると聞く度に、随分遠方までも出掛たのです、田舎者の東京見物を赤毛布と申しますが、私は女の癖に其の赤毛布を行つたので御在ます、斯して私は天晴お轉婆娘の評判を博しましたが、そのお蔭には東京は隅々まで心得て了つて、大抵の所は知らぬ限なく、大きく言へば足跡全都に洽しとでも申上たい位のもので、今では最う殿方にも負けぬ程の東京通で御在ますよ。

私共が東京へ参つたのは押詰つた十二月の末で、兄夫婦と共に貸家を捜すやら、引越をするやら、正月の支度をするやらで、非常に忙しく暮して了ひましたから、仲々見物などの騒では御在ませんでしたが、愈々障子の張替も濟み、餅も搗けて來て、大方仕度も調つた大晦日の晩、銀座の夜見世に買物に行つたのが、東京の賑かさを知つた初めなので御在ました。

此の時私の心に銀坐は賑やかな所、面白い所と感じましたが、外にも此様な所が幾もあると聞くものですから、いでや是より東京にありとあらゆる衢の殷賑扨ては名所を見て歩かうと云ふ大それた願を起し、新年匆々から、テク／＼歩きを行つたのでしたが、其は實に愉快で御在ましたよ。

## ▲初荷と出初め（新年の見物）

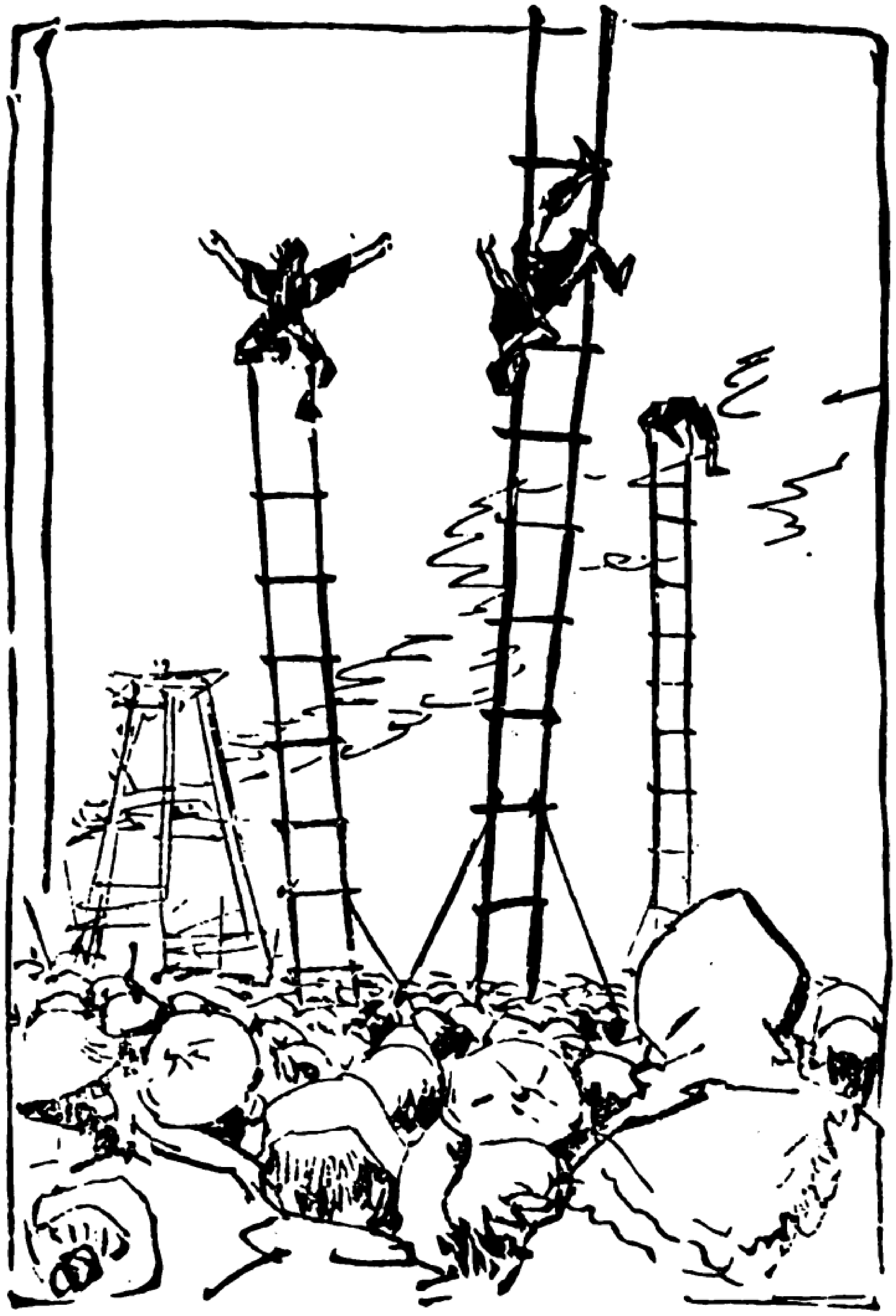
先づ何よりも初めて田舎から來た許の私は、東京の正月が見たくてなりませんので、元日のお屠蘇を祝はうし、直ぐに實行しやうと思ひましたが、兄が今日は回禮客が通る位のもので別に賑やかな事はない、其

の代り明日は萬歳も通れば、初荷も見られて面白いから、明日にしろと申します故、其の命に從つて此日は家でおとなしく遊んで了つたので御在ます。

そこで二日の朝は早朝より愛宕下の住宅を出て、別に年始にゆく所も御在ませんから、唯だ何處といふことなしに市中を散歩いて見ました。國のお婆さんに聞かしたら驚くでせうよ、昔者の常として御寺の和尚と良家の娘は松の内に外に出るものではないッて言つてる位ですから……けれど私は大反對ですわ、今時這麼馬鹿氣た戒に從はれるもんですか、それに兄も私と同主義で、當節柄女なりとて家に逼息して居る樣では因循臭くて不可ぬ、大に運動す可しつて奬勵して呉れる方ですから、私は誠に仕合なんですよ。仕合せと言へば此日私の見た人の顔には、幸福を約束する芽出度い瑞雲が揺曳いて居る樣でしたわ。綱引を飛ばせるフロクコートの紳士の眉宇にも、小僧を連れて年玉を配つて歩く袴羽織の商人の顔にも、瑞々しい松飾の間に追羽子を突いて居る娘の顔にも、總て活々とした新らしい氣が立ち昇るやうに見えました。それから家門の繁昌を祝ふて歩く三河萬歳の鼓や、獅子舞、角兵衛獅子大神樂の大鼓の音で、其の何うも賑やかな事つたら、田舎で迚も想像の出來ぬ事で御在ますよ、今思ふと彼の兼房町通りで御在ましたね、彼處へ參りますと、丁度向ふからお祭の樣な騷でチャンチキチャンチキ、スッテン／＼と遣つて來るものがあります。停立つて其の近附くのを見ますと、先頭には奇麗に飾つた花車を進ませ、其に續いて數十輛の牛車、牛には五色の布の化粧が施してあり、車には荷物を滿載して、其にエビスビールと記した商標旗と、長い篠竹の先へ付けた球燈とを挿し、馬鹿囃子とエンサカホイの掛聲で以て車が進行すると共に、球燈がゆら／＼と左に右に鉢合せをして居るので、御在ます。成程大したもの、是が初荷と言ふのであらうと思ひましたから、尚且外のをも見たいと存じまして、御苦勞樣にも其の車のお伴をして銀座の通りへ出ますと、此處は又た大層の賑ひ方で、往來はまるで織るやう。するとエビスビールのと畧ば

同じ樣の趣工で、サッポロビール、岩谷天狗、其外いろ／＼の初荷が一度期に遣て來ましたが、何れも勇ましい景氣のものですこと、私はほんに新年劈頭の好い觀物だと思ひました。

それから可笑しう御在ましたのは四日の朝、突然にチャン……チャン……チャンと梵鐘の音が響くので、火事ぢやなくつてと慌て丶跳起きたので御在ます、而したら兄は笑つて居て、火事ぢやない、消防の出初だつて申すぢやありませんか、何だ馬鹿々々しい、お蔭で風邪を引き相だと、弗々言て居ますと兄は猶ほ床の中で、東京市中六分署四十組の消防夫、總勢すぐつて二千餘名、揃ひの半天腹掛股引に身を固め、取佩く手鍵、長鍵を朝日に晃めかして、隊伍堂々、八重州町の原に整列したる有樣は實に江戸の花勇ましくこそ見えにけれど、講談口調か何かで辯つて居るものですから私は行つて見たくなつて、兄さん面白さうね、つて鎌をかけますと、見たけれア俺が連れてつて遣らうつて申しますので、是れや好い鹽梅、御意の變らぬ内にと促し立て丶朝の御飯も匆々、嫂から飛んだ彌次馬の御



揃ひだと冷風かされるのも耳にも掛けず、家を飛出したので御在ます、すると日比谷公園あたりは仲々の人出、彌次馬は私達ばかりぢやアありませね、で、八重洲町の原に出て見ますと、成程大層の消防隊、其が各自の纒印の下に整列して、方形の陣取をなし、あの廣い原を包圍して居るので御在ますよ、而して赤い色の蒸氣喞筒は重砲でも据付たやうに控へ、組々の腕力喞筒は臼砲でも持出したやうに置かれ、筒口は小銃のやうに荷はれ、天に冲する梯子刺扠の數々、其はほんに壯觀で御在ますよ。私共の行つた時は消防主任官の點檢が終つた後とかで、丁度喞筒の練習を行てる所でした、ハイ、梯子乘も見ました、假設火事の消防も見ました、救助網の試驗も見ましたけれど、私が一番感心したのは、獨乙から取寄せたといふ救命階子の試驗でした、其れは車の上から長い長い鐵の階子が、丁度繼竿の樣な仕掛で天に向つて突出し高い所に掛ると、之に一人の者が猿のやうにスル／＼と登つて參りましたが、實に輕妙なもので御在ますこと、此の時私は渾麼事を思つたのです、何處かに火事があればいゝなそしたら此の人達が實地に働く所が見られて面白からうなんて、私は先ア如何して斯う彌次馬根性なんでせう、其の足で淺草に參り、翌日は神田の明神から湯島から上野、其の又たあくる日は山王樣に、招魂社どこも／＼賑な所ばかり、這麼風に松の内は遊んで歩いて許居りましたが、暮の内に入學の手續をして置いた、三田の女學校に、一月八日の新學期から通學することに成つたものですから、左樣々々は運動ばかりしても居られず、さうかと言つて廢して了ふも厭ですから、勉强したり、運動したり、其は／＼忙しい体になりました。

### ▲初卯詣(繭玉のみやげ)

國に居りました時、お婆さんの話に初卯には龜井戸が賑やかだよと聞いて居りましたから、行て見たく思つて居た所、丁度其の日は十日で日曜ではあるし致しますから、兄に賴んで連れて行つて貰ひませうと存じ

た所、兄はお友達と外に約束があるとかで斷られましたから、今度は嫂さんに同行を迫つた所、私と違つて非常な出無性で御在ますので贊同して與れず、仕方が無いから一人で行くことに極め、先づ地圖を開いて見て大方の見當を心得て置き新橋から電車に乘つて兩國で下り、橋を渡つて、詰の公番で道順を聞いたのでしたけれど、餘り丁寧に敎へて與ましたので、東京馴れぬ私には何が何やら薩張要領を得ずに了ひましたから、何でも人が大勢行く方に跟いて行つたら宜からうと思ひ、無我無中にいろんな町を通つて



行きました。ソレでも辻々の町名札を讀んで行つた順番によると、龜澤町、南割下水、竪川通、報恩寺橋といふのでしたから、餘り損も爲なかつた樣ですわ。扨て愈々天神橋といふのを渡ると、左側には酢に團子などを並べた掛茶屋二軒、雜誌の口繪で度々拜見して居ると少しも違はぬ大皷橋を渡つて境内に這入ると、何よりも先づ驚くのは夥しい雜沓、此の境内に落ち合ひ流れ込んで來る男女の人波は實際潮の湧く樣で、其が又押合ひ揉み合ひする有樣は唯だもう凄じいと申すより外は御在ません。境内には天神樣の御社に並んで妙義樣の御社があり、妙義樣の

方では當日の祭神といふので、參詣の客が夥しく集つて賽錢を奉り、神官が之に開運火防の御守符といふのを戴かして居ります。其柄天神樣の方でも、雷除の御守札といふのを下される相で、其を滊車の切符か何ぞの樣に帽子の椽に挾んでゐるのを澤山に見受けました、而して繭玉を商ふ者が澤山に居りますよ、之を又た何の人も〱大抵は買て歸る樣ですね、此の繭玉と申すのは柳の枝に團子を五色に彩つて着け、尙ほ紙製の小判や千兩箱のやうな物を大小幾つとなくぶら下げたもので、謂はゞ小兒の玩弄品に過ぎませんが、緣起を祝ふ御幣擔ぎの人達には至極尊いものだ相で、私の傍に居た紳士の如きは大枚五圓を投じて大枝を二三本買つて居りましたつけ、馬鹿らしいでは御在ませんが、中には又た小僧体の男で慈姑の團子の串を頰張りながら人中を歩いてる者もありましたが、私は何も喰べる所の元氣でなく、雜沓に避易して匆々境内を出て了ひました。

### ▲閻魔の賽日（籠を出た鳥）

一月十六日土曜日の午后、學校よりの歸路、同級生の東さんと道連に成て、例の芝山内を通つて參りますと平時になく賑やかではありませんか、東さんに今日は何があるのと御伺ひすると、貴孃御存知なくつて、今日は閻魔樣の賽日よ、地獄の釜の蓋の明く日だと言ひますわ、而して又た小僧さん達の休暇日よ、ホラ御覧なさいまし、向ふから双子のお仕着に小倉の帶を締めた小僧さん達が大勢來るでせう、彼の人達は今日一日主人から休暇が出て方々を遊び暮し、今此處の閻魔樣へ御詣りに來たんですわ、東京の町方では一月の十六日と七月の十六日、此の兩度の賽日を藪入と申して、雇人に休暇を與へるのが古來の習慣で御在ますから、小僧さん達は丸で籠から放した鳥の樣に翼を伸して、此日一日を行きたい所に行き、見たい所を見、喰べたい物を喰べて市中を遊び歩きます其故淺草は先ア一番ですが、此の邊迄も此の通り賑ふので御在ます、ドレ

貴嬢の爲めに閻魔樣を御案內致しませうかと仰言るので、御慶事紀念の電燈の前を右に曲つて行くと、そこには一種陰氣臭い鐘太鼓の音がして、善男善女の參詣人がゾロ〳〵出入して居ります。群集を押分けて御堂の前に來て見ると、恐ろしい顔の大きい口の閻魔の像が嚴然と控へてお在なさるのであります。兄なぞに言はせると閻魔なんてものは想像の產物だつて申しますけれど、其にしても能くまア這麼に大きな妙智奇な物が出來たものだと、私は熟々思ひました。其柄大門を出て神明樣に參詣し、宇田川橋でお別れして、私は愛宕下の方に東さんは源助町の方に。



▲初　午（鳥居の林）

其の東さんから初午には王子の稻荷樣が賑かだと聞ましたから、二月六日の當日、王子行の動議を提出致ました所、否、王子よりは羽田の方が宜らうと云ふ兄の意見で、此日は嫂までも引張出し家內總出で以て羽田の穴守稻荷に參詣する事に成ました。で、新橋から大森まで汽車に乘り其より嫂は電車が嫌なので一同俥で行く事になりました。

車上より田甫の景色の清々としたのを眺ながら、畑道を凡八丁行て廣い街道に出で、道標の羽田道とある所から左に這入て、一直線に南に進と、軈て蝦取川の渡場に出ました。そこで俥を下て、人も俥も渡して貰ひ對岸に揚ると、もう此邊から掛茶屋、翫具屋等が軒を並て居ます、掛茶屋には納め手拭を吊た竹竿がズラリと軒先に出て在て、床几を据え、菓子燒鍋蜜柑の類を置いて、口々に御休なさい、御掛なさいと呼はつて居る、其聲を聞流しつゝ二三丁行つて石橋を渡ると、鳥居が段々見えて來ます、鳥居といへば實に驚きましたよ、宛然隧道の樣に、澤山の鳥居の林が犇々と重り合つて、凡そ四五町の間一列に續いて居りますが、數へて見たら何千本あるか知れますまいよ、聞けば是は皆な御信心連の奉納ださうで御在ますね、兄は例の調子で、盛なる哉稲荷や、僕も人間を止めて稲荷になりたいと申すんで御在ますよ、けれど眞實さう思ひたくなる位で、實に之には驚きましたよ。扨て此の鳥居が盡きると、お社があり、そこには參詣の男女が大勢居りました、中には何々講中と記した旗を押立て揃ひの着物を着た團隊の參詣も多く見受けました。それから境内を逍遙いて見ますと、神樂殿や額堂や水行場があり、社務所では火難、盜難除の御守を賣つて居ります。而して其の社務所の對面に洞穴が御在ます、入口に茅葺屋根の小さい祠が出來て居まして、唐縮緬の幔幕が張てあり、中に狐や繪馬等が澤山に飾つて御在ます、其柄雜多いろ／＼の供物、御供餅だの油揚だの赤飯だのお旨しさうに出來て居ますわ、一寸喰べて見たい位。暫らく其の前に立つて見て居ますと、品の善いお下髮のお婆さんが洞穴の前の砂と鹽を懷紙の上に拾上げて居ります。大方之を持歸つて家の周圍へ撒くと繁昌するとでもいふのでせうよ。すると又た二十四五の銀杏返に結つた派手造りの新造が洞穴の所に來て一心不亂に拜みを始めるので御在ます。何處の方か知らないが、遙々狐を拜みに來るなんて馬鹿氣てるぢやありませんか、何故斯う無教育の人が多いんでせうね。それから人造富士といふのに登つて見ましたが、此處から

眺めると遠く東京灣を隔て、房總の山々が見え、横濱神奈川等をも見晴らして、佳い景色で御在ますこと、スケッチにでもしたいやうですわ。また面白い事もありましたけれど是で歸ることに致し、例の鳥居を潜つて、元鈴木といふお茶屋で夕飯の支度をなし、翫具屋に寄つて手遊附の突羽子と笹着の目無し達摩をお隣の子供にもと存じ買つて參りました。歸りは矢張俥に汽車其でも大層遲くなりましたこと、娚さんは碌に歩きも成さらぬ癖に、草勞れた〱つて愚痴を零して居るんで御在ますよ、私はどんなに面白う御



在んしたらう。

▲花見（櫻のトンチ／＼）

穴守參詣后は、三月の試驗が目の前に迫つて居りますので、當分は何處へも行かれぬ事になり學校と家とで勉強一心、其故紀元節の賑はひにも十軒店の雛市にも、行て見る譯にゆきませんでしたが、其内に試驗も滯りなく濟んで、花も笑ひ出す四月と成りましたから例の出たがりが始つて蟄居しては居られず、兄から向ふ十五日間外出を許すといふ折紙を貰つた譯でもありませんが、毎日々々花の名所を憧れ歩いたので御在ます。本統に私は男の樣ですわ、什麼遠い

處でも委細構はず逍遙くので御在ますもの、事によると歸宅が遲く成て媽さんに心配させるもんですから最う明日から出さぬと兄に小言をいはれた事も度々なんで御在ますよ。さうですね、花の名所と聞く上野、向嶋は申すに及ばず、芝山内、山王樣、招魂社、清水谷、江戸川端、日暮里、何處も彼處も花ある所は片端から見て歩いたので御在ますよ、何處が一番好いかと仰言つても私には這麼風流な事は分りません、唯だ最う何といふ事なしに面白く成つて了つて、菜の葉に留る蝶々の彼方へ飛だり此方へ飛だりする樣に氣の向いた方に出掛て行つて、多勢の人ががや／＼と面白さうに浮かれて居る其の賑かな有樣を見るのが只譯もなく面白くつて、花を見るより人を見るのが樂しみだつたので御在ますよ。田舍の花見と違つて、東京の花見は誠に陽氣なもので、頓とお祭の樣ですから、私達の樣な田舍者は唯だ最う煙にまかれて了つて、花見とは言ひ條花の下をまごついて來るので御在ますよ、殘らす御話するは大變ですから、向嶋に行つた時の事を一つ丈け御咄致しませう、私の行つたは四月の六日、咲きも揃はず散りも初めぬ見頃で、而も其日は日曜でしたから、隨分の人出で御在ましたわ、例の東さんを誘つて源助町から電車に乘つたのでしたが、雷門に着いて見ますと、その電車に乘つた、人の大半は皆、向嶋に行く人だつたので御在ますよ。而して後から來る電車は何れも／＼滿員札を揭けないのは無い位で、留る每に花見客を吐出してるぢやありませんか、私は此時思ひましたね、東京と云ふ所は昔にしても八百八町、今は遙と殖えて千何十町とある廣い所だとは聞くもの丶斯うも同じ目的を以て同じ方角に來る人が澤山にあるものかと、つく／＼思ひましたね、けれど全く廣い許でなく、人が多いんですね、其にしても這麼に澤山の人を養ふ東京は、有繫は東洋唯一の帝都丈あつて盛んなものだと思ひましたよ。

却說、電車を下りて雷門と言つても今は名許ですが、其の雷門内の仲見世の繁昌を左に見て、吾妻橋の方へ參りますと、前からも後からも同じ方向に向

つて押寄する人の波、廣小路とさへいふ廣い往來が人で一杯に埋つて居るので御座ます。そこで橋の方を見ますと、渡つて行く眞黑な人の頭顱で橋上更に橋を架するの觀ありとでも申しませうか、身輕のものなら飛上つて踏んでも行けさうなんですから人の頭だか往來だか分らぬとは實に斯ういふ有樣を云ふのだらうと思ひました。何しろ夥しい雜沓、何うして此の橋を渡らうかと一寸逡巡致したので御在ましたが、東さんが何あなた恐れることがあるものですかと仰言るのでい、はぐれない様に手を提いて戴き、人を押分け〳〵進んで行きますと、何時か最う橋の上に來てゐるぢやありませんか、橋の上は一層の混雜、押されて〳〵まるで潮の中に巻き込まれでも爲たかと思ふ程の苦しさに、川の景色を見るなどの餘裕はありません、早く渡つて了はふと一圖に先へ許り氣をあせらして、辛との事で對岸に着きましたすると其の前が札幌麥酒會社の煉瓦塀、橋の袂では樂隊が船の中でプーカ〳〵、ドン〳〵奏つてるぢやありませんか。私は是を聞くと何だかもう愉快に成つて體がゾク〳〵して來ますわ、それから間も無く枕橋といふのを渡ると、さア是からがお花の土



堤よ、右が水戸樣の御屋敷、左が八百松といふ料理屋ですと東さんの説明、成程雲霞と咲き續く櫻の木が、長い長い土堤を飾つて、花の隧道を築いて居りますから、初て見た私には只だ奇麗！と申すより外に言葉は無かつたので御在ます。あゝ川は悠々として花の裾を流れ、花は靄々として川の岸を裝ふ、此の川、此の花、ほんに好い配合だと思ひました。それに西の方を見ると、富士山も見えますし、東の方には筑波山も見えますので、一層趣があるので御在ます、けれど景色を見るよりは花の下の賑ひを見た方が面白いので、土堤をゾロゾロと歩いてる人に連れられて、行く行く三圍稲荷、牛の御前、長命寺等に參詣致し、言問團子といふお茶屋で休んだので御在ました。こゝでは團子、櫻餅、山椒餅なぞを賣つて居りますが、花を見るには最も好い場所だ相で花見の客が大勢休んで居ります。言問團子！、雅の名前ではありませんか、業平朝臣の心あらばいざ言問はん都鳥の歌が思ひ出されるんですよ、其頃は這麼に賑かでは無かつたのでせうに千年后の今日は實に盛んなものだと思ひました。

私達は此處に休んで、花に飽いた目を暫く川に移しますと、川の流を上へ下へと往來する、屋根船、傳馬船猪牙船、川蒸氣船の外に對岸から花見客を運んで來る渡舟、舷に旗を立てゝ鐘大鼓で囃子たてる花見船、勝負のある度にどつと鯨波のあがる端艇の競漕などで、川の中の賑かなこと、陸の雜沓にも負けぬ位で御在ますよ。アラ御覽なさいましよと東さんが仰言るので、何かと眼を陸に轉じると、ふざけて居るぢやありませんか淺草海苔の上下をつけ、大森鬘の大髷に櫂木を插した道化者が、供の奴に擔がせた樽酒を口うつしに飲みながら、肴はこゝに御持參と社杯採つてムシヤムシヤ喰べて居るので御在ますよ。すると後から來た者が、是は近頃珍らしい御趣工、ちと拙者にもふるまふては下さらぬか、と役者の聲色を遣つてるんで御在ますよ東さんに伺うと斯ういつた道化の剽輕ものが毎年三組や四組はあるんですつてね、東京といふ所は面白い所だとつくづく思ひましたよ。夫から言問團子を出て歩き

出しますと、矢張何處までも花と人で、益々賑やかになる許り、路傍に掛茶屋の店はあつても、そこへは寄らないで、土堤の芝生に腰を下して、瓢箪酒の手酌、樽酒の献酬、まア〳〵一杯と知るも知らぬも一切平等に献しつ献されつ、面白さうに飲んで居ますが、何と美しい風俗では御在ませんか、花の下には世の中の隔離も階級も無くなるものだと見えますね。それより私は東さんの御案内で白鬚、百花園、木母寺、水神までも見て参りましたが、何處もかしこも花と人で一杯、本統に面白う御在ましたこと。

## ▲祭禮（軒提灯と花笠）

扨四月の花も散つて了ひ、目に青葉の心地よい五月とはなりました、けれど生憎此月は勉强の方が忙しかつたので、僅に大久保の躑躅と龜井戸の藤を見に行つた位で、碌々郊外散歩の面白い思ひも致さずに暮して了ひましたから、お話も御在ませんが、六月こそは方々に祭禮があると聞きましたから嘸ぞ面白からうと樂しみに爲て居たので御在ます。兄の話にも六月は祭禮の多い月だ、先づ六月三日の氷川神社、七日には京橋の天王樣、八日には品川の牛頭天王、十五日には山王の祭禮、十八日には魚川岸の水神祭、中にも山王の祭禮は日本三大祭の一つとも言ふ位で賑かである、抑そも山王の祭禮と謂つぱ氏子の町内が百六十ヶ町、祭禮番組が四十五番、第一番が大傳馬町の諫鼓雞、二番が南傳馬町の猿、それより順を追つて四十五番まで、鉾もあり花車もあり、屋臺もあり、これが六月十五日の未明に永田町の山王樣の前に集つて、警固手古舞花やかに、木遣音頭で半藏門から御本丸御廓内へ練込むといふ騒ぎ、其は昔の話であるが、今でも仲々賑かだよ、山の手から下町にかけての氏子中では戸毎に軒提灯を吊し花笠をかけ、麹町の通では提灯の外に地口行燈を立て、日本橋通りの商家では店に金屏風を飾り緋の毛氈を敷き、親類知己を招いての見物、辻々に神樂堂を設け、御神酒所をしつらひ、町内の子供達は樽御輿といふものを擔き廻してワツショイ、ワツショイと騒い

でゐる、そこで十四日が宵宮で、十五日の本祭には神輿の渡御あり、其の行列は仕事師が木遣音頭で先に立ち、次に馬上の神官に大日傘の差掛、天狗の高足駄、續いて白張の仕丁神輿を擁して練りゆく有様は實に古式で面白いものだ。其柄花山車には諫鼓雞、猿田彦命、日本武命、阪田の金時、神功皇后武内宿禰、牡丹に唐獅子、月に芒など種々なのがあつて、紅白の鼻綱つけた牛に曳かれて揺られながらに練つて行く、その牛車の上には頭被した馬鹿囃子の連中が乘込んで、チャンチキ／＼ドン／＼と面白さうに囃してゆく、扨て又た踊屋臺のチン／＼ドン／＼、手古舞藝者の木遣節、若衆連の素人仁和賀、面白いもの許だからお前なんぞは一日立つて居つても見飽くまいなど丶言はれるものですから、六月十五日といふ日を樂しみに待つて居たのでしたが、愈々祭禮の當日と成つて見ると、今年は戰爭の影響かして、何の催しもなく、極くもう詰らなかつたので、落膽致しましたよ。それでも東さんと山王様に行て見ますと、流石に境内は參詣の人で賑かで、加之に娘劍舞の見世物なんぞがあつたりして、どうやら此處丈は御祭禮らしう御在ました。山王様で面白かつたのは、休み茶屋で星ヶ岡茶寮縱覽切符といふのを東さんと二人で、十錢宛出して買つて、——這入つて見たのですね、すると女中が丁寧に案内して呉れて、二階の廣間や、座敷なんぞを見せて呉れましたが、最後に奥の方の三疊の茶室に通して呉て、そこで本式に袱紗捌も形の如くに、お茶を立て丶呉れたのでせう。所が私も東さんも丸つきり御存知ないので何うして良いのか些も分らず、困つて了つて泣きたくなりました互に顔を見合せて、飛んだ所へ這入つたものだと後悔しても、今更斷る譯にもゆかず、マヽヨ何うなるものかと普通のお茶の様にカブッと飲んで、餘つたのを東さんに飲んで戴きましたが、這麼體裁の惡かつた事は御在ませんでしたよ、止せば善いに女の癖に生意氣に這入つて來るからだと後で女中が笑ふだらうと思ふと最う體裁が惡くつて／＼、逃げる様にして出て了いました、而して歸つてから散々自分達のをかしさを笑つ

たり笑はれたりしましたが、實にあの時は滑稽で御在ましたよ。

## ▲蓮と朝顔

（露のひぬま）

それから七月には何處へ行つたかと仰言るんですか先刻から話し續けで口が疲れましたから、マア一寸御茶でも飲まして下さいよ、………七月には淺草觀音の四萬六千日にも行きましたし、琴平の緣日にも行きましたし、人形町の草市にも行つて見たし、隨分方々へ行きましたが、中で一番面白かつたのは七月廿日の朝、兄に連れられて入谷の



朝顏を見に行つた時でした此日は前夜の約束が、忍池の蓮を見て其から入谷に廻ると云ふ事でしたから、素敵もなく早く起され、大急で支度し、愛宕下の家を出たのが三時少し前。外は未だ黑闇で軒の瓦斯燈がボンヤリと光つてる許、人通りも何もありはしません。けれど新橋まで行けば電車に乘れること丶信じて居りました所、家を出て餘程行つてから、電車は五時からでなくては運轉しないよ、俥も居ないよ、と兄から言はれましたので、是は大變、此のマア暗くて淋しいのに下谷くんだりまでテク／＼歩かせられる位なら、寧そ止にして家に寢て居た方が

よかつたと思ひましたけれど、今更引返すも殘念ですから、愚圖々々言ひながら兄に跟いて行きますと、兄は又た意地を惡く、幸橋から、淋むしい丸内に這入り八重洲河岸を通つて、神田橋を拔け、美土代町通りを眞直に駿河臺に上り、お茶の水橋を渡つて、――こゝで夜が明けました、本郷通に出で、切通を下りて、而して池の端へ行つたのでしたから、隨分澤山歩いたのですわ、それでも四時半には先方に行着きましたから一時間半しか掛らなかつたので御在ますよ、けれど最う明るく成つて了つて、上野の木立も龍岡町の森も朝靄の内に包まれた景色の好さ。池の端にも忍岡の辨天樣の境内にも洋杖を携へた人がチラホラ。私達は辨天樣の橋の所に蹲踞んで居りましたが、池の中は隨分な蓮ですこと、而して葉の上に高く首を載せた樣な紅白の蕾、實に奇麗ですよ、そこへ朝の新鮮しい空氣がサツト池の上を渡つて蓮の葉が少し許り搖れる景色と言つたら、何とも言へない好い氣持で心がサバ／＼しますわ、突然ポツンと云ふ音がして、蕾が開くかと見ると、直ぐにもう花の姿勢を保つて居るぢやありませんか、其の間は實に瞬たく隙もありません位。すると隣のが又たポツン、そこ／＼に音が傳つて、段々に花が殖え、その淸い姿を池の上に揃はせますが、見て居る内に朝靄が次第に池の面を去つて、森も木立も判然として來ますので、蓮の淸い姿は愈々鮮に成つて、その何うも奇麗な事つたらないので御在ますよ、何時までも見て居たい程。

けれど入谷の朝顏に露の干ぬ間と存じ、池の端を立去つて、上野を拔けて、入谷に廻り、丸新や入又や新鶴などいふ植木屋を一軒／＼見て歩きました、園内には花壇が出來て在て、いろ／＼の花を咲かした鉢植の朝顏が陳列してありますが、實に何うも眼が覺める樣に奇麗で御在ます。兄は朝顏が好きで自分で培養する程ですから、花壇の前に立つて彼の此のと品評し、最后に今戸燒の小さい鉢を一つ買ひましたが、私は唯だ奇麗と思ふ許り、何れが好いのやら薩張り分りませんでした、それから朝顏で人形を拵らへてありますが、

是は奇麗といふよりは、器用と言つた方が可いでせう花ゝ澤山見れば飽きるもの、私は最うクサ／＼して了つて早く歸りたく成りましたから、何時までも愚圖愚圖してゐる兄の袂を引張る樣にして、漸く此處を出て了ひました、歸途は根岸の岡野に寄つて、お汁粉と雜煮を御馳走になりましたが、何しろ早朝から歩かせられて、お腹が減いて居りました所なので、其の旨しいつたらないので御在ますよ。其より鶯谷を上つて復た上野を通り、一寸パノラマの「鴨綠江激戰」を覗き、三枚橋から電車に乘つて歸つて來ましたが、隨分草臥れました。

さて八月九月は暑中休暇で田舍に行つて居りました爲め、八月二十日の兩國川開にも、九月四日の遼陽占領の祝捷にも、大凡の景況を新聞の記事で承知したのみで、實况を見ずに了つたのは實に殘念で耐りませんけれど九月の中旬には歸京した故、十月十二日の池上本門寺の會式には、是非共參詣しやうと其の日を待つて居りました所、兄から今年は戰爭の影響で例年の樣に賑ふまい、それに若い者が戰爭に行つて、町内に騷ぐ者が無いから、萬燈も少からう、と申されましたので、池上に參詣するは廢止にして、聖坂まで行つて萬燈の通るを見る事に致しました、成程話に聞く通り大きな萬燈を振翳して、一貫三百たゝ捨てた、どどんがどん／＼と團扇大鼓を叩いて、イケガーミ、ホンモンジ、コラサッサ、ヨイショヨッショと宛で祭禮の樣な騷で、勢よく練つて來ましたが、其も二ッ三ッ途切々々に通つた許りで、案外詰りませんでしたから、夜露に風邪でも引かぬ内にと存じ、匆々歸つて來て了ひました。

### ▲團子坂の菊　（日露戰爭の人形）

けれど十一月三日の天長節、此日は愉快で御在ました、午前は學校の祝賀式に出席致し、式が濟んでからは製作品のバザーが開かれまして、其の店番を言付かりましたお蔭で折角樂しみに爲て居た青山の觀兵式は見に參られませんでしたが、午后からは店番を寄宿生

の方に代つて戴いたので、サア自分の御役が済んだから是から何處かへ行きませう、と東さんをお誘ひして早速學校を飛出し、團子坂の菊見といふ事に相談を決して、芝園橋から神田兩國行の電車に乘り、萬世橋で本郷行に乘り換へ、弓町で下りて、追分から高等學校の裏を根津の須賀町に下り、餘程歩いたやうでしたが道々も東さんと面白い事を話しつゝ行つたので、何時か最う團子坂に來て了つたので御在ます。

私は豫て團子坂と云ふ所はモッと長い、モット廣い坂で、斯う杉の生垣か建仁寺垣でも折廻した靜かな風流な所だと想像して居りましたところ、實際を來て見ると、豫想とは全で反對で、俥も樂には通るまいと思ふ程の挾苦しいダラ／＼坂、加之に坂の兩側には大幟が立つてゐる、庵看板が上つてゐる、段々幕が張つてある、木戸が出來てゐる、そこには木戸番が木戸札を叩いて「サア入らつはい、廻り舞臺大仕掛の菊細工、菊人形の元祖は此方々々」と頻りに景氣を附けてゐるのですから、何の事はない恰で觀物小舍の前、淺草の奥山へでも行つた樣な心持が致すので御在ますよ、而して其前を人がゾロ／＼歩いて居りますので、唯だ譯もなく面白く成つて、坂上から坂下まで凡そ二丁許もある所を幾遍マア往つたり來たりしましたらう！。すると東さんが唯だ歩いて許居ても仕方がない、何處かへ這入つて見やうぢやありませんかと仰言るので、中でも一番面白さうな「種半」といふのに五錢の木戸錢を拂つて入場致したので御在ます。

這入て見ると成程素晴らしい大仕掛のもので、大い小屋に大きな舞台が出來てゐて、書割、大道具すべて芝居の通で御在ますのさ、而して舞臺の上には奇麗な菊人形が飾付けてあります、種半のは旅順要塞軍使差遣の作り物で、山岡参謀や通譯官や喇叭手や、實に何うも巧く出來て居りますこと、そこで此道具が開くと「闇の扉」となり、更に舞台が廻つて「小鍛冶」となるのですが、其が殘らず菊で拵へた衣裳を着て居まして、菊の葉の青い所が衣の地に成り、それに黄菊白菊の花のいろ／＼が模樣に出て居りますから、綾羅錦繍の美

燦然として人目を眩すとでも申上たい位、實に奇麗で御在ますよ、よくマア這麼に器用に出來上つたものと熟々思ひましたね。

それから此處を出て、倘且外の家のをもと思ひ、隣りの植重といふのに這入つて見ると、こゝにはマカロフ戰死の戰況を仕組んだ菊人形が出來て居ります、それから最う一軒と存じ植惣といふのに這入つて見ましたが、こゝでも矢張戰爭を仕組んだ旅順砲台占領の場とリユーリツク撃沈の場とが大層立派に出來て居りました、菊こそ同じ菊でも家々によつて趣巧を異にし意匠も違つて居りますから、夫々變つた趣味があつて一寸は見飽きませんのです、けれど團子坂の菊人形なるものは甚だ俗趣味極るもので私達の理想の趣味では御在ませんね。

まだ外に植梅といふのもある、仙樹園といふのもある、戰捷園といふのもある此の戰捷園といふのでは戰地の景色を盆景に仕立てたものを見せるから、鳥渡覗いて行かうぢやないかと東さんは仰言るのでしたが、私は菊に肝心な眼が疲勞れて了ひましたから、最う止にして歸りませうと東さんを促がして、團子坂を去り往とは道を變へて根津權現の傍から、不忍池の端を通り、上野の達磨でお壽もじを喰べ、三枚橋から電車に乘つて芝まで。何處へ參りますにも電車が出來てからは本統に譯は御在ませんよ。

### ▲酉の市（熊手にお多福）

十一月十一日の酉の市には行て見たかと仰言るんですか、へい參りましたとも、大層な人出で御在ましたよ淺草から吉原へかけては全で人で埋まつてるんですもの、夫は〳〵非常な賑ひ方ですから、私は人込を分け〳〵やつとの事で鷲神社の境内に這入るには這入りましたが、最う少しで下駄を片方紛失して了ふ所でしたわ、此處では商人が葭簀の店を列べて、熊手にお多福の面と寶船と大福帳を飾付けたものを賣つて居りますが、利得を掻込むといふ縁喜から、參詣の者は皆な之を買つて、擔いて歸ります。境内では重に熊手を買

つて居ますが、門の外では唐の芋や黄金餅や粟米などを賣つて居て、何の店にも客が一杯群つて居るので御在ます、私は女の癖に大きな熊手を一本買つて引脊負つて參りましたので、皆なに笑はれましたが、其でも飛んだ好い手遊だと思ひますわ。酉の市と言つて騷ぐ割合に是と取立てゝ面白い事も御在ませんけれど、唯だワヤ〳〵と參詣人が紛擾混亂すのを見るのが愉快で御在ますから、二十三日の二の酉にも最う一遍行つて見たい樣に思つて居ます。

唯今は瀧の川の紅葉も眞盛りで唐紅に水くゝる龍田川の趣があるといふ事ですから、是へも參りたいので御在ますよ、其柄十二月の末に成りますと、年の市と言つて五十連飾や門松や蜜柑や新年の必要品を賣る市が市内の要所々々に立つて、賑かださうですから、是非行つて見なくては成りませんわ。

今年歩いた所はマア這麼もの、東京は廣くて一年やそこいらでは仲々歩ききれませんから、來年に成つたら又た何處か新しい方面へ出掛ませうよ。（完）

## 都なる姉より 四季の衞生を述べて故郷の妹に贈る文

代筆　糸左近

朝さむみ嚏出でたり一唡
　求めおかなん安知歇貌林

と、誰やらが詠まれし時節に相成申候ところ、嬉しき御玉章によれば、御兩親樣を始め奉り、兄上樣御前樣も皆々御障りなう入らせられ候よし、誠に〳〵目出度存じまゐらせ候。妾事もねもごろなる師の君が敎へたまふ衞生の道を守り、事なう學びをり候へば、憚りながら御案じ下されまじく候。御申越には四季の衞生を約やかに知らせよとの仰せ、固よりくすしの道を學ぶにもあらねば、詳しき事は存じ申さず候へども、老いたまふ御兩親をおもひまつる所から、常々心して記しおきたる事ども、聊か左につまみ書きいたしまゐらせ候。

秋の往にし今日此頃は、頓に朝夕の寒さいや增し、自ら寒冒に罹り易く相成申候、そも〳〵寒冒は百病の本とやらにて、これを防がざれば氣管支加太兒や肺炎

さては肋膜炎など色々の重き病の種ともなるべくと存じ候、それゆゑ少しにても萠し候節ははしがきの歌にもこれあり候やうに、安知歇貌林(〇、三)と白糖(適宜)とを混せ、寝際に御服み下され候て、能々汗を御取下され度候、それにても尚痰咳など出で候はゞ、遠志根(三、〇)を温湯一〇〇、〇(大凡半合なり)にて、十五分時間煎じ、其の煎じ詰りしだけ、水を入れ、これにも白糖(適宜)を加へ、一日三度に分けて御用ゐ下され度候

朝寒し遠志根切る醫者の妻。

とは、これを詠みしものに候。それより古今集ならねど、

ゆふされば衣手寒しみよしの丶
吉野の山にみゆきふるらし

とも申すべき時に相成るべく候はゞ、彼の凍瘡赤ぎれなどの漸く皮膚を襲ふものに候。

赤ぎれはこひしき人のかたみかな
ふみ見るたびにあひたかりけり

これを豫め防がんには、なるべく罹り易き部を水氣の無きやう乾きたる布片にて拭ひ、温かに包むやう必ずべきは申すまでもこれ無く候へども、尚襲はれ候折は苛性加里(一、〇)屈利設林(三十瓦)アルコール(五十瓦)水半合を浴後に塗くるが何より宜しく候、妾も昨年の冬試み候て殊の外効驗これあり候。

正月は都も鄙もおしなべて、下戸も上戸も屠蘇に酔ひめで度ことの數の子、或は矢鱈に靑昆布の多かるものに候、左候へども屠蘇數の子靑昆布は殊の外御注意下され度候、屠蘇は毒物とにはあらねども、其の藥を包む絹片の袋は毒ある色素を以て染むるものに候へば、白きを御用ゐあらまほしく候、數の子は蛋白質の多き滋養品なれども、消化甚だ惡しく候へば、目出度しるしまでに召し上り下され度候、昆布は煎汁として、他の食物の味を助くる義俠の趣きありなど申せど、其の靑きは緑靑にて染むるが多しとかや、努な用ゐ玉ひそ

二月は着更衣など申せど、新暦にては

梅の花それとも見えず久方の
あまぎる雪のなべてふれゝば

てふ景色、御兩親樣は殊に御惱ませ玉ふべく候へば、牛鳥の肉や新らしき魚類の旨き物など、お酒の友に參らせて、寒さなんどはいづれの國かといふやうに宜敷御ねがひ申上候、脂肪類は寒さを防ぎ、しかも斯る節には殊の外消化宜しきとのことに候。敷炬燵にて寢ね玉ふは老の御身に露無理ならぬとに候へども、夜もすがら炭酸瓦斯を吸ふこと夥しく候へば「湯たんぽ」に代用いたさるゝやう御前樣の温かき御心にて御諫め下され度候。

三月は日を追うて春めき

あづさ弓おしてはる雨けふふりぬ
あすさへふらば若菜つみてん

蕗薹獨活などのきはめて若きを卵綴にてさしあげ玉はば御喜び玉ふべしと存じ候、すべて野菜類は若芽が消化よろしく、熟すれば熟する程あしく候。

四月より五月にかけては、天麗らかに風輕く、柳は招き、櫻は笑ひ、應接にも遑なきほどにて、病ある人も自ら爽かにならんこと無き時節、まして天は筍蕨狗背或は蕗など、その他いろ／＼の珍らしき物を賜ふされば此の時に限りての衞生法とては別に知り申さず候へども、これ等の食物も嫩弱なるを御えらび玉へと申すまでに候。筍は昔の人はかたき竹てふ連想から餘程消化の惡しきものゝやうに思召され候へども、割合に滋養分もありて、消化も左程あしからずと、ベルツ博士も申しをられ候へば、孟宗の味噌煮に、鰹節山にかけて、御晩酌の一部を助け玉はゞ、父上のほゝゑみ玉ふ御顏、今より見ゆるやうに候。

六月栗の花咲き梅の實熟する頃は、

さみだれに物思ひをればほとゝぎす
夜ふかくなきていづち往くらん

と、紀の友則卿が淋しがられ候ほどありて、何となう鬱陶しく、のみならずよろづ濕氣を帶びて、しと／＼と心地惡しく、僂麻窒斯性の母上は嘸々御困り遊ばすことゝ今よりいたはしう存じ候、何卒襯衣は申すに及ばず、御着物はすべて濕氣を帶ばざるフラネルを進らせ御蒲團も毛布にて包み、食物は殊に鷄卵魚肉豆腐な

どの滋養物をお勧め申し、兄上と共に按摩し奉り、痛む箇所にはアルコール或は沃幾丁幾をぬり、時々左のお薬を御用ゐあらば宜しからんと、或る醫士の方より聴き申候。

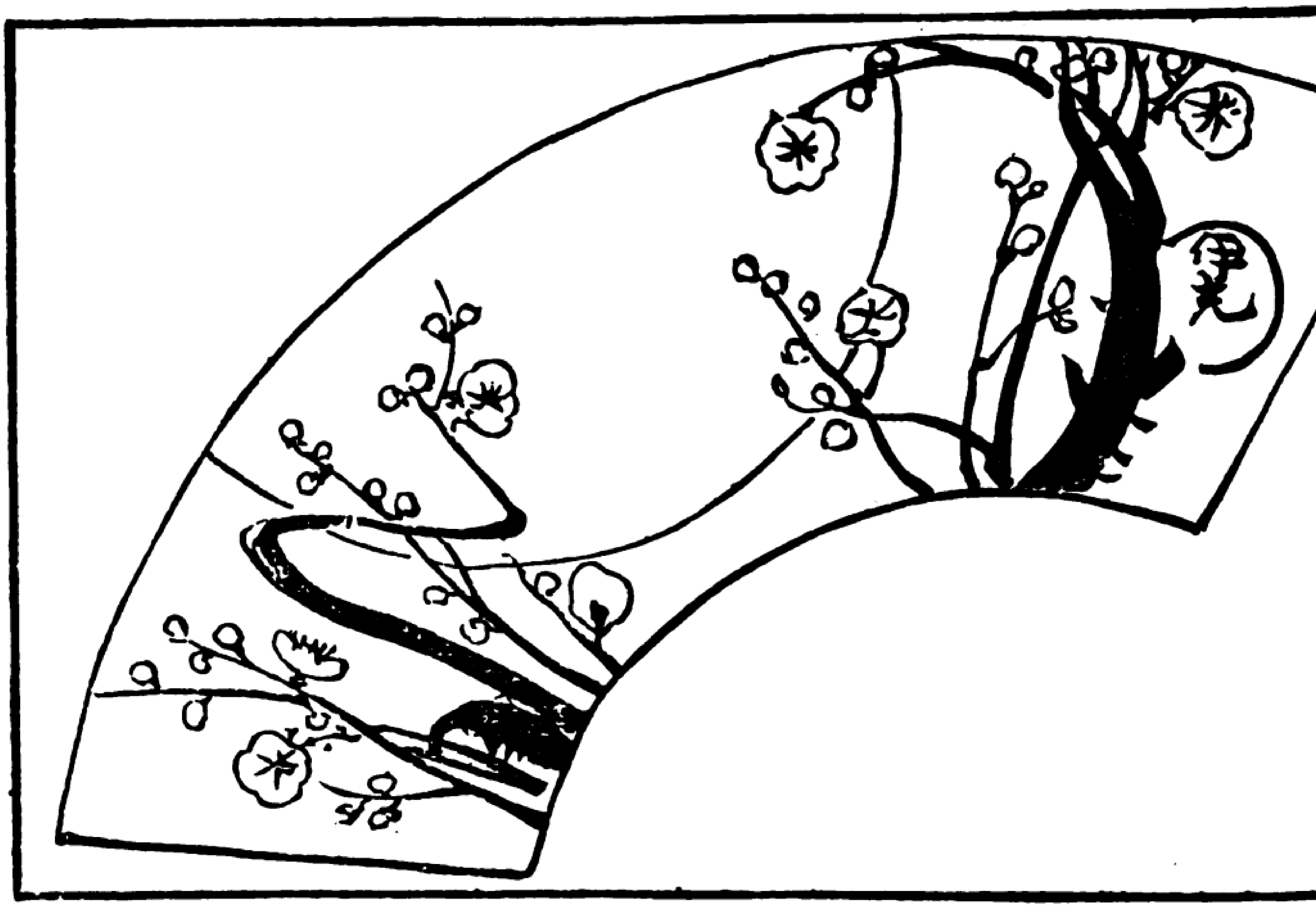
撒曹(四瓦)　薄荷油(一滴)
白糖(適宜)　水(一〇〇、〇)瓦 半合程

右一日三回に分けて服むべし

尚、兄上は例の皮膚病を御治療かたがた母君に従ひ、相摸の堂ケ嶋にても御湯治甚だよろしからんと存をりまゐらせ候。

七八の二月は何れの地もてりはたく暑さとはいひながら都はまた特別にて、街の砂は毒氣を吹き、屋根の瓦は火焔

名書十二ヶ月(一)



光琳の梅に月

を吐く如く思はれ候。左候へば妾も試験済み次第早々歸省して御身に代り、あらん限りの孝道を盡し、樂しき團欒いたさばやと相待ちをり候へども、この月ほど衛生の必要なるはこれ無く候へば、筆の序でに夏に最もありがちの急性胃加太兒(俗に申す食あたり)脚氣の二病につき知るがまゝを記しまゐらせ候

抑々急性胃加太兒は腐敗しかかりし食物例へば饐えたる飯或は肉などを食し、又饐えざるも程をすぎて貪るなどが原因となり、直ちに吐き、惡心を催し、或は腹痛頭痛七顛八倒泣き叫び、はては四肢力脱け、一方ならず苦しむとに候

まづ早急の手當としては氷を食し、極めて身體を靜かにし、

重曹(五瓦)　酒石酸(四、〇)　枸櫞油(二滴)
白糖(適宜)　水(二〇〇、〇瓦一合)

この藥を二三時間の中一口程づゝ度々服めば輕きはこれにて愈ゆるものに候、この外樟酸攝僞謨(〇、一)を與ふる法など色々の治療もこれあり候へども何れも劇藥に候へば、重きは固よりお醫者に願はれ度候。次に脚氣は醫科大學などにても其の原因を御研究中とのとなれば、仲々六かしく候へども、兎に角暑期殊に梅雨上りの後急に暑くなりし折などに發り易き病に候。療法は言ふまでも無く轉地に候へども、しか爲し難き場合には滋養の食物を取り、極めて良き葡萄酒を少量に用ゐ、身も心も安かにし、初期には、

硫酸麻偏涅曳謨(十五瓦)　稀鹽酸(一瓦)
白糖(適宜)　溫湯(百瓦弱半合)
右一日三回に分けて服むべし、

を一週間も服み續け、尙浮腫のある者は、

醋剝(四瓦)　苦丁(二瓦)　白糖(適宜)　水(百瓦)

を又一週間も續くるが可しとのことに候。尙脚氣病者の豫防十則とて、糸醫士が女學世界誌上に示されたるを記せよ、

一、朝は五時前に起き出で三十分間以上一時間内の散歩すべし。
二、大量即ち五六合の牛乳を毎日服むべし。
三、脂肪性の食物は極めて少量に用ふべし。
四、酒は平生の半分量に減らすべし。
五、茶菓生水を嚴禁すべし。
六、麥飯を實行すべし。
七、夜は九時頃に寢ぬべし。
八、腦力を費さぬやうにすべし。
九、暴飲暴食を愼しむべし。
十、室の内外を淸潔にし空氣の流通を善くすべし。

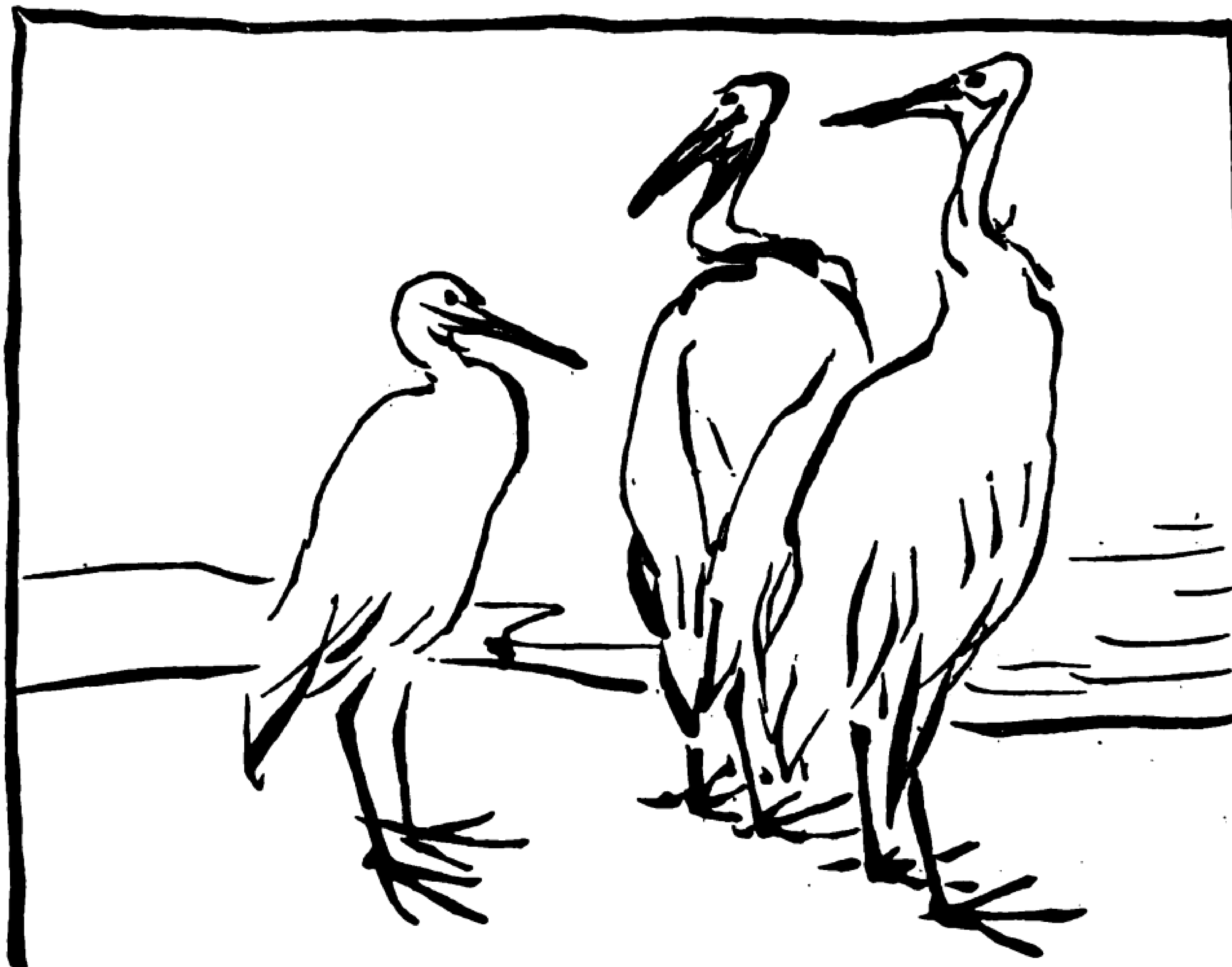
と。これあり候。脚氣患者に限らず、すべて夏は身體鈍くなりて食欲も減り、從うて脂肪の强き物は消化あしく候へば、何人にも右十則は心得べきことかと存じ

候。果物は新鮮なるものに候はゞ清涼劑として少量にめし上るとは望所に候、天は果物に限らず水分を含める物を夏に多く與へ賜ふは、げに理りあることゝ今更ながら感じ入り申候。又海水浴などいたして白帆の往き來さを眺め、磯吹く松の音を聞くもこよ無き衞生かと存じられ候。月日は枯草の燃ゆるが如くに、めら／＼と過ぎて、

このまよりもりく
る月の影見れば
こゝろづくしの
秋はきにけり

斯くなれば身も心も次第に

## 名畫十二ヶ月（二）



芦雪の鶴

快くなり、食欲も大いに進み從うて消化力も宜しくなるべく候へども諺にも申す如く油斷大敵とやらにてこの氣候の變換と共に罹り易きは腸加太兒病に候。これは飲食物を度を過して用ゐ、或は氣候の良きに絆されて月見しながら假寢の夢を結ぶなどが原因となり、腹痛に續いて下痢し、黃色或は綠色の糞便を水瀉ぐ如くに、一日三四回乃至は十回以上も洩し、後には裏急後重にもなり申すべく候。斯くなれば早速脂肪性の食物を嚴しく禁じ、淡泊なる流動性の食物を取り、腹部

を温め冷たき飲食物を避け、

硝蒼(一瓦)

を一日に四五度用ゐるがよしとのことに候。若し治療を怠りて慢性にもならば、その重さは再び此の世の月を眺むることのかなはぬやうに相成るべく候、あな恐ろしきは不衛生の結果に候。

秋愈々更くるに從ひ、栗、柹、蜜柑或は松蕈などの味美き物數多く出で候て、兄君はこれらを殊の外嗜まれ候へども、大方は滋養物に候はねば餘り御過し無きやう祈りをりまゐらせ候。

これにて四季衛生の大要は冬より述べて秋に終り候へども、尚詳しくは女學世界の生理衛生及び一日醫者なんど御讀み下され度候。終りに臨みて今一言申上たきは御身や妾の如き若き年の、行末如何なる艱苦に逢はむも知れぬ身は、徒らに衛生に泥まずして、零度の寒さにも堪へ、百度の暑さにも抵抗せらるゝやう、常々練習しおくこと、軍國のをみなとして、何よりの衛生かと存じられ候、一町の道にも車に乘り、渡場の舟にも醉ふ如き奧方は、今日より後は、我がすめら御國の大和魂を有たぬ人に候、肉太り骨逞ましく色黑く力ありてこそ美はしく候はめ、なよ〳〵として色白きは賓女の如くに候て、大丈夫の妻とは成り申されず候。申上たきこと千萬無量に候へども、まづはをしき筆とめまゐらせ候あら〳〵かしく。

十一月十五日　れつ子より

てい子樣へ

# 東都四季だより

菊の屋

## 第一信(一月九日)

▲璞の年の始の御慶芽出度申納候、扨て舊冬中都門四季の樣子を其の折々に御通知致さんと御約束致候件、愈々當月より實行可致候、尚ほ今后も引續きお便り致すべく候間、此段豫め御諒承被下度候。

## 名畫十二ヶ月（三）



光琳のつゝじ

▲今年は三ヶ日とも無類の好天氣なりしため別して市中は賑ひ候、先づ眼に觸るゝ千戸萬戸の松飾に、未來の祝福を約束する色の見ゆるは何より嬉しく、腕車や、馬車や、衢を往來する大禮服の回禮者を見るに付ても、屠蘇機嫌の危き千鳥足を見るに付ても、羽子に毬に乙女子の綾羅を飜して心の逸むを見るに付ても、春は何となう長閑にて、芽出度心地致候、東都の風俗として

▲一日――には初日出を拝んで年中の吉祥となさんと芝浦高輪を初め愛宕山、九段坂、洲崎、湯島天神、神田明神、上野台等に參る由豫て聞及候に付、小生も本年こそは是非にと存じ、未明より起きて先頭第一に愛宕山に出掛け、首尾克く初日の光に拝謁を遂げ候、嘸ぞかし本年は仕合が宜しかるべく、今から寢て居て待たうかと存じ居候呵呵、此日宮中に遙拜の御式あり、文武百官の參拜有之候由、一日より三日の間は一年の祝福を祈ると稱し、其年の惠方に當る神社へ詣る様の古い鑄型の人も多く見受候。

▲二日――の初荷は一般經濟界の不景氣にも拘らず、廣告的に見せびらかす向も少からざるやにて、市中は相當に賑ひ候、初荷と申すは問屋又は會社にて初商の商品を荷車に積ませ、之に球燈を挿し商標旗を飜して、牛

馬に牽かせ取引先を廻るものに御座候が、其の練行く光景は實に觀物に御座候。

▲當地にては七草雜炊にて所謂松の內を終り、八日より七五三飾、門松を撤去致候故、昨日からは市中の光景が一變して急に寂寥の觀を呈し候。

▲明十日は初卯に當り、而も日曜なれば、龜井戸の妙義社は格別繁昌致すべく、當日仝社に參詣致す者は必ず繭玉を土產に持歸る事、古くからの習慣に御座候。

▲十六日――は閻魔の賽日にて兼て又藪入に御座候。此の日は奉公人に取ては年に二回の尊い休暇日に候爲め、諸方面の愉快を一時に濟さん慾心より所謂淺草かけて芝の海とあるが如く、市中は到る所小僧さん達にて賑ひ候、當地の閻魔堂は淺草藏前長延寺、芝増上寺、四谷新宿大宗寺、上野廣小路常樂院、深川仲町閻魔堂、日本橋茅町藥師寺內、本所回向院等にありて孰れも繁昌致候。

▲廿一日――は大師の賽日とて川崎方面に人出多く、新橋橫濱間は臨時汽車を特發する程に參詣人にて雜沓致候。

▲廿四と五の兩日は龜井戸天神社にて鷽易と申す神事を執行致候、是は何でも社頭にて鷽といふものを買ひ、其を神前の鷽と取替へて來るものとかにて、凶を吉に取易ゆる面白い緣喜のものなる由承り居り候に付、本年は當日が幸日曜にてもあり、其に同所の梅園も咲綻ぶべくかと存じ候まゝ、散步がてら實況を見て參らんかと樂しみ居候。

▲本所回向院の春相撲は例年の通り來る十五日頃より興行致すとかにして今より前景氣盛に候へば、滿都の人氣を橋東の一角に集むるも玆四五日の後に御座候。

▲乍末寒氣激烈の砌、小生なども此頃は襯衣に胴着に下着二枚の厚着を致居候程なれば、御地の寒さは格別なるべく、折角御自愛願上候　恐惶頓首

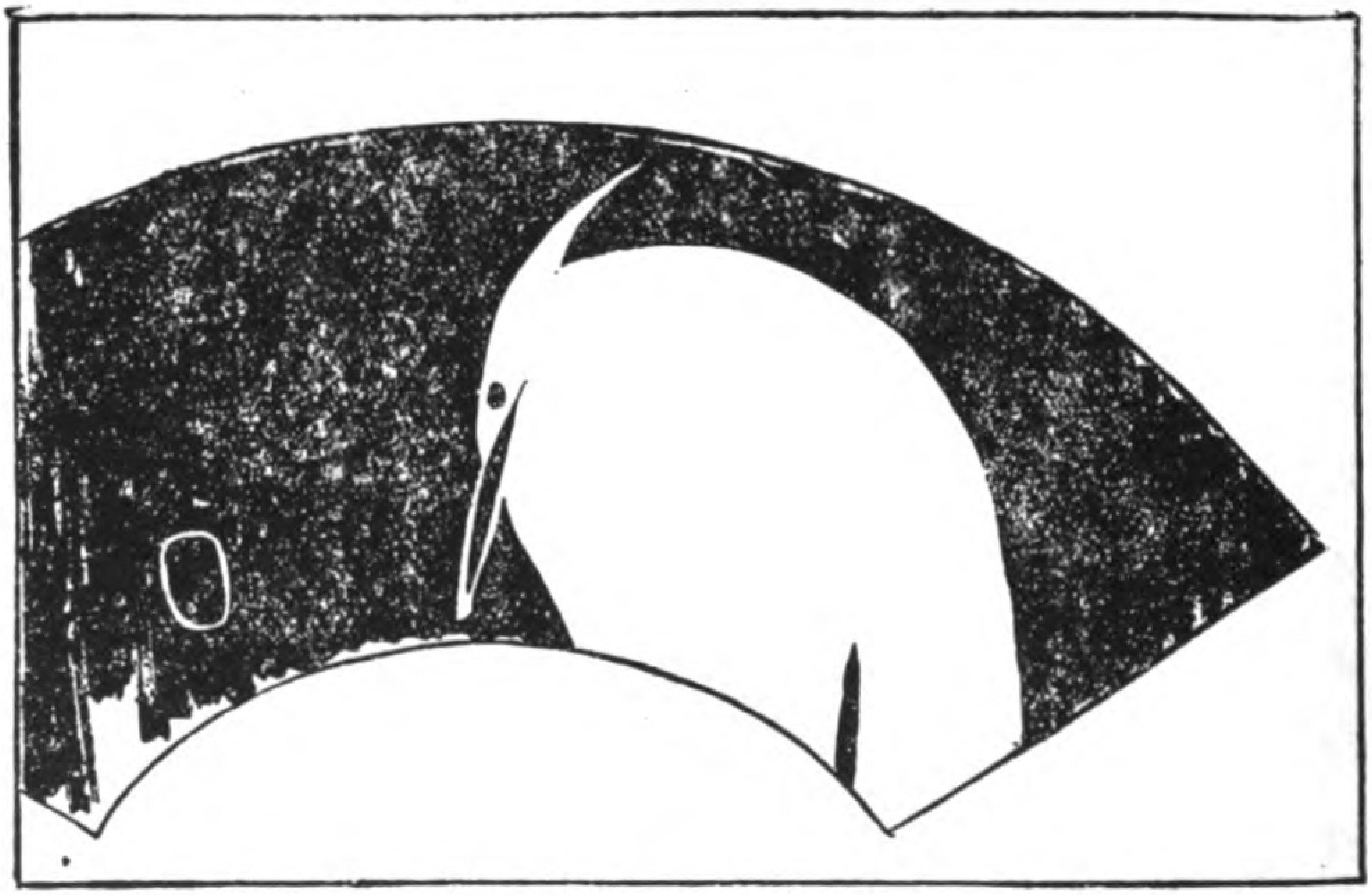
第二信（一月十三日）

▲餘寒尙ほ去りやらず候處、高堂益々御清祥の由奉賀上候、降而當地昨今の時候、一月よりも却て着類に念入候程ながら、弊家一同幸ひに無恙、御休心あれ、

扨て愈々日露の風雲も破裂して開戰といふ事に成り、當地の如きは日夜大路小路を走る號外賣の聲と、兵士の劍光帽影と、祝捷の國旗と、提灯行列とにて、全都を擧げて軍國の裝ひ致候。

▲去る三日――は節分の當日とて、萬事に古式を守る御地にありては定めし戸毎に年越の豆撒を行ふことなるべく、取別け御家庭は御多人數の事とて「鬼は外福は内」の聲も賑々しき御事と遙察仕候、其に引替へ當地にては節分の古儀全く廢れて、個人の家庭に之を行ふもの殆ど無之、僅かに湯島天神、神田明神の疫神祭、高輪安泰寺の五福神祭、愛宕山下の身代不動の節

## 名畫十二ヶ月（四）



光琳の畫

分會、龜井戸天神の追儺、淺草觀音の修正會等にありて古式の保存され居る位に過ぎず候。

▲六日の初午――も昔は「伊勢屋稻荷に犬の糞」と申したる位なれば、市内に稻荷祉のある事非常なものにて、之が初午には同時に祭禮を初め候故、各社にて亂打する太鼓の音鼕々として恰かも大風の吹き來し慨有之由、古老より聞知致居候が、近來は社の數も減りたるため頓と其の樣の事無之候へども、有繁に稻荷は矢張澤山にて、東都特色の一つと相成居候、就中最も繁昌するは、王子稻荷、向島の三回稻荷、淺草田町の袖摺稻荷、橋場の眞崎稻荷、芝の烏森

稲荷、赤坂の豊川稲荷等の諸社に御座候、昔は王子稲荷を一番と致し候處、近年は羽田の穴森稲荷といふが大層な人氣、神も盛衰があるものと存せられ候。

▲一昨十一日——の紀元節には、梅信に促されて、龜井戸の臥龍梅より小村井江東、木下川梅園をかけて散策を試み候處、清香馥郁、日頃の俗塵を一洗仕候、明日の日曜には、方角を變へて大森蒲田より遠く小向井の梅園を賞さんと準備致居候。

▲來る十五日——は釋迦寂滅の當日とあつて、各所の寺院に於て涅槃會を執行致すこと年々の例に御座候、小生も些と宗教氣を出して説教でも聞に行かんかと存居候。

▲廿四五日頃より日本橋十軒店といふ所に雛市立ち、節句用の雛人形を美々しく陳列致候、小生も之を見ると女の子が欲しく相成候、先は此位にて餘は後便に讓る。匆々頓首

第三信（三月二十一日）

▲追々春めきて參り外出の好時期と相成候、陳者前便に一寸申上候雛市、本年は戰爭の影響にや至つて景氣揚がらず、例年に比し店頭寂寞の觀有之候、小生は友人の娘の初節句を祝ふ料にとて、光月の店にて五人囃と隨神一對を買求め候處、當日其の御禮として全家より招待を受け、雛段の前にて白酒の饗應を受け候。

▲彼岸中の宗教界を瞥見候處、諸寺院にては悉く佛事を修し、善男善女は觀音に參詣し、又は六阿彌陀詣を致候、六阿彌陀とは行基大師の作にして、其の所在地は一番足立郡本木村長福寺、二番南足立郡沼田村延命寺、三番北豐島郡西ヶ原村無量寺、四番北豐島郡田畑村與樂寺、五番下谷廣小路常樂寺、六番南葛飾郡龜戸村常光寺。

▲昨日の日曜は同好の友人と、久振にて一竿を携へ、本所堅川筋の鮒釣と出掛候、唯今は釣遊の好季節に候間、春風に乘じて綸を垂るゝ釣客も少かるましぐと存候、當地釣遊の場處は、隅田川鐘ヶ淵、言問團子の附近、本所業平橋、深川扇橋、本所堅川筋、小名木川筋等にて御座候。

▲上野公園權現社附近の彼岸櫻は、來る廿四五日頃より咲き初む可く候間、此次の日曜には、白馬會の繪でも品評がてら、彼の邊を漫歩うと存じ、檄を友人間に飛ばさんと、唯今其の草稿を認めたる所に御座候。不備

第四信（四月十二日）

▲春風駘蕩の候、都は柳櫻を打交せて、花の世界を現出致候まゝ、當月は都の花に就て申上べく候、扨て花といへば何處よりも先づ向島が一番繁昌致候、同所は隅田の緩流に沿ひたる長堤にて、櫻の並木路を狹んで連き居れば、盛時は雲霞の中の隧道を歩く

## 名畫十二ヶ月（五）



鳥羽僧正の筆

心地致候、併し仝所は靜に花の美を賞する所にては無之、騒いで花の色に狂する所に御座候へば、人盛って花と相混亂する時の盛觀を御覽に入れ度候。

▲小生は去る八日の灌佛會に、子供を連れて小石川の傳通院に參詣致したる歸途上野に廻り候處、所謂三日見ぬ間の櫻哉にて先月見たる時よりも咲揃ひたるため一層美觀を呈し、滿山花ならざるはなき光景に候ひし彼の有名なる淸水觀音堂の秋色櫻も、屛風坂の吉野櫻も、兩大師前の糸櫻も共に滿開にて、あたら風に散

るを怨む許にて候ひき。

▲上野の北に飛鳥山あり、春時は滿山花を以て粧はれ、殊に山上の眺望宜しく候間、觀櫻會又は運動會の大連こゝに繰出すもの多く有之候。又日暮里の花見寺は田端停車場前の小高き丘上にありて、庭園も狹からず、櫻樹も左のみ多しといふにはあらねど、何處やら古色を保ちて、錆びたる趣を存し居候。

▲尚ほ花の名所を擧ぐれば、芝公園、愛宕山、御殿山赤坂氷川神社、麹町清水谷、小石川江戸川端等、其他麹町日枝神社にも、靖國神社にも、淺草公園にも、深川公園にも觀る可きの櫻少からず、加之も市中は櫻樹に富みて、千代田城を廻る内堀、外堀の縁、山の手各町到る所花だらけにて、滿都は宛ら白雲紅霞の裏に包まれたるかの觀あり、流石は櫻花國の名に背かずと存じ候。

▲櫻を外にしては桃花の名所に中野、川崎、越ヶ谷あり、梨花は川崎近傍、市川近傍、山吹は高田山吹の里巣鴨、染井、櫻草は大久保、入谷、染井、上駒込、何れも運動家の行く所に御座候。

▲小生は來る十七日の日曜日に例の雅友と小金井行の約束致候。同所は甲武鐵道に依りて國分寺又は境の停車場にて下車し、其より半里許徒歩する由、花は吉野にて、老樹多く、多摩川上水の兩岸一里許の長堤に、白雲の如く連る光景、何共言ひ知らず美しと申し候へば、枯渇したる詩嚢を肥やすには屈竟と存じ候。

▲當地昨今の氣候は、所謂花見時候にて、襦袢に下着上着、袷羽織といふ所、至つて肌心地よく、程合に御座候以上。

### 第五信(五月二十七日)

▲花は根に返りて三春の光榮青葉に殘るの候、貴家益〻御清福、奉謹賀候、扨て先頃は聊か武雄様の御武運を祝さんとて、疎末なる武者人形御寄贈申候處、早速鄭重なる禮辭を賜り、却つて痛入候、承れば武雄様には未來の大將を以て任じ居られ候由、天晴の御心掛、何に付ても御可愛い盛りに御座候。

▲本年は軍國の砌とて、國民武裝の結果、男子ある家

庭に端午の儀式を復興するもの多く、之に依て武士道の根を培はんとするは喜しき現象に御座候、其が爲めか、當地の十軒店は三月の時に引替へ、非常の繁昌を極めたるやに候

▲五、六、七の三日間は九段靖國神社に於て例年の如く招魂祭執行、相撲、能樂、花火の奉納あり、今年は國難に殉したる忠魂を憶ふの秋にも候へば、都民は皆な敬意を献げて參詣致候。

▲二十一日の川崎大師は例の通り繁昌致候。

▲回向院の五月場所は、滿都の人氣戰爭の方に集中致居候爲めか、何となく景氣引立たず候。

## 名畫十二ヶ月（六）



岸連山の辛夷

▲當月の觀物は藤花にて、龜井戸天神社、根岸藤寺芝公園辨天池等、孰れも見頃に御座候、就中龜井戸天神社の藤は有名なるものにて、大鼓橋畔の架上より長く池面に垂れたる趣の美事なる事、藤の花三尺八寸も候ふべしの句も思ひ出され候。

▲當地唯今の氣候は襦袢に袷衣にて丁度宜しく、身輕に扮立ちて郊外散策を試むるには恰好に御座候、本所四ッ目植文の牡丹、芍藥も、大久保の躑躅も今が見頃に候へば、例の動物採集かた〲、目に青葉の保養を致させ度と存じ候

## 第六信（六月二十日）

▲拜啓御地の今頃は田植やら養蠶やらにて嘸ぞかし御多忙の事と存上候、其に引替へ小生は暇でもあり、時候も宜しきより例の散歩好の事とて當月は所々方々に遊歩を試み候、一々申上るも煩しけれど、去る十日には堀切の菖蒲を見に、十二日の日曜には向島百花園の杜若を見に、又た昨夕は妹を連れて王子まで螢狩に、又た今朝は拂曉より水鷄の名所と聞く砂村邊を歩いて參り候。

▲當月はいな、鯔釣の好時節に候間、品川臺場邊には釣客の舟遊を兼ねて出掛くる者多く候、小生は昨年の今頃、多摩川に鮎釣に參り候が、當時の多漁を思ひ出しては愉快でく〳〵、今年も又た行きたく相成候。鰕釣も隨分面白きものゝ由、其の場所は本所法恩寺橋筋、業平橋近傍、深川猿江、竪川筋、木場邊。

▲當月は祭禮の多き月に御座候、十五日の日吉山王祭氷川神社祭、廿四日の愛宕神社祭など、其の重なるものに候、献燈と記せる軒提灯の間をドン、ドン、カッナ、カッチと神輿の渡御する光景は、確に東都景物の一つに御座候。

▲三十日には市内の各社にて大祓を執行し、輪潜りをしつらひ候。

▲小生は御承知の通り庭いぢりが道樂にて、猫の額の様な狹い庭にいろんな物を植え置き候處昨今は椿や、菖蒲や、杜若や薔薇の花盛にて賑に御座候、御笑覧までに小生培養の薔薇の一片を封じ込め候、貴兄よりも何か御地の花を御封送被下度候、頓首。

## 第七信（七月三十日）

▲酷暑の候御機嫌如何、御見舞申上候、小生は日増しに氷屋の玉簾に親みを加ふる許に付、夏知らぬ御地の涼味が戀しく御座候、却説今月の月事を申上れば、

▲七日の七夕昔は此の日牽牛、織女の二星を祭ると稱し、供物を献げ色紙に詩歌を連ねなどするが故、七夕は家庭樂事の一つに候ひし處、新暦にては氣節も何となうふさはしからず候所より今は名のみ殘りて殆ど之を行ふもの無くなり候。

▲四萬六千日――九日十日の兩日は四萬六千日と唱へ諸所の觀音へ參詣するもの多く、就中淺草觀音最も繁昌致し候、此日觀音へ參詣すれば四萬六千日の間毎日參詣したる割合に當ると申傳候。

▲草市――十二日より市内各所に草市と申し、盂蘭盆の靈棚飾物供物に要する品、即ち鼠尾草、麻から、眞菰、瓜、茄子等を賣る市場を立て候、其の場所は銀座兩國廣小路、神田旅籠町、今川小路、人形町通、各家々にては之を購ひ魂棚をしつらひて、十三日より十五日まて精靈祭を執行致候。

▲藪入――十六日の閻魔の賽日は、兼て又た第二回目の藪入りにつき小僧、下婢等は此一日休暇を諸所に遊樂し、命の洗濯する事、一月に變らず候。

名畫十二ヶ月（七）



鳥羽僧正の筆　（盂蘭盆の意）

▲東都に於ける當月の觀物は牽牛花と蓮花に御座候、小生は今朝拂曉より出掛、露を履んで上野不忍池に蓮花の開く音を聞き、入谷に廻つて朝顏の色々を見て參り候。

▲今三十日は土用中の丑の日に當り、鰻屋の繁昌する日に候、此日鰻を食すれば暑氣を避くる効ありと申候に付、果してかゝる効あるものか何うかを、今夕小生の一家に試して見んと存居候。

第八信（八月十日）

▲驕陽炎威を揮ひて瓦を熱し甍を溶すの砌、滿都は炎塵千丈、人は

苦熱に避易して避暑旅行に出掛くる者多く、爲に有繁絡繹の大都も日中は往來稀にして、街上寂寥を極め候に付、當月は別段申上る事も無之候。

▲兩國の川開は來る二十日に執行致由なれば、例年の通り雜沓致す可く、數萬を以て數ふる都民の大集團、雲霞の如く橋畔に押寄せて玉屋、鍵屋を叫ぶも近々に御座候、今年の煙火、時局に因みたるもの多く、仕掛花火には敵艦燬沈に擬したるもの有之由なれば、當夜の壯觀思ひやられ候。

▲水明山紫の御地の涼味は、當地にては迚も得られず候へども、強いて求むれば、王子、目黒、十二社、大宮公園、芝浦、海水浴、愛宕山の觀月などに候はんか小生は是等納涼地を歴遊致した位にては到底滿足出來申さず、明后日頃より逗子にでも避暑せんかと存居候次便は同所より匇々不一。

第九信(八月十七日)

▲逗子より一書を呈候、然者小生事、去る十二日より家族を引連れ當地に參り居り、百姓屋の一室を借受けて、每日談笑に耽り居候、靑松白砂の間潮聲牧笛を聞くあたり、一家團欒して堂に滿つるの淸風を浴ぶるの快は、夕顏棚の下涼所の比にては無之、正に天下の至樂と存候、左に近作の腰折一首入御覽候。

時なれや都塵を厭ふ夏きては
屋形にまさる小舍の狹莚

第十信(九月五日)

▲殘暑漸く退き、そろ〳〵金風の吹き始むる候に相成候處、貴家益々御安泰の由奉欣賀候、次に小生は一昨三日避暑地を引上げ歸京仕候が、海水浴の功能にや、其后壯健を加へて、至極の元氣に候間、乍憚御安心被下べく候、扨て

▲本日は遼陽占領の公報發表相成候爲め、市中は俄に景氣付きて、戶每に球燈を揭げ、辻々に國旗を交叉して、祝捷の意を表し、帝國萬歲を連呼する聲到る處に聞え申候、今夕は小生の中間内にても大々的祝勝會を催す筈に御座候。

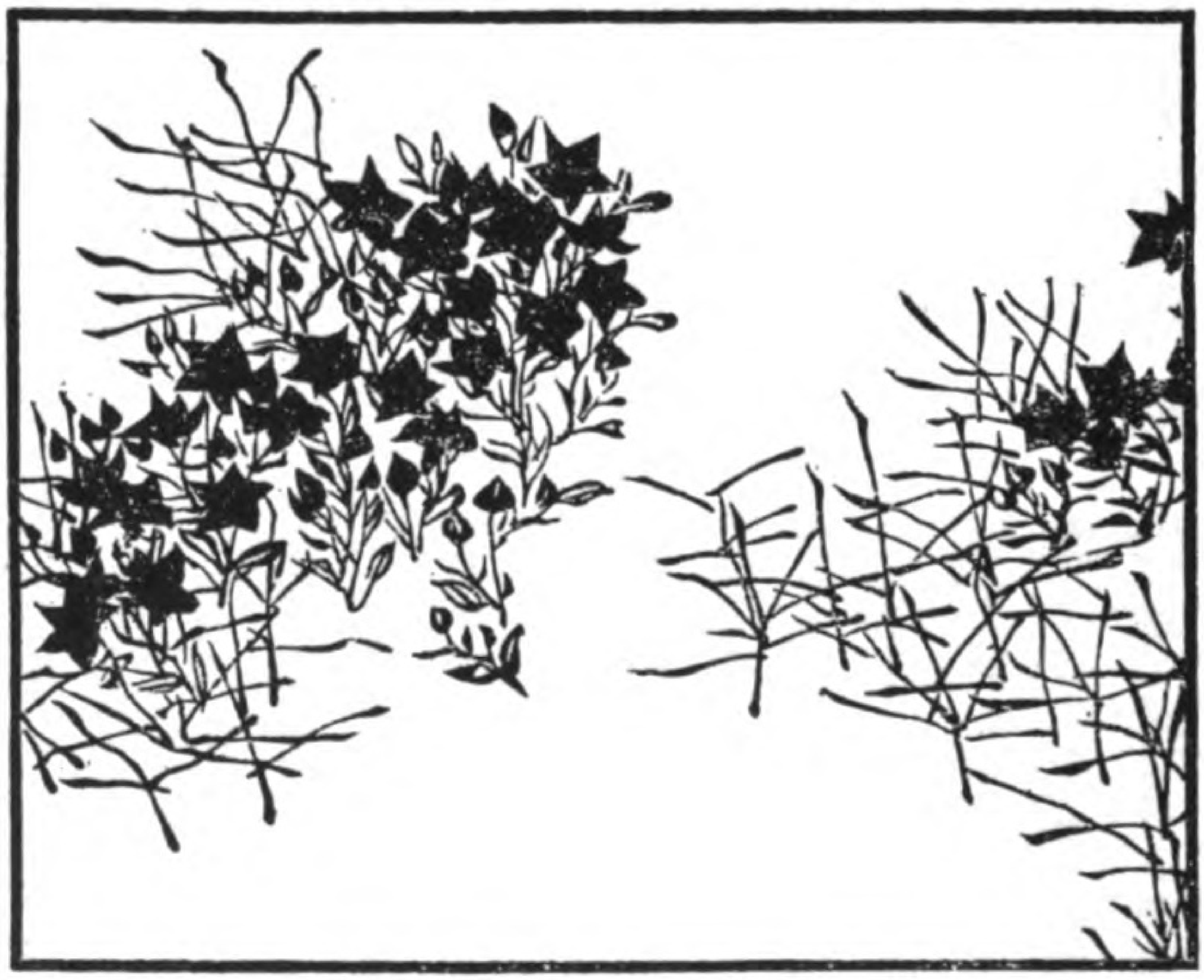
▲今夜は陰曆の八月廿六夜に當るを以て、廿六夜待と

稱し、宵の内より芝浦海濱又は高臺の地に詰め掛け、月の出汐を待ち受くる者夥しく御座候、小生等も祝勝會散會后は此方の仲間入して、三尊の阿彌陀佛を拜まばやと存候。

▲來る十五日は神田明神の祭禮に御座候處、今年は兵馬倥傯の際とて、氏子中に神輿の渡御もなく、戸毎の軒提灯をも癈して頗る質素に執行相成可由傳聞致候。

▲日増に秋冷を催し、見る物あはれ深く相成り候に付、散歩客は杖を郊外に曳きて向島百花園の七草、龜戸萩寺の萩を見るべく扨ては一瓢を携へて、日暮里、道灌山、飛鳥山邊に蟲の音を尋ぬる連中多からんと存候。

名書十二ヶ月（八）



光琳の秋草

第十一信（十月十四日）

▲拜啓、一昨十二日の池上本門寺會式は、是も戰爭の影響にや、本年は賑かならず、例年なれば信者の繰出すは無論の事、大皷を叩いて、押立て行く萬燈は萬燈と衝突し、一貫三百何うでも可いと騷ぎ行く彌次馬連は先頭部隊を壓して、道路の混雜非常のものに候處、本年は人出甚だ少く、沿道寂寞の觀を呈し候、併し眞の信心連の參籠通夜するものは、矢張例年の通り夥しく有之候に付、寺内は相應に雜沓し、有繫に祖師の勢力の偉大を想はしめ候。

▲來る二十日の蛭子講は昔より都下の商家の盛んに行ひ來りしものなるが、近年は此事大に癈れ申候、但だ

日本橋旅籠町呉服屋大丸に於ては、此日縮緬其他呉服細工を陳列し、知人顧客を招きて酒宴を開く由に御座候。

▲扨て其前日十九日はベッタラ市とて、日本橋通旅籠町、人形町、小傳馬町、通油町へかけての往來に、淺漬澤庵を賣る店が澤山に並び候、之を賣るのは何れも屈竟の若者にて、向ふ鉢巻襷掛の扮裝威勢好く「すア入らはい／＼、廉くつて旨いの」と聲を嗄して客を呼び居候、其の大根の價は普通一本三四錢より七八錢なるが、客は早朝より夜に入るまで、店前に群集して、男も女も爭て之を買ひ、露出のまゝ手々に引提げて歸る光景は東都奇觀の一に御座候。

▲當地唯今の時候は追々冷氣を加へ候得共、今の所にては未だ袷に袷羽織位にて宜しく御座候。

第十二信（十一月三日）

前便呈上以來僅かに二旬を經たるのみに候へ共、時候の進み方の餘激なる驚く許にて、餘程寒氣を感じる樣相成候間、流石薄着自慢の小生も昨朝より外套を着けて出勤する仕末、されど例の壯健なれば、御安心下さる可し。又手

▲今三日の天長節は市中の賑ひ非常なものに御座候、今年は驕露を擊ちて連戰連捷、將に醜敵を屈伏せしめんとして、帝國の威武宇内に輝き、我等また戰勝國民の榮譽を荷ふに至りし所以のもの、是れ偏に聖上御威徳の餘澤に外ならず候につき、陛下の赤子たる我等は、二千年來ためしなき今日の吉辰を永く紀念すべくと存じ候、小生等は茲に謹んで陛下の萬歲を祝し、併せて帝國の萬歲を祝す。

▲當月中に於ける都門の賑ひを申し候へば、昨今尤も繁昌を極むる團子坂の菊人形、五日より七日にかけての招魂社の祭禮、十五日の七五三祝ひ、十一日及二十三日の酉の市等にて有之候。

▲團子坂の菊人形は時節柄時局に因みたるもの多く、中に就て最も好人氣なるは、○種半園の「旅順口要塞攻擊、湯山城附近田上中尉奮戰、廣瀨中佐戰死、軍使差遣、○植梅園の南山激戰、遼陽占領、○植重の旅順背

面攻撃、マカロフ戰死、敵艦轟沈、○植惣の旅順口砲台占領、南山激戰、黒龍江のおよし、浦鹽艦隊轟沈、○戰捷園の戰地實況盆景、などなる由、殊に本日は同所の書入日に付、雅俗の觀客群集して、非常の盛況ならんと存候。

▲酉の市は此月酉の日に各所の鷲神社に於て執行致す所にて、東都繁昌の一に御座候、本年は十一日の一の酉、二十三日の二の酉の兩度にて候へど、年に寄りては三の酉までも有之候、同神社は淺草にも新宿にも目黒にも深川にても有之候へど、淺草のもの一番繁昌し人出夥しく候、當日商人は熊手にお多福と入船大福帳等を飾りしものを商ひ、縁喜商賣の者之を求めて來ん春の祝福と致候。

▲小生は明后五日の土曜日を期して二三の雅友を唆かし、王子瀧の川に紅葉を見に參らうずると存居候、同所は都下第一の紅葉の名所にして、楓樹川の兩岸に連り、碧水紅を泛ふるの趣、小龍田川の觀有之候。

▲來月に入りては年末多忙の際、或は筆を執る暇なきやも知れずと存じ候まゝ、序手を以て茲に十二月行事の一つなる年の市の景況を申上置かんに、一體此の年の市と申すは、新年用の諸品を賣る市場の謂にして、即ち市内の要所に假屋をしつらひ、七五三飾、門松、破魔弓、鞠、勝手道具等を陳列し顧客を待つものに有之候處、之を買はんと最寄の町々より集り來るもの多く、爲めに店前は殺到して、歳晩に於ける都民匆忙の狀を現出致候、其の場所は、十五日に深川八幡、十七八日に淺草觀音、廿、廿一日に神田明神、廿一、廿二日に芝神明、廿四日に芝愛宕神社、廿五日に麹町平河天神、廿五日より三十一日まで麹町五丁目、廿八日に兩國藥研堀、廿五日より三十一日まで銀座通り、其他小さき年の市は市内各所に有之候、

尚ほ十二月中には煤拂、餅搗、寒詣等の事も有之候へど、そは實地を見たる後に申上べく、先は是にて

匆々　頓首。

女學世界定期増刊

# 十二ケ月



# 社會暦の圖



# 田舍の四季

笑門

## 春の山里（叙事文）

庭の竹籔に囀づる雀の聲に曉知らぬ春の眠りも覺て臥床を出づれば、母は已に起き出でゝ炊事の支度なしつゝあり、井戸端に行き淸水汲みあげて盥漱を終り、和らかき朝風に袂吹かせつゝ前栽を行けば水田一ッ隔てたる向ふの森に鶯の聲も聞え、垣根のほとりに咲ける菫の露を帶びたるもゆかしく、霞そめたる淺間の煙も長閑なり、やがて父上も起き給ひ妹も起き出で年老ひたる祖母も起き出でぬ、父上は庭の隅に取散されたる藁を束ね、祖母は爐邊に坐りて柴折りくべ母上が炊事の助けをなし、妹は室内の掃除、庭の枯柴など取片付くるうちに飽くまで眠りを貪ぼりし弟殿も父上の大喝に驚ろき覺めて、睡き眼をこすりながら起き出で、昨日殘せし林檎の接木を爲さんとて鎌と鋸とを携へて裏の畑に行きぬ、「朝飯なり」と母上の呼び給ふに家に歸り打そろうて朝の祈を捧げ爐邊を圍みて膳に向ひぬ母上は釜の傍に坐して飯を盛り給へば妹は汁などとゝのへ祖母は猶柴折りくべて湯を沸かしつゝあり、「今日の天氣は如何に」など打語らへつゝ菜汁と大根漬に麥飯三杯傾け了れば、今日の業務を何くれと語らひつゝ父上と余とは麥畑を耕すべく十町あまり離れたる野に行く可く、弟は車を曳きて淺間の麓に行き芝土を切りて田に運ぶべく、祖母は留主居を兼ねて麥をひくべく妹は父上が野良衣の破れを繕ふべく母は隣家に機織に行くべく定まりぬ。

弟は紺の野良衣に半股引を穿ち、ふちの破れたる麥藁帽子をかむりて、早や荷車ガタガタと引出すに、父も余も各其業に付くべく急ぎぬ、父上はあちこち繕いたる袷の裾を折りて帶に挾み、股引はゝきを穿ちて垢きたる手拭をかむり、余は袖など摺り切れたる洋服の上衣に紺の肌引を穿ち麥藁帽をかむりて、腰のあたり紐にてしめ付けたるに其樣の可笑しげなりとて、祖母

も妹もいたく笑ひ興しぬ、父上は鋤を肩げ余は草把と鍬とを携へ村端れより松樹茂れる鎮守の森を過ぎて、林端の坂を下り向ふの岡へと上りゆけば菫たんぽぽ路の邊に盛りをきそひて、青く青たる麥畠のそよ吹く風に靡き所々菜の花の黄色なるに蝶の戯むるゝも見え松のしげみに山櫻のほの見ゆるも面白し。

やがで畠地に行きつけば父上は鋤もて空地を耕やし給ひ、余は麥畑の草を取りて鍬にて土を穿ち寄せぬ、疲るれば畔邊に出でて煙草くゆらし、父上と樣々の物語りしつゝ凡そ十分許りも休みては又も業をはげみぬ、耕しては休み休みては耕しゆくに日

## 名畫十二ヶ月（九）



狩野山雪の四季屛風の秋

はいつしか高く上りて腹の中自から空しきを告ぐる頃、妹の山櫻の枝など折り携へて未だふしなれぬ讃美歌可笑しく歌ひつゝ中食携へ來るに、畠續きなる森影に行きて、父上は松の根元に腰打掛け、余は柴草の上に踞して包を開けば、隣家より貰ひたりとて、草餅の大きやかなるに小豆のあん入れたるがあり、父上一つ余れ一つ遂に殘りなくなれば妹は空包携へ路のべの胡蝶逐ひつゝ歸りゆくに又もおのがじゝ先きの業を續けぬ、やがて聞ゆる上り列車の汽笛に「はや晝となりぬいざ歸らん」との父の言葉に打連れて家に歸れば妹は笑ましげに門邊に迎へて「迎

ひに行かん所なり」など語りぬ、母上も弟もはや歸り居て、弟は歸路に車を覆して小指少し傷けたりとて母に小切れにて包みもらひ居りぬ、晝飯には大根漬の茶漬に味噌仕入用の甘酒など幾椀か傾け盡し、暫時横になりて息ひ居れば、折しも新聞の配達し來るに、寢ころびたるまゝ余は先づ小說の欄など讀むに、父上は附錄の相塲など眺め給ひ弟は余が左側によりそひて雜報の面白き題目など探しつゝあり、かくて一時間計りも休みて各午前の業を續ぐべく立出でぬ、出立がたに母上は父上にむかひて「夕食は何にすべき」と問へば「何にても」と父上の答へ給ふに母上は余が顏ながめて「汝は又蕎麥が好きか」など云ひつゝ笑ひ給ひぬ、午後も亦午前の如くはげみて黄昏告ぐる山寺の鐘に鴉の鎭守の森に急ぐ頃家に歸ぬ、農具は小屋に納め背戸の小川にて足を濯ぎ室に上れば影暗き燈火室内を照して夕飯の支度とゝのひ居りぬ、蕎麥もあり、麥飯もあり、葱の味噌汁もありき、夕飯後祖母は早くも臥床に入り、余は晝の新聞など繰り返すに、隣家にて「風呂の出來たり」と呼べば父母と妹とは入浴にとて出去りぬ、弟ははやも爐邊に倒れて鼾の聲のみ高し、やがて皆立歸りたるに暮れの祈りを捧げて臥床に入れば、小田の蛙の聲のみ聞へていつしか夢なき熟睡に入りぬ。

## 夏の深山（叙事文）

今朝はうれしくも雨模樣とおもつたのは誤りで、垣根の外を通る二人の朝顏賣の「けふも暑くへげそうですね」といふ聲きこへし程もなく一面に立籠たりし霧は一重〳〵と衣をはがすごとくへげて傳通院の森も五郞兵衛山の森も今はよく見へそめると暑さの神の護光かとばかり、日光はきら〳〵と窓よりさしこんできて見るだにあつき青空が見へて來た。

あゝ今日も暑いのかきのふは九十度、一昨日は九十一度、東京の夏はげに苦しい、それから思ふと去年行つた赤城山は暑などは夢にも知らない所であゝ考へ出すと今にも行きたくなる。

上野を朝出發した滊車は乘客の汗一斗を乘せて晝前に

前橋市についた、我はぶら〳〵と獨りこの町を通りぬけて前方遙かに火山的の裾野を長々と斂ける赤城山その頭は濃き白雲に閉ざゝれた山邊を指して行つた。

田畠を通過ぐれば桑の畑に入る、目もはるかに連れるさまは桑の海ともいふべし日は遠慮なく頭より照りつけて、わが背は汗の瀧をなし、路ばたから立つかげろふのゆらぐ影をみても、目がくらむばかりであつた。

二里ばかりして漸く山邊に近づくと、はや、かな〳〵蟬の聲が木影から交る〳〵聞え、涼しき風が袂を吹いた是よりいくつかの荒村を過てゆくと、氣候は漸々涼しくなり、山を上りつめた頃は午後五時過であつたが、しばし足を休むるために路傍の枯木に蹲まる時しも雲霧蓬々と吹き來つて、さきの暑さは夢の樣に忘れはて汗は氷るかと思はれてそゞろに寒くなつて來た。山の中とは云ひ乍らかくばかり温度の違ふものかとおもひつゝ大洞の方に急いだ。

牧牛遊べる一里あまりの草原をすぎてゆくと、日は漸く沈んで殘んの夕ばえいろ美くしく、ふと樹間にみえすいたのは瀲灔たる湖水でそれが今紅に映じた時、深山鳥の靜寂を破ぶる一と聲。

名畫十二ヶ月（十）



若冲の楓

一點の燈火をたよりて湖畔の一軒家についたが、爐火のもとで食事する時、白雲は容赦なく窓のすきまより入りこみて、火影おぼろになりしをみて、我は深山の面白さを感じた、そして枕につく時はからずも一ツ二ツの螢がふわ〳〵と我が枕邊をとびちがふた。

夜になつても戸を閉さぬ、盜賊の憂はときけば家の人人はそれは里で云ふ事ですと答へた、雲の上の天國とは爰ならんとおもッた。

爐火をかこんで互に山人のはなすをきけば都人には物珍らしい猪のあばれた話、猿の助を乞ふた話、山犬のおそろしき事、沼の主をみた事、或は山姥、山男、大入道やら、一ツ目小僧やら、いろ〳〵かたりつゝ笑ひ興ずるのであッた。

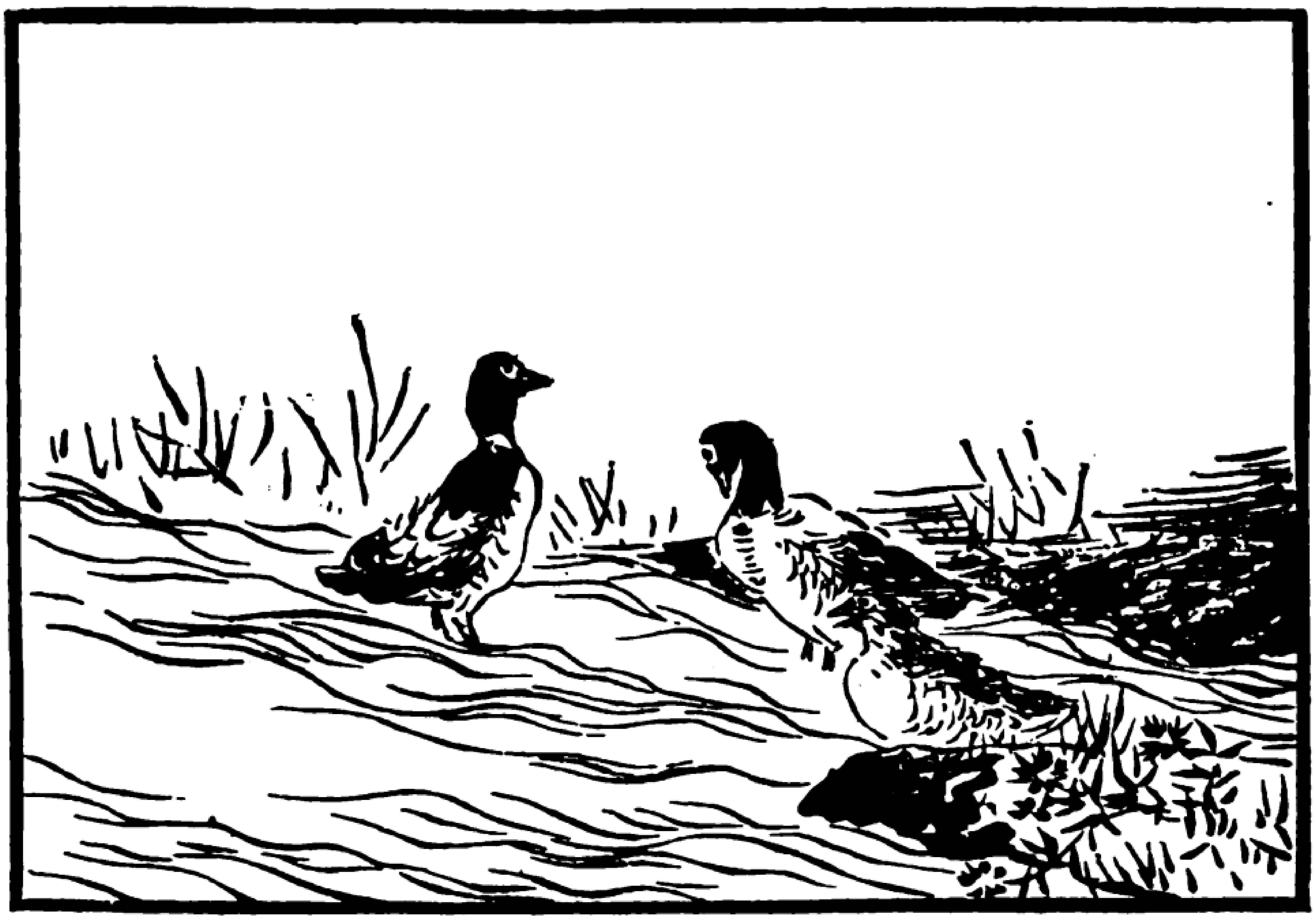
## 紅葉の秋（抒情文）

秋もいつしか暮れかゝり朝な〳〵の時雨はをちこちの山の梢を薄くこく色どるたねなるべし、今日は小春ともいふべき空いと麗かに風さへなく、さも彌生のこゝちせられ、何となく野遊なつかしければ紅葉狩こそよからめと思ひ立ちぬ。

日頃ゆきかふ親しき友がきふたり三人をかたらひ、いそぎ割籠の用意などしつゝ家を出で離れ道すがら樣々の眺めをも打すて、こゝろざす彼方の山にのみ目あてして足を速めてたどり〳〵ゆきぬ。されど是ぞと思ふさまもなし、こは如何にしけん名にし負ふ紅葉はいつしか朽葉色となり、たゞ松のみどりの色のみ見ゆるこそうたてけれ、けさの霜こそと賴母しくおもひしものをとたゞちに立歸らんとし思ひわびしも、わり籠の手前何となく恥かし、兎も角もとて定かならぬ道を別けつゝさまよひありきしに、吹き來る木枯の颯々と音していづこよりか二ひら三ひらの紅葉風のまに〳〵舞來りぬ、今は中々に心强しと、此處、彼處と訪なひつるに向ひの山の端より幽かにこぼれ見ゆる紅葉のつまつまの見えけるに嬉しさに喘ぎ〳〵ちかより見るに、そこらわたり、眩ゆきばかり、一むら繁る紅葉ばのうき秋風をよそになして、心靜に錦の帳を、建連ねい

まを登りとなん見ゆるなり、其の嬉しさはとつ國のある人が名もなき國を見出せしこゝちもかくやと手の舞あしの踏ども忘れとけつまろびつゝいぬの子の雪によろこぶ風情をかしく。いまは尋ねあぐみし苦しさをも語り合ひつゝ、何のいやもなく錦のとばり綾羅のしとね敷つらね、落葉が上に坐をかまひ、今こそ開くわり籠の數々、御酒呑ざるに酔て韓紅の、面に映る夕ばゑに、何れを紅葉とわき難きまで、興に入るこそいと／＼をかしき事の限りなりけれ、たえて通ひ路もなき山陰を、かゝる珍たき紅葉の木を人は知であ

## 名畫十二ヶ月（十一）



呉春の畫

りしや、空しく散りはつらんと思へばいとゞ口惜う、あはれこの木若しこゝろあらば梅櫻の香はあらじともその赤き心根をば世のため人のために九重の都ちかき庭にうつし植ゑば人見て心の鏡とやせん來ん秋もまたかく染めなましゝのべよ霜時雨散るともよし、赤きまごゝろをは、な忘れそなど。たがひにいましめて行末こし方のこと語りもつきず、友がきと物するうち、雨か、霰か、ふりかゝる音とに驚ろき、かへり見るに、まどろむ紅葉の梢と見しは、覺めてあとなき夢なりき、あなをかし、つれなさの秋の日や、

はや暮れ近かくなり渡る鐘の音に、いそぎたちて夕餐の物まいらばや。

## 氷柱の朝（寫生文）

冬の朝は懐かしいものである、ゆうべ塵のやうに降りたる雲の、今朝は白妙の銀世界、庭面を見渡せば、一と株の丁字が綿帽子を冠つて四周一面鮮やかな粧ほひ伏せた植木鉢まで富士山の姿、これは千兩、萬兩、流石に天公の仕業は偉大なものだと感心せずには居れない、併しこれは初雪に對する一時の感で、毎日のやうに、この雪が降れば、銀世界も忽ち飽かれて仕舞つて千兩萬兩の眺めも、「イヤ飛んだものが降つて往來の妨げをする」など、潘される様になる、それでは一向初雪も埋らぬ事になる。けれど宵に降つた雨が一夜一瞬の間に凍つて、翌朝の水晶世界を現ずるに至ッては冬の神の巧妙なる美術的技倆を賞讃せずには居れないのである。

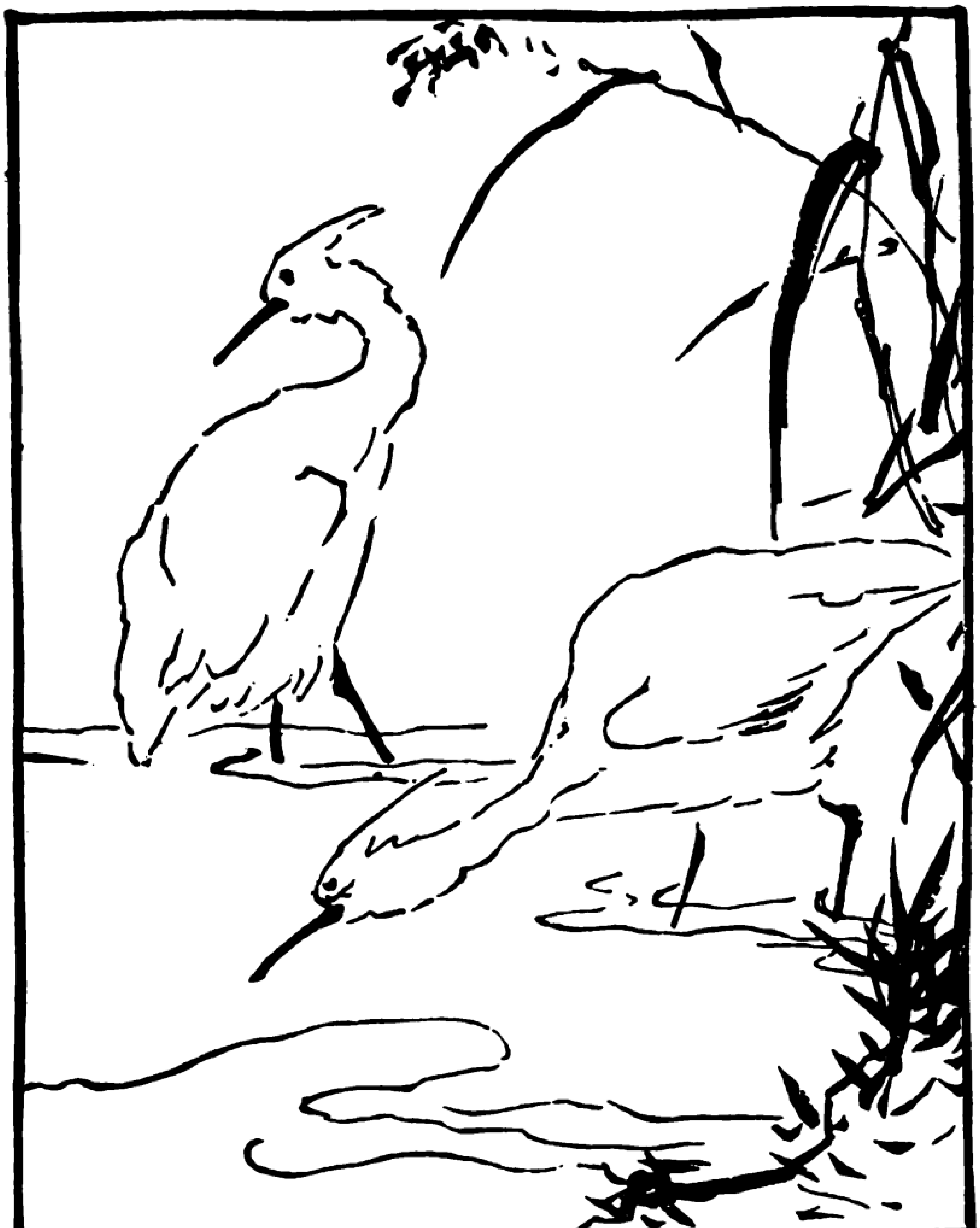
雪は天より水の分子を凍らせて地上に落すものであるから、それが降りて世界を白銀のやうにするのは當然の事であるが、一旦降らせた雨を其の儘凍らせて翌朝の寝ぼけ眼を驚かすに至つては其の技術一段の妙境に進んだものと言はねばならぬ。我等、初雪の眺めを銀世界と稱讃した如くこの美景を水晶世界と尊め奉つた事である。まづその驚ろかされた美景の一端を記して見ると。

庭前の枯枝、平常は何の趣きもない、眼の邪魔位に思ッてゐたものが、一夜の内に水晶の珠を綴つた如く、燦々瑯々として實にこの一と枝千金にも代へ難い價値があると思ッた。支那の詩に「一夜春風氷を破ッて來る、千朶萬朶、梨花開く」とあるが、眞に千朶萬朶に梨の花が咲いたやうであつた。滿庭の氷柱景色何ともいへぬ美景であつた。

軒を傳はる戸樋の溢水、寸盈五分置に、長きは四五寸短きも二三寸、能く磨かれた水晶の氷柱、草堂ながらも瓔珞したは、何とやら白色白光の淨土にも居る心地がする洗濯の竿懸りにと引延べられし針金は、硝子

の皮に包まれて小指程にも太り、庭面は灰水抜の砂糖を溶して流されて居て、食べるものに譬はゞ、石衣といへる菓子其儘。石榴躑躅の枯れ切つた小枝、また水晶の衣を着けて、此に花あり葉あり更に巧なる實ありとは如何にしても思ひ浮ばぬのである。松の葉の透明にして房々と垂れたる、隔たりて見れば色つきて拂子の其にも近く連翹柳の柔和なる枝は、只見る葛素麺の迸かと思はれ

名畫十二ヶ月（十二）



蕪村の白鷺

不思議なるは風に煽られて時々戞々と音するにぞある。

又庭の銀杏樹が、全く葉が落ち盡したる偉大の幹に、水晶と琥珀を削つて枝を作り、剃刀の刄なるもあれば刀の切先なるもありて、碧空を裂き四圍を斬りまくつて居る。そして其の水晶琥珀の刄先が又日光を浴びて居るので、或は赤光或は青光或は黄光五色七光を放つのである。

誠に極樂淨土へ行つてもこの景色は見られぬ又月世界

へ行つてもこの奇景は見られぬ。然るに天公はこの醜多き浮世に時々こんな美景を作つて與れるのである。我々は冬の神に感謝せねばならない。

# 四季物語

## （春）捕虜の母親

### 上

戰爭も大分長びきまして家庭の上にさま〴〵のお話が集まつて參ります、これは西洋のお話で丁度佛蘭西と普魯西と戰爭のあつた時の事でございます、佛蘭西の去る片田舍にジャコビーといふ一人の寡婦が住ふて居りました、其家は滊車の停車塲の側で右左から來る往來の角に當つて居りました、家は狹いけれども新らしくて四邊に人家もなく樹木が茂りあつてまわりは石垣に取圍まれ屋根はすべて瓦で葺かれてあります、このジャコビー女は丁度その年の七月に普魯西と開戰の詔勅が下りまして一人息子のアリスチッド、ハムーヅといふものが軍隊と一緒にベルタンの方へ向つて出發致しました、それでこの寡婦はこの家に住ふたのですこゝに移轉ました所以は停車塲に近くて萬事便宜がよいからでした、ジャコビーは女ながら立居振舞しとやかで、賤しからず、我が子を愛する事深く戰爭が濟んで歸つて來たらば、直ぐに彼れの腕にとり縋がつて抱きしめやうといふその折の樂しさは如何ばかりかと空想を腦に浮べつゝ日を送るのは、何處も同じ母親の眞情でせう。

アリスチットは軍隊と共に出立せんとて用意の物を充した袋を手に取り持ち乍ら母の顏に接吻して勇み勇んで門出をしました、其折の親の情はまあどんなでしたらう。まして親一人、子一人、お互にこの世で便りに思ふて居るのですから唯もう哀しさが先立つて打しめりました。

子が出立した跡で哀なる母は指折數へつ規則通りの日數に到着する書簡を嬉しく讀みつゝ、初めの程は心を

慰さめて居りました。

然るに戰爭は段々と佛蘭西の方に不利益な形勢となり程なくアリスチッドが駐在して居た地が獨逸兵の爲めに襲はれてその村落もババリヤの二軍團に占領されて仕舞ッて、これ迄日限を違へず參ッた通信の途も殆んど絕へて仕舞ました、最後の手紙は八月三十日セダン（獨逸軍の爲めに包圍された處ろ）の近村から認めたものでそれすら一定の軍事郵便でなく日限不規則に持來たる配達夫に依賴したものでございました、其後はとんと通信の途が絕えて仕舞ひましたからアリスチッドは討死したのか、またはセダン城陷落の時捕虜の身となッたのか、あはれやジヤコピー夫人は確かな報せを得る事が能ませんでした尤も唯一つの確かな事實は八月卅日以來音信が絕へたばかりで死亡の通知さへ今日まで無い處ろを見ると未だ息災で居るとしか思はれない。況してジャコピー夫人の身となッては我が最愛の一人息子が喰敢なく死んだものとはどうしても考がへられませんでした。で始終こういふ事を獨り言のやうに言つて居ました。

アリスチドは、必筆を持つ事の叶はぬ廓內に獨逸兵の爲めに幽閉されたるに違ひない、けれどこの恐ろしい戰爭が止んだならば必らず歸ッて來るに違ひな




紅葉の名所（榛名）

い
とジャコピー夫人は朝夕心の裡に待ち詫びて居ました

## 中

八月より九月に亘ッた恐ろしい戰爭も冬となり春となッて漸やく和解し、セダンの包圍は元より巴里の籠城も平和を告ぐる時は來ました。一人息子の身の上唯安全にあれかしと冀ふ夫人の心は金をも溶かす思いで、平和と聞いては希望の喜びに躍る胸の動氣はいよ〳〵高まりました。捕虜もそれ〳〵送還せられ、去年アリスチッドと同じ頃に出征した若い者共二人三人は旣に歸つて來ました、停車場には破れた軍服を着て顏色のやつれた虜のものが潮の湧くやうに歸ッて來ます、くぼみ果てた眼の中にも故鄕をまのあたり見ては嬉さに輝き渡ッて居る人々の体爲、ジャコピー夫人は獨逸から到着する滊車に注意して眼を放さず、下る者があれば一人も殘らず取調べて其地にあッた人々に尋ねて見ましたけれども誰一人アリスチッドの消息を齎らしたものはございません。セダンが陥ちてから此かた顏さへ見た事なしとか、其中で一人の兵士が申しますのに何も鏖殺しに成ッたといふ譯でもなし、聞けば敵の國で亂暴を働らいたものもあるとの事なれば恐らくはプロシャの囚獄にでも繋ながれて居るかも知れません。まアそういふ噂もありましたといふのでジャコピーは毎日案じ煩らひまして獨逸政府に掛け合ふて貰ッて幾度となく息子の安否を尋ねました。そして今日は目出度歸ッて歸るか、翌日は息災な顏を見せるかと夜毎に新らしい家の食堂には温かいスープ、美味い葡萄酒其他の食器を取揃へ、さへ渡る滊笛の音に胸をいため耳を聳て、盗うつ、春の雨を心の中の哀みと共に聞つゝ待ち暮らして居ました。

## 下

ジャコピー夫人が愛兒を待つこと久しい、其の一夜、篠突くばかり降しきッた雨に暗く、最終列車は獨逸ストラスブルクから着しました。此の日こそ一切の捕虜

の送還せらる丶最後の日で、今しもプラットホームはこれ等の人で充されました、最終の客車から辛うじて下りた一人の兵卒が足に負傷でもしたものか、たよたよと力なく身は疲れて何となく病後の人らしく顔の色蒼白く、今夜はもう疲れて汽車を續ける事もなり難い樣子、然るべき旅宿もあらば一夜憩みたしと人々に尋ねて居ました、停車場から遙かに隔たりし所ならでは旅宿らしきものはないとの事に力なく人に後れて停車場を出て行きました。

かくて闇の中に旅宿を求むる心で、とある森蔭の孤つ屋を見出し、そこの窓に映る燈火の光が影淡く見へましたので、兵士はそれを旅宿であらうと思ひましたから、戸の側にた丶ずみて手もて探ぐりますと呼鈴がありました、喜びながら力限りに押すと、やがて窓の火影は洩れて、内から何か獨り物いふ氣勢でした、靜かに聞きますと。


紅葉の名所（榛名山）

あ丶今夜は家の子であらう

と叫びました。足音は次第に玄關に近づき、戸を開ける時に兵卒は一人の老婆を認めました。老たる女は驚ろきながら兵卒の顔を打まもりまして思はず聲をあげて申しました

あ丶神樣、これは家の子ではございません！

寡婦は痛く感動致しました、且つ人違ひであッたのに落膽した樣子でしたから兵卒は申しました。

私は今夜終列車で獨逸から歸ッて來ました者です、

彼處できけば旅宿がこの近傍に在るといふ事でしたからそう思ッて貴女の家の門を叩きました誠にはや失禮ですけれど私は今躰が綿のやうになッて疲れて居ります、どこでも搆いませんからと一晩憩ませて下さいませんか。

ジャコピーは暫時言葉なくたゝずんで居りましたが、この若い兵卒の容貌といひ、年齢といひ、わが子に似た處ろがありましてそゞろに心が動き哀れを身に感じまして思はず落涙致しました。

さア、早く御這入なさい、こんな天氣につかれた方を道に迷はせては神樣の心に背きませう、わが子の身の上を思へば今頃はあやめも分かぬ闇の夜に名も知らぬ村に一夜の宿を求めやうと探して居るかも知れません。

と言ひつゝ内に這入らせまして肩に擔ふた袋を卸させアリスチッドの爲めにとて日頃から用意した温かいスープを與へ、自分は側で給仕しつゝ行衛の知れぬわが子の話を續けました。

兵卒は疲れし事とて食事の終るや否や早くも眠りを催ふして堪難い樣子でしたからジャコピーは我子の美はしい部屋に導びいて臥かしました。

翌日兵卒は衣服をあらためて、はや立出やうとしましたから、おし止めてまづ朝餉を供しまして、又もやアリスチッドの物語を始めました。

ア、憐れな子よ、今しもどんなに外國で苦しんで居るだらう。あの子は自家で、我儘に育つた子であッた戰爭の門出をする時私は青い色の毛糸で頸巻をこしらへて與りました、それはあの子が神經痛でひどく惱んで居ましたから、頸首の寒さに堪へる樣にと心附けたものでしたが、この冬の烈しい寒さに役に立てたがとうか、私はそんな事までも案じて居ります。

この一言を聞くや、兵卒は始めて考へ當る事があったが、食事もせず、つら〳〵と思ひ返して見ました。成程そういへばあのセダンの役で自分逹の仲間は皆繋がれて恰も獨逸の番兵が羊の群を守るやうに我々を見張

つて居た、その時自分の側にこの寡婦が語した人と露違はぬ若い兵卒が坐つて居た、成程青い色の頸巻を襟にまとつて居た、戰には敗て捕虜となつた身にも可笑さは同樣でその男の樣子を見て笑ひ罵り、はては青首男と呼んで諢名のやうになつて居た然るに或夜故郷に殘した母親が戀しくなつたものと見へ、例の青小僧は逃亡を企て、二十丁ばかり辛くも逃げ出したのを番兵か見つけて後から鐵砲で擊ち放した。どうして堪つたものではない、其塲へどつと斃れて其儘いきは絕へて仕舞つた、たゞ青い色の頸巻に捲かれた顏が一層青い影を止めた、あゝ思ひ出しても無殘な事。



紅葉の名所（摩川）

兵卒は席を立ちて哀れな寡婦に禮を述て
貴女の御子息はほどなく御歸でせう、多くの佛蘭西人は獨逸に殘つて居ます、必らずアリスチッドは歸つて來られませう。

と言いつゝ袋を肩にして其家を立去りました兵卒は家の影が見へなくなると急に蹌と〻まつて、はふり落つる淚をおしぬぐひまして、獨言しつゝ、

實にはや何とも言ひ樣のない哀れな婦人だ、アリスはどうして再び彼の家に歸つて來やう。神樣、どうかあの寡婦を憐れんで下さい！

# 負傷兵（夏）上

日本と露西亞の戰爭は世界始まッて以來の大戰爭でございます。幾萬といふ敵味方の勇士は屍を戰場に曝らして各々其國の爲めに盡したのであります。その功績は敵も味方も同樣で、國民たるものは子孫萬代の末までも深く偉勳を身に刻んで置かねばならぬ事であります。

日本と露西亞の戰爭中我軍の爲めに一番困難であり、又一番慘狀を極めましたのは、旅順口の方へ向ひました軍隊です、世間の人は南山の落ちた翌月位に旅順は落ちる事と思ふて居りましたが、それが翌月になり、翌々月になッても落ちぬのみか、敵の防禦は中々堅固で、日本軍は每度打破られて其の都度夥たゞしい死傷を作ッたといふ噂が聞へました、一と頃は或る方面に向ッた二ッの聯隊は全潰に遭ッて、五千人の兵士悉く戰場の露と消へて仕舞たなどいふ忌わしい風說の傳はッた事もありました。

それから段々と月日が經つた、大分日本軍の勝利も見へる樣になりました、けれどもまだ旅順は陷ちませぬ開戰以來八ヶ月になりますが、この肝腎な敵の要塞はまだ落着がつきません。まア敵は何といふ頑固な防ぎをして居る事でせう。日本軍隊の艱難辛苦實に思ひ遣られます。實にこれは筆にも言語にも言ひ盡し、書盡す事は出來ますまい。

旅順の陷ちないのは露西亞の兵隊の強いのではなくて其の器械の強いのであります、旅順で防ぎをして居る人間が強いのではなくて、砲臺や、石壁の強いのであります、旅順では兵士と兵士が戰ふのでなくて、兵士と砲臺とがいくさをして居るのであります。一方は人間、一方は恐ろしい鐵や巖です。日本人がどんなに强いからつて此の鋼鐵や巖と戰つて容易に勝てる譯のものではありません、私は近日旅順から負傷して歸ッて來た人を尋ねてこの恐ろしい、凄まじい古今未曾有の要塞戰の景况を聞きました。

時は八月上旬の事でございました。日本軍が占領しました或る砲臺と敵が守ッて居る砲臺との間の谿谷は東西二三百間ばかりもありませうか、前日此の砲臺を奪ひ取る爲めに苦戰した我軍の人の死骸と、砲臺から逃げやうとして撃たれた敵の死骸とで殆んど此の谿間を埋めんばかりに重り合ひ、恰ど寺の畵にある地獄畵を生で見るやうな心地がしましたが一度この谿間に落ちたものは重傷者は元よりの事、輕傷者とても又タトエ健康な者でも容易に此處を脫れ出る事は出來ません。それは何故かといふに、谷底が深くて敵と味方の目下に在るから、匍匐して山の中腹まで登ッて來やうとすれば直ぐに敵の眼に觸れて砲撃される、殊に旅順の敵は衛生隊でも赤十字のしるしのある病院でも何でも構はず砲撃するといふ無慘な譯ですから、いくら衛生隊が骨折ッて、この憐れな負傷者を收容しようとしても助ける譯には行かず、只見殺にするより外に仕方はないのです。




紅葉の名所（妙義山）

負傷者すらこの如くでありますから死人の遺骸などを收容する事は固より出來ません、私の知人に一旦落ちた谿間から這ひ上ッて、命からく〳〵野戰病院にこぎつけた兵がございました、此の男の話に敵壘間近まで突貫し、あはや砲壘へ飛び込うとした一刹那、敵の殘兵から狙撃されて、股を討た

れ、足が萎て、其儘谷底へ轉がり落ちました、其の落ちた當座は氣絶して何も覺へませんでしたが、フト氣がついて見ると自分の下には三人の露兵が重傷を負ふてウンく呻きながら苦しんで居ました。

おのれ憎い奴、どうして呉れやうかと一時は敵愾心も起りましたが、熟々見ますと三人共いづれも重傷で、一人は眉間から頰を擊たれて顏の全面血に染まッて居る、他の二人は胸部に二個所、肩先に三個所の銃丸を受けて最早絶命に近い体でした。

自分はこの体爲を見て急に不憫の情が起きました、すると件の負傷兵は互に傷所を指さし、何か譯の分らぬ事を言ひつゝけて自分に向ッて手を合せますから、繃帶でも賴む事と思ひまして用意の綿撒糸を取り出して介抱してやらうとすると、彼等は手もて制し、自分の所持して居る劒を指しておのれの頸の所ろへ擬へました。

そこで自分は、アゝ成程と心づいて、扨ては苦痛に堪へ兼ねて早く止めを刺して呉れとの歎願かと不憫はいよく加はりましたが所詮助からぬ物ならば一刻も早く苦痛を止めてやるのが慈悲と思ッて其場で介錯してやりました。一人は年齡二十歲ばかりの青年で眼元のうるはしい美男子、今一人は三十近い髯の深い兵士で首に寶石の十字架を懸けて居りました、元より名も知らず、籍も知らず、不思議な緣で介錯をしたが、嗚呼定めし遺族もあらうにと其折の顏は今に忘れません。砲煙戰雨、流血杵を漂はすといふ此大修羅場、一刻移れば我が身の上も亦この如く無慘の最後を遂ぐべきこの瞬間に於て、今まで敵として戰つたこの露西亞人によし一刹那とは言ひ乍らこの如き眞情を注ぎ、涙を灑いだのは寧ろ我れながら不思議でありました。

## 中

それから自分はどうにかして生命だけは助かつて再び國の爲め、君の爲めに盡さなければならぬと考へましたから、脫けられるものならこの難境を脫けたいと、彼方此方見廻すと彼方の巖の蔭に三人、此方の草の中

に五人と頭をうたれ、胴をうたれて、血まみれになつて斃れ臥して居る其の有様、實に眼も當られない。せめて我が戰友の中で生命のある者ならば共に介抱し合ふて隊に歸りたいものだと、巖の間を匍匐して近づいて見ると、いづれも皆縡切れて居るものばかり、そこで段々と谿間を横ぎつて山の裾の處ろまで來て見ると、山上の砲壘から露兵が自分の姿を見て狙擊する一度に銃丸が三發來たこれは危ない、こゝで無益に命を捨てるでもないと思つて、擊たれた體に裝つて死んだ眞似をして仕舞ひました、で、晝間はとても脫する事は叶はぬから、夜間を利用して敵の眼を避けて山腹を這ひ上らうと決心しました。

こういふ譯で自分は戰友の死骸の中に頭を突込んで虛死を裝ふて居ましたが、その中に段々と時が經つて次第に飢渴を覺へる、この時はもう飲むものも、食ふものも少しも持つてゐませぬ、殊に殘暑の暑さといへば御話にならぬ位で百度以上の熱光は上よりクワン／＼と照つけるから、渴は一層甚だしい、實にもう生命にも代へられなくなつて來たので、今まで呼吸を殺して僞死して居た身が苦しさの餘り這ひ出して水のある處ろを搜しにかゝりました、けれどもこの邊一帶燒石の磧であつて一滴の水もない、やうやく晩方に及んでやつと谿水の流れて居る處ろを見出した。ところがそれは谿水と言ふよりは寧ろ血の河といつた方がよい位で敵と味方の死骸の下をくゞつて流れる血の混じつた水でした。けれども渴した時の苦しさ、用捨するまでもなくこれを手に掬ひあげて喉を濕ほして僅かに呼吸をつきました。

## 下

夜に入つてあたり眞暗になつたから、もう敵の眼にかかる心配はなからうとおもつてそろ／＼山を這い上りましたが、股を擊たれてゐる、擊たれた處からは絕へず血が湧き出る、時々眩暈みがする、殊に身は綿のやうに疲れてゐる、思ふやうには運ばなひ、其間敵の砲臺から二發、三發づゝ我が軍の方へ向けて發射するそ

の曳火彈が私の頭の上を超すのである。すると生命を棄て丶敵壘に向つて行く時は何百發の彈丸が一度に雨霰と來て、顔向けもならないやうな時でも、心は常に勇みきつて、何を思ふ遑もなかつたのが、扨て一旦捨た命でもこうして、助からうと思ふと一發の砲聲にも身が縮まるやうであつた。考へて見ると人間は不思議なものです。

それから夜通し斷巖絶壁の山を這ひ登つて。やつと我が舍營のある處まで來て、やれ助かつたなと思ふとそれぎり氣が遠くなつて、そこに其儘斃れて仕舞ひました。

氣がついて見ると野戰病院で創口に繃帶を施されてゐましたが、其折同じ樣に負傷したもの丶說にき丶ますと、私が落ちました溪の少し南の方に敵の隊が澤山に居て、負傷して谷へ落ちた日本の兵を片つ端から虐殺したといふ事でした。

私は其の隊に見つからなかつたのが天幸でかへす返すも私は生命冥加なものでございました。

## （秋）世界漫遊者

金壁燦爛たる日光の靈域を見物し終つて中禪寺の仙境に旅路の塵を洗はせ居る夫婦の外人客あり、この客至つて奇特の人物にて、食は脂濃き肉類ならでは口に適はずとて態々東京より取り寄せざれば承知せぬが一般外客の習ひなるに、それとは變つてこの客、一向に肉を食はず、衣服、身の廻り、其の他の調度の豪奢なるに引かへて、朝夕の飲食は牛乳と野菜、麵包に豆類を供するのみ、外國人にして肉を嗜まぬこと不思議の一つと通辨人を介して其の理由を尋ねたるに、意外なりしは此の人々の素性なり、今の世に珍らしき事とてその人の經歷の一端、外客の語るを聞くがまゝに記して見れば。

### 上

余は今を距ること四十五年前倫敦の片田舍に生れたり、父は教會の教師なりしが子供十二人ありて一年三

百磅の收入にては迚も扶助し了すべくもあらねば、長子の余は十四歳の春家を出で丶去る商館に雇はれたり、初め三年が間はたゞ衣食を給せられたるのみなりしが、三年の後に至りて一週十志の給金と晝飯の料として乾麵麭と水とを得る樣になりぬ、さりとて尋常の生活を爲す時は到底是丈にて見苦しからぬ事をなす可からず、此時余は偶然菜食斷肉を勸誘したる書を得て、之を熟讀し深く其說に感服して以後は一切酒肉を近くまじと決心せり、時に余は年齢方に十七歳、丈は五尺六寸にあまりて倔强の男なりき斯くて余は上役の手代に賴みて一週間十八片にて部屋一ト間を借り受けしが其部屋には寢臺一脚ありしのみ必要の家具もなく蒲團もなかりし、されど如何なるヿありとも人に借金してわが勤儉の鋒を鈍らすまじとの覺悟なれば、家を出づる時母上の余が爲めに荷物の上包して遣られし粗き帆布の切れに枯草を一ぱい押つめて敷蒲團とし、八週間が間は每夜古着にくるまりて此の敷蒲團の上に寢ねたり食物は每日パン半封度、一週に蠶豆一封度、甘藍二個、馬鈴薯三封度、種油二片、米二封度、酒石一フアシグにて一日都合三片の割合に過ぎざるも、量も滋養も頗る多かりし、時々兩親の許より果實の籃を送られし時は、喜んで賞翫したれど、併し往々運賃先拂ひにて送らるゝ事ありて斯る




紅葉の名所（小豆島）

時には余は甚だ難有迷惑を感じたり、されば余か一週の豫算案は食物一志九片、宿料一志六片、薪燈九片半にて殘五志十一片半は他の用に供したり、入週を經て二磅の餘を貯へ得たれば、此にて藁牀、毛布、敷布、枕の古手を買ひ、猶一年間右の麁食にて辛抱し、都合十二片を貯蓄したるが、市中には身分よき知己親戚も少なからず、往々訪問を受くることもあれば、此の金にて必要の家具を買ひ夜は寢室、晝は居間、應接間の役を務め日曜日には、余が現在の妻、即ち當時の淑女來りて共に茶を喫し、將來に希望ある談話に時を移し然る後寺に行きしこと度々なりき、此の淑女は恰も余と同年配にて無慘の繼母より辛く取り扱はれ、無理に四十五歲の老鰥夫に押し付けむとせられしが、此の少女は只余に其の愛を繋ぎて他を顧みず、余が所藏の菜食論の書を借讀して以後一切肉食を斷たむと決し、家族の嘲笑を忍びて其の決心を貫き徹せり、然るに少女の父は初めわれら二人が間の契約を許せしも、彼の四十五歲の富人が來りて其女を娶するに及び、意を變じて余が其家に來往するを差とめ、其の女を強て例の老富人と共に散步などさせたり、されども可憐の少女は猶も余に貞實を盡して心を變へず、余も又之を懷ふこと深かりければ今二つ部屋をもちて衣裳見苦しからず貯ふるに至らば、速やかに結婚せんと約しつゝ勉むること更に二年、恰も二十回の誕辰を過ごせし後、余は少女の父に赴むき「余は今己に部屋三つほど立派にもちて足下の娘御を維持するにたふれば速かに結婚の日を定めたまへ」と請求したり、少女の父は畢竟心のよき男なりけん前の事は忘れはて快く承引し之を余に妻はせし時は持參金として十磅を其女に與て繼母より二磅を予へ、而して余が妻の兄弟姉妹は引出物として家族用聖書一卷を贈りて、禁肉者なる我等夫婦を祝せり。

## 下

去るほどに余は妻を迎へて生活の趣味は以前に増して面白くなりしが、所得の金は猶一週十志に登らず、

されば部屋三つ此代三志六片、薪、燈一志、食物三志六片、雜費二志と斯様に割り付けて一年を暮し、翌年十一月の頃に至り妻は一子を擧げぬ、此まで家事萬端細君の手一つにてやつて廻せしことなれば、此より子もりに終日の暇を潰されては迷惑なり、如何がはせんと思ひ煩ふ所に、社長の細君訪來り様子を見て歸りしが、翌日は余が給金も一週十八志に上げられたり、此にて愛蘭生れの下婢一名を雇ふ事となしたりしがこの女も亦余等夫婦と同じく禁酒肉の主義を守れるこそ我等に取つて仕合せなりけり、斯して二年を經て余が貯へ十磅となれり、さらば之を種にして何か一と儲せむと

紅葉の名所（小豆島）




思案したるに余が會社には一百あまりの職工ありて、其が使用する道具は皆此の市中にて高く買ひ入るゝものなることに思ひ當りて、此處ぞと倫敦の田舎なる製造所に赴き廉價にて雜貨類少々買ひ入、此まで職工等が買ひ居りし値段より一割ほどの廉價に賣捌きしが、シカモ余は之にて一割八分の利潤を得、彼此する間に年の暮には十磅の親は百五十磅の子孫を產みたり、此の圖を外づさず一人の職工が怪我にて引き込み居るを幸ひ、此の男を雇ふて他の店々にも賣り弘めさせ、妻は自から會計を擔當して勤勉誠實に取り引したれば、製造元はいよ〳〵信用を置き、內職次第に手廣くなりて、終には手

代一名を置き或る倉庫を借り余等は倉の二階に移り住みて猶生計の程度を上さず、專ら勤儉を主として働らきたりけるに、段々月日を經過して結婚より四年の末に及て計算したるに積りたる金一千五百磅となるに至れり、此時余は社長許赴きて告ぐる樣「余が妻は一年千五百磅の利潤ある商賣を致し居れり、余は足下の奉公を已めんと欲せざれども若し余が俸を一年二百五十磅に上げ玉はずば餘儀なく去らざるを得ず」と余が要求は直ちに許諾されたり、斯くて妻を迎へて六年、子供三人まで出來し時、火事にて倉も家具も悉皆灰となりしが、幸にして此等は五十磅の保險をなし置きたれば格別の損にはあらざりし、然し余は一期の浮沈の際なれば余はまた社長に談判すらく「余は已にわが商賣の事に通せり、且余は隨分大なる關係を有し居るを以て八千磅の資本にて足下に競爭する商賣を起す丈の信用を有せり、唯足下もし潤澤なる俸給を余に予へられなば、余は敢て斯くすまじ、余は一年四百五十磅を要するなり而して其の閑を以て前通り雜貨の商賣をなすべし」と社長は亦此の要求を諾し、余を支店の長となして五名の手代を余が手下に置きたり、茲に於て余は初めて印形にわが家紋を彫らせ、衣服も立派に改め、婢三人僕一人を召使ひて市外の別墅めきたる家に住し、一年四百五十磅にて生計を營み、內職の利潤は猶資本にと積み置きたり、斯りし程に社長二名は愛蘭に赴きし歸途、難船して跡には凡庸なる二十歲の少年のみなれば、引受人等相談して會社の事務を余に總理させたり、されど唯、事務の總理といふだけにては、未だ雇人たるの境界に過ぎざれば、今一歩進んで更に其の株主たらんと欲し之に迫りて若し余を其仲間の中に入れずば去て他に競爭の商賣を起さんと談じたれば、引受人等相談して一生の間余を其仲間に入るゝことゝし、今の社長子なくして死する場合には會社の利潤の三分二は余に落るの約束を定めたり、此處に於て余は更に上等の家に住し、馬を畜ひ無幌馬車を置き、園丁二名を使ひ一年千二百磅の生活をなし、亦余が妻も是迄一週に三日は半日づゝ事務に關係せしが、此より全

く引退きて一個の令夫人とはなりぬ、斯くて四年の後余が仲間なる少年社長は浴水の結果として肋膜炎にて死せり、蓋し此の少年の體は麥酒と牛肉と煙草にて出來上りたるにて、また平生興奮劑を用ひし結果として斯く夭死せしなるが、余の如き菜食者は水に浴したればとて病に罹しこともなく、而して余は平生遺言狀を認め置きて我が子供等も苟くも菜食斷酒の主義を守るにあらずば余が財產は一片なりとも相續せしめざることを記し置きたり、社長の死亡は不幸の極なりしが、金の上より云へば余が所得は更に增加せり、今や余が結婚してより已に二十年を過ぎしが、毎年每日たゞ商賣の爲めに奔走して終に鬱散の旅行をせしことなければ、翌年夫婦相携へて世界漫遊に出懸けたり。これ余が半生の經歷なりと客は語り終つて快然たり。

## （冬）陣中の名物

遼陽が日本軍に占領される一と月ばかり以前の事でございました、これは佛蘭西の或新聞社から派遣された一記者が、遼陽の停車場に近い飲食店で晝食をしてゐる間に遭遇した隨見錄の一つです。陣中の有樣は自から描かれて居ります。

私が雜沓してゐる飲食店へ這入つて食堂の一隅に陣取て漸々と食堂へ詰掛て來る大勢の士官を見て居るに誰も彼も皆元氣に滿ち〳〵て如何にも愉快さうに思はれたが之は強ち私の僻目ばかりでも無かつたらしい慥に此處に並んで居る士官達は普通の露國人よりは高聲で物語り又其動作も誠に活潑に見えました其理由は直知れます此等の士官は近い頃滊車で此地へ送られたので此處で以前から戰鬪をしつゞけて居る其同僚達に久し振で面會することが出來、互に故鄕の樣子や、戰場の模樣などを問ひつ問はれつして居つたからでございます遼陽は露西亞軍にとりて唯一の根據地であつて既に到着して居る軍隊は此處から諸方へ派遣され、又新に到着した士官や、兵卒は、滊車の長旅路から此處で初めて其行先を知るのでございます、私の隣席に坐つて居つた一人の士官は樣々と此地の出來事を委しく話

してくれました、卓子の隅の方には腕に赤十字の紐を巻付けた妙齢の婦人が若い士官と頻りに何か物語つて居ます、此二人は數ヶ月間離れて居つて今漸く此處で再會することが出來た姉弟で、姉の方は以前から滿洲へ來て居ましたので既に恐ろしい戰爭の有様や、勇敢な士官や、兵卒が手足を打斷れて苦悶する悲慘な光景を見て居ましたが弟の方は今始めて歐洲露國から其の部下の軍隊と共に遙々此處へ送られたばかりですから一時も早く戰場へ出て自ら拔群の働をなしたいものと熱望つて居ます。二人は他の見る眼も樂い位故家のことやら、親戚のことなど互に睦まじく語り合つて居ましたが今に此二人は又袖を分たねばならぬのでございます士官は血氣な青年のこと丶て近い内には又屹度會はれるに相違ないと、事もなげに云ひました、すると姉の方は弟の頼もしい語を聞いて微笑ながら應答はして居たもの丶其露を帶びたる憂はしげな眼の内には何時如何して再び會ふことが出來やうかと、自ら危ぶんでゐる様が明かに見えたのでございます。

それから又窓に近く一人の優しい頤の脹らんだ肉付の善い、髯のない髮の毛の少く縮んだ小さな男が立つて居ます若し其男が銃劍を持て居らず、又高い長靴や士官の着る帽を冠つて居らなかつたならば私は屹度其を婦人と間違へたに相違ござひません隣席の士官に此事を話すと士官は變な笑顔をしながら之を私に紹介しやうとのことで其人の名前を呼掛けて側近くへ招寄せました成程姓名と服装だけは立派な男でございます併したとひ銃を提げ、劍を帶び、胸には光輝く新しいセント、ジョルジの十字章や數多の勳章を着けて居つたにもせよ猶此士官を婦人でないと言ひ張るものがあつたならば私は生命を賭けてゞも爭つたでございませう、固くるしい初對面の挨拶などが濟んで段々と物語の進むに從つて遂に此の士官は私の想像通 女 であることが分りましたアレキサンドル、イワノウホッチと云つたのは僞名で實はイワノウナである之はもと西伯利亞大學の一女學生でございましたが久しくトムスク府の大學校で東洋語を研究したものと見へまして支那語も

日本語も非常に流暢に話すことが出來ました、既に先年團匪の叛亂のあつた時も男裝して露軍に從つて居たとのことでございます。幼少の時から至つて冒險が好で自分ながら其好奇心を制することが出來ませんかつた、で此度の戰爭にも自ら斥候に使つて貰ひたいといふ事を願出たのでございます固より先例もあることなり又其敵國の言語が善く出來るのですから露軍にとりて非常に便利には相違ありませんが併し露西亞の陸軍省では初めの內は此婦人の從軍を餘り喜びませんでした然るに婦人は其後露軍と日本軍との形勢に付て非常に必要な、本營でも餘り多く知らなかつたやうな報告を大將に捧げましたので初めて從軍を許されること丶なりまして願によつて男の名を採用されたのみならず又護衞のために二人の騎兵までも附添へられることゝなりました其以來此婦人は日夜戰場に馳驅して露軍に多大の利益を與へ、又勇敢な働きをもやつたので終にクロパトキン大將はこの婦人にセント、ヂヨルヂの十字章を與へることゝなりました、婦人は自分の經歷を非常に樂さうに話しましたが戰爭のことや斥候の際に見聞した所のことは少しも口外しませんでした。




紅葉の名所（新川）

四季物語はこれでおしまい

# 音物贈答の心得

贈り物は人生の信義を表はす交際上の禮式にして折に觸れ時に臨み、殊更吉凶事のありたる時其の情誼を物品に移して表はすは欠ぐべからざるの事なり、贈り物は受納者をして其好意を感ぜしむるを以て大切の事となす。故によく其の時期と場合と境遇と、老若男女の區別を見はからひ、風俗習慣もよく心得てなさゞれば己れの本意も空しくなり、人をして己れの好意を感ぜしむる事能はざる事あり、世には身分不相應の物を他より贈られて、却て迷惑を來す事あり又人に物を贈りて却て受納者の心に不快を感ぜしむる事あり、是等は皆其時と場合と境遇に適せざるの贈物より來る失敗なり、庭の花を人に贈らんとする時には蟲の喰ひたる葉や蜘蛛の巣を取りて贈るべからす、但し取りたる儘にて贈るべし。

平生知りたる家に物を贈らんとする時は、先方の貧富貴賤嗜好等をも考へて贈るべし、物足らいで居る人には成べく日用の必要品を贈り物足りたる人には珍らしき物を贈るべし。

他家より物を貰ひ受けたる品の稍隔たりたる日數の物は其品物をよく調べて贈るべし、又他より求めたる品物は有名なる品にあらざれば贈らざる樣にすべし、世間にては金錢を送るを不敬の事と信じて用にも立たざる品物を贈るものあれども、吉凶事には成べく金錢を贈つて人々の便利を圖るが、贈り物の眞意に叶ふものなり。

贈り物は成可く外形の虚飾に流れて其實を失はざる樣の心掛あるべきなり、世間には箱の底を高くして華々しきものとなし、其内の物は僅かに一重に盛るに過ぎざる少量の物を贈るの風流行せり、これ等の仕事は贈り物の眞意に叶はざるのみならず却て人を辱しむる極て卑しき仕方なりと知るべし。燒芋を美麗なる箱にて贈るよりも、カステイラを紙に包みて贈る方却て人を喜ばしむるものなりと思ふ。

新婚の者、並に病人、產婦に贈品せんとする時はなるべく其人の用に足るべき品物を以てす、又老人に物を贈る時は成可く美味ある且つ先方の好みたる品を撰ぶべし。

贈り物は人と爭ひて己れの身分不相應の物を贈る者あれども是れも贈り方の親切にあらず、又目錄を書く時は奉書紙を以てすべし、贈られし物の風呂敷を返す時は白紙を一枚入れて返すべし、自分より尊き人に物を贈る目錄は必らず眞字にて書くべし、又箱、曲ゲ物の蓋の表書は、木目を立にして書くべし、曲ゲ物はとぢ目を字頭にして取手を左にして書くべし。

# 四季進物一覧

## 年玉

羽子板　燐寸　柱暦

松魚節　ビール　鶏卵　菓子折　呉服切手

煙草　毛糸　手拭　足袋　リボン　半襟　半紙　葡萄酒

砂糖　正宗　海苔　コーヒー　眞綿

罐詰　絹糸　ハンケチ　下駄　羽織紐　帯〆　筆墨　ビスケット

## 中元

三盆白　白玉粉　素麺

松茸　干鮑　昆布　干鱘　山葵漬　串柿　佃煮　蒲鉾

書籍　雑誌　手帖　状袋　繪葉書　しをり　寫眞挿　花瓶

林檎　葡萄　密柑　梨子　水蜜桃　湯葉　スルメ　鹽鯛

袋物　小間物　裏地　花簪　岐阜提灯　團扇　扇子　肩掛

## 歳暮

鹽鮭　食鳥類　乾物類

### 新世帯へ

風呂敷　小簞笥　鏡臺　針箱　皆式膳　塗椀　小皿　珈琲茶碗　生地盆　ナイフ

### 祝儀

末廣　島臺　積綿　雁鴨　頭付　巻絹　奉書紙　角樽

### 子供へ

繪草紙　歌留多　將棋　ほうづき　獨樂　手毬　羽子板　人形　お伽噺　菓子

### 不祝儀

蠟燭　線香　薫香　干菓子　造花　生花　觀世麩

女學記者立案

# 名家年中行事

一記者

記者が初めて加納子爵を入新井村の御邸にお訪れ致して、種々と御家庭のお話を承はつたのは一昨年の冬で御在ました、其の後頓と御無沙汰を致して居りましたるに、こたび「家庭十二ヶ月」を編むに就ては是非共名家の年中行事を御伺ひして誌上の光彩としたい、其には加納子爵家をお訪れしてお話を願ふたならばといふ事で、この十月三十日の午后同邸に推參することゝなり、三年振で御目通りを致した所、子爵には記者の希望を諒とせられて、御家庭にて遊ばす一年間のお仕事を御繙かせ下さいました。

子爵は瀟洒快活の態度で、私共の年中行事と申した所、別段御聞に入れるやうな事はない、尤も昔時、御一新前は諸家共に極つた慣例古式が在て、私共に致しても年頭には主人は大紋を着け長袴を穿き、夫人は白無垢に裲を着し、屠蘇を祝ふにも長柄の銚子を用ひ、おナガレ頂戴と稱して家來共が後の盃を頂くなどいふ樣な儀式があり、其の他にもいろいろ八釜しい典例があつたものですが、私の代と成ては間もなく御維新といふ非常の時勢に會しましたから、文明進歩の世の趨勢に鑑みまして、一切舊弊の慣例を破壊して了ひ、舊法によらずして新に法を立て、繁文に代ふるに簡易を以てしましたから、唯今では至極無雑作な生活を行つて居つて、昔の樣に貫還うでの儀式や極つた行事などはありません故、强つてお話し致すべき事もないが、併し折角の御來訪であるから、私共に於ける一年間の家事とでも云ふ樣な事をお噺し申しませう。

▲拜賀式と墓參

先づ元日の仕事から申上ると、此の日は一家揃つて早起致し、室に清新の空氣を迎へて、一同着席し、そこで家族共より年頭の祝詞を受け、私よりも之に挨拶を與へて、芽出度雜煮を祝ひ、其が濟むと私は直ぐ支度して御所へ拜賀に參ります。

御所を下ると、直ちに四谷南寺町の戒行寺に加納家の墓詣りを致し、其より上野の東照宮に參拜し、其の方角に當る谷中天王寺の墓地を見舞ひ、其の足で下谷の廣德寺、之には私の實家である立花家の墓が御在ますから之に參詣を致し、次に德川家達公と慶喜公の兩邸に推參して年賀を申上る、是は私共の舊主で御在ますれば、聊か舊恩を記する一端と存じ年々缺かしたことは御在ません、私が元日年始に參る所は唯だ是丈で此外には何處へも參りません。

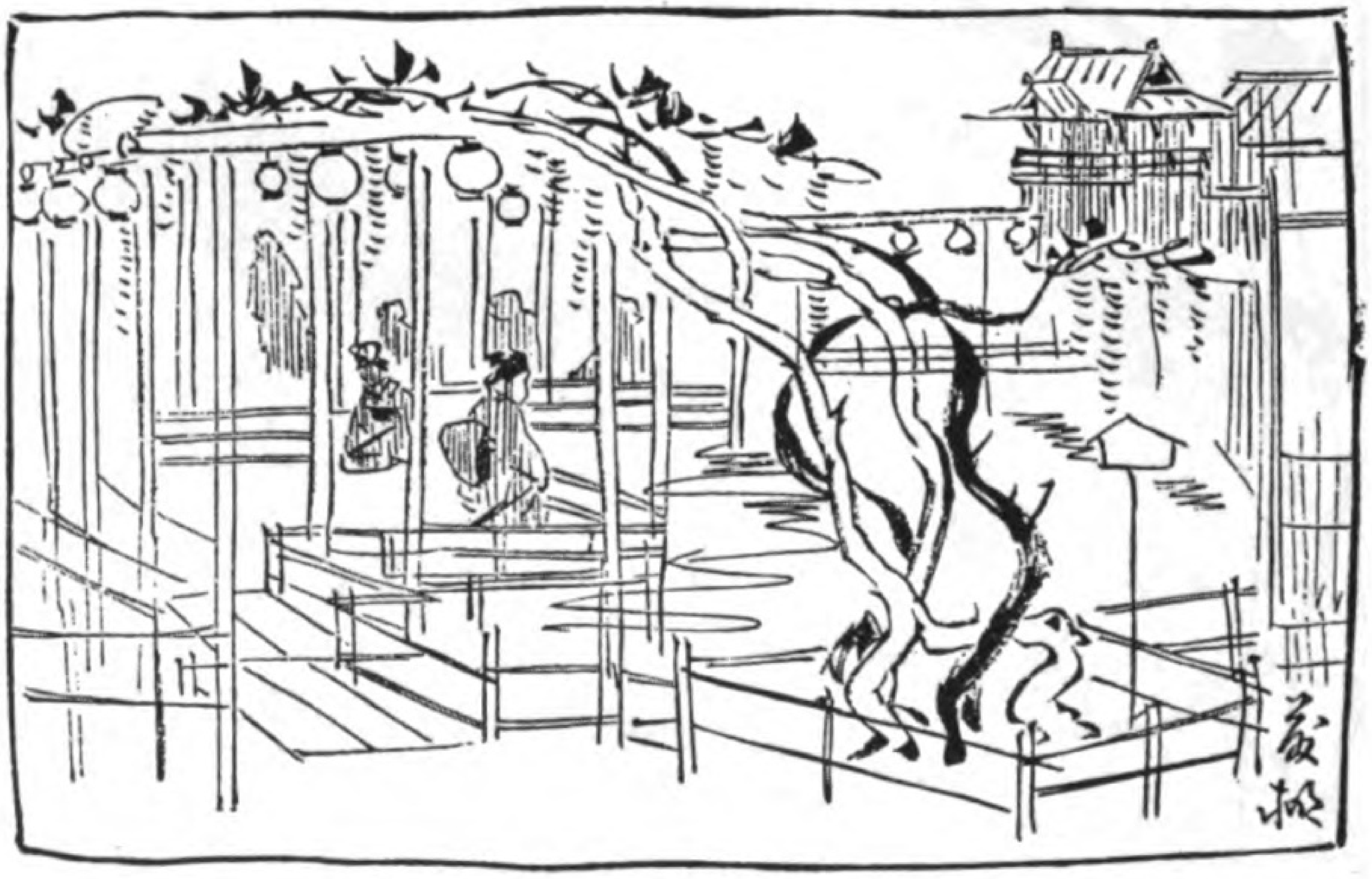
墓參の事を申上た序に申しますが、私の家は元と日蓮宗で、四谷南寺町の戒行寺が先祖代々の菩提所で御在ましたが、明治六年神道に改宗致したに就き、新たに谷中天王寺に墓地を求めました、――幼少で亡つた長男が之に葬つて御在ます、墓地の廣さは二坪で御在ますが、之に石垣、鐵柵を廻し、内部は石室風に致し、勿論火葬でありますから、累代の者が總て之に納められるやうにしてあります、左様、五十人位は這入るで御在ませう、而して中央に大きな石碑を唯一つ立て、之に先祖累代の墓と刻けて御在ますが、即ち是は私以後の先祖累代で御在ます、それから石碑の右側面には自分以下主人の名前を列記し、左側面には夫人及子供の名前を記して參るつもりで御在ます、斯樣に共同墓地に致しますれば、貴重なる帝國の地を塞がずに濟み、且つ家族の者も死して尚ほ居を同じうするの樂があるので御在ます。

## ▲先祖祭

先祖祭も私共では一人々々別々に行ひませんで、一定の日に一纏めにして合祭致します、初め八月十七日は今より六代前の久道公――の忌日で御在ますから、此の日を以て先祖祭の日と定め、久道公はじめ累代の靈を祭ることにしてあります、是も神道式に據て、神官を招じ、供物を献げ、祝詞を上げて、最も鄭重に執行ひます。

## ▲園遊會

それから私共では年に二回、村内の統一と輯睦を計る一助にもと存じ、園遊會の樣な事を致します、一を野遊會といひ、一を漁遊會と名付てあります、私共では到底立派な事は出來ませんから、園遊會とは言はず野遊會と言て居ります、此の折は私共の此の庭を會場とし、村内の役場員や、村會議員、學校教師、大森停車場の驛員などを招待して、酒食を饗し、快く醉ふて貰ふので御在ます、左樣、人數は四十人位のものでせうが、是等の人が皆な喜びを以て集り胸襟を開いて談笑を縱にして與れまする故、非常に愉快で御在ます。當日會場には天幕を三個所に設け、其の一を蕎麥の店に充て、一を團子と稻荷壽司、他の一つを蒟蒻の煮込と酒の燗を致す所にして御在ます、元とは芋汁會と稱へて村の者を坐敷に招じて酒に芋汁を御馳走したものでしたが、どうも履物を脫いて疊の上に畏るとなると、窮屈を感ずると見ねて、酒の飲み方が少い、然るに庭前で致すことに成りましてからは、酒も餘計に飲んで十分に歡を盡して與れますので、大きに私共に於ても心持が好いので御在ます、デ、一度此の野遊會を致せば次回は漁遊會と申して、此の前濱に數艘の船を浮べ酒に握飯位を携へて行て、肴には海上で漁した鮮魚を料理して、其を舟中で村の人と共に食するといふことにしてありますが、是も仲々愉快で御在ます。



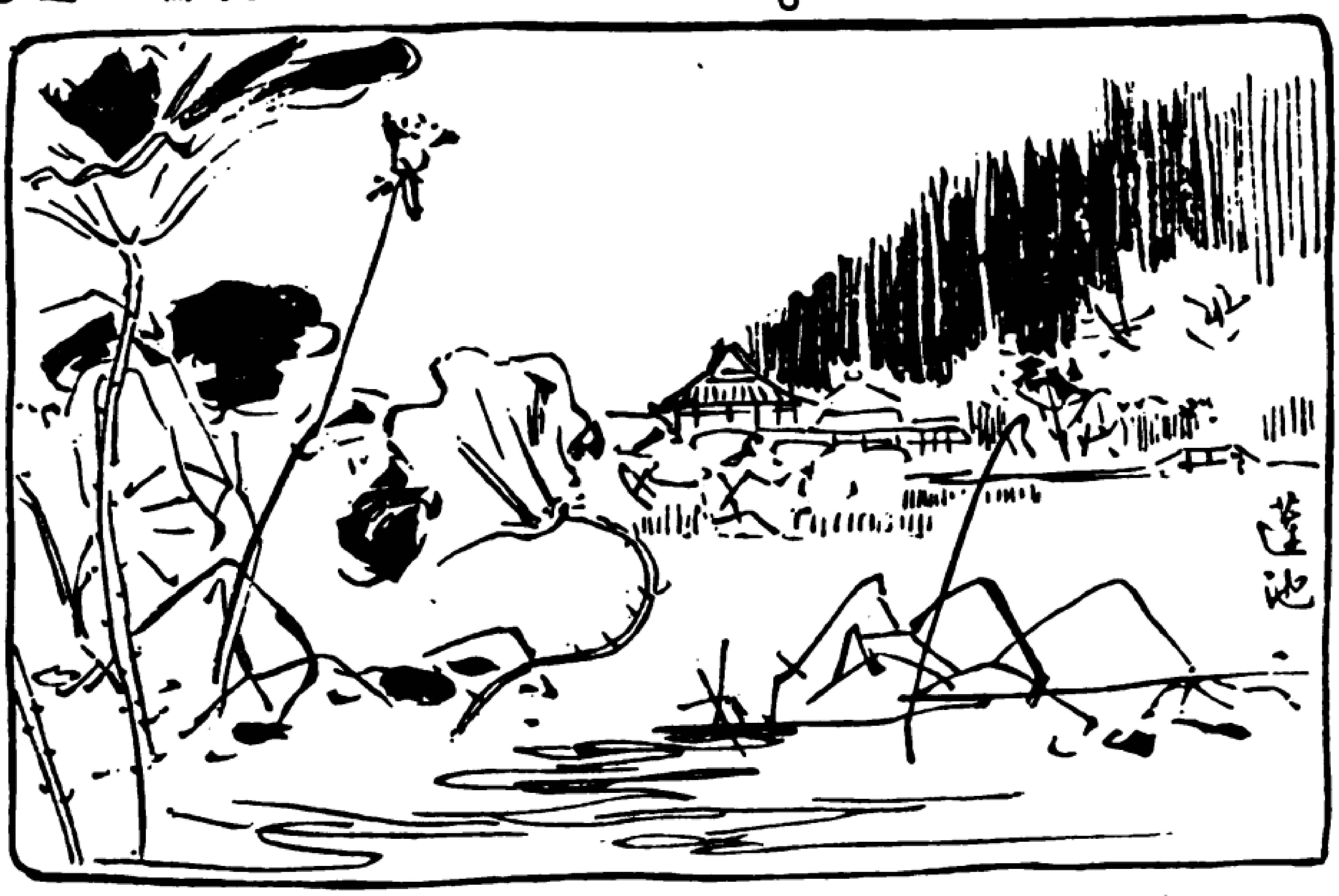
## ▲行啓紀念日

次は十一月十三日の行啓紀念日で御在ます此日は當家に無上の光榮を添へた尊い日でありますから、永く此の榮譽を記念したいと存じ、當日は親族知巳を集めて、祝宴を催すことに致してあります、其は一昨年十一月十三日の事、皇后陛下が八景園へ行啓遊ばした御序を以て、恐多くも弊邸へ御立寄の御沙汰を蒙りまして、此の庭に御椅子を置かれ　望遠鏡で海を御覧遊ばしながら

種々と御言葉を頂戴し、尙ほ子供共にまで拜謁を賜り、凡そ四十分程御休憩に成つて御還啓遊ばしましたが、實に難有いことで、お掛を辱うした椅子は直ぐ箱へ入れ粹膳舘に致して大切に保存してあります、又た其の御場所は、石で圍ひ大理石の碑を立て、文字は實家の兄(立花種恭子)が認め、永く此の榮譽を紀念することに致しました、尙ほ今年の十一月十三日には閑院內親王殿下の御成を辱うするといふ難有い內命を蒙つて居りますので、更に新しい光榮を添へる譯で、誠に當家に取つては此上もない面目と心得ます。

## ▲遊山と散歩

それから正月は學校の休みの內に一度、丁度松の內で東京の市中が賑かでもありますから、之を機として家族全體、子供六人に私共夫婦、下男下婢に至るまで、但し一人の留守番丈を殘して、餘は殘らず連れて遊びに出掛るので御在ます、此の遊びの目的は中ば見るにあり、中ば喰べるに在りますから、先づ大抵は子供の喜ぶ淺草へ參る事にしてある、而して玉乘も見る、パノラマも見る、花屋敷へも水族館へも珍世界へも這入る、又は池の鯉に麩を投げたり、觀音の鳩に豆を與へたりして、十分に子供達の目を慰めた上、喜玉庵に立寄つて蕎麥をタラフク喰べさせて、口腹を喜ばせ、十分に一日の歡を盡して歸宅致すので御在ます。




尙ほ暮の休みの內にも一日子供を連れて郊外散歩に出る、それから舊暦三月三四日の鹽干狩には子供達を二三艘の船に乘せて遊ばせます、子供に對しては先づ此位のものですが、悴達は此の夏の暑中休暇には鎌倉地方に修學旅行を試み、長距離游泳に優等を取つた相です。

## ▲獨立的修學旅行

修學旅行と申しても、私の言ふのは學校の先生の監督を離れた獨立的のもので、兄弟といふものか親友といふものかが、連立つて、自分達の欲する所に行き、思ふが儘に自由の研究を遂げて來るのを謂ふのです。

學校の監督の下に團隊で行つては、總体の經費は分つても汽車賃が幾干掛つて、宿賃が幾々といふ樣な細かしい事は分らず、隨つて見聞より得る智識も一定の範圍に止つて居りますから、私は寧ろ此の獨立的修學旅行を奬勵するので御在ます、世の諺にも可愛い子には旅をさせろといふてありますが、確かに旅行は子供の爲に善い教育と思ひます。

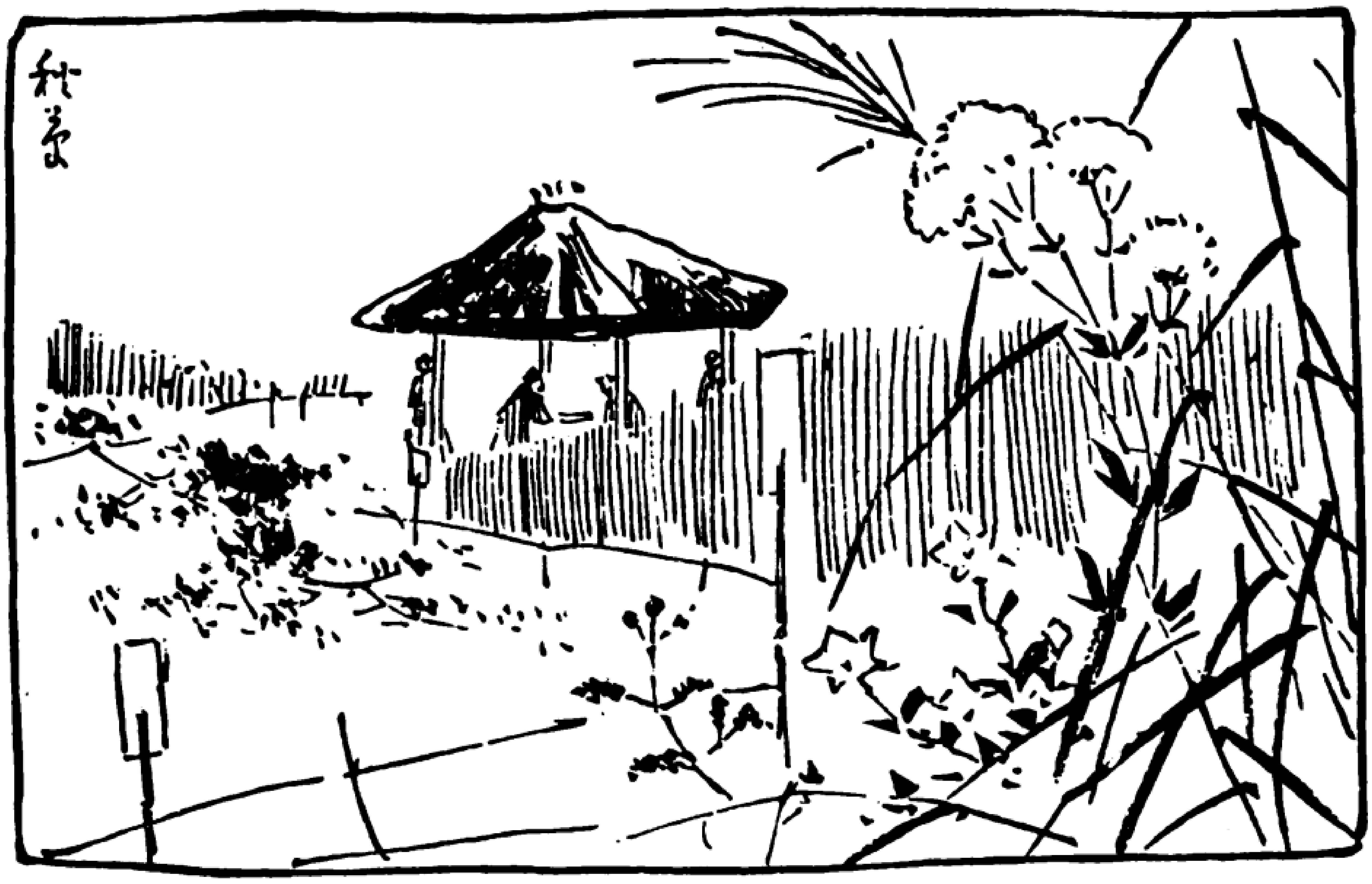
私は此の旅を男子にのみ限らず、女子にも應用して來年からは家の爲

達にも此の修學旅行を致させて見る積で御在ます、昔は箱入娘とか深窓に育つとかいふことを以て女子教育の理想としたものですが、是からの時勢にはそんな事では不可ません、女たりとも世界を跨に掛る位の元氣がなくてはなりません故、時々家庭の外に出して全く監督者なしに内地を旅行させて他日の用意と致し、旁々自己の知見を外界に向つて廣めるの必要があります、斯うへば世の親達は女の子の獨り旅行を案じて危險と思ふかもしれぬが、素より多少の危險の伴ふは覺悟の前である、汽船に乘つても汽罐が破裂すれば其迄である、汽車に乘ても衝突轉覆の厄にかゝれば是又負傷をするのであるから、道歷事までも案じるのは甚だ取越苦勞の過ぎたものと言はればなりません。

かういふ理由で是非共來年からは娘達に修學旅行を實行させやうと思ふて居りますが、其の折は豫め地理などを調べさせて置いて、銘々に旅費を持たしてやり、三日路位の所に其も獨立自由の行動を執つて旅行致させる積りで御座ます、是は必ず家庭教育に於て又た學校教育に於ての足らざる所を補ふて餘りあるのであるだらうと信じます。

## ▲家庭演說會

扨又た毎土曜日の晩には子供達が集つて家庭演說會なるものを開きます、是は家庭教育の一方側として子女に言語の使用を覺えさせる爲め、即ち思想感情の表章たる言語は大切なものであるから、是が練習を計る爲めに設けたもので、會數も既に百六十回からを重ねて居りますから、此頃は大分効能が見えて來た樣ですが、何しろ子供の事で智識が幼稚であるから、別段大議論も出でず、其の進步は甚だ遲々としたものでありますが、併し是によりて多少の効果のある事は確に認め得らるゝので御ます。



## ▲運動場

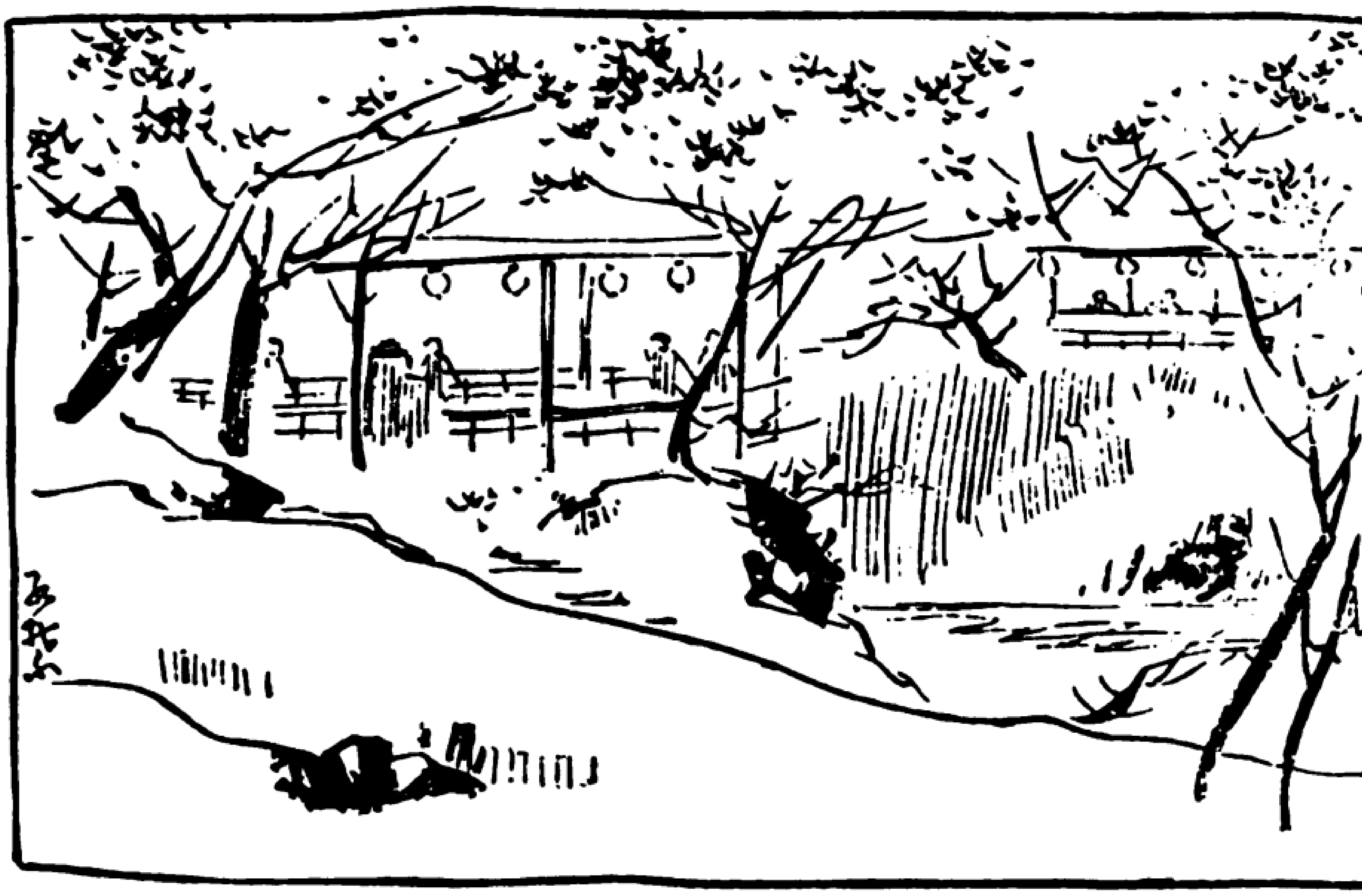
私は又た村内子弟の躰育に資する目的で後園の畑地千二百坪を潰して運動場を拵へ、今年の二月より公開致しました、之には種々必要なる運動器械を設け、又た棍棒、啞鈴、球竿等の躰操用具を初め、獨樂、羽子板、紙鳶等の遊戯用具までをも備へて、之を入新井村有志運動會と名付け、會員組織にして男女を問はず入場を許し、會員は入會金三十錢の外に毎月會費として三十錢——兄弟二人なれば第二者を二十錢に、三人なればその第三者は十錢を納め、又會員でなくとも多少の寄附をなすものは誰でも入場せしむるといふ規定で、事務所を當邸内に置き、

長男が其の委員長と成つて、會費の集金其他の事務を執つて居ります、昨今會員の數は二百名以上に成て居りますが、日曜には伜の友達なぞが東京から遣て參りますので、仲々賑かで御在ます。

子爵は此の時日の暮れぬ内にと仰有つて記者を運動場に御案内下さいました、運動場はお邸の後丁度八景園に隣れる閑靜の丘上に在て、二十五間に五十間の面積を領し、平坦に地均をした上に、テニスコート、鐵棒、回轉鐙、遊動圓木、ブランコ、矢場といふ順序にいろいろの運動器械が設けられてあります。私の入場した時は丁度六七人の男學生が襯衣一枚の活潑の扮裝で交々鐵棒に吊下つて居り、テニスコートの上では丸髷の御婦人が少女を相手に羽子を突いて居られました。子爵は右手の空地を指されて、追て此處に銃劍術の道場を建てる心算であると言はれ、尚ほ語を續いて、諄々と體育の必要を説かれ、國民の体格を造る上に必要なる運動場を、全國の町内に少くとも一ヶ所づゝ設置して貰いたいものだと熱心に御話なさいました。

▲二季の慰勞金

扨て運動場を去つて元の應接室に戻り、再び席に着きますと、今度は夫人が代つてお話し下さいました。



私共では盆、暮の二季に雇人に慰勞として金員又は物品を遣はす事に極めて御在ます、其外女中共には年に三回程暇を與へて遊びに出します、春なれば花の咲く頃、秋なれば小春日和の餘り日の短く成らぬ内に一日の休暇を與へて保養を致させます時には皆な出て了つては御差閊であらうから一人丈居殘りませうと申出る者もありますけれど、それでは却て宜しくありませんから、一人殘らず出して遣ります、成程其の日は私が女中に代つて臺所働を致さねばなりませんから、忙しいには違ひありませんが、其の代り皆が歸て來てから、いろ〳〵面白い話をして呉れ、寢てまでも奥樣這麼事が御在ましたと愉快相に話掛けますので、其を聞くのが何より嬉しう御在ます。

▲月々の事

月々の行事などゝ申しますものは、多くは喰べます方の事許りで、昔の人に言はせますと、一日、十五日、廿八日には赤飯を炊くものであるの、甲子には茶飯を炊くものであるの、庚申には豆腐を煎つて子供に喰べさせるものであるの、毎日蕎麥を喰べると小遣錢に不自由をしないのなどゝ申して、いろんな事を致したもので御在ます、併し唯今では這麼事を馬鹿正直に守る必要は

なく、それに主人は奢侈じみた事は嫌ひで御在ますから、勿論舊習に據るの何のといふ譯ではありませんが、唯だ宅では時々變つた物を喰べて食味の單調を防ぐといふ衛生上の意味から致しまして、一日と十五日の兩日には赤飯を炊き、六十日目に一度づゝ廻つて來る甲子には茶飯を炊き、三十日には蕎麥を打つて喰べることに致してあります、其柄宅では五節句は致しませんが、十五夜と十三夜の兩日には形の通り團子を拵へて、神酒に薄、柿、栗、枝豆、絹被芋などゝ共に、之をお月様に上げると申して机に載せ、月見の筵を催すので御在ます、月々極つた事を申上れば先づ此の位のもので、此他には別段何も致しません。

## ▲日々の事

朝は四時にベルを鳴らして一同起出で、其より子供達は凡そ一時間程勉强致し、六時に朝の御膳を認めまして、直ぐに男の子供、是は二人共學習院に通ふて居りますが直ぐに出て行き、女の子供は華族女學校に通はせてありますが、是も髪を結ふと直ぐに包を抱へて出て行きます、大森から滊車に乘せて、新橋から學校までは歩かせることにして御在ます私は毎朝此の應接間と部屋の掃除を致し、それから庭へ出て鷄の世話を致します、主人が調物でもあつて家に居る時分には、女中の手傳をして勝手を働き、皆が出切て了ふと、女中達は縫仕事を始めたり、洗濯をしたり、私は菜園を見巡つて歩いて、其の日に入用の物を取らせるので御在ます、殊に茄子なぞは直に色が變りますから、何うしても其の日に取つた新しいのでなければ不可ませんので、毎日午前に一度づゝ菜園廻りを致す事にしてあります。

四時になりますと、子供達は學校より歸て參り、直ぐに運動場へ行て遊ぶので御座ます、其柄六時に夕食を頂き、食後は談話や唱歌で樂しく暮し、七時半より九時までは銘々が勉强を致し、九時になるとベルを鳴らして先づ子供達を息ませ、私は火の元や戸締を見廻つて十時に休むので御在ます、翌日も矢張り此通で毎日同じ事を繰返して居ります。

主人の家庭敎育は勉强よりも體育を尙ぶ方で御在ますから、運動はもう十分に致して居ります、其のお蔭で子供は皆な壯健で御在ますから、私も別に勉强を强いず、丈夫にさへ育つて吳れゝば何よりだと思ふて居ります。

記者は是等のお話を伺つて、晩餐の饗應に預り尙ほいろ〳〵と御夫婦より有益なるお話を承つたのでしたが、餘り長座になりますので難有く御禮を申述べ、お暇を告げたので御在ました。

## 西太后と老媼

淸國の西太后は本年七十歳の高齢に達せられ十一月には七十回の降誕祝賀式を行はせられるソヶで有るが此の祝賀式に際して西太后に祝意を表せんとて上京したる珍らしき一人の老媼が有ッた。

彼女は本年百十歳の高齢で陝西省西安の住民で有ッた過ぐる義和團の亂に皇帝は西太后と共に北京を落ち延び玉ひて鳳輦西安に着せし折柄此の老媼は兩人の息子に助けられて西安府の門外に鳳輦を奉迎した息子と云へば若さうに聞ゆるけれど當時兄は九十歳弟は八十八歳で有ッたが群集の中にかゝる高齢者ありと聴き玉ひし西太后は珍らしき事に思召して行在所に入らせ玉ふと同時に老媼を召して慰め玉ひ且つ様々の下賜品も有つた。

義和團の亂が平和になつて皇帝西太后と共に北京に歸らせ玉ふ時親しく老媼を召て機會も有らば必ず北京に來べしとの恩命が有ッたので今回西太后七十歳の御祝ひに遠路の所を厭はず兩人の息子に助けられて上京したのださうだが其の健康は尙中々達者な者で一見した所では六十ばかりの通常の老媼と異ならぬ風采だと云ふ事だ而して其年齢已でに七十歳に達して頗る心細き感を有し玉ふ西太后は何卒此の老媼にあやかりたい者だと云ふて痛く其上京を喜んで居られる

# 我家の小暦

白井俊子

久しく一部の人々によりて稱へられし家庭暦も、近來漸く世間の屬目する所となり往々實行されつゝあるを聞くは、誠に喜ばしき事といふべし。余も亦た嘗て之を定め置きたれば、今說明を附して之を畧記せん。

◎元旦、歳末　我が家にては一年の末日、送舊迎新の準備を整頓し終れる頃に至れば、家族相會して既往一ヶ年間の天恵を謝し、來るべき年の幸を祈りて寢に就く。時は十時を越ゆべからず、唯主人のみは十二時より一時に至る除夜祈念會に出席するを例とす。さてまた元旦は門松、注進繩、飾餅の如きは一切せず唯一竿の國旗を樹つるのみ、當日は一家早起して屋内を整頓し、後一同一室に會し其年の祝福を祈り、又一家一ヶ年間の行事に就て語り合ひ、後相共に第一餐の食卓に就くを例とす。

◎四季の睦　四季其折々家族親睦會を開く、大要左の如し。

「桃の日」（春）我が親戚に女兒あり、三月三日を以て行ふが故に、女兒なき我家は翌四日にこれを行ふ。敢へて内裡雛を飾るにあらず、たゞ嬰兒の從姉弟及び伯叔母を迎へて共に食事をなし、兒等には玩弄物を贈答して樂む、此日の主人役は主婦之に當る。

「菖蒲の日」（夏）五月五日にして略前記と同じ、されど主人役は嬰兒の名を以てし、家長之が補助たると舊慣によれる鯉幟等の如き親戚等より贈られしものあれば之を床に飾るのみ。

「菊の日」（秋）九月九日、此日は野外に散策して一日を樂しく遊び暮すなり、されど若し雨なりせば、普通とさまで異なるなしこれ蓋し前日即ち八日は嬰兒の誕辰なればなり。

「光の日」（冬）十二月廿五日にして即ち聖誕節これなり。此日親は子に、子は親に、其他同居者互に相知れざる樣聊かなる物品を贈答す、其物品は手製を最と

す。一家の小祝會、會堂の出席等云はでも哉。ヨリ貧しき同胞の爲めに應分の働きをなすも此日にして、時に嬰兒の名を以てすることあれども多くは匿名とす。

以上は四季一定せる睦びにして、臨時の會合の如きは食卓會議に於ける決議によりて實行するものにして、私暦にて規定せず。

◎兩親の紀念日　兩親永眠の日を紀念せんが爲に開く、されど普通一般のそれと稍趣きを異にし、所謂精進料理の如きを用ひず、且つ一家の和合を以て主とすこれ蓋し父の遺志によれる也。即ち左の如し。

「父の日」　四月一日にして、家長は一同に代りて本所押上の墓所に詣で、夕餐後家族と共に父に就て、さては其教訓に就て物語り、嚴かに祈禱を捧ぐるを常とし、家長必ず司會者たり。

「母の日」　二月十六日、墓所は百數十里外の郷里にあれば、寺院に金を贈るが例なり。其他父の日と多く異ならず、時には此日を以て慈善的行爲を爲すことあるべし。司會は主婦之を勤む。

我家の父及び母の日は寧ろ深く樂しく其日を送らんとを努む。されど「父まさば母のまさばと思ふ哉乳兒の笑顔を見るにつけても」とか「けふもまたありし其日の儘にして消へし日かげはかへらざりけり」などの詠をなすことあり。

◎誕生紀念日　家長は十月十九日、主婦は二月廿六日、嬰兒は九月八日なれば、此日は心許りの祝ひをなす。されど我が家の現今は、嬰兒の誕生日を以て主となし、撮影もなせば其身長躰量等を必ず計る、而して此日は紀念として書籍を求めて嬰兒に與ふるを以て習慣とす。若し土地を有せば紀念樹をなさんと欲すれども、今は之を爲す能はず、唯だ紀念として若干の金員を何等かの事業に寄附するか、慈善的の行爲を爲す而してまた、兒の獻身禮を受けたる日を以て

「潔めの日」　として聖別し、嚴肅なる集會を開き、兒父母は受禮當日の心を忘れざらん樣に勵まし合ひ、兒に對する互の勤めに就て祈る。時は五月八日なり。

同居者或は雇女の爲めにも其誕生日を紀念しやる。

されどこは家庭暦に加へず、何となれば彼等は出入するとあるものにして其日を一定し難ければなり。

◎結婚紀念日　十月廿七日にして、式日の嚴粛を想ひ、且つ夫妻當時の決心と心情とを忘れざらんが爲めに之を守る。必ずしも規定の式あるにあらず、時にして許さば野外に遊ぶともあり、友を招くともあり、只だ其折々の都合にまかす。されど多くは相携へて媒介者を訪問することを努む、蓋しこれ媒介者の最も喜ぶ所なるのみならずまた媒介者に對する一の義務なれば也。

◎四季の散策　屋外運動は我家憲の重きを措く所なれども、「汗顔得食」的の我が家なれば思ふ半も之を實行し得ぬぞ憾なる、されど強て四季一度づゝは之が實行を期す。而して出來得る丈簡易に之を爲すを努む。即ち左の如し

「花の曙」　春の日の詰朝、わりごを携へて人繁からぬ間に花を眺め、かくて菫菜咲く野に一と日を送る、日は四月中旬、家族都合よく、うらゝかなる日を以てす。

世の中にうれしきものは思ふどち
花見てくらす心なりけり（拾遺集）

「青葉陰」　夏の日、流れの邊、森の木陰、涼風に膚を托して苦熱を拂ひつゝ樂む。時には海濱の知己を訪ふとあり。多くは八月中旬とす。所謂避暑は、特別の事情あるにあらされば、せざるが我か父の遺訓なり

たちよれば涼しかりけりみつ鳥の
青葉の山のまつのゆふ風（新勅撰集）

「紅葉狩」　名所などはあらでもよし、唯だ秋の日に折を見て郊外に連立ち遠く近く紅葉を眺む、若し出來得べくば汽車に乗りて稍遠く遊び、茸狩などをなすもよし。言ふ迄もなく家族相伴ふ、左の歌の如き憾なからん爲に。

染てけりもみぢしにけり山里に
ねだくぞ今日は獨きにける（後拾遺集）

「雪の朝」　外出はせず、白妙の雪、庭の小枝にかゝれるを、共に眺めて相樂む。こは冬のうち雪降りし日

と一家の都合によりて定む、左の如き心もて。

眺めやるこゝろの道もたどりけり
千里の外の雪のあけぼの(玄玉集)

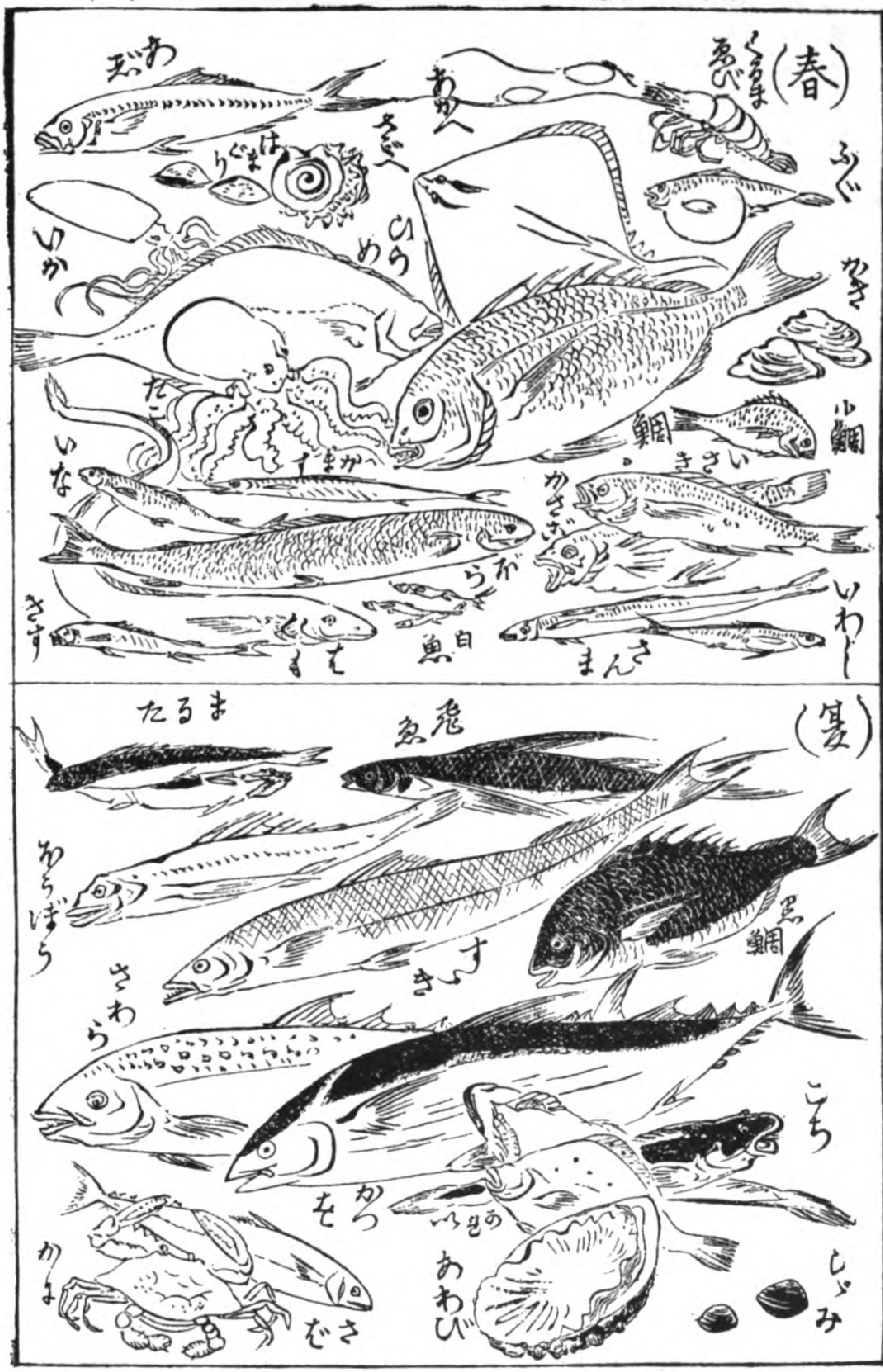
◎就學紀念　我家にては卒業祝をなさず。たゞ小中大の學校に入れる日を紀念するのみ。これ深き理由とてあるにあらず、我が家憲は兒等をして卒業證書を得んが爲めに學ばしむるにあらず、たゞ其者の有爲の人物となり、「人」として、此世に立ち得るに至らんことを欲し、學に就るは其門に入りたるなれば也。

◎就職紀念　目的を立て既修特意の才學を以て一事業を創む、其當時の苦心、希望決心これ必ず顧みるべきもの日夜其事に勵精する一の動機となるものなれば此日を聖別す。

以上は小き我家の一私曆の梗概なるが、若し家庭改良に心ある人の、眞面目なる批評を得、更に完きものを製するを得ば單り我が一家の幸福のみにあらず。(完)

## 麗日

心なき草木も今此時と折を得顔に生ひ榮へたる彌生の春の中頃です、啼く鶯や、飛ぶ蝶々に促がされて究屈な學校の寄宿舍を出て見ました、野には春色みち〳〵て今を盛りと咲きほこる、菫、蒲公英、蓮花草、麥は青々として一段の艶を增し、黄金色なる菜種の花、井手の小川を流るゝ水も又悠々緩として自然に平和の趣を作り、あちこちの森蔭に淡すりとぼかしたやうな桃、櫻、遙か向ふの山々には薄絹のやうな霞かゝりて、畫も及ばぬ好景色、何ともいひ樣のない麗かな心地がしました、實に今は一年中の好時節、夏の納涼も秋の月見も將た又冬の雪見もどうして〳〵及びませう。野山の眺めは春の日に限ります、告天子は空高く舞ひ上りては面白く囀へり、風ははんのりと暖かに、さながら綿もて包むやう。又柔うかな茵を敷いて心地よく臥せる樣、一寸散歩に出た身なから、歸るそらはありません。それゆゑつい〳〵我識ず一と足、一と足と前すゝみて、いつしか十二社の森の近くまでまいりました。これはあまり遠くまでと心づいて、もう歸らうと思ひながら偶と向ふを見ますと小さな女の子が唯一人畔道に何かして居ますから、近寄つて見ると、矢張春は樂しいもの懷かしいもの、遉が女の子は優しいもの、菫だの蒲公英だのを摘みながら小さな聲で誰に敎はつたともなく君が代の唱歌を唄つて居りました。嗚呼無心の小女よ、汝が現在は眞に自然の寵兒なるぞよ。


春
くるまゑび
ふぐ
かき
小鯛
いさき
かさご
いわし
さんま
白魚
はまぐり
さゞへ
ひらめ
いか
たこ
いな
ぼら
きす
夏
まるた
すゞき
黒鯛
さわら
こち
かつを
あわび
しゞみ

# 四季の庖厨（魚の季節）

▲鯛——三四月頃漁するを櫻鯛或は花見鯛と稱して殊に賞翫す、用法は刺身、吸物、膾、燒物。

▲黒鯛——夏季を以て旬とす、この用法は刺身、煮つけ、あらひ、付燒。

▲かつを——四五月頃漁するものを初鰹魚と稱して味尤も美なり、用法は刺身、吸物、燒物、葛餡かけすき燒、てつぽうあえ。

▲鯖——六七月頃水面に產卵す、殊に夏秋の頃漁するを秋鯖と稱して美味なり、用法刺身、味噌煮、鹽燒、酢びたし。

▲そうだ鰹魚——秋季の頃多く漁す、用法は鹽燒、酢煎り、せんば煮等なり。

▲鰆（さはら）——五六月の頃内海に來りて產卵するを以て其節捕獲す、刺身、照燒等よしとす。

▲鰺（あぢ）——六七月頃を旬とす、用法は鹽燒、煮物、三杯酢。

▲鱸（すゝき）——春夏の頃を以て旬とす味噌すいもの、味噌づけ燒物、生酢。

▲いさき——秋夏の頃多く漁す、用法は鹽燒をよしとす。

▲むつ——この魚は二三月の頃產卵してこの頃を尤も美味とす用法は煮付、鹽燒、すり身。

▲こち（牛尾魚）——この魚は五六月頃產卵して周年漁すると雖も殊に夏季を美味とす、鐵砲あえ、鹽燒、あらひ、ぬたなます、田樂、つけ燒。

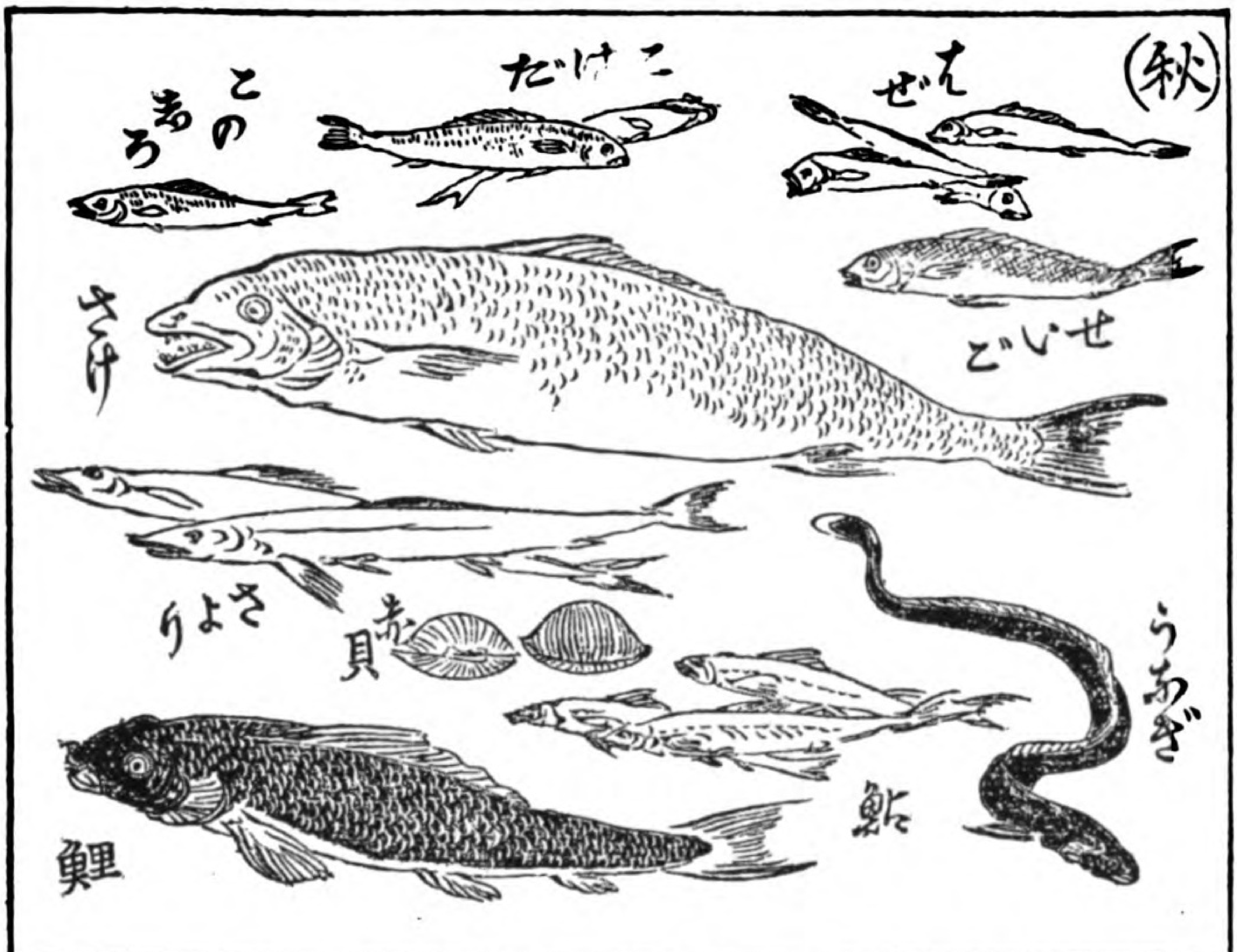
▲ほうぼう（魴鮄）——產卵は六月頃にして漁季は三四月頃とす鹽燒、つけ燒、吸物。

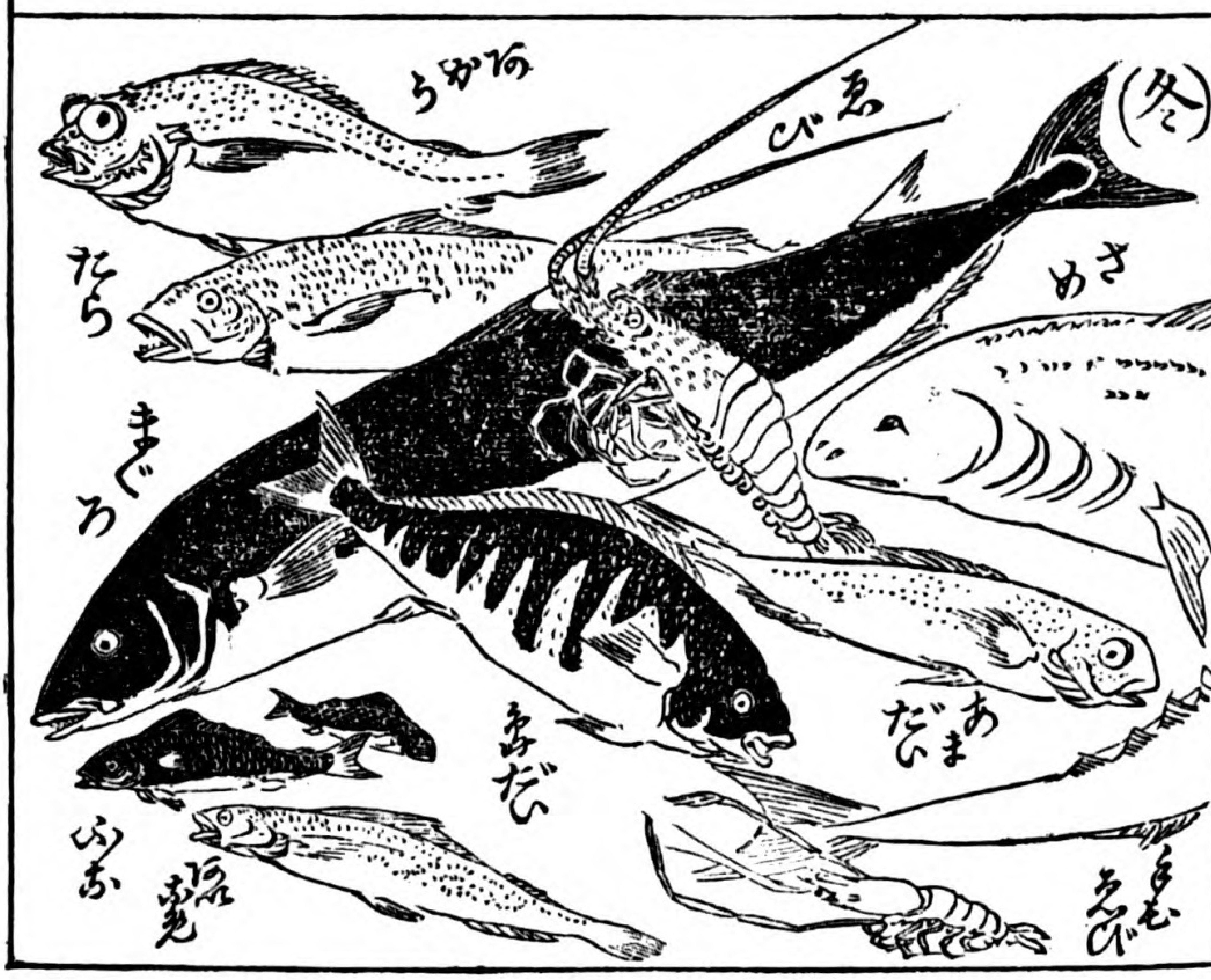
▲あんこう——これは冬月漁するを眞味とす、味噌づけ粕づけ、吸物等なり。

▲いわし（鰯）——この魚は周年漁す、されど秋期漁するものを佳味とす、鹽燒、三杯酢、鹽燒。

▲あなご——種類多し、用法は蒲燒、田樂、鐵炮あへ、膾、あんかけ、味噌煮。

▲このしろ——秋より翌春に至る間多く漁す、用法は三杯酢、天麩羅、鹽燒。


秋
はぜ
こはだ
このしろ
さけ
せいご
さより
赤貝
うなぎ
鮎
鯉


冬
ゑび
たら
さめ
まぐろ
あまだい

# 四季の庖厨（魚の季節）

▲さんま――外洋に産して九月十月の頃に産卵の爲めに、沿岸に來るを捕獲す用法は燒物、大根共に味噌づけ。

▲さより（針魚）――春多く漁す、用法は刺身、つけ燒、合せ燒、ぬたなます。

▲飛魚――五六月頃漁す用法は擂燒、つけ燒、鰻燒等とす。

▲比目魚（ひらめ）――周年漁すれども春を旬とす用法は、刺身、煮物。

▲かます――七八月頃の産卵にて八九月頃漁す用法煮物、擂やき、つけ燒。

▲鯉（こひ）――周年漁すれど季節は夏の物なりこれ乳を出す故産婦の滋養藥なり用法はあらひ、濃汁。

▲鮒（ふな）――霜月に漁するものを紅葉鮒とす、用法は甘露煮、雀燒。

▲赤がひ――夏秋の頃を以て産卵の季とす。用法はなます、三杯酢。

▲鳥かひ――一月より九月頃まで漁す、用法は天麩羅、三杯酢、吸物等なり。

▲かき――夏秋の頃産卵す、而して孕卵の季は毒あり食すべからず用法はなます、吸物。

▲くるまゑび――季節は周年漁す用法は天麩羅とつけ燒。

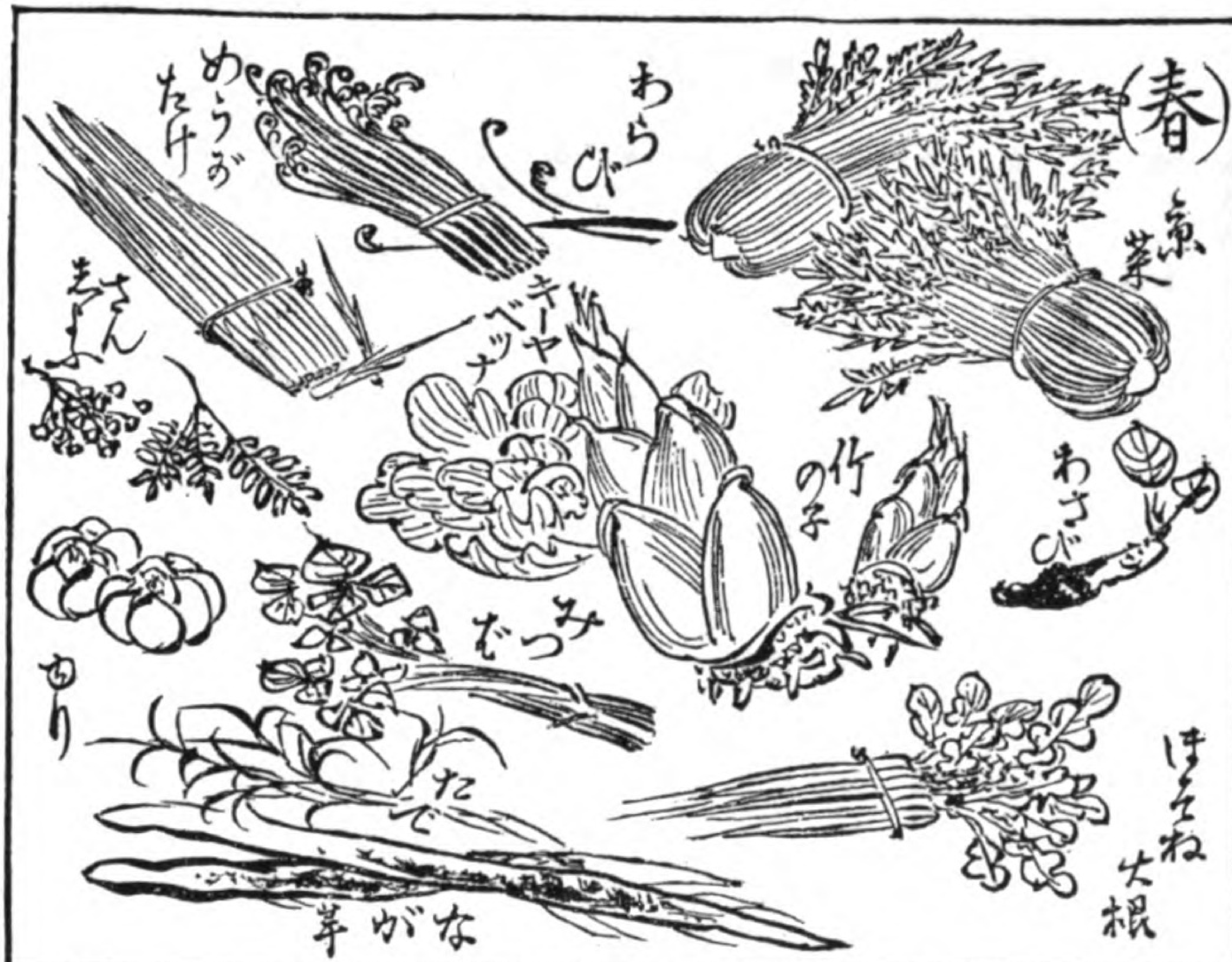
▲はまぐり――夏秋の頃産卵す、用法は潮汁、燒物。

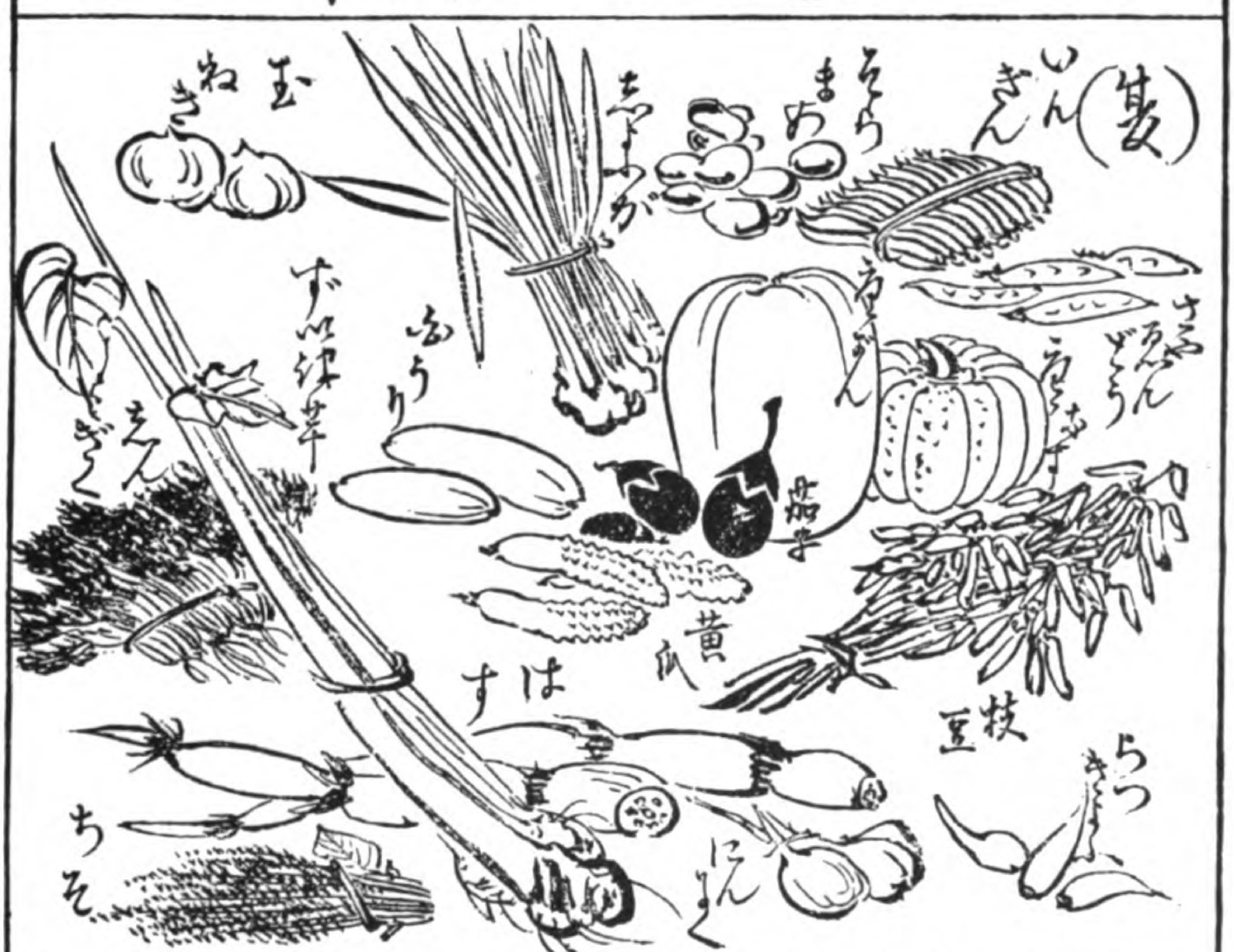
▲なまこ――春季を旬とす、其干したるもの海鼠と稱す用法は三杯酢。

▲やりいか――五月頃より九月頃までをよしとす、用法は木の芽あへ、うま煮。

▲いゝ鮹――一月より二三月頃漁す、用法鐵砲あへ、煮つけ。

▲章魚（たこ）――四月十月頃まで漁す、用法は、三杯酢、ふくら煮、櫻煮等とす。


(春)
京菜
わらび
キャベツ
竹の子
わさび
たで
なが芋


(夏)
いんげん
そらまめ
玉ねぎ
茄子
黄瓜
枝豆
はす
にんにく
ちそ

# 四季の庖厨　（野菜の季節）

▲莢豌豆（さやゑんどう）――柔らかなるが故に未熟の内摘みて食料にす、用法は靑煮揚物。

▲隱げん豆（ゐんげん）――其種類種々あり用法は煮物、製餡、きんとん。

▲すいき芋――專ら其莖を取りて食用に供す、用法は膾。

▲薯蕷（ながいも）――ながいもと、つくね芋との別あり佛手薯は其形狀手の掌に似て多くとろゝ汁の原料に供す又ながいもは料理用として必要なる蔬菜なり用法は煮物、とろゝ汁。

▲慈姑（くわい）――二種ありその質堅くして苦味を帶ぶものあり又靑色にして其質やゝ甘美にして柔かく共に用法は煮物、あげ物。

▲百合（ゆり）――頗る種類多しといへども、食用に供するものは鬼百合と、姬百合の二種にして近來天蓋百合を改良せるものに過ぎず、姬百合は少しく苦味あるものなり用法は煮物、きんとん。

▲萵苣（ちさ）――靑色と紫黑色を帶ぶるものあり其柔かきは紫黑色にして其莖の上部を取り、皮を剝ぎ細かに刻み、三杯酢につくる。用法は刺身の盛合せ、ひたし物。

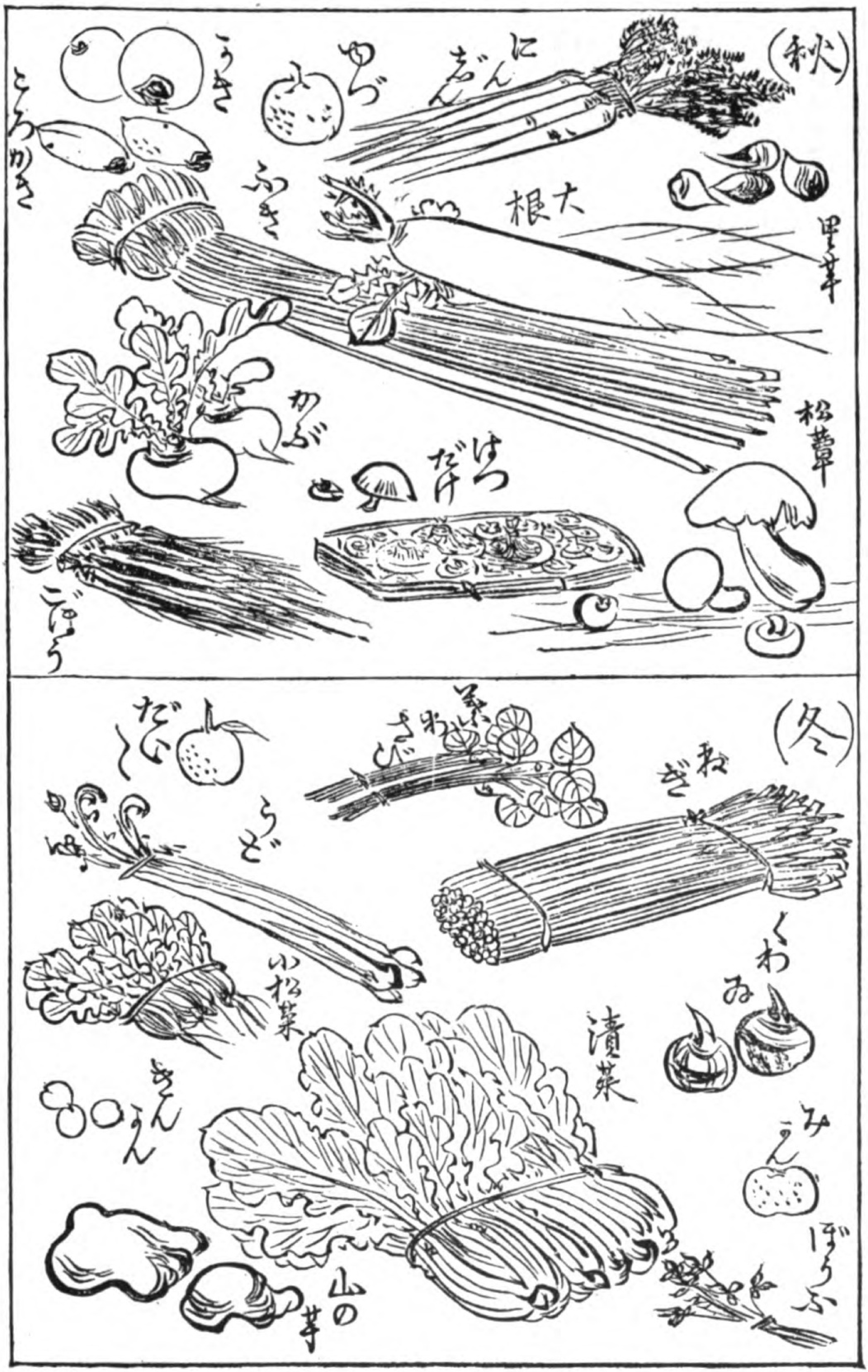
▲しゆんぎく――二種あり一は葉の形小さくして香氣頗る多く他は葉の形大にして香味やゝ淡く又朝鮮しゆんぎくと稱するものは大葉なるものなり用法ひたし物。

▲わさび――小根を食するものにて且つ辛味を含有するものなる故に葉形共に葱に似たり、用法はぬた藥味。

▲みつば――四季もやしを以て栽培する故常に絕ゆる事なし、浸物、吸物、揚物。

▲菠薐菜（ほうれん草）春蒔と秋蒔とあり、春蒔は五六月頃に採収し又秋蒔は九月頃より採收す、用法は浸し物、汁の實。

▲土當歸（うど）――自生物と、もやし作と兩樣あり、頗る香氣つよくして且つ甘味あり用法は煮物、あえ物、膾。


(秋)
にんじん
ゆづ
ふき
大根
かぶ
はつだけ
松茸
ごぼう
(冬)
わさび
だい〳〵
うど
ねぎ
小松菜
くわゐ
漬菜
きんかん
みかん
山の芋
ぼうふう

## 四季の庖厨（野菜の季節）

▲蕨（わらび）――山野に自生するものを採りて食用に供す用法は煮物、吸物。

▲ぜんまい――是又わらびに似たるものなり、用法は煮物。

▲款冬（ふき）――白ふき、赤ふき、靑ふきの別あり、水ぶきは苦味少きを以て上品とす用法煮物、味噌づけ。又つくだ煮にしたるを伽羅ぶきといひ、御茶づけの菜によし。

▲筍（たけのこ）――早生と晩生との別ありいづれも春月發生するものを以て佳とす、用法は煮物、あえ物。

▲南瓜（とうなす）――其上皮に皺多きものを縮緬南瓜と稱す、近頃洋種のもの種々あり。

▲西瓜（すいか）――日本種と洋種の二種あり、日本種は圓形にして小く肉は紅色、實は黒く、又洋種は楕圓形にして果皮は淡綠色を呈す肉は赤く甘美に富めり。

▲芥子（からし）――からし菜の種子を粉韲して是をねりたるものなり、香料として必要なり。

▲ゆづ――初夏花をひらき冬季に熟す、外皮に一種の芳香を有す用法吸口、砂糖漬。

▲さんせう――其芽、つぼみ、若實を煮食す、用法吸口、あえ物用。

▲紫蘇――靑じそ、赤じその二種あり共に香料となし、又多くは鹽漬とす。

▲せうが――一種の芳香あり、春月舊根より新芽を出す、輕快なる辛味を含む、用法は味噌づけ、藥味、

▲紫菜（のり）――香味を有するを以て海草中の嗜好品となす、用法は吸口、燒物。

▲ひじき――毎年二三月頃採集す、春月其芽を取り沸湯をそゝき乾燥したるものなり。

▲わかめ――本邦南方の海中に產す春季其若葉を採り淸水にて洗ひ、乾燥したるものなり、用法は煮物、膾、ぬたいろ〳〵あり。

# 料理十二ヶ月

鶴の屋

## 春の庖厨

### △汁

春季汁の材料は大根、蕗の薹、嫁菜、わらび、松露、うど、小鳥、焼ぶな、はまぐり、新若布。

○いてふ大根、蕗のとうこま〳〵。

○さゝがし午蒡、嫁菜こま〳〵。

○灰汁だし蕨、へがし百合根。

○根芋の筒切、胡麻じる。

○松露、ぶんどうもやし。

○あんとうの皮角切、款冬長ぎり。

○松露、よめ菜。

○さより片身そろし、若ぶきの葉こま〳〵。

○皮むき伊勢海老小口ぎり、青海苔あぶりはなし。

○赤貝へぎてわり根芋。

○蛤のむき身、嫁菜こま〳〵。

○鯉の筒ぎり、粉山椒、濃しようしる。

○焼小鮒、干ざんしよう。

○鴨うす切、せり。

○たゝき小鳥、獨活のせん。

○あられ豆腐つく〴〵し。

○つみいれ豆腐、新若布。

○しんじよ、大賽切、菜こま〳〵。

○あられ豆腐、青菜こま〳〵。

○焼豆腐大賽の目さゝがし午房。

### △吸物

吸物の材料はほうれん草、しゆんぎく、三ツ葉、焼のり、つぶ椎茸、鯛、小鳥、いか、筍の穗など。

○ほうれん草、うど小口切。

○きす、ゆで〻生、じゆん菜、胡椒。
○あいなめ切身ゆで〻三ツ葉、柚の花。
○灰汁出しわらびの穗、燒のり、すり生姜。
○白魚、細きり若布。
○烏賊をたんざくに切りゆがき、燒のりもみ、柚子。
○ゆで小海老、もみのり、燒豆腐。
○燒小年魚、根芋。
○鹽鱈をしほ出し、燒豆腐かく切り割ねき。
○よせ烏賊、つぶ推蕈、花柚。
○鯛の薄切、筍の穗、潮仕立。
○鳥薄切、松露、三ツ葉長ぎり、胡椒。

### △鱠

春の鱠の材料はあさり、鯛、白魚、たこ、あみ、赤貝などよし

○蛤蜊の身ゆがいて若布、うどの短冊、からし酢味噌
○揚豆腐皮ゆがいて、あさつき、糸ごんにやく酢味噌
○霜降鯛、いり酒、わさびの莖、酢につけ置(鯛を刺身につくり別に玉子をゆで白味ばかりをよく摺りすいのうにのせ指にて摺落し、鯛の身につくるなり)
○鰡平づくり、三ツ葉、からし酢。
○白魚、章魚小口ぎり、いり酒。
○さより細づくり、うどせんに生姜酢。
○年魚細づくり、からし酢味噌。
○くじらの白皮薄ぎり、蛤からし酢味噌。
○鮭、鹽引薄づくり、ザツとあぶり橙酢。
○赤貝へぎてゆで岩茸細くきり、からし敷味噌。
○貝のはしら、淺草海苔もみかけ、大根をろし酢。

### △刺身

春季の刺身の料はかれい、鯛、ぼら、などよし

○めぢか鰹、長手づくり、さゝれ獨活、山葵醤油。
鰈つくりて沸湯かけ、わさびじようゆ。
○赤貝長せん、鰡平づくり、わさひ醤油。
○鯛平づくり、白髮大根、わさび醤油。

○ぼら大づくり獨活せん、わさび醬油。

△煮物

○小芋薄味、獨活、湯煮丸ぎり、葛かけ、卸し生姜。
○百合の丸煮（生のまゝ逆さまに鍋かぶせ食鹽と味淋にて煮る凡二十分）。
○筍、じゆんさい、葛かけ、おろしわさび。
○糸こんにやく、白髮にんじん、淺草海苔もみかけ。
○蕨、燒豆腐花かつをかけ。
○菅牛房、靑海苔。
○獨活うま煮、こしよう散かけ。
○比目魚、あら煮、もやし生姜。
○鰈の葛煮あを海苔。
○蠣ゆがいて、嫁菜ゆで、葛かけ、すり生姜。

△燒物

春の燒物はさより、さわら、あゆ、いぼだい、はまぐりなどよし

○白燒鯛、きのめ醬油。
○さより白やき、酢醬油。
○さわらの照燒、鹽燒の款冬のとう。
○蓮根湯煮して味淋醬油つけ燒、胡椒ふりかけ。
○胡椒醬油に酒を加へてくわゐの付燒。
○百合根へがし胡椒醬油つけやき。
○比目魚の色つけ燒、こしようふりかけ（醬油に酒しほ加へてつけ燒にするなり）。
○飯だこのつけ燒、木の芽醬油。
○年魚の鹽燒、酢牛房。
○いぼ鯛、山椒醬油つけ燒。
○あいなめの木の芽醬油つけ燒、山いものでんがく。
○蛤のつけ燒、酢うど、（太きうどを一寸ほどに切りザッと湯煮して、唐がらし酢にてつける）。
○鯛の蠟やき（切片に淡じほをあて串にさしよく燒き卵のときたるに饂飩粉まぜ、とろ火にて五六ぺんつけ燒にし串をぬきて出す）。

### △和へ物

○くわゐにもやし茗荷に木くらげ、胡麻、木の芽みそ
○蕗に新ゑんどうゆで、薄味つけ、黒胡麻味噌。
○百合の根へがし、うど短冊、經山寺和へ。
○松露薄味つけて、木茸細くきりて胡椒味噌。
○若ちさゆでヽ酢味噌あへ。
○筍ゆでヽ亂切にして木の芽みそ。
○白魚をゆがきて辛あへ。
○海參に松露しろあへ、(干海鼠を湯煮し細くきりざつと醤油にて煮る、松露切りて之れも醤油にて煮、干ざんしようを摺り、豆腐と味噌を入れて濃くすりてあへる。)
○車海老小口切、蕗筍各ゆでヽ黒胡麻酢味噌。
○烏賊ゆがきて細作り、ひぢき莖を去りて白あえ。
○烏賊角に切りて木茸繊に切り唐がらし味噌。
○烏賊の足を油にてあげ、ねぎ味噌。
○赤貝へぎ湯をとをしてちよろぎざつと湯で、梅肉あえ、(梅肉は梅干の實を拔き裏ごしにし、味噌砂糖少し入れて摺る)。
○赤貝、百合の根さんしよう味噌。
○蛤ゆで、荒布せんに切り白胡麻みそ。
○鳥貝、わけぎからし味噌

### △浸し物

○若三ッ葉にはり〲大根生醤油(はり〲は干大根を薄く小口切にし、酒にひたし置て用ゆ)。
○田芹に獨活のせん酢醤油。
○たんぽヽは嫁菜に、つく〲し取まぜ生醤油。
○貝わり菜胡麻醤油。
○わらびに刻み松露、辛し醤油、(わらびの灰出したる穗ばかり切り、ザツとゆで、松露もゆでヽ)。
○ふきの若葉よくゆでヽこま〲白胡麻酢醤油。
○松菜にかやの實を生にて細ぎり生醤油。
○もやし根芋湯煮して竪に削り白胡麻醤油。
○嫁菜に筍の皮酢醤油(ゆでたる筍の尖りの柔らかき

皮を取りたてに切りて取合す)。
○葉にんじん五分切、胡麻あえ。

△田樂

○伊勢海老の皮を去りざつと湯がき油やき山しよう味噌でんかく。
○はも骨切、山椒味噌。
○いり蠣串ざし、ふきみそ。
○蛸の足小角切こしよう味噌でんがく。
○蛤ゆでゝやき山椒みそ。
○蕗の薹唐がらし味噌でんがく。

△揚げもの

○針魚片身おろし骨をすき天麩羅。
○いか白魚もどきに切り五分ほどつゝ寄せて天麩羅。
○蝦をつゝ切にして、貝の柱と一所に天麩羅。
○三ッ葉亂ぎり、精進あけ。
○小くわゐ、芽をつけて精進あげ。
○わらびをゆで、穗を長くきりて精進あげ。
○淺草のり、角切、片側衣つけて精進あけ。

△飯

○ゑびめし(海老をしほゆでして頭と皮とを去り飯の出來上らんとする際に入るべし)。
○くごめし(葉を熱湯に通し半日ほど水に浸しよく絞り細かに刻み燒鹽少し加へ焚きたてのめしへまぜるなり)。
○海苔めし(飯少し强わく焚きのりをよくあぶりもみて岡交せになす、交せる時鹽少し加へ香料添へて出す)。
○白魚めし(白魚に少し鹽ふり置き飯の火を引く頃打ち入れて焚き、昆布だしの漬汁にわさび靑のりをそふべし)。
○鯛めし(鯛の身を洗ひたる汁にて飯をたき出來上りし上にてかねて身をさいの目に切りたるものを上よりかけるべし漬汁は前と同じ)。

○鯛の子めし（鯛の子をざつと湯煮してふくろを去り水の中にてよく解き布に包みてもみばら〳〵となし飯の半煮の時入れて焚き上ぐるなりうす醤油のかけ汁に粉山椒）。

○干葉めし（大根の葉陰干にしたるをよくもみてくきを去りサッと湯をとをして引あげ鹽を加へ米にませてたく）。

○皂角めし（さいかち飯は葉を鹽ゆでにし細かに刻み飯を移す時交せる）。

○松露めし（松露を薄く切りて味をつけ炊立のめしにませる）。

○蛤めし（むき身を茹て味淋鹽にて味をつけ飯の煮たちたる時打込むなり）。

○筍めし（柔かき處ろを薄く切りだしにて味つけ岡ませにす）。

○うこぎめし（葉をゆで、水にさらし、細かに刻み鹽を加へ岡ませにす）。

○雉子めし（だしを煮出し少し鹽を加へてめしを炊き雉子の身ばかり薄く作りゆがき、めしの上に置きて出す、清汁に葱のみぢん胡椒などの香料を添ふ）

### △香の物

○小蕪の莖、鹽押し、刻み唐がらし。

○干大根五分切唐がらしきざみ三杯酢。

○細根大根三杯酢づけ。

○三月大根大阪切づけ。

○葉わさび三杯酢づけ。

○干大根あちやらづけ（干大根を一寸ほどに切り竪に四つ割に切り蜜豆腐のかす、昆布、鹽押茄子、小梅干等を加へ酒醤油にて酢は梅の酢を用ひて當座づけにつける尤も木茸唐がらしを入るなり）。

## 夏の庖厨

### △汁

夏季汁の材料は新そら豆、ゑんどう、さつ

まいも、あかえい、こち、根芋など尤もよし

○新芋、そら豆。

○割蕗、ゑんどう豆。

○さつまいも、大蓑、十六さゝげ。

○あかえいに冬瓜の面とり、胡しやう。

○泥鰌の骨ぬき、新牛房、さゝがし山椒。

○鯒の切味、茄子角切、口茗荷だけ。

○筍そぼろ、ときからし（一寸五分ほどに切り丸くくるくとまき一方を切離しのばしたてに細くきざみ湯煮して煮込みからしを離して）。

○いてう大根新芋。

○丸むき茄子、紫蘇こまぐ。

○うどんのつみ入れ、にんじんの葉細々。

○根芋たて割ゑんどう豆。

○若茄子、小口切あられ豆腐。

△吸物

○大鯵つゝぎり、うしほ立茗荷たけこまぐ。

○花小鯛つまみ菜、口芽うど、うしほ仕立（小鯛の頭を取り尾つけて三枚におろし骨を取り皮を内にし尾を立て竹串に巻き直ちに潮煮の汁にて煮る椀へ取る時串を抜取る）。

○あわびのそぼろ、潮仕立、生姜、おろし汁（あわびの周圍を取り中の身ばかりをサッと湯を通し細かく刻み潮立仕にして生姜の汁を落して出す）。

○鮎の片身おろし燒、新牛房のたゝき青唐がらし。

○海鰻の骨切、さやゑんどう、口青ざんしよう。

○海老のつみいれ、團扇茄子、口柚子（團扇茄子は小茄子をたてに莖まで切るなり）。

○鳥の摺り身、むすびこんぶ。

○すゞきの切身、とうがんのせん、口茗荷。

○新百合、海松、口針生姜。

○青つぎ早松茸、口柚子。

○塩くじら茗荷せん、團扇茄子

△膾（幷に刺身）

○洗ひ鯉、うど白髪、いり酒。
○眞名かつを平づくり、生姜酢木くらげ。
○水貝新生姜花づくり。
○鯛細づくり三杯酢、白瓜せん。
○鱸なげ作り、蓼味噌。
○鯵、背ごし胡瓜せん、蓼、紫蘇酢。
○ぼら細づくり、むしりゑび、わさび醤油。
○かつを大身づくり、山の芋すり醤油、胡瓜小口（じねんぢよを摺りて醤油に溶きたるなり）。
○さらしくじら牛房白髪、山椒酢味噌。

△煮物

○茄子に賽目いれて新牛房つゝ切。
○あなご薄葛煮、すり生姜。
○鳥肉むしりごんにやく、摺り柚子。
○芝海老、胡瓜あんかけ、卸し生姜。
○蛸薄切、茄子大賽、共煮。
○さわらに漬松茸あんかけ、柚子。
○虎魚すつぽん煮。
○鮑江の島煮。
○五位鷺午旁の錢切。
○あかえいにはじき豆あんかけ、とうがらし。
○冬瓜にはじき豆あんかけ、卸し生姜。
○茄子のいり出し。
○茶筅茄子に新午蒡あんかけ、ときがらし（小茄子を軸付に立にきり、筋を入れ湯煮してひねれば茶先のごとし）。
○筍輪切、さやゑんどう青煮。
○筍亂切、むすび荒布。
○蕗　きやら煮。
○蓮根大斜切、蕗の緑煮。

△焼物

○まながつを一と塩、鯛の付焼き。
○鮎のひらき蓼醤油つけやき。
○烏賊たんざく海膽やき。

○鯛松かさに切り青ざんしよう、醬油つけやき。
○鰻蒲焼、山葵醬油。
○あなご三枚におろし山椒醬油つけやき。
○大鰺鹽焼蓼酢。
○茄子の龜の甲焼
○零餘子串ざし醬油つけ焼
○新里芋ころもかつぎ生醬油つけやき
○茄子のすぎ焼(皮をむき輪切にし、串をうち、胡麻の油をつけ焼く味噌を甘加減に仕立、干ざんしようの皮を入れぬりて茄子は又やくなり)。

△浸し物

○ちさこまぎり酢醬油。
○ぜんまい芥子醬油。
○根芋うすく切りて、酢醬油すり胡麻。
○茗荷の子、立に二つ切り、胡麻酢醬油。
○莢いんげん、山椒醬油。
○蓮の若葉こまぎり、生姜醬油。

○芋莖胡麻酢醬油。
○茄子立てに薄切り、胡麻醬油。
○若胡瓜小口切、唐がらし醬油。

△あえ物

○きんこ輪切胡瓜もみて木の芽あえ。
○蛸小口薄切り黒胡麻味噌あえ。
○新百合ひじき金山寺あえ。
○生貝大賽切うにあえ。
○さやいんげん、茗荷の子青あえ。
○竹の子からしあえ。
○藤豆ゆでゝ木の芽あえ。
○さやえんげん白あえ。
○もみ瓜、芥子酢みそあえ。

△香の物

○夏蕪と茗荷だけきりませて鹽おし漬。
○茄子初夢づけ。

○らつきやう三ばい漬(らつきやう五升に鹽一升生姜の芽刻みこみて押づけにし三十日經ちて砂糖密につけるなり)。
○白瓜捨小舟。
○白瓜印籠づけ。
○胡瓜うづまきづけ。
○十六さゝげ粕づけ(あまり實の入りすぎぬ内に取り生のまゝ粕につけ込むなり)。
○茄子味噌づけ(蔕を去り生のまゝ二三日日に干し赤味噌につけ壓石を置くなり)。
○刀豆粕つけ。
○茄子鼈甲づけ。

△飯

○蓮めし(蓮のわかばを細かく刻みさつと湯を通しめしの炊き上りたる時交せるなり又蓮のはを如何様にもきざみて煮出二重ごしにし其汁へ鹽少し加へ炊くべし蓮の香氣あり)。

○しそ飯(靑しその葉をしほにて揉み水にて洗ひ絞りこまかに刻み飯の半ば煮へたる時打込み炊くなり)
○さといもめし。(新さと芋の子を程よく切り鹽ゆでにし米に交せ炊くなり)。
○そら豆飯(むきそら豆を飯の水少し增して米にまぜ炊き込むなり)。
○しゞみ飯(しゞみをゆでゝ身を取りよく洗ひ飯の火を引く時上に置く、鰹の煮汁醬油加減しておろし大根と葱の小口唐がらしの香料にて出す)。
○かつを飯。
○いんげん飯。

## 秋の庖厨

△汁

○はらゝご、ぬかご、豆腐のから。
○燒あゆ、根いも、に靑山椒。
○鯊の片身をろし、銀杏大根。

○身蜆、ちさ、こま〳〵。
○芝海老、茄子、ぎんなん、潰し松露。
○鮑の薄切り、青こんぶ短冊。
○零餘子、白髪午房。
○新里芋十六さゝげ。
○薩摩いも角切にさやゐんげんのせん。
○百合根、新午房さゝがし。
○かもうりそぼろ、茗荷の小口切。
○茄子の大賽の目、葉にんじんこま〳〵。
○初茸につまみ菜、口柚子（汁をうまく仕立つるには初茸を細かにし白水に浸しおき、よく洗いてすり、だしにてとろゝ位にのべ、すいのうにこして、しるに交せるなり。）
○松茸、冬瓜の大賽、口柚子

△吸物

○こち斜ぎり、十六さゝげ。
○黒鯛きり身、つぶ初茸、防風。
○蛸ひら〳〵きり、小茄子四ッ切、つぶ推茸。
○ゑそ骨切、松茸、へぎ柚。
○むきはまぐり、青こんぶ平ぎり。
○蝦のたゝき、冬瓜そぼろ、こま〳〵生姜。
○うづらのたゝき、摘み菜、口柚子。
○寄せぐわゐ、白髪午房、胡椒ふりかけ（寄慈姑とは皮をむきて葵卸にておろし胡椒ふり掛し葛粉と共に砂糖少し加へて擂盆にて摺り如何樣にも形どり飯にて蒸すなり）。
○結びかんぺやう、刀豆せん。

△鱠丼に刺身

○葛引鯛、蓮いも、おろし山葵、いり酒。
○いわし引さきて大根たんざく、生姜酢。
○鱚薄作り、くらげのせん二杯酢。
○ぼら薄作り、茗荷せん。辛子、酢味噌。
○鮃細づくり、紫蘇の穗、そろへて、山葵醤油。
○鯛細づくり、子を酢にてとき、おろし山葵。

○きはだまぐろ、もみ大根土佐醤油。
○針魚ほそづくり、貝のはしら、生姜酢。
○いなだを皮のまゝつくり、蓼酢。

## △煮物

○むし鰯あんかけ、卸し山葵。
○きんこ寄せ煮。
○蛸の柔か煮、自然薯うま煮。
○焼鮒煮びたし、新蓮根の鹽煮。
○さゝゑ薄切、腸ときてとも煮、こしよう撒かけ。
○はまぐり、時雨煮、紫蘇の實うま煮。
○いなだの酢煮、干ずいきの煮しめ。
○刀豆の照煮、柚子皮照煮。
○銀杏ひぢきよせ。
○鹽いりつけ松茸青海苔かけ。
○松茸湯煮、葛かけおろし柚子。
○燻茄子、ひじき。

## △焼物

○はも骨切、胡麻の油にてあげ、葱味噌かけ。
○小持鮎のいろ附焼、山の芋、唐がらし味噌つけやき（色つけやきとは醤油に酒しほ加へてうすくつけやく事）。
○かつを小賽切、花柚子すりませ、醤油つけ焼。
○あなご土藏やき（土藏やきとはさんしよう味噌をつけてやく事なり魚の上をぬる故にかく云ふなり其やき方は背より割きて中骨ぬき、みそをこめ紙にて胴を巻きてやくなり）。
○いなひらき、白焼、おろし生姜生醤油。
○きはだまぐろ傳法焼（葱の白根をせんに打ち炮烙に敷き火にかけて少しやけたる時鮪をさしみやうに作り上へ並べ、焼きて色の變りたる時かへし器物にとりて、したじこしらへ置きてかけて出すなり）。
○鯰利久焼（生醤油に粉山椒を交せて付焼にするなり）
○鴨すき焼、太煮のねぎ、焼唐がらし（かも、しぎの類。

つくりたまりにつけ置古く遣ひたる唐鍋を火の上に置、柚の皮をあと先におきて鍋のうへに右の鳥類を置くなり色變るほどにて食するなり)。

○うづら大根おろし。

## △あえ物

○身しゃみ、葉にんじん五分ぎり、山椒味噌あへ。

○赤貝へぎて、茗荷のせん、山葵味噌あへ。

○ゑび味噌あへ。

○さゝゑ細ぎり新蓮根亂ぎり、胡麻みそあへ。

○ずいき、はぢけ豆、胡麻酢あえ。

○小芋四ッ半に切り松茸の笠四ッ切、柚子味噌あへ。

○百合根、ぬかご、梅肉あへ。

○にんじんほろあへ。

○柿小口きり、茗荷ゆでゝ立きり、青味噌あへ。

○疊分、蛸の黒胡麻あへ、身しゃみ青あへ、松茸白あえ。

## △浸し物

○ぜんまい、芥子酢。

○藤豆黒胡麻あへ。

○水菜、芥子醤油。

○ちさ亂ぎり、生姜細ぎり、酢醤油。

○長芋せん湯煮して生醤油

○餘まきゐんぎん斜きり酢醤油。

○黄菊に花湯を通し唐がらし酢。

○茄子割きて焼きたるを、胡桃醤油。

○蓮いも小口切、酢醤油。

## △田樂

○あわび角切、さんしよ味噌。

○せいご尾頭とりて、唐がらし味噌。

## △揚げ物

○伊勢海老むき身、天麩羅。

○はも骨きり、ほそぎり。

○ひらめ、蒲鉾にして衣なし。

○鯒細ぎり天麩羅。
○鰶身たゝきよせて天麩羅。
○たなご三枚にをろして天麩羅。
○紫蘇の實の穗一本づゝ精進あげ。
○茄子皮むきあつ切り。
○生姜の根四つ割り、莖を一寸ほどつけ。
○百合根へがして三つほどづゝよせて。
○つぼみ松茸、立に薄ぎり、一ッづゝ。
○ぜんまいゆでゝ二寸ほどに切りよせて。
○藤豆すじを取り二ッ位づゝ以上精進あげ。

### △飯

○鱧めし（骨を去り薄く小口切りにしよく湯がき飯の火を引く時に上に並べむす香料は葱の小口切りおろし生姜添へる）。
○鰯めし（いわしの頭と腸と去り飯を炊く時釜の中へ逆にさし込みて焚き最早出來上らんとする時尾を以て引けば骨は悉く拔けるなり）。
○栗めし（栗の大きなるを上皮をむき器と火にて燒けばしぶ皮たやすく剝けるなりそれより二つに割り又は賽にきざみ飯の半ば煮へたる時上に置き火をたくべし、あまり煮へすぎては體さい惡し）。
○きばめし（十六さゝげを小口切りにし味りん醬油にて味つけをか交せにする）。
○松茸めし（米一升の中へ猪口二杯の酒と醬油入れて飯を炊き松茸を短册に切り味りんにて味をつけをかませになす）。
○初茸めし（莖を去り味淋にて味をつけをか交せになす）。
○むかごめし（是は通例むかごを鹽湯出にして入れるなり）。
○刀豆めし（飯の水加減を少し增し鹽を入れて炊き込むなり）。
○椎の實めし（ざつとゆでゝ皮を去り飯にしほ少し加へ共に炊き込むなり）。
○薩摩芋めし（皮をむき大賽の目に切り飯の半ば煮へ

たる時打込むなり鹽少し入れる)。

○五目めし(椎茸、きくらげ、こほりごんにやく、ほろ〳〵豆腐、あはび、ゑび、右細々にしてうす味つけめしへまぜる)。

○あられ粥(鱸又は鯛などの肉を摺り身にし少し柔らかに仕立粗らき金ずゐのうにて水の中に摺り落し霰の如くし白粥を少し柔らかめに炊き火を引く時入れて能くむらし器に盛るべし、清汁に香料を添へて出す)。

### △香の物

○瓜末なり、だるまづけ。

○かも瓜味噌づけ。

○紫蘇の實しほづけ。

○茄子からし漬。

○柿かす漬。

○山葵かす漬。

○生姜味噌づけ。

○午房味噌つけ。

## 冬の庖厨

### △汁

○燒白魚、干大根小口切り、つぶ椎茸。

○小鳥たゝき、干葉こま〳〵口柚子。

○赤貝へぎ、小芋輪切、芹細々。

○鰕ざこ、新ずいき、干さんしよう。

○燒こはだ、大根わぎり、口柚子。

○燒小餅、燒豆腐大賽切。

○小芋輪切、葉こま〳〵。

○とうの芋くし形、新ずゐきさきて。

○竹輪いもに、銀杏、解き芥子。

○百合根へぎてわかめこま〳〵、輪切唐からし。

○小蕪葉をつけて竪に切り、もやしうどたん冊。

○あられ豆腐、こま〳〵菜、納豆汁。

○ちよろぎ、葱の白根。

○銀杏大根、ほうれん草叩き切り。
○漬しめじ茸、竹輪豆腐。
○さつまいも、たゝき菜。

△吸物

○蝦くづし、鹽松茸、三ッ葉こま〳〵。
○金海鼠太切、もやしうど斜切り。
○鯛の骨付切り、蕗の薹こま〳〵。
○結びきすご、淺草のりもみて。
○烏賊のそぼろ、すゐせん寺のり。
○石がれいの亂切り、葱の五分切り。
○鴨薄切り、大こんたんざく松露。
○なめたけ、薄くず、花柚。
○すくひいも、もみ靑のり、こしよう。
○鯉の毛切り、寒松露輪切り。
○むき蛤ひじき、ちよろぎ。
○鹽だら切身、靑こんぶ結びて、口胡椒。

△鱠並に刺身及びあへ物

○海鼠小口切り、唐がらし細々大根卸にまぜ二はい酢
○鱠作りからし酢、うどせん。
○ばか貝の舌、蕗みそあへ。
○むき蛤、大根切ぼし、ごますみそ。
○鮪大賽切り湯を通し、おろしいも生醤油。
○燕鳥肉さきて、胡椒玉子酢。
○烏賊細作り、さより細作り、生姜酢。
○たなご背ごし、わり葱ゆでゝ、唐がらし酢。
○白魚湯通し、玉子みそあへ。
○鮭の平作り、はゞき海老、わさびいり酒。
○ぼらの細作り、大根たんざく、うにず。
○大根せん、串柿細引二杯酢。
○にんじん、百合根ごまみそあへ。
○とうの芋薄味つけ、ごまみそあへ。
○黒慈姑賽切り、天門冬たて切り、辛子酢みそ。
○百合根はなして、のり酢かけ。
○うど、蓮こん、靑味噌あへ。
○鍋山こんにやく、薄味付て、鴫みそあへ。

△煮物

○小鳥なんばん。
○きんこの煮付け、自然薯のしほやき。
○かしわ、こんにやく、ころ〳〵煮。

○鴨のたゝき、丸むきうど。
○さゞえの鹽煮、金かんうま煮。
○燒はせ柔らか煮、さゝがし大根の煮しめ。
○こち亂ぎり、すつぽん煮。
○干海老、大根芥煮。
○大鮒丸燒のまゝ、酒味噌煮。
○蒸雉子引さきて、あんかけ。
○鯛亂切り湯煮してだい〴〵ず。
○ちよろぎ煮付、松風くわゐ。
○荒布まき。
○蓮根、皮午蒡、あんかけ生姜。
○太牛蒡、山椒みそ煮。

## △燒　物

○大甘鯛三枚に卸し、味噌醤油つけ燒。
○鯛の味噌漬燒、唐煮のみかん。
○結びさより、鰤鹽やき。
○かますの薄鹽燒、天王寺蕪しぎやき。

○小鳥骨共たゝき、丸めて山椒醤油付やき。
○鰤糀漬燒、帛まき蕪。
○玉子厚燒、小串魚。
○一しほ生鮭、白ざけかけ。

## △田　樂

○いなだ短冊切り、唐がらしみそ。
○中太の牛蒡、山椒みそ。
○天王寺蕪、としようみそ（大なる蕪を柏子木に切り串にさし醤油一扁つけて焦げぬ程にやき油少し引き味噌つけるなり、醤油つけては火中へ通らぬなり）。

## △浸し物

○小松菜亂切り、芥子醤油。
○人參せん、銀杏小口、ごま醤油。
○芹の莖そろへ、柚子醤油。
○うど短冊、生栗の煮酢醤油。
○小松菜、胡桃こま〳〵生醤油。

○芋ずゐき、こまず醤油。
○ほうれん草、けしふりかけ薄醤油。
○壬生菜、けしふりかけ生醤油。
○ぶんどうもやし、黒ごま醤油。

## △飯

○小鳥めし、(何鳥にても毛を引細く叩き飯の半炊へたる時たゝきたる肉を打込みて又たきてむす、清汁に大根おろし、葱のみぢん胡椒の粉添へて出す)。
○ひしこめし、(竹べらにて骨を去り、飯の火を引く時に上に並べてむす清汁にて出す)。
○葱めし、(葱の白根ばかり細くせんに切りよくゆでゝ水をきり飯のふきあがる時上に置きふたしてむす)。又白ね細々にして始めより米に入れてたくもよし。
○かきめし、(蠣をよく洗ひ笊にあげ水を切り飯に少し鹽入れて强めに仕かけ煮へ立つ時かきを入れ飯をうつす時にそつと交せる、清汁におろし大根、揉み海苔、こま〴〵葱の香料を添へて出す)。
○信濃めし、(大根しらがの如く打て飯のふきあがる時上にならべふたをなし、うつす時まぜる清汁に葱山椒などの香料を添へて出す)。
○黄金めし。
○豆腐めし、(豆腐をつぶしゆでゝよくしぼり、薄醤油と酒しほにて甘きかげんに味をつけあとにて飯にませて食す)。

## △香の物

○人参、みそづけ。
○大根當座みそづけ。
○澤庵みそづけ。
○鹽おし茄子、みそづけ。
○蕪千枚漬。
○蕪から味漬。
○細根あちやら漬。
○大根蕪あさづけ。
○澤庵づけ。

(完)

# 四季の挿花

挿花は四季折々の植物美を室内に移して坐らに観る為のもの、兼て又た室内を装飾する為のもの、加之も日本特有の妙技とさへいふなれば、家庭に趣味てふものを尚ぶ姉妹等は、春蘭秋菊の折々に斯の技を試み玉ふこそよけれ。今さる方々の栞にまで、四季折々に生けるべき花を擧ぐれば、

（春）

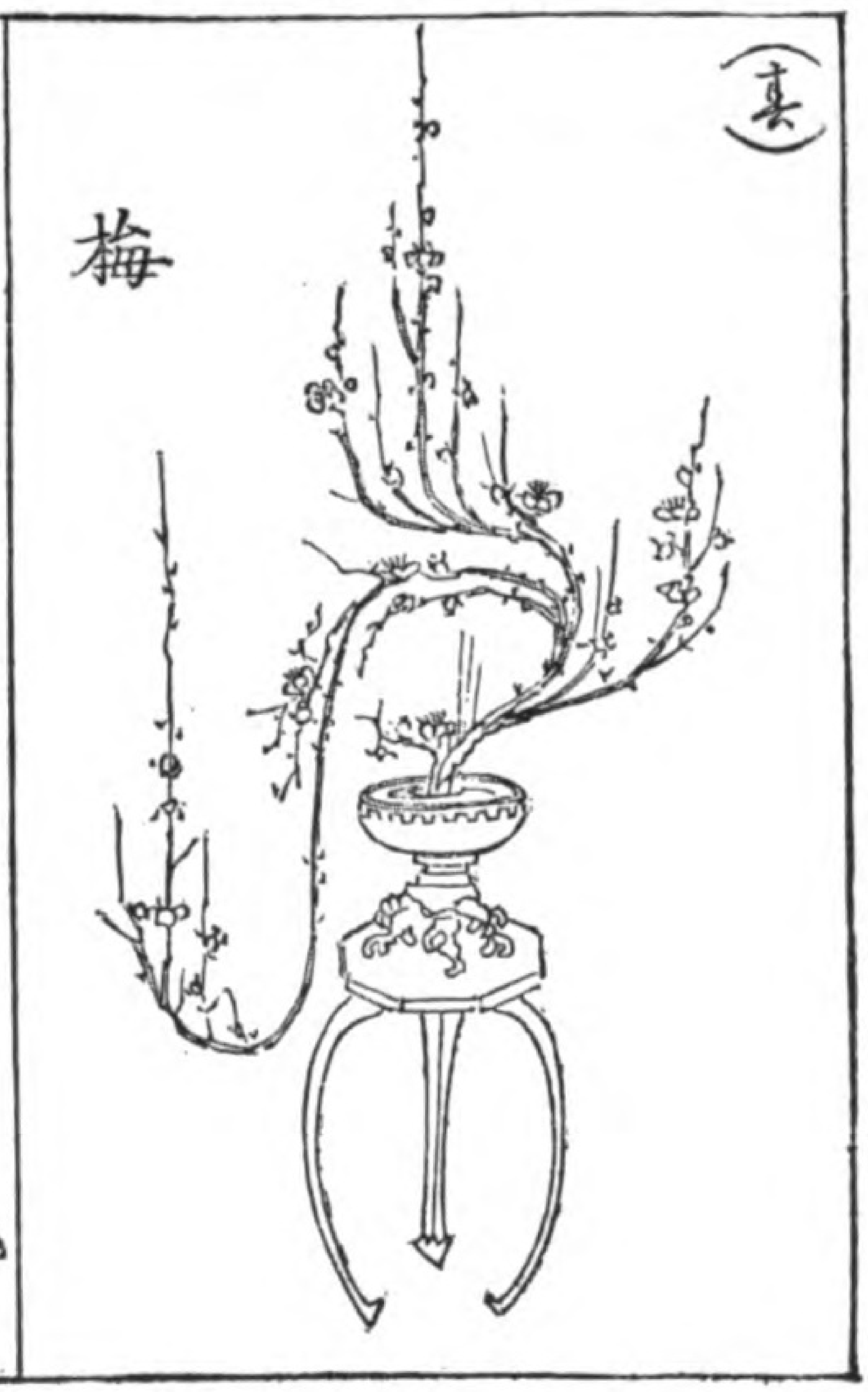
梅　山礬杏　連翹　玉蘭花　薔薇　牡丹　榲桲　玉蘭　蕙蘭　仙臺萩

水仙　李花　未央柳　桃　錦帶花　躑躅　燕子花　辛夷　芝蘭　草牡丹

福壽草　金絲梅　金雀花　海棠　縷絲花　繡毬　石南　歐蘭　山蘭　吉利子

山茶花　小櫻　櫻桃　木瓜　笑靨面　石榴　荀蒿　馬蘭　櫻草　罌子花

金盞花　垂絲櫻　山櫻桃　梨　棣棠　藤花　木蘭　白頭翁　他偸根






（夏）

合歓　杜鵑花　槿花　橘花　紫陽花　慈姑　花水剣　百合

楝花　葵　卯花　山梔花　剪春花　澤瀉　杜若　山丹

牡丹　錦葵　虞美人　天蓼　石竹　浄斎　萱草　牽牛花

芍薬　紫薇花　攅特花　婆羅花　蓮花　澤桔梗　吉祥草　河骨

小藤　鳳仙花　美人草　鼓子花　萍蓬　紫羅欄　夏菊

（秋）

芙蓉　秋牡丹　麻鳴草　秋海棠　野菊　丁香茄

蘭　金沸花　蕃　剪紅紗　紫菀　烏瓜

木犀　桔梗　千屈菜　藤撫子　龍膽　葛花

菊花　女郎花　劉寄奴　白粉花　天麻

頳桐　雞冠花　黄芩　鬱金　牽牛花

（冬）

臘梅　山茶　水仙

迎梅　茶梅花　千日紅

瑞香　茶の花　寒菊

枇杷　南天燭　款冬

八手花　梅もどき　青陽菊






# 西洋交際の手振

## 食卓上の作法

本邦人にして未だ西洋の禮式に嫻はざる人は宴席に臨みて隨分迷惑する人尠からず、食卓に列して隣人の皿を奪ひ、又は食後に出す水を匙にて啜る人もありて見苦しき事限りなし、又一方に饗宴を催ふす家にても西洋の禮式を心得ず、往々來客に對して失禮の振舞あれば今此等の人の爲めに食禮の一班を記すべし。

△食卓――饗宴を催ふす家にてはまづ來客の人數を見積り食卓の大小長短を定むべし、第一に窮屈ならざるを要すれどもあまり食卓を大にして談話に不便を感ぜしむるべからず、大抵客と客との間は二尺より二尺三四寸を適度とす而して其の裝置は成可く佳美風流を旨とし、食卓の上には純白の布を蔽ひ、盃、皿の戛々の響を防ぐ爲め其下にフランネルの如きものを布くをよろしとす、其他よく磨きたるナイフ肉叉、匙、及び美麗なる陶皿、布巾の類を用意し其他藥味バタ、鹽等の諸品は卓の中央に配列し、酒盃などは來客の便利の處に置き、花瓶の裝飾も美麗にし、食後に出す菓物は皿數少くして澤山盛るよりは、量少くとも品數多きをよしとすれば、主婦たるもの是に留意すべし。さて獻立は大抵料理人に一任する方よろしけれど器用なる妻君は自分で料理し置くもおもしろし、又來客の數に應じ給仕人の數を供へ置くべし。

△來客――來客は定時に先ち、五分乃至十分前に集り食卓に就く、但し、周章て椅子により又は、著るしく食卓に接し、或は離るゝは禮にあらず、心氣を靜め、容儀を正し、閑雅、靜謐を旨とし、左邊に供へたる布巾を胸部にかけて食物の至るを待つべし。而して順序を經て我前に飯食の來るまでは食卓より手を遠ざけ、決して待兼たる風情をなし、肉叉又は肉刀を以て食卓などを叩く如き擧動あるべからず、此間は隣人と閑話するはよろしけれど、必らず、放言、高談を謹むべし主人及び主婦は相對して食卓の中央を占む、是れは用

事を便じ兼ねて應對に便ならんが爲めなり。

△獻立の順序——第一(ソップ)を始めとして燒肉、羹魚、野菜等普通七皿より鄭寧なるは十皿以上に及ぶ食品の代る毎に飲料(シャンパン酒若しくはマデール若くは葡萄酒)を用ひるを常とす、食後には乾酪菓物糖菓、夏ならばアイスクリームを用ゆ、最後に珈琲又は好みによりて茶を用ゆる事あり。

△會食者の心得——食品の好惡を評すべからず、若し好まぬ食品來らば少しく食して止めて可なり、人より餘り早く食し了るは不可なり、空皿を搆へて人の遲きを堪へられざる如き樣子又は食品の早盛を望むが如き風情あるは不可なり、又遲過ぐるも不可なり。何となれば是れが爲め他の獻立遲滯すればなり、給仕來る時は食し終ると否とに論なく必らず皿を下ぐべし。ソップを啜り終らば匙を皿の上に安んじて給仕に皿と共に持ち去らしむべし。其他の食品にあつては皿を更ゆる毎に食具即ち匙、ナイフ等を新にする家稀なれば、ナイフと肉叉を十字にせず且つ卓布を汚さゞるやう心して其側に置くべし、液物を自他の身躰及び食卓に滴すべからず、烈しき物音又は見苦しき樣子を爲すべからず。

△食事中の禁物——食物を滿口に含む事。食物を喰ふに大口を開くこと。食物を啣みて席を立つ事。同じく談話する事。果實其他食物の筋骨等を、器皿外に吐き出す事、口部並に咽喉を鳴らす事、食事中に、齒ほぢり又は口中に手指を入るゝ事(パン)をナイフにて割く事、食席に下着のまゝにて出又は手指を汚し又は頭髪をふり亂して臨む事等。

△注意すべき件——飲食の時は意味淡泊なる閑談をなすべし、決して思慮を要する熟談をなすべからず、卓布にて手又は口を拭ふべからず、必らず自己の胸部にある布巾を以てすべし、塵などの食物に附屬し居る時は人目を避けてソット撮みて皿の縁に置くべし。背を椅子に寄せ又は食卓に寄りかゝる事あるべからず、給仕を呼ぶに高聲を發し又は荒々しき擧動をなすべからず、會食の時人より先に席を立たんと思はゞ一應は會

釋すべし、食卓につきては、痰を吐きクサミをなすべからず、他に行きて是を爲せ、齒の損するを恐れず骨を噛み菓物の實を碎くなどの振舞あるべからず醬油を皿の一方に集めてパンにて拭ひ是れを食ふなどは不可なり。

△晩餐會——交際の爲めに晩餐會を開かんと欲する家は期日に先立ち一週間前にそれ〴〵招請狀を發すべし但し時刻は午後五時より八時頃まで、招請する人數は大抵十二人を通例となす、是れ尤も便利なり。而して品格は身分の大差なき人を撰ふべし招請を受けたる人は直に其の諾否を答ふべし、若し出席出來ざる都合あらば其旨を詳記して回答するをよしとす、出席者は其刻限に先つこと五分乃至十分前には必らず其家に赴くべし我國の習慣としてワザと二三時間遲れて行くが如きは大いに先方の差支を來す事となるなり、主人夫婦及び家族は刻限より早目に接待室に待受け來客毎に慇懃に挨拶して其入來を謝すべし、饗宴に臨みての席順は時宜に從ふも豫め奉書紙又は絹地の小札に來客の名前を記し置くも可なり。

△夜會——これは衆客の胸襟を開いて淸談快話するの目的なれば食品は最初より食卓に陳列し來客をして各自隨意に食せしむるをよしとす、時刻は午後八時より十二時までとす。

△待遇——晩餐會又は夜會に論なく人を招請せんとする家は其當日は室内及び門前を奇麗に掃除し豫め來客の姓名を案内者に告げ置き、客至らば慇懃に之を迎へ男客は脫帽室、女客は化粧室(大會に於ては)に導き僕婢をして其使役に供して必らず手落なき樣萬事氣をつけ帽子、杖等の混雜せざる樣にすべし、主人夫妻は來客の意を損せぬ樣慇懃と丁寧とを主とし、接待の周到進退運動の敏活なるを要す、西洋にては食卓に臨みては主人の側には重なる女客を招し、主婦の側には重なる男客を招すれども、我邦にては來客も主人も夫妻相並ぶを常とすこれは、何れにても便宜に任せて可なり。

△食後の合圖——珈琲を飲み終り談話斷絕の機を見て主人は食卓を離るゝの合圖を爲す、此時來客一同直ち

に置の側に布巾を置き（疊まずに）起立して食堂を去りて客室に移るべし。

△食時中の注意――食事中主人は食卓に配慮するの狀を爲すべからず、譬へ食品不足又は疎忽あるとも來客の面前に於て給仕を叱咤するは無禮なり、客に於ても廻り來りし食品に不快の物あるも其事を顏色に顯はすは又無禮なり、又來客は料理品に關して佞するが如く或は逆らふが如き意見を述ぶべからず、又非常なる珍肴にあらざれば非常に賞歎すべからず。

## 名刺の扱ひ樣

抑も名刺は活用すれば隨分人一人前の代理を成す場合少からず尤も注意すべき事なり。

△名刺の種類――訪問の名刺はうつくしき洋紙或は透明なる洋紙にて其質は堅靱にして其形ちは豐富なるを要す、然れども端書大の山師的名刺は宜しからず、磨きたるが如き艶あるか、又は靑貝の如き色ある名刺を持つべからず、且つ名刺の緣に金色を帶ぶるもの宜しからず、名刺の四隅に黑線を施したるものは喪用と知るべし、名刺には頭字と職業とを肩書して差支なし、夫婦各別の名刺を有すべし、或時は合同のものを用ひて妨げなし、結婚せる婦人は名を署するに及ばず。

△名刺活用の場合――通常他人の家を訪問する時には一葉の名刺を出す、併し佛國にては男子は其訪ふ處ろの家内の男女の員數丈を置き、女子は其家の婦人の員數だけ名刺を置くの習ひなり。宴會の招請或は禮物を受けたる時或は結婚、死亡、出產等の告知狀を受けたる時或は、一家の吉凶の通知ある時、或は出立又は歸宅の通知を受けたる時は、物品を送らざるも必らず名刺を贈るをよしとす、出發の時の名刺は告發と署す、新年の名刺には、賀新年と署す、人を訪問して家主不在なる時は名刺の肩を少し折り置くべし。

## 贈り物の心得

通常の贈り物は砂糖製の菓子や花束（種々なる花を集めて一圈の花束を作り西洋諸都市にて花市場なるもの

ありて、可憐なる女兒等製造して賣り捌けるなり是れは我國の鷄卵や、鰹魚ぶしや、三盆砂糖の如く、多くの場所に進物として贈り遣はすなり。進物を受けたる時は直ちに之を開らき、其好否に拘らず、賞讃して感謝すべし、其禮物若し砂糖菓子たる時は其家に居合はす人々に分配すべし、結構なる進物を贈らんとする時は自身にて是を携帶するよりは寧ろ、名刺と共に訪問前に是を贈り、其後に行くを宜しとす、「クリスマス」には匙や、ナイフや、カード(花牌)や時計や、十字架や、人形の如きものを贈る、又新年の進物には尊貴の人より卑賤の人に與ふるを可とす、非常の場合にあらざれは尊長に物品を呈するは不可なり、又新年の進物は早きを可とす、あまり遲延に失すれば、他家よりの到來物と疑はるゝの恐れあり、新年の進物は時計や玩具や、流行の器具や、其匙や、ナイフの如き日用品を送るも可なり、下輩の人には金錢を送るよりも又所持せざる必要物品を送るを可とす、何となれば下輩の人は往々金錢を浪費するの恐あればなり、商人の主人は其雇人の職務の勤怠によりて金錢を送りて之を賞す、雇人は主人に物品を呈する場合なけれども或禮式に當りては雇人醵金して高價の物品を呈出するは佛蘭西邊の商家の習慣なり。

△花——花は西洋人が尤も尊み、且つ常に進物に用ゆるものなり、譬へば吉事に於ても花をかざり、名譽に於ても幸福に於ても祝義に於ても乃至葬儀に於ても花を用ゆるなり。前にもいへる如く西洋の各市府には盛なる花市場ありて、男女麕至雜沓し頗る盛觀を極むるなり、而して花には各意味あり是れを以て情意に形り又言語に代表せしむ、この故に處女の飾るべき花と否とあり、又妻女の帶びて、可不可の差別あれば此の辨識なくして妄りの花を贈りて人の意を損ずる事あればよろしく注意すべきなり。

△花の意味——百葉薔薇は兒童の敬愛を意味し、白薔薇花は潔白を意味するが如し左に其の區別を列せん、

○薔薇の莟は————幼弱。

○卯の花は————幼年。

○雁来紅は——友情と春。
○白百合花は——純粋。
○黄薔薇、桃色ばら桃花——情愛。
○鳳仙花、水百合——淡白。
○水仙、照日葵は——痴愚。
○忍冬は——愛着。
○虎耳、山芹菜——信仰。
○金雀花——家徳。
○金盞花は——嫉妬。
○桂樹——勝利、凱旋。
○橄欖と柘榴——和親、平和。
○黄石龍膽は——威權。
○黄百合花は——虚飾。
○山蘿蔔——寡婦の標號。

等それ〳〵意味あればそれ〳〵注意して用ふべしこれは但し日本にある花のみを撰みたるものなり、又莖は謹厚、謙讓の意味あるを以てすべての女子に適す、橙花は妻婦に可なり(貞節)

更に又花園に植うべき花と人に贈る可き花束とを記せば丁子草は贅澤、鬱金草は華美、李花は富貴、紫蘇は貧乏、夕顔は脆弱、野薔薇は嫉妬、莠は不德、黄楊は堅固、狗骨は防禦、蘆草は柔順、三色菫、離別を惜しむの意なり。

## 容儀と粧飾

△沐浴——朝起る時は單に眼のみを洗ふを以て足れりとせず、一日に一回は十分に身体を拭ふを要す、身体を拭ふには海綿を用ひず、手を以て皮膚に水を濺ぐをよしとす、水は雨水又は蒸溜水を尤も可とす、石鹸は十分に使用して直ちに洗ひ落し柔軟なる手拭を以て皮膚をよく拭ひ乾かし後に肢體を強く摩擦すべし、摩擦の方法は眼面肢体より眞紅色の顕はるゝを適度とす此浴法は實に簡易にして少量の微温湯と一個の石鹸一巾の手拭を用ゆるに止まり何人も容易に爲し得べき簡便法なり、又時々熱き湯に海綿を浸し體軀より脂汁を拭き去るを要す、日光及び空氣に觸るゝは人間健康上特

種の沐浴法なり、故に衣服を着る前に暫時日光に身体を曝すも又一法なり。

△呼吸――は身体中肝要なるものなれば、常に適宜の運動を試み、新鮮の空氣を呼吸すべし、而して呼吸に惡臭を帶ぶるものは胃、齒、肺、若しくは喉等の病症より起るものなれば必らず深く注意し置くべし、呼吸の臭氣を療する一時の方法はコーヒー、肉桂、丁子等の香料藥品を用ひて可なるも、若し惡臭甚だしきに至れは必らず醫者の治療を乞ふを宜しとす。

△皮膚――婦人にして若し皮膚を美麗ならしめんとならば必らず藥品を用ふるに及はず、新鮮なる空氣中にて十分なる運動をなし、又浴湯の際十分に皮膚の氣孔を開き健康を助くる飲食を爲し、十分に睡眠を爲すに在り、決して鉛粉等の重量顔料(礦物質)を用ふるべからず、尤も輕量の顔料(澱粉質白粉)に至りては用ふるもよし、ニキビの生じたるが如き事あれば重炭酸ソーダ十八グレーンと香水六滴を混じたるものにて顏を洗ふべし、皮膚青白き時は、微温湯を以て洗ひ粗き手拭を以て十分に摩擦し空氣と日光に觸れしめて適宜の運動を試みるべし、又膚の荒たる時は夜間グリスリンを塗り、翌朝清水とよき石鹸とを以て洗ひ去るべし、皮膚を美麗に保たんとならば、豚肉、乾酪其他の多量の脂肪質ある食物を謹むべし。

△手――を美麗に保たんには種々の方法あり、強き勞力に關はらざるものは甚た簡易なり、即ち石鹸を十分に用ひて洗滌し、爪刷子を用ひて屢々洗へは必らず清潔となるべし、皺などの生じ易きものは毎度就寢前にグリスリンを以て洗ふを可とす、冬日には雪と石鹸とを以て手を洗へは光澤を生ずる事極めて妙なり、手を極めて白く美ならしめんには二三日毎に牛乳と清水とにて屢々洗ひ就寢前に棕櫚の油を塗り毛製の手袋をはめ翌朝温湯と石鹸とにて洗滌すべし、日光の爲めに手の燒けて黃色を帶ぶるに至れば、石灰とレモン汁にて洗へば二三回にて以前に復するなり、然れども手は美麗に保つと雖も、若し怠惰にして美麗ならんよりは十分働らき美ならざるに若かし。

△足――足もよく保護するを要す、これを善く〳〵保たんと欲せば十分清潔にせざるべからず、清潔の法は一日に一回づゝ洗足すれば申分なけれども一週間に少くとも三度は必らず行ふべし、靴足袋は屢取かへ、殊に歩行せし時はしば〳〵取かゆべし洗足を怠たる時は、忽ち不快の臭氣を放ちて人に厭はるゝ事あり、必らず洗足に注意すべし、洗足は温湯を用ひて十分能く洗ひ去るを要す。

△頭髪――人に天然の美を添ゆるは頭髪なり、衣服の美、寶玉の光何かあらん、されば婦人には頭髪は最善最要のものなれば平常大切に之を取扱はざるべからず。

△美髪法――脳病又は熱病に罹りて頭髪の脱落する事あれば全快後髪の根より剃り去るをよしとす、當時髪を剃り又は髪を短かく刈りて髪根を強くするを忘るべからず、髪を刈るには毎月上弦の頃（三日より八日まで）をよろしとす、髪の二股に別れたるものは速かに除去すべし、髪の脱落する原因は夜間の冷氣又はカモジを用ひて頭髪を壓抑して空氣の流通を防ぐに基因するものなれば常〳〵これに注意すべし、すべて頭を清潔にするは、頭髪を保護する最良法なり。故に石鹸又はアンモニヤ少量を加へたる水にて頭部を洗ふをよしとす、又屢々梳り、且つアンモニヤ水に浸したる髪刷毛にて摩擦するをよしとす。毎日密櫛を用ふるは不可なり、是は頭髪を抜去るの恐あり、故に一週間に二回を適度とす、粗櫛にては毎日梳づるをよしとす、臥床より出でゝ直ちに梳るは不可なり、常に頭髪のもつれざる様に心掛くべし。

△長髪法――頭の熱する時は、牛髄膏か、グリセリンを髪に附くべし、頭の冷し時は水と焼酎を等分に混じ是に機那末を加へて用ゆるべし、髪の脱落する原因が髪根の衰弱若しくは機關の衰弱より來りたると見とむる時は胡桃の煎汁にて朝夕髪を洗ふべし、頭にフケの生せし時は細末の鹽にて頭部を摩擦すべし、石鹸にてもよし。

△歯――毎朝食後は歯楊枝を用ゐて清潔にすべし食事

毎に歯を清むるは此の上の良習なり、歯並をよくし清潔にするには時にカチール石鹸を用ゆるをよしとす、歯楊枝はゴム製を用ひ、歯は横に磨くよりは竪に磨くをよしとす、歯脂の溜りて除き難き時又は歯の缺損したる時は速に歯醫者に就て治療を受くべし。

△眼――隅に塵垢の溜るを見るは誠に見苦しきものなり顔を洗ふまでに汚物の出づる時は柔軟なるハンケチにて徐かに拭ひ去るべし、眼は五官中尤も大切なるものなれば必らず清潔に保護するを要す。

△耳――日々沐浴の際、耳汚を洗滌耳だれの出づる事あれば靜かに之を拭ひ去るべし。

△鼻――鼻液其他の汚物の附着し居らざる樣清潔に保つべし。

△爪――爪を生し置くは禮にあらず必らずハサミ去るべし、爪に黒き垢などの附着しあるは見苦しきものなり。

△正しき習慣――人々清潔と健康を保たんと欲せば須らく身体に關する習慣を十分正しく守る事を心懸ざる可からず即ち、訪問、旅行、又は就業より睡眠、上厠沐浴、飲食等の些事に至るまで不秩序ならざる樣心懸さるべからず、禮法は即ち秩序なり、秩序は自然の理なれば若し是に背けば自然の禍を釀す、人の疾病にかかるは知らず〱自然の理にそむき秩序を失ふより起るものなりと知るべし。

## 室内の装飾

室内装飾にも自然の禮法あり、然れども甚だ繁雜に亘ればこゝには其概略を記するに止めん、又装飾の流派の多數なることと我國の坐敷の装飾と異ならず、各々、趣向と流義とあるべければ、西洋諸國中に殊に社交の中心なる佛國巴里の普通の装飾法を示さん。

伶俐なる人は室内装飾を見て一家の主婦に會見せざる内に其の質の賢良なるや、又行儀の方正なるや、又賢良なるも禮法の心得あるや、兎に角主婦の性質を察知するに足るべし、室内装飾は實に一家の主婦を代表したるものなり。

△装飾の要――すべて清潔と温雅、秩序あるを要す。

△客房――火爐の右の方には主人の爲め肱掛椅子、賓客の爲には肱かけ椅子又は長椅子を供ふべし、三四人以上客を入れたる室内には丸卓子を供ふるを可とす、丸卓子には席の上下なし、其傍には硯箱、書札、寫眞帖、新聞紙、名刺盆を置べし、客房にガラス戸棚などはよろしからず、各室に必らずストーブを備へ置かざるべからずと雖も、終日薪炭を焚置くは入費も少からず、若し火を消し置けば、來客の暖を採るに間に合はず、斯る時には、交際上手の人は居間に客を引き、若しくは日を定めて來客を請待するを常とす。

△化粧室――化粧室には、ブラッシ、(頭、爪、齒、衣を掃除するに要用なる各種類のブラッシ）海綿、粗櫛、密櫛、夾刀、毛拔、白粉箱、香水瓶等の雜品を臺上に整列し置き又壁間に姿見かゝみを掛け置くべし、然れども化粧具は隨分贅澤を極むるものなれば、富豪にあらざれば別段に化粧室を設くるほどの餘裕はなし、寢室の一部に些々たる化粧道具あれば足れり。

△寢室及書齋――普通の家にては寢室と書齋は一室に置く、家族、故舊の畫像は此の室に置くを常とす。

△食堂――には直徑の卓子と椅子を供ふべし、こゝは寢室と反對にして家族故舊の畫像は決して壁間に掲ぐべからず、されど山水風色の油繪をかゝげ、又一面の小鏡を置くは妨げなし、大鏡を置かざるを例とす。

△處女の室――裸體或は怪異の畫を掲ぐるは甚だ不可なり、すべて靜かにして穩やかなる趣を存すべし。

## 寫眞の交換

△寫眞帖――西洋にては各家必らず寫眞帖を備へ置くを常とす、寫眞帖は實に人生の紀念なり、秋の夜の徒然なるまゝに寫眞帖を開かば如何なる感か起る或は知己親友の顏を見或は故人の容貌を想ひて往事を追想し此人は若くして死亡せり惜しき事なり、此婦は既に嫁したり、此女は他國へ出發したれば再會するを得ず、此人とはよく談笑したりき此娘は昔は甚だ美人なりしが今は著しく老ひて變れり、など追懷せば今昔の感に堪

へざるべし。

△寫眞交換の注意――西洋人は己の寫眞と、他の寫眞とを交換する習慣あり。されどこれにも禮法あり、男子は女子より自己の寫眞を望まれたる時は再應の乞を待たず、これに應ずべし、女子が再三弱年の男子に向ひて、寫眞を懇望するは禮にあらず、男子は婦人に對して寫眞を懇望すべからず、女子は其の新郎の外若年の男子に寫眞を與ふべからず、婦人は男子より所望を受くるとも、親族或は年長（老人）或は殊に自分に勝れる人を除くの外は一切謝絶すべし、男子と男子、又女子と女子の間にありて、一方より寫眞を送られて己れの寫眞を贈らざるは恰も借金して返戻せざるに均しといふ、男子は其の服裝正格なる寫眞にあらざれば婦人に送るべからず、親族又は親友の中形寫眞のみは媛爐の邊にかくるを常とす、贈遺用の寫眞は帖に入るべき手札形なり、其以上は最近の親族か、懇親の朋友、特別に懇望せらるゝにあらざれば人に送るは禮法にあらずといふ。

（了）

## 女流俳句十二ヶ月

記者撰

一月　父母のすこやかにして雜煮かな　照女
二月　初午や馬鹿な顔して馬鹿ばやし　季子
三月　春めくや四條の橋の人通り　光子
四月　杜鵑淀の川瀨の朝ぼらけ　峯女
五月　軒並に菖蒲さきけり片田舍　糸女
六月　朝顔や根岸は水のよいところ　種女
七月　かぢの葉にかくこと多き遊女哉　その女
八月　蓮の中辨才天のほこらかな　大子
九月　鉢植の菊美くしく咲にけり　清子
十月　明日江戸へ行くべき夜半の時雨哉　とみ女
十一月　風もなき天長節の日より哉　龍女
十二月　尾車のめぐるは早きしはす哉　壽女

# 日本名所舊蹟案内

▲武藏
王子瀧、飛鳥山櫻、瀧の川紅葉、川口善光寺、大宮公園、玉川鮎漁、小金井櫻、高雄三峯、堀の内祖師、池上温泉祖師、大森海水、川崎大師、杉田蒲田の梅、金澤の八景、芝又帝釋

▲下總
成田不動、宗吾靈社、稻毛海水浴、香取官幣社、銚子海水浴、犬吠崎

▲上總
鹿野山、芝山の二王

▲安房
鋸山、北條海水浴、鏡浦、清澄山

▲常陸
筑波山、加波山、常磐公園、大洗海水浴、霞浦、鹿島官幣社、那珂川漁

▲下野
日光、岩船山、唐澤山、佐野公園、足利學校、那須温泉、鹽原温泉、川治温泉、落原温泉

▲上野
伊香保温泉、榛名山、磯部鑛泉、妙義山、霧積温泉、碓氷峠、權現紅葉、澤渡温泉、四萬温泉、川原温泉、草津温泉、高津戸急流、赤城山

▲磐城
勿來の關、白河の關、湯本温泉、南湖の奇勝

▲岩代
飯坂温泉、湯野村温泉、高湯温泉、霞島信夫文字摺石

▲陸前
松島の奇景、鹽釜神社、青根温泉、峨々温泉、瑞鳳寺、多賀城趾玉川古蹟、菖蒲田海水浴、鳴子温泉、宮城野萩花

▲陸中
中尊寺、五串の瀧、衣川舊趾、鉛川温泉、南部富士

▲陸奥
長者山、善知鳥神社、外ヶ濱

▲羽後
十和田湖十灣、男鹿の島巡、鳥海山、大湯、濁森の湯大瀧

▲羽前
湯殿山、月山、五色湯、滑川の湯、山寺山

▲越後
赤倉温泉、關山温泉、松山温泉、

▲加賀
白山、中山温泉、兼六公園

▲越中
立山、有磯の海

▲信濃
善光寺如來、川中島、諏訪湖水、姨捨山、田毎月、湯田中温泉、戸隱山

▲甲斐
身延山、御嶽山、差出の磯、猿橋

▲相模
江の島、鎌倉、逗子、横須賀、鵠ヶ沼海水浴、大山、大磯海水浴、國府津海水浴、酒匂海水浴、小田原海水浴、道了權現、箱根温泉同權現

▲伊豆
熱海温泉同八景、伊豆山、伊東温泉、修善寺温泉、湯ヶ島温泉、戸田海水浴、堂ヶ島洞窟

▲駿河
富士山、佐野瀑園、牛臥山海水浴、清見潟海水浴、久能山、燒津海水浴、志太鑛泉、三保松原、田子の浦、清見寺

▲遠江
秋葉山、小夜中山、濱名湖

▲三河
豐川稻荷、前芝海水浴、佐久島海水浴

▲尾張
名古屋金城、大野海水浴、熱田宮、師崎海水浴、豐濱海水浴、

▲美濃
養老の瀧、長良川の鵜飼、谿物路の里、關ヶ原古戰場、虎溪山奇泉

▲近江
琵琶湖、八景、彦根公園、比叡山

▲伊勢
太神宮、宇治公園、二見浦、湯の山温泉、辛洲海水浴、朝熊山

▲山城
圓山公園、嵐山、保津川等、其他京都には神社佛閣の美觀多く見るべきの名所、枚擧し難き程なり

▲大和
吉野山、春日神社、月ヶ瀬梅、奈良大佛等他にも有名なる箇所多し

▲紀伊
高野山、和歌の浦、那知瀧、熊野龍神温泉、本宮温泉

▲和泉
堺濱海水浴、茅渟浦風光、住吉社

▲攝津
有馬温泉、箕面山、寶塚温泉、布引の瀧同温泉、諏訪山温泉、和田の岬、須磨の浦、湊川神社

▲播磨
舞子の濱同公園、明石海水浴、書寫山、高砂松等外多くの名所あり

▲但馬
生野鑛山、城之崎温泉、播州富士

▲美作
鹽の湯温泉

▲備前
岡山後樂園、西大寺

▲備中
沙美海水浴、吉備神社

▲備後
福禪寺、福山公園

▲丹後
天の橋立、丹後富士

▲安藝
嚴島、廣島公園

▲周防
錦帶橋、大畑瀬戸

▲長門
馬關港、壇の浦、赤間宮

▲筑前
大宰府天滿、蒙古首塚

▲肥後
熊本本妙寺、錦山神社

▲薩摩
櫻島鹿兒島公園

▲日向
高千穗、湯の屋温泉

▲讃岐
琴平神社、屋島古戰場、高松舊城、善通寺

博文館發行

▲日本漫遊案内
▲枕頭山水
▲旅行案内
▲日本名勝地誌

# 各國物產一目

山城　大和　河内　和泉　攝津

▲畿内

西陣織、友禪染、清水燒、宇治茶
吉野紙、吉野葛、奈良晒、奈良漬
河内木綿、三宅縞、道明寺糒
樸櫟織、段通
伊丹酒、池田炭、御影石、神戸牛

伊賀　伊勢　志摩　尾張　三河　遠江　駿河　甲斐　伊豆　相模　武藏　安房　上總　下總　常陸　小笠原島

▲東海道

伊賀燒
萬古燒、津綟子織、簾屋紙、伊勢蝦、
時雨蛤、紙煙草袋
熨斗鮑
七寶燒、豐樂燒、瀨戸燒、鳴海絞、
名古屋扇、蘿蔔
石材、三河木綿
石腦油、石灰、椎茸、濱名納豆
駿河半紙、安部茶、竹細工、寄木細
工、駿府塗、興津鯛、芝川海苔、富
士石
甲斐絹、葡萄、水晶
八丈絹、雁皮紙、色紙、梅干、海老、
石材、鮑
湯本細工、粕漬、鮑
秩父絹、八王子織、五日市織、行田
足袋、川口鑄物、淺草海苔、鉛筆、
鼈甲細工、蒔繪細工
魚類、房州砂
鰮、松材、鯛、青串魚
結城紬、銚子縮、野田醬油、流山味
醂、佐倉炭、行德鹽
紙類、煙草、銅器
檳榔樹、巴蕉、椰子、鼈(オホガノ俗ニシヤウガ)
山羊(クボヤギヤー)、野衾(ノブスマ)、獸海鹽、信天翁、蛸木

近江　美濃　飛彈　信濃

▲東山道

長濱縮緬、膽吹艾、茶、蚊帳
縮緬、美濃紙、養老酒、蜂屋柿、甜
瓜、蠟石
水松細工、檜、榲細工
生絲、蠶卵紙、上田縞、更科蕎麥、檜

上野　下野　磐城　岩代　陸前　陸中　陸奧　羽前　羽後

生絲、伊勢崎紬、桐生織物
鹿沼麻、足利絹、眞岡木綿、大谷川
海苔、岩槻木、日光塗
煙草、延紙、石英
會津蠟燭、信夫摺、二本松紬
精好織(俗ニ仙台平トテ云フ)、名取川埋木、氣仙行李、
乾飯
南部縮緬、生絲、眞綿、薄荷
木材、魚類、穀塗、硫黃
米澤織物、最上紅花、藏面石、花
紋燭
杉、檜、木材、虎斑竹、春慶塗、秋
田款冬

若狹　越前　加賀　能登　越中　越後　佐渡

▲北陸道

若狹塗、越上、鰈
奉書紙、鳥子紙、奉書紬
加賀絹、杉原紙、象嵌細工、九谷燒
乾菓子
輪島塗、鹽、石炭
吳呂、丸布、藥劑、米、ヒミ鰯
越後縮、精好平、石腦油、海魚類、
石炭、翁飴、鮭、米、紬
金銀、蛸

丹波　丹後　但馬　因幡　伯耆　出雲　石見　隱岐

▲山陰道

煙草
縮緬
金銀、出石陶器、豐岡柳行李、牛
白珊瑚
鐵、伯州木綿
鐵、蜜柑、人參、十六島海苔、松江鱸
銀、鐵、半紙
木材

播磨　美作　備前　備中　備後

▲山陽道

赤穗鹽、龍野醬油、明石縮、姬路革、
高砂染
雲齋織
伊部陶器、長船刀劍
紙
備後表、保命酒

安藝　周防　長門

鐵礦、牡蠣、臙石、算盤
岩國縮布、大島縞木綿
鹿子絞、赤間硯

紀伊　淡路　阿波　讃岐　伊豫　土佐

▲南海道

生蠟、蜜柑、高野紙、那智黑石、雲
齋織、陶器、無煙石炭
伊賀野燒
藍(アイ)、齋田鹽、縅織
食鹽、砂糖、保多縞
銅、簾、松山縞
半紙、鰹節、珊瑚

筑前　筑後　豐前　豐後　肥前　肥後　日向　大隅　薩摩　壹岐　對馬

▲西海道

博多織、蠟、石炭、米、鯨
久留米綛、生蠟
小倉織、石炭、門司硯
豐後絞、牛、錫、白珊瑚
有田燒、伊萬里燒、石炭、唐木
米穀、硫黃、綿甜
日向半切、椛、茶、椎茸
國府煙草、硯石、蜜柑、蘇鐵、大根
煙草、阿久根燒酎、七島筵、鰹節、
錫、飛白、陶器
鹿角菜、蝦、鯨
鯨、獅、海肝

▲琉球諸島

牛、馬、魚、貝類、琉球絣、上布、
芭蕉布、紙、竹、漆器、琉球泡盛、
紬、錫盃

▲北海道

大理石、紋別石、阿波石、砂金、砂鐵
亞鉛、琥珀、珊瑚、瑪瑙、石黃、チ
ンコ斑竹、辛夷(コブシ)、秦皮(トミ)、(又鳳尾ト書ス)
ホッブス、オヒヤウ、昆布、臙虎、鯨
鮭、緋、鰮、膃肭臍、海驢、水豹、熊、
テンキアッシ織、豆類、木材(ロニ)、魚介
煙草、蕎麥、鱈(タラ)、牡蠣(カキ)、海肝、斑狐
等

# 小天地



## 貧乏女學生の一年記

女子大學　藤村さだ子

### 其一（始めて東京に上る）

我家は元は何々佐渡の守と云はれし藩主なりしと、古き系圖に見えたり、あゝ世が世にてあるならば美はしき名門よ華族よと今にもてはやされたらんに、昔戰亂の打つゞきたる頃、我祖先も天晴將軍の下に馳せ參じ功名手柄して終に職に倒れけるなりとかや、其後は所謂奸臣の爲に見るかげもなく落ぶれて、終にたどりたどりて越後にさすらひ、茲に主を求めて昔の樣に打かはり、細々と暮しけるとかや、今は夫より幾代をか經たりけむ、明治廿二年の頃は我父上の又次第に榮えて出づるに車あり入るに多くの侍女の迎ふるこそなけれ我家は豐なりき。

裏には果樹次第に太りて枝と枝とは重りて、宛も木の葉のトンネルをなし、葡萄は年々に實り苺の床には赤き實の布けるが如く我等を悦ばし、時に從つてクリーム色のあまき汁滿らん計りの玉蜀黍、今爐に起したての火の上に幾本となくかざゝれて、香ばしき匂をはなち、下男が夕方畑の歸るさには黃にいゝ、みわれたるまくわ瓜を夕餉のあとにまちかねて庭の草花眺めつゝ打よりて味ひし樂しさ幾年經たる今猶忘れかぬるぞかし。今より思へば誠や此頃は我家中興の花の時代なりき世は太平なりき、さはれ世は永久に斯く太平なる能はず

運命の神あり、ねたみの神あり斯くてぞ世は浮世とこそ云ふべけれ。

我父上の人のよきに付け入りて折々壯士の如き人出入する樣になりたり、いやらしき人よ何の用ありて斯く度々來るならんと母上と竊に眉ひそめし頃は早や遲かりき、父上はさる山林の事業に引入れられて持ちたる田地を抵當に金を借り入れたるが抑々の誤り。今更云ふも詮なければ夫よりは只要り目のみ重りて、借りたる金の期限は過るも思はしく事業のはか取らねば、終には無理算段も附き果てゝさしもに太平を歌ひたる我家に忌はしき執達吏の容赦もなく入り込みて目ぼしき品は云ふも更なり我大事にせる晴着さへ簞笥より出すとならぬ樣封印せられし時の悲しさ心細さ、母上の心痛如何ばかりなりけん世なれぬ身に訴訟沙汰や差押へに日の多くは送りけり、之今猶忘れもせぬ明治卅四年の秋なりき。

明る年の春我は都に登りぬ父上は住みなれたる家邸を後に都に出でゝ一働きせんとて我を伴はれたるなりき流石に如何に落ぶれても今の世に教育なくては叶はじとて、我は幸か不幸か猶學びの園に通ふべくさる學校に入學せり。云ふ迄もなく定まれる月々の收入あるにあらねば我は常に足らぬ勝に、覺束なくも、過ぎ行きぬ、我貧乏女學生の一年間と題しての日記は之より初まれるなりき三十五年一月父上は兎も角もとて一家を借る、何事も新世帶の初々しく、今の身には些と廣すぐる間數の部屋の内には、何一つの道具もなく、僅に知人より借りたる夜具の三四枚、父上の行李一つと、我少さきもの共に三つ、空の戸棚に入れもせず、床の間に置けり、臺所には昨日我身ら買ひあつめたる道具の五品六品、居据りあしく此處彼處の棚に一つ二つ宛載れる樣、宛も荒れたる古寺の夫かと氣味惡きばかり今は世に己が家と云ふものもなく、賴もしき人もなく命より世に貴き金は更になくして、明日の活計の夫すら心細き果なき親と子は、斯くして此處に此夜を明せり、ごと〳〵と一しきり騷ぎ廻りたる鼠の音、靜まりたる後は、一しほ森として、同じ思ひにや父上の寢苦

しげに寢返りして、力なき吐息幽に聞えつ、我は其夜まんじりともせず思ひ明しぬ。

## 其二　（新世帶の苦しみ）

明る朝は夙に起き出で、當世の海老茶式部も今朝よりは襷かひ〴〵しく、昨夜とぎ置たる米、買ひ立ての釜にあけて、習れぬ水仕に釜の下焚にくすべつゝ、幾度涙にむせびたるか余りに燃え付かぬは如何なる故かと下のぞき見れは、怪しやこは如何に釜の底より水幾處となく滴れり、こは如何に昨日初めて買ひ來し釜の斯くも洩る處ありしとは露心付かざりき、氣の付かぬ事したりとあはてゝ父上の許に知らするに、何と云ふ手ぬかりの事しつるものかなとて、つぶやき給ふ、我は今更に云ひ譯もなく默然たれども斯くてあるべきにあらねばとて一しきり骨折りて又燃やせば滴は次第に少なくなれり何の故とも分らざれどまづ嬉しやと兎にかく飯は出來たり、金氣あれば上かわの飯は赤き色せり後にて聞けば新しき釜の底に水のつけるは洩るにはあらずして俗に汗かくと云ふなりと萬果なき中にも笑ふ事はありけり。



風俗十二ヶ月（一）年禮

生存競爭の盛になりし今日此頃とて、思はしき生活の

道もなくして時は徒に移り行けり、其間には如何に苦しき事の多かりしよ、父上と只二人の新世帯如何に樂しからんとて友は羨みぬ。さはれ我等は露うらやまるゝ身にてはなきものを、赤貧に甘じて自ら高潔と叫びしは是昔の事、實に今日生活の道覺束なくては人に愉快はあらぬものぞかし、何につけてもあゝ金が無くては詮方なしとかこたれ、果ては父上も餘りに云ひ甲斐なき人よとあらぬ愚痴をも時々はもらしつ。

## 其三　（授業料の欠乏）

學期の變り目には其學期の授業料を皆納めざる可らず元より十圓とまとまりし金は今の身分になか〳〵苦しかりき他の友の如くやす〳〵とは納められず、父上のさる知人に約束し置きたる事のあれば、今二三日待てとの事に、見へすきたる僞りと知れど、二三日は過ぎぬ、さはれ金は出來ず、斯くして詮方なくも一月は夢の間に送れり、朝支度して學校に行く事の如何に辛らかりしよ、我と我心の咎めては何も知らぬ友の顏さへ嘲けるが如く見へて、要なき事ども自ら氣を廻しつ、一月半もたちぬ今は事務所の前通るさへ恐ろしく止を得ぬ用事とて其前過るには宛も罪を犯せる罪人が交番の前馳せ通る時の如くに胸おどらして行く。

ある時事務所より少し用事あれば、次の休みに來よと小使して云ひおこしたるに、さてこそ月謝の事よと早や胸せまりて教師の云ふ事も耳に入らず、いつそ行かずに歸らんか否々斯くとも又明日と云ふ日のあり、今日行かずば明日は多くの友の前にて責めらるゝやも知れず、斯くては猶更つらし、所詮逃れぬ場合よく云ひ譯したらば事務員とてもよも夫でもとは云ひ給ふまじと、兎かくに心痛めつゝ進まぬ歩みをはこんで、恐る恐る事務所に屠所の羊の如くに出づれば、あなたの本籍と生年月とを書いて出して下さいとの事、我は案に相違して何の事かと馬鹿らしく猶外に云はれぬ内にとそこ〳〵に逃げ出す、往きの有様に引かへて胸なでおろしつ、あゝさるにても子に斯る憂目見する親が又とあるべきか、さりとては情なき我父上よ、今日は斯く

泣死ぬ思ひしつるものを、家に歸りたらば今日こそ遠慮なく云ひて滯りし月謝無理にも乞ひ受けんと要なき心遣ひしつる馬鹿らしさに、却りて腹立たしく、友のかれこれと戯る丶中わき目も振らず家に歸る一月に買ひ貰ひたる靴ははや踵へりて右も左も磨りゆがみて歩き惡き事非常なり之も誰故皆云ひ甲斐なき父上の爲と石につまづきて危く倒れんとしつる一剎那の獨言。家に歸れば父上は火もなき火鉢の傍に默然として腕こまぬきて座し給へり、面白からぬ面持ありくと前



風俗十二ヶ月（二）きさらぎ

には手紙さし置かれたり、歸らば云はんと意氣込みし先きの勇氣何處にか失せて、只痛はしく、何處よりの手紙と見れば國元の母上よりなり、六月の祭りにはせめて五圓だけにても送り給はれとの事、あゝ要るものは只金にして而も得るに道なし。學校にても金の要るは只月謝のみに有らす、人並に勉强せんと思へば四五冊の參考書もほし、されど半紙一帖すら心にまかせぬ今の身一圓の金かよはき力に如何に倒になりて振へばとて出づべき道理なければ、皆が買ひ揃ふる理科の書物も兎かくの口實設けて人に見せて貰ふ。名

孝心の盛なる我如何に貧に苦しめばとて親しき友にも斯くとは打あけかねたりし、さればあらぬ外見に氣を倦ぬるいと苦し。

## 其四　(米屋と談判)

生ける人間の如何に儉約しても物食べずには居られず月末となれば掛の五六圓は如何にしてもあり、何處より金の入る目あてもなければ父上も詮方なく昔は容易に下げざりし頭今は卑しき人にまで下げて方々頼みまはり給へど夫も度重なれば快よく貸しては呉れず、時は容赦なく過ぎて三十日ともなれば角こそ生えて居らねど宛然たる鬼共遠慮もなく責め寄せて來る恐ろしさ人なれぬ身には何と云ひ譯せんと、まづ先だつものは涙なり、心弱くては叶はじと漸々の事に事情はなして二三日の猶豫乞ひて追ひ返しホッと一息つく間もなく又入り代りに來る米屋、何はなくともまづ大切なるは米屋と漸くに今朝父上が都合して借り來給へる一圓の金出して二三日も立たば殘りの分は拂ひまする程に、何分夫迄待つて下されと漸くの事に云ひ拔けて、佛頂面して歸る小僧の後姿見送りて思はず板間に泣き伏したるぞかし、あはれや米屋の小僧風情に頭さげて頼み入る辛さ斯る卑しき者に迄見くびられて何の顏もて學校に行かれん、友に逢はるべき。

## 其五　(債鬼の攻撃)

大阪の博覽會は初まれり、我友の多くも夏休みを利用して勇みて出掛けぬ我にもと親しき友より強いて進められしも用事あればとて辛じて云ひ拔けつ、工藝館に五十圓百圓の品惜し氣もなく二ッ三ッ約束して得意氣に歸る人もあると云ふ今日此頃、我等は實に一圓の錢も容易には使はれじ實に五六年前迄は我から誇るもをかしけれど、何々の村にて我家と云へば知らぬ人もなき富豪の身なりしを實に我等が末路悲しきかな、而も天は猶此不幸なる我等に健康の賜を與へ給ふに吝ならざりき我等は實に苦しき中にも身體には一の障りなくて今日迄來れり。

斯る内にも債鬼の責めは一日も逃れ難く、終に父上も最後の手段を施すべく決心し給ひぬ、あはれ子孫の末迄も榮あれかしとのみ祈りて、玆二十年多くの財と勞力とを以て漸くに出來上りたる田地は、夫が抵當に一切引渡しぬ、夫も詮なし、借りたる金の返せねば、之は國元の事、現在の我等は今ははや十錢の貯へもなくして三日を過すのあはれなる身となれり父上は三度の食事より好きの煙草も充分には得喫み給はず思案に暮れての末煙草入れの底はたきて、漸くに掻き集めし一服の立ち登る煙のかげ、淡き果なさ傍に夫れを眺むる辛さ我は幾度人なき處に泣きしぞ。



風俗十二ヶ月(三)花見

## 其六（始めて古着屋に行く）

明治卅五年九月廿五日は我に取りては忘られぬ日となりぬ、つく／＼と此頃の父上の御上眺めては、何を誇りて絹物のべろ／＼としたる衣服の着らるべき今の我身には用なき唐織物賣りてと我は終に決心しぬ、斯く心定めたる我は心の内に近頃になき云ひしれぬ嬉しさを感じぬ。鬼も十八番茶も出花の今年十八の我、などて着類のほしからぬ事あるべき好き帶もほし羽織もほし有るが上

にも猶新しきものほしきが常の習ひなるに、代りのあるにもあらぬ二三枚の晴着賣拂ふが嬉しとや、流石に我は泣きぬ之なければ此次の親睦會にはあはれ木綿の衣着て行かざる可らず。身なりなどに心奪はれなとは常々師の君の仰せ給ひし事なれど友の皆美しき衣着たるが中になにとて此なりして行かるべき、さはれ今の場合我は斷然意を決して落つる涙横に振り拂ひつゝ糸織の綿入二枚紬の羽織と帶一筋手早く風呂敷に包みて友の許に行くとて家を出でぬ往來の人皆心ありげに此方打眺めり我は何となく恥づかしく足早やに四ッ谷口指して行けり。とある古着屋の前を見るに人二三人此方見て何かさゝやけり氣後れして只走り通りつ不甲斐なき心よと我と我身を叱りて二三間行くに其處にも人は居りて足は止まらで通り過ぐ思へば人なき家はあらぬにと打ほゝえみつゝ、今度こそはと盟ひて漸くにとある家に入る、どぎまぎとはかく〳〵しくは物も得云はず之買ひて賜はれと風呂敷包出せば番頭は烏散らしき顏して幾度も裏返し表返し調べて何故に斯るもの賣り給ふなど問かるゝに却りて恥かしく、只少し入り要のありてのみと、より云はざりしかば、此處の處名前など細かにかきしるし、印迄おさしてさて五圓五十錢をよこしぬ、我は意外に驚きしかど猶一ッ試して見んと今少し出して給はれ此羽織など未だ新しきこと、さもしと思ひながらねだるに彼方も氣の毒とや思ひけむさらば今十錢出ださんとの事に猶其上にとは云ひかねて金受取りつ逃ぐるが如くに出で去れり。

此五圓六十錢の金何と云ふて父上に見せん、我ながら空恐ろしく、其夜は蒲團の下に入れて夜もすがら恐ろしき夢におそはれぬ、あゝ貧程恐ろしきものはなし人を欺き己れを欺く。去りながら犯したる罪の消ゆべくもなし。ふと我は心付きて近頃いたづらに懸賞小說出しけるに、折よくあたりて此五圓を得しと恐る〳〵父上の前に出せり。

あはれ此五圓の金嬉しとや見給ひし悲しとやながめ給ひし少時御言葉もなくて伏し沈み給ひぬ、我も何となく悲しく近頃には嬉しかるべき五圓の札二人が間に置

きて默然たりき。
兎も角も之にて月末の拂ひも常よりは滯らず。

## 其七 (母の上京)

斯る悲しきが内にも樂しき日は來りぬ、其年の十月三日國元より母上子供達つれて此處に引上げて來り給ふ昔のまゝならば、皆一ッ處に集まりて世のうき風も知らずに睦び事したりけんを、世のまゝならぬ處々に分れて人に知られぬ苦しみのさま〴〵を盡したるだけ一しほ今日の對面の嬉しく、云ひ合さねど皆眼には涙ありき、足らぬ勝の中にもいとよく太りて年よりは丈高くなりし弟共、見るにつけいとほしさは彌勝りぬさはれ嬉しきだけに猶悲し昔ならば久々にて皆打よりし祝ひには花々しき馳走して打興じつる事もありしに今は尾頭つきたる魚さへ皆に付くる事なり難く、里芋の煮ころがしに、世のうき味の鹽辛きたくあんも珍らしければにや、さも嬉しげに食ぶるを見ては胸の怪しくふさがるを覺えぬ、まして父上は何と感じ給ひけむ、疲れたりとて子供等は早くねぶりぬ。母上が苦しかりし留守中の話に夜は思はず更けて床につきしは早や十二時過ぎなりき。

家族の殖えたる忙がしさと種々の心遣ひに今は學ぶべき學校の事さへ身に付かず、急がしとて休む日も次第に多くなり行けり我は實に世帶じみて友が無邪氣なる戯れ聞きては云ひ知らず悲しかりき、手は日毎の水仕に荒れに荒れて美はしき指輪はめたるしなやかなる友の手の中には恥づかしくて出されぬばかり、湯にもしば〳〵行かれねば首のまはり垢じみて我ながらむさくろしく愛想つきけり。

## 其八 (弟の月謝)

十月の廿二日弟共の月謝くれとてねだりたれど、例の事とて二人して一圓二十錢の金容易には出だされず二三日まてと父の云はれしに子供心の正直に今日は忘れずに必ず持ちて來よと先生の云はれしものをとて容易に聞き入れず、終には聞き分け惡しき子よと叱られ

て後には何も云はずわが傍に來て常には腕白の何かと云へば誰にでも喰つてかゝる弟があはれやしく〳〵と泣き出せり、よく〳〵悲しかりつらん可愛のものやと抱きしめたき思ひを忍びつゝ、此姉さへも今では月謝修めよと云はれてより早一月の上も立ちたれど、まだ納めである程なれば一日二日おくれたりとてよもや先生に叱らるゝ事もあらじ今日は辛ぼうして行かれよ休みては又父上に叱らるゝ程にと和しくさとせば漸く聞き入れて詮方なげにしほ〳〵として出で行けり。學校にて他の生徒の月謝もち行くを見ば如何に肩身せまくや思はむと學校に行ても夫のみ氣掛りなりき、かゝる人知れぬ心遣ありて何とて他の人々と共に身を入れて授業の受けらるべしや師の君の質問にあらぬ事答へて皆に笑はれ恥づかしきよりは悲しかりき。

其年も果なく迫れり學校も休みとなりぬ亦くどけれど再び三度同じ事操り返さゞるを得ず、あゝ世が世ならばと、あゝ世が世にてあるならば責めて餅の一石もつきて座敷迄置き並べらるゝに引かへて漸く一斗とはさてもあはれ大晦の夜おそく、新しき年向ふるに家並に立派なる松かざりも出來ねば辻に賣る松買ひに行く形ばかりの〆なわ付けて二錢なりき。

元日の學校の式には休めり、世は年と共に變りて我家にも福の神の今年こそは舞ひ込み給へと苦しき時の神だのみするも笑止なり、流石に新年は何となく心のどかなり、家のもの打寄りて火鉢をかこみて話す、斯く云はゞ定めし樂しきまとひと人の想像し給ふべけれど、否々決して然らず無心の子供こそ樂しげに年玉にもらひしかるたなど出して弄べど、我等は何となく心細かりき、表には車の音勇ましく羽子つく子供の聲々嬉しげなり。

## 其八 （晴着の詮鑿）

我卒業の期も日に一日と近づきぬ、他の人々は袴こしらへんとて騷げり、海老茶も餘り有りふれたれば此度は紫こそ宜からんと常よりはで好きの一人重立ちて云ひ出すと、夫こそよけれと、其處にもこゝにも樂しげ

に唖やく聲吾耳には如何に響きしよ。夫よりも猶辛らかりしは皆卒業の紀念に學校に殘さん爲に、年毎に書く絹地の畵書かんとて、皆ひしめきつゝ框に張りたる書絹三枚四枚買ふ中に、我は只一枚より買はざりき夫も漸く買ひてもらひしなり、其時友の一人あな君の大膽なる事よ只一枚にて書き上げ給ふ氣か、我等には眞似も出來ず今年の傑作は君にとそなど心ありてか、將無邪氣にか、遠慮もなくのゝしる聲に聞き知りて、まあと驚ける樣の顔せる五人六人、人の心も知らで心なき友よと我は心に泣きつ。



風俗十二ヶ月(四)文づかひ

雪中の梅とは我好みて撰びし書題、我身の上に引比べて雪の中にもしほらしく、咲き出づるが如くいつかは志を得る時あらん果なき願、枝は我にもあらで見事に、勢よく出來たれど、繪の具の不充分なりし爲花の色は猶あき足らぬ處ありしも、書き直すべき絹なければ、心殘しつゝも止みぬ。

終に卒業式は來りぬ此一年間實に今の我身にはふさはしからぬ心遣ひの數を盡して學びの道もつい怠り勝ちになりたれば、此榮えある卒業も覺束なくやあらんと心痛したりしに、幸にも洩れざりけり來る三月の廿六日式は

行はるゝとの事なり。

我より先に母上は心痛められたり、我卒業式の晴着なければ、今迄は兎もかく今年は學校の卒業なれば皆紋付の用意してあるべきに、汝は如何にすると濟まぬ顏しての母上の話、流石に我も口にこそ云はざりしかど實に之も氣掛りの一なりき去りとて事を設けて行かぬも口惜し、終に母上にたのみて常には疎き叔母上の紋付借りて貰ふ、袖丈けの塞まりたるも借り着なれば詮なし。

## 其十（卒業式）

三月廿六日空清く晴れたり學校の門には日の丸の旗心地よく風に翻へれり流石に所柄とて殊に目立ちたる裝せる人はなきも皆今日を晴れと着飾りて早や三々五々登校せり、皆々いとも嬉しげなり、我も流石に嬉しからぬには有らざれども、そこは何といふても流石はまだ乙女なり着たる着物の何となく氣になりて、袖みぢかしとて人や笑ふ、常にはいつも見苦しき風せる己れの今日に限りてよき衣着たるは定めし借着ならんと、友の内には早や推したるも有るべしなど、何事につけても心引けて後の笑ひ聲さへ氣になりて、不愉快の事のみ我から心に繪がきて校長が懇なる告辭も大かた耳に入らず、卒業證書と菓子包みとを手に持ちて門を出でし我は少時氣ぬけしたらん如くに茫然たりき。

あゝ我貧乏なる一年間は斯くして終れり、時には父母恨めしとかこちぬ、心なき友よと泣きぬ、何々の君はよく人に半紙借り給ふ事よ何時もおきまりなど口さがなき友の我に聞えよがしに罵らるゝ時のつらさ斯程にして迄も學びの道は行かねばならぬかと時には我身を磨く道さへ厭はしかりき。

さはれ貧の賜として我は今も感謝する一事あり何處の社會にも貧は卑しきもの、わが世に時めけるを見よやと計りに己が色褪せたる袴はきて辨當にはたくあんより外に菜なく、ちぎれたる草履いつ迄も惜しげにはき居ると見て口にこそ云はね、目もて笑ひ後に指さすと知らぬ顏に忍びて過る辛さ、さはれ人は包める鬱憤

の何處にか洩れずして止むべき、流行の髮飾りにかなはぬ己れはわき目も振らず否止を得ず學びの道さしてまつしぐらに息をもつかずに走りたる甲斐には、席のみはいつも首にあり き、名譽心にからる る人よとそしり給ひ ぞ吾身は貧なりし故 に斯く忍耐力も出で しなりしを。(完)



風俗十二ヶ月(五)かねつけ親

# 新世帶日記

若き細君

十月七日(金曜日)　上天氣

「おや夢だつた」と思ふと最う明るく成てゐる、大層出世を爲た所なので、もつと見て居たい樣な心持。御隣の女中が車井戸の水を例の騷々しく汲む音がする、急いで起きて雨戸を開けると好いお天氣、庭に一杯木の葉が散つてゐるので、竈の下を燃付て置いて、直ぐ掃除を始める。露を避けながら生垣の所まで來ると、山吹の下に大きな蟇が蹲踞つて居る、オー氣味が惡い私は蛇より嫌な故か、キヤツと言つて跳び退いた。私の聲が餘り仰山だつたので何事かと喫驚して お目覺めに成る。

七時、散歩に御出掛なさる、例の洋杖を持つて。かと思ふと最うお戻り、大急ぎで御膳立。

八時、御出勤、今日は歸りが遲いとのお申置。

後片付が濟んで、仕事を始めた所へ、戸籍調の巡査がお出なさる、例のお尋ねに對して何も變りはありませんと申上げて置く。

其と入れ違ひに保險會社の集金人が來たから、四ヶ月分の掛金を渡す。

漸やく片袖を縫ひ終つて一休みすると、最う號砲。柱時計を見ると五分遲れて居たから、直して置く、昨日も進めたのに、何故斯う遲れ勝なんだらう。

午后三時、小包が屆いた、表書は靜岡の姉の手、開けて見ると名產の山葵漬と大好物の溝柿が澤山這入てゐる。お歸宅に成つたら嘸ぞお喜びなさるだらう。

夜、靜岡への禮手紙を認めてゐる所へ、赤坂の妹さんがお入來になつたから、例のバイオリンを復習つて上る、其が濟むと、やがて歸りなさると言ふ故、靜岡の溝柿を半分持たして上げ、手紙を入れながら角までお送りする。

九時過、夫歸る。珍らしい御酒機嫌、例の調子で得意の小督を少し許り謠つて、直ぐにおよる。

十月八日(土曜日)　あたゝか。

今日も好いお天氣、朝飯に昨日靜岡から贈つて寄越した山葵漬を添へる、大層辛いこと、夫は鼻を皺めて被居る。

七時、御出勤。今日は他へお廻りだ相で、少し早目にお出掛なさる。

目黑の百姓八百屋が來た、馬鈴薯に葱を取つて置く、町へ買ひに行くよりも安くて新しい樣だ。

今日は秋日和の洗濯物には恰好いと云ふ日であるから、午前中の課業として、夏物のシャヽ洗ひをする、此間買つた石鹼が最うお仕舞に成つた。此頃のは何故かう遣ひでが無いのかしら。

明日は日曜日ではあるし、お客のある日でもあるから、家の中を奇麗にして置かうと思ひ、午后から大掃除を始める。居間から書齋から坐敷から勝手から便所まで殘らず一人で遣るのだから、仲々忙しい。それでも淸潔に成つて心持が好い。

五時ちつと廻つた時干物を取込んで、疊み付けてゐ

る所へお歸りになる、早速掃除の仕方を檢査して戴く成程奇麗々々、見違つた樣だとお讃辭を頂戴して、私も滿足。

直ぐ髮刈にお出掛此頃流行の耳前毛を剃落す事丈は止して頂戴と申上たが御聞入がない。些も御似合なさらぬのに！

夫は夕食后をそくまで書き物をなさる。

私は來週分の献立表を調製へる。色々と思案を凝して漸つと出來上つた。そこで七日間の材料を豫算つて見たら壹圓二十錢かゝる、其でも今週より餘程安上に出來たから嬉しい。献立表を用ゐると、其の度に彼是と氣を揉まなくつて濟むし、それに無駄な物を買ひ込んだり不經濟に時間を潰す樣な事がないから、什麼に便利だか知れない。



風俗十二ヶ月(六)　くしいれ

十月九日(日曜日)　くもり

今朝起きて見ると庭の南天の葉がそよそよ搖れてゐて、其の風のうすら寒いこと、追々寒くなる許。七時頃降り出した雨は直きに上つて了つたけれど、晴れる所へはゆかず、一日曇つてゐた。其でも降らないで仕合せ。

朝御膳が濟んで、散歩にお出ましに成たあと、いつもの花屋が來たから、白菊の大輪を一束買つて、早速前のと挿かへる、どうも六ヶ敷くて旨く出來ない、けれど何うか斯うか。

十時頃、會社の丸井さんが入らしつた、生憎主人が不在なのでひどく落膽してお在だつたが、丁度宜い鹽梅、待つ間もなく夫が歸つて來たので、例の面白い話が始まる。明日靜岡へ御出張ださうで、歸りには三保の芋をお土產に持つて來ませう、察するに奧さんも芋黨の一人と心得る、ねえ、さうでせうなど丶ふざけた事ばかり仰言る。さうかうする內、最う十一時半、何ぞ御饗應をせずばなるまいと思ひ、お茶を入れかへながら坐敷にまかり出て、窃と夫に目配すると、直ぐに膝を四つ叩いてお見せになる。解りましたと腹で承知して、勝手に下り御酒の支度をする。宅では客のある時、主人から暗號を與へて貰ふ。其は膝を叩くので、一つがお茶煙草盆、二つが御菓子、三つが御飯、四つが御酒。是で行ると本統に躰裁の善いこと。御肴はオムレツに刺身、——刺身丈魚屋へ行て誂へて來る。

午后二時御歸去になる、大層お醉ひなすつて。

其と摺違ひに玄關に俥が駐る、誰方かと思へば、今度は私のお客で、學校朋達の山本さんが久し振で入らしつたので在た。大層立派な品の善い奧さんにお成んなすつたこと、昨日仙臺からお歸りで、しばらく御無沙汰をしたから久振でお目に懸りに來たと仰有る。お土產にわざ〳〵鯛味噌を持つて來て下すつた、其の心盡しが何より嬉しい。御一緒に卒業の時に撮つた紀念寫眞を今更のやうに御覽に入れて、いろ〳〵と學校時代の事を思ひ出す、昔のお友達は何時までもお懷しいのね、なぞと言つてシミ〴〵とお話する、私共へも何うぞ御來で下さいと仰有つて、お歸去になる。あゝ、お美しいお姿!

夫は夕刻より琵琶の會があるとかで夕飯后間もなく御出ましになる。

夜、實家の阿母さんが梅ちやんを連れてお入來になる、一月振で當に結ふて戴く。阿母さんのお話に、梢

さんはとう／＼お死去りなすつた相だ、お可哀相に、あちらへ被嫁つて未だ間も無いのに……だから御前も病氣をしない樣に、養生しなくつては不可ませんよ、是からは尚更寢冷えして風邪引かないやうにつて子供に言ふ樣なことを仰言る、親は何時までも。梅ちやんにお芋を西京燒にして御馳走する其を喰ながら、阿母ちやん今夜歸りに姉ちやんの樣な帶を買つて頂戴よと頑是ない事を言つてゐるあゝ、私もつひ此間まで梅ちやんの樣な我儘を言つて親に世話を燒かしたものだつたのにと、お歸りに成てからも、つく／＼思つた。



風俗十二ヶ月（七）里がへり

いろ／＼お催があると見えて夫の御歸宅が遲い。往來は旣う人通りがなくなつて、妙心寺さんの犬が頻りと吠えてゐる。

十一時過ても、お歸宅がない。何處かへお廻りに成つたかと案じてゐると、玄關に「お歸り」と俥屋の聲。

珈琲を入れて進げて、すぐに休む、十一時半。

十月十日（月曜日）

ふきぶり、

今日は朝から北風が吹いて甚い大降、雨戸も樋も、山吹も南天も、萬年青の鉢もびしよぬれ。

七時過に漸う／＼御目覺に成た爲め、あはてゝ御支

度なさる。俥をお勸め申したなれど、要らぬと仰言つて、外套を召してお出ましになる、こんな日の御出勤は御大抵ではあるまい。

九時頃、伊勢屋の小僧さんが御用を聞きに來た。是も職業なればこそ、降つても華客廻は缺かさない、感心なもの！　柿の殘つたのが有たから剝いてやる。

例のを五合丈吩咐る、斯ういふ日は一倍疲れて歸つてお來だらうから、——これは無論献立以外。

ドレ私も自分の職掌に取かゝらうと縫掛の羽織を持出す。こんな天氣の時は暗くて遣り難いのだけれど、書齋丈は少し明るいから、其處へ持て行て切々と針を運ぶ。お陰で午前に仕立上つて了つた、お歸宅に成たら着て見て戴かう。

午飯を喰べてから、靴下を編み始める、私が來てから是が五足目、温和しい方に似合はず歩き方がお荒いから。

名古屋の太田さんから私にあてゝ大層長いお手紙が來た、どうしても田舍は可厭だ、二人共東京の學校に出たいから、宜しく御周旋を乞ふとのお依頼、早く何うか爲て上げたいものだ。夫も心配なさらぬではないが御夫婦共一緒に呼び迎へる樣な口は滅多にありはしない。

神田の山本さんからもお端書が來た、昨日入らしッた御禮の御言葉、御手も仲々見事だ。

四時頃雨が少し小降に成つた、と思ふと最うソロソロ商人が遣つて來る、献立表に據て肴屋の半平を取つて置く。是で玉子綴を拵へるとして、御酒のお肴には買置のスルメを甘煮にして上げやう、さう〳〵、其が宜からうと襷掛になる。

雨天の故か、最う日が暮れかゝる。洋燈の支度をしてゐると、そこへお歸來になる、濡雫に成つて。御困りでしたらうと申上ると、何、是式の雨に、戰爭へ行てる人もあるんだと嚴い仰言りやう。

六時夕飯、お膳の上の銚子を御覽に成つて、是は有難い、思ひ掛けない御馳走だと仰言つて、大層お旨し相に召上て下さる、是でこそ私の志も通るといふもの

宵の内御書見なさる、私はお傍で編物を。何だか寒い晩。

雨も降るしするから、常より早くやすむ。九時半。

十月十一日(火曜日)

夜來の陰雨はカラリと晴れた。昨日に引替へて好いお天氣だから、早起の爲榮がある、夫も早くからお出ましになる。

八時まで張物をする、御隣でも矢張爲て入らつしやるやうだ。

例の八百屋が來たあと、衛生組合から今月分の組合費を集めに來る、四錢五厘渡す。

すると今度は氷川神社から月掛の一錢を取りに來てお札を置いてゆく。

それから物貰ひが來る、齒入屋が來る、西洋洗濯屋から用を聞きに來る、天氣になるといろんなものが遣つて來るものだ!

おひるすぎ、少し暇になつたから、新聞を讀んで見る。二面を見ると「勅語を衆庶に賜ふ」としてある。戰爭は容易には濟まぬ、しつかりして掛れとの御趣意、畏多い事と思ふ。私達も何ぞ御奉公になる樣な事かしたいものだ。愛國婦人會のモット、モット平民的のものが出來ると良いのだけれど。それから三面では黑法師と云ふ人の「新細君」追々面白く成つて來た。

三時頃、齋藤さんからお重の内をお遣はしになる、御使ひはいつもの女中。入物を御返しやうと思ひ、奥へ持て來て開けて見ると結構な御手打のお蕎麥、けれど何うした加減か、ベト／＼で餅のやう。是はマアと可笑しくも成つたけれど、折角の頂戴物、宜しく御禮をと言傳て女中をかへす。後でよく見れば見るほどお蕎麥の形はない、さりとは隨分お珍し過ぎるものを下すつたものだ、他樣へ進げるものは氣を付けねばならぬものとつく／＼考へた。

張物を剝がして、是から晩の支度をと思ふと、もうお歸宅り、今日はいつになくお早い。

まもなく碁のお友達の横山さんが入參しッた。例の暗號で御夕飯を出せと仰言る、けれど生憎御飯がかつ

かつなので、少しまごついた、恰度貰ひ物のお蕎麥を思ひ出し、何うかと思つて上げて見たら、是は結構、珍らしいものと仰言つて、澤山召上つて下さる、マア宜かつた。

お茶を召上ると、直ぐに碁が始まる。此の方の癖としてチョイ〳〵私の方を、見る樣で見ない樣な特別な目付で御覽なさる、いやなお方！ 何時ぞや夫に向つて私の事を掘出物と仰言つたさうな、人を道具か何ぞの樣に安く見てお在なさるから惡らしい。

急にはお仕舞になり相もないから、お茶を注れて上げて置いて、ちよつと御免を蒙り、お湯に行つて來る歸つて來てからも、未だ前の丶片が付かぬらしい、御手間が取れるものだこと、もう善い加減にと欠伸が出さうに成つては嚙潰す苦しさ！。

やう〳〵十一時過に成つてお歸去になる、散々敗北なすつた相な、好い氣味！。

夫をお臥らせ申して、お門を締めに出て見ると、サツと光が射してゐる良い月夜、と思ふと然うではなくて吊提灯を提げた人の影、ハッと思つて仰山に逃げ込むと外では笑つてゐなさる、見ればお隣の女中ではありませんか、隨分きまりが惡かつたこと、後で考へるとをかしくて〳〵……。

十月十二日（水曜日）

お出ましに成たあとへ、お國の父さんからお葉書が來た、拜見すると

こちらは何も變つた事はない、心配するな、お前方も達者で何よりぢや、二人共睦じう暮して末の繁昌を樂しむが可い、何しろ今の內は氣を揃へて稼ぐが大事だ、俺も此頃は暇ぢやから歌ばかり讀んで居る餘り讀んでばかり居るので、短冊が無くなつたから榛原のを送つて貰ひたい、是が用だ。

と例の面白いお手紙、お歸宅に成たら早速御覽に入れやうと思ひ、書齋の机の上に置く。

御手紙の事から思ひ付いて、書留めて置かうと筆を執つたけれど、仲々纏らない。

座つた序に紺屋へ催促の端書を書いて、角のポスト

へ入れて來る、注文通りに染つて來れば宜いが。

十時頃、丸井さんの奥さんが御訪ね下すつた。誠に氣捌な方で、臺灣に御出の時分のお話や嫁にいらつしやりたての古いお話や、姑で苦勞遊ばしたことなぞお話になり、本統に貴女はお仕合せよとしみ〴〵仰言るそれから種々面白い世間話をなされて正午少し前お歸りになる、仲々お如才ないお話上手のお方、交際馴れた方は何處か違ふもの、私なぞは足元へも……と思つた。

何ぞ御饗應をと思ふたのだけれど、お客樣を置き去りにして買物に行く譯にもゆかず。一人では斯う云ふ時に困つて了ふ。



風俗十二ヶ月（八）産屋入り

夫は早くお歸り。すぐと御端書を御目に懸ける。

今夜のお菜は何かと献立表を見ると雞肉スープとあるのでいつもの鳥屋へ行て見たが、生憎賣切れ最う一軒の方へも行て見たけれど、こゝにも無い。仕方が無いから歸つて來て、事情をお咄し致し、明晩の牛肉と繰替へて下さるやうにと願つたが、頑として御聞届がない、一旦献立表を定めた以上は何が何でも斷じて厲行せねばならん、何處へでも行て搜して

來いと仰言るので、到頭十二三町もある三田の通りまで、行つて、やつとのことで買つて來た。其が爲め夕飯の時刻が大層遲く成つて了つた、是こそ所謂自繩自縛、飛んでもないものを設けたものだと思つたけれど此位の我慢をしなくては家庭の規則が立たぬと思ひ直して、言ひたい不平も言はずに了つた。

夕飯后、あと片附をしてゐると、突然、今夜はお會式で賑やかだから、散歩かてら日本橋まで行つて阿父さんのお誂へ物を買つて來やうと、仰言るので、支度もそこ〳〵、家を締めて一緒に出る。

細い細い三日月が丁度上野町の黒い木立の上に、遠く近く會式に詣く太鼓の音が聞える。

三田から電車に乘ると、折惡しく横山さんが居なすッたのには何だかきまりが惡かつた。

歸途には聖坂の下で、暫らく立止つて、萬燈の來るのを見て居たが、途切々々に來るばかり、今年はどうしたものかいつも程にぎやかでない。

家の前まで戻つて來ると、お隣家の時計が最う十一時を打つてゐる。

大層遲くなりましたこと、言つて門を潜つた時、急に吹出しさうに成つた、昨夜の提灯の事を思ひ出して。

あゝ今日は草疲れた！、けれども面白かつた！。

明日は夫の誕生日、お赤飯でも炊きませう、神田の妹さんも來なさるだらう、妹さんは長唄の吾妻八景がお上手、久振で彈いて戴かう、夫も例のお聲を聞かして下さるだらう、私はバイオリンでも……十一時四十分過ぎ明日のお米の仕掛をへてしるす。

# 育兒一ヶ年の經驗

松山俊子

九月八日、愛兒第一回の誕辰を迎へて種々の感想が腦中を往復致します。初めて母となりし者の初めての經驗、世の母親達の御參考などゝは思ひもよらぬが、唯だ秋の長夜の御笑ひ草にてもと、滿一ヶ年の經驗の

一二を思出づる儘御話致しませう。

△誕生の當日

妊娠してより次第次第に身重になり、種々の事を思ひ續けて暮せし間に早や臨月と成りまするや、出産は何日頃であらふ、其折の苦みはどれ程のものか、呱々の聲を聽た時の心地は什麽でせうかなどと思ふて見たり、或は又た出産は婦人の大難と云へば、萬一難産でもあつて其儘になりはせぬか、不幸にして難産であつたならば自分は什麽でも忍耐するが、生れる兒は健全であつて呉れ……男だらうか女だらうか、神の



風俗十二ヶ月（九）香いれ

授物なれば、何方でもよい、唯だ滿足な兒が出來てくれ……男ならば名はこうの、女ならばあゝのと思ふたり、果ては將來の敎育法の、嫁入仕度のと二十年も三十年も先のことまで思ひ越し、氣が附て獨微笑む事も度々でありました。

思ひ返しまするると九月八日の朝、良人が公の用務で家を出らるゝので玄關まで送らうとした、何となく腹がつり足が重いので室を出るさへ困難でした、産の爲に十日許り前から來て居て呉れた生母は「或は今夜催しがあるかも知れんよ」と申され、良人も靴を履きかけて「オギ

ヤアの聲を聽きますかな、嬰兒に宜しく〳〵など〻冗談言ひつ〻出て行きました「まさか今日は」とは思はなかつたのでしたがお晝に近ふなるに從つて腹の工合がいよ〳〵變でしたから「或は」と考へ脫漏なく準備をして居ると晝飯時分より益〻激しく痛み出し午後一時三十分頃になつてオギヤアの聲を聽きました、これが愛兒の始めで此世の空氣を呼吸した初めであつたのです。夜に入りて良人は歸り來り、嬰兒の橫臥せるを眺め且つ生母とも何か話して居りましたが、種々の用を一通濟まして後皇天の恩惠を感謝致しました。

かくて最初の一週間許と云ふものは身体が疲勞して居るので、中々よく眠りましたが、母や良人は種々働いて與れましたから、萬事都合よくゆきました、併し命名には大に苦心したそうです。尤も誕生前から、略ば定めて置きましたが、愈々となると中々決定が出來ません、遂々此七日目まで定らずに居りました。けれども出產屆も愈々其日に出さねばならずとて、遂に〇〇と決定しました。

それから嬰兒の寐床は最初より別にすることを確守し同衾を許しませんでしたから、これが習慣となつて、今では一人でなければ安眠しられない樣です、さて此頃の私の乳の分拆表は左の如くて一般の例に比して良い方で御座いました。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 含窒素物 | 二、一五 | 脂肪 | 二、七二 |
| 乳糖 | 六、五二 | 無機鹽 | 〇、二七 |
| 養分比例 | 二九、五 | | |

かくて二十一日間も至つて經過宜しく、瞬く間に一ヶ月を過しました。

さて上述の如くにして生れた嬰兒が、其後第一回の誕辰迄のことを掻摘んで申上ませうなら、

△身體の發育及び動作

見舞やら喜びに來て與れた人々は嬰兒を見て、常陸山々々と申ました、これ比較的肥大であつたからだと思ひます、左に其一二を申まれば、

| | |
|---|---|
| 三ヶ月目 | 一貫七百五匁 |
| 五ヶ月目 | 二貫十五匁 |
| 八ヶ月目 | 二貫三百五十匁 |
| 十ヶ月目 | 二貫四百七十匁 |

十二ヶ月　二貫六百十五匁

鳥渡御斷り申て置きますが、上述の量り方は、孰も醫師にして貰ふたのでして、一度も自宅では致しませぬ

▲身長

| | |
|---|---|
| 三ヶ月目 | 二尺余 |
| 五ヶ月目 | 二尺一寸七分 |
| 八ヶ月目 | 二尺三寸五分 |
| 十ヶ月目 | 二尺四寸 |
| 十二ヶ月目 | 二尺五寸六分 |

右の如くで體量も身長も、三島博士の調査されたものより、少しつゝ増して居りました。

○動作　に就きましては、日常多忙なる身とて豫定の如く充分に取調べることが出來ませんでしたか、正



風俗十二ヶ月（十）かつぎぞめ

當に認めたのは大要左の如くで御座ひました（三島博士の製せられし表を摸して編めり）

| | |
|---|---|
| 首をふる | 九月中旬（一週過） |
| 自ら首を眞直にす | 十二月中旬（十一週頃） |
| 握ろ | 一月中旬（十七週前） |
| 身體の上部を眞正にす | 同上（同後） |
| 物を示す | 五月上旬（三十四週頃） |
| 匍匐 | 七月三十日（四十七週過） |
| 物につかまりて起つ | 八月下旬（四十九週頃） |
| 同歩む | 同中旬（五十週頃） |
| 捉りなしに起たんとす | 同下旬（五十一週頃） |

右の如くにして、一體に一般の嬰兒よりは遲し、これ

一は初生兒なると身體比較的に肥大なるに據ると小兒科專門醫は申ました。何にしろ近頃は亂暴に成たので傳役も殆々閉口いたします。

△精神作用の發達

此調査は殊に困難で、到底正確に認める事は出來ませぬ、唯注意した點丈を申せば左の通り（プライエル氏の研究表に從ひて編す）

味官、嗅官　は當初よりなるは云ふ迄もなし

| | |
|---|---|
| **聽官** | |
| 子傳歌を聽くものゝ如く見へしは | 七週目頃 |
| 音響のする方に首を廻ぐらしゝは | 十週頃 |
| **觸知** | |
| 冷熱の區別を覺知せしは | 初日より |
| 自他の手の別を知れるは | 廿一週頃 |
| **視官** | |
| 眼の微動を認めたりしは | 初週より |
| 物の動くに從ひて眼を動かす | 六週頃 |
| 明と暗とを見別けしは | 十二週過 |
| **反射的運動** | |
| 欠伸 | 初週より |
| 溜め息をなす | 廿五六週より |
| 浮手を知らする者の如し | 四十五週頃より |
| **好惡** | |
| 母を見て喜ひ又機嫌直る | 十五週頃 |
| 笑ひ初め | 六週の終 |
| 聲を立て嬉々として笑ふ | 二十週頃 |
| 唱歌につれて手を拍て嬉笑す | 四十五週頃 |
| 好惡の表情の明白なるは | 十二週頃 |
| 飽て乳房を離す | 二十週頃 |
| 物眞似する運動 | 三十週頃 |
| **記憶** | |
| 父、母、子傳なとを覺ゆる | 三十週頃 |
| 鳥の鳴く音、ランプ、物賣の聲、玩具等の所在、等を知り聞けは指示す | 四十四週頃 |

元來私共の養育法は、出來る丈自然に、切言せば寧ろ野生的なれば、物を敎ゆる等の事は嚴に禁じ居れども、可愛さに思はず禁を犯すことなきにあらず、兎に角に嬰兒の敎育の實行は理窟通りに參らぬもので御座ひます。

△衣服及寢具

衣服に就ての理想は隨分御座ひました、乍去之を實行するには中々困難で、思ふ半分も出來ませぬ。私のした事を少しく申上ぐれば、

一、衣服は絹物類は到來のもの唯だ一重ねなるのみにして、購入したことはありませぬ專ら木綿類の輕暖なるものを數多く製する樣にして居ります。

二、製法は大抵自案の改良服であつて帶は未た全く締めさせませぬ、これ一つは前の開かぬ爲めと腹部を壓迫しない樣にする爲めで、敢へて珍らしい事ではありませんが、鳥渡、

三、襁褓はすべて新しき白色のものを用ひて古着などは一切用ひません、それに此洗濯に大に注意を拂ふて居ます、で御座ひますから中々に手が懸りました。



風俗十二ヶ月（十二）麻うみ

四、寢具に就ては思ふ程實行は出來ませんでしたが敷蒲團は懸ける物よりも注意して居ますそれから懸ける物も毛布を使用しますが寒くなりまして普通の夜具の袖の無いもの、例へて申さば襖の樣な形のものを用ゐて居ますが、重くもなくまた肩もよく蔽ふるが出來ますので中々宜しう御座ひます。

五、寢衣は綿の入つたものは一切着せませぬ、大概ネルで、時には袷衣を用ゐます、これ寢苦しくない樣にする爲ので御座ひ

ます、先に申上た通り獨寢をさせて置きますから寢冷しない樣に注意するのは中々困難で御座ひます、殊に活動の激しい今日此頃は猶更……

### △飮食物

私の乳が大層出がよいので、牛乳も始めの程一週間許りは用ひましたが、其後普通の食物を與ふる樣になる迄即ち十ヶ月目頃までは殆ど牛乳等を用ひませんでした、併しこれは失敗でした、何となれば私が病氣であるとか、乳に少しく異狀のあつた時に牛乳を與へ樣としても中々呑みませんでしたから、併し他の食物を少しづゝ用ゐる樣になりますまでは、此憂ひのなかつたのは實に天幸で御座いました。

普通の食物で用ひ來つたものは、左の品々で御座ひます。

パンを牛乳にて煮たるもの
鷄卵を入れずに造りしクリームの柔かきもの
稀薄なる粥(今は普通のもの)
砂糖のなき薄く柔かき煎餅
ビスケットを溶せしもの(原形の儘を與へては中々危險です)

段々成長して離乳期も近いて來ましたから、牛乳を與ふる必要があるのですが、前申た通り其儘ではいやがりますから、前述の食物の中に入れて與へた爲に、今は喜んで呑む樣になりました、さて其牛乳は小兒科醫の言に從つて適度に薄めて用ひましたが今はさる事は致しませぬ、煉乳はフオーク印か、ネツスルを用ひました、尤もこの煉乳は夏中丈で御座ひます。

敢て自慢をするではありませんが、今日に至る迄飮食物の爲に腹を損じたことは全くありませんでした。現今は中々大食で乳の外に粥は一度一小碗一杯つゝ三度は乾度食します、時間のことも出來る丈嚴重にして居るのですが、併し中々豫定通りには參りませぬ。

一家族の食事中は誰か一人が世話して居つて決して食卓の邊には置きませぬ、これ彼の無暗な物を欲しがるを防ぐ爲めで御座います。

### △運動、言語及玩具等

屋外運動は晴天の日乳母車なり抱くなりして表に出ますか、これは中々パンクチユアリーには出來ませぬ

乳母車も誕辰後に買ふたので、その以前には大に必要があつても調へませんでした、これは彼の腦に大なる影響を與へらるゝと思ふたからです。

寢眠は大抵午前十時午後三四時頃で夜は七時頃から安眠し、身體に異狀あるか淨手の時ならでは起きませぬ、萬一目さます事があつても出來る丈靜に眠らせます、乳は欲しがつても大抵はやりません。

彼は玩弄物破壞の名人です、で御座いますからセッセし後樽を與へます、が大に困難する事は我國の玩具は十中の八九迄嬰兒に適當しない事でそれにはほとほと閉口で御座います、茲に於てか大に玩具改良を叫び、大に改良せんことを切に望む次第であります。



風俗十二ヶ月(十二)歳暮

序に申上ますがわが愛兒のけふ此頃の智識(?)を申上ますれば大抵左の如くです。

オンモ　これは屋外に出でんとを欲する時の音△ウマ〳〵　乳や食物を望む時△カー〳〵「鳥は」と申すと屋外を指して申ます△ターチャン　父を呼ぶ(折々です)△モー〳〵　傳者が「桃から生れた桃

太郎ー〳〵」と歌ひ出す時と、彼は大抵かく云ひて手を拍つ
其外折々妙な言をなして私共を喜ばせます、それから
「アップ」はと云ふと屹度自分の頭を指します△「ハメノ〳〵」と云ふと
掛け聯れし旗を教ゆ 「ホープ」と云へば籠の文鳥を示す
など色々ありまして近來は「トットノ目」も「アワヽ」も中々上手です、電車はと云ば手を左右に打揮る等日々變化し進歩して行きますが、私共の責任の重きをも愈愈深く感ぜられます。

△疾病

嬰兒の少し重き病に罹つた事は一度即ち今年の殘暑の候でありました、當時一二度は徹夜して看護する程でありました、これは私共の不注意もあつたでありませうが、一つは氣候の變化の激しかつたのが大源因であつたと思ひます。良人が當時の狀態を記せるものあり、今左にその數節を寫しませう。

▲發病の原因　數日前より嬰兒は身體に稍異狀あるものゝ如く動作平日の如く活潑ならず、發汗の如きも彼が肥滿せると暑氣烈しきが故のみにあらざるが如く感ぜざるはなかりしも彼や生れしより愛に十ヶ月有餘、種痘、痲疹の如き難關も、意外に輕く、知らざる中に過せし程にて、今日に至る迄微恙さへなかりしが故に、前記の如き徴候も、さまで意に止めず、輕微の感冒なるべしとなし、僅かに之に備へしのみ。然るにこれ我等の失策の甚しきものなりき。嬰兒は外出を欲し且つ電車の往復するを見て無上の樂みとなしたれば、常に之を以て慰めぬ、一日客あり遠くより來り、大に嬰兒を愛し、夕餐時涼風稍強き頃、彼を擁ける儘外出しぬ。當時其不可なるに注意せざるにあらざりしも、他にも來客あり、且つ珍客なれば素氣なく之を止むるの禮なきを思ひ、之を默過したり。これまた我等の失策の第二なり。彼や珍客に相違なしと雖へども、愛兒の健康を犧牲に供して迄も歡迎せざるべからざる義務なかりしなり。然るに一は兒の日常の健全に慣れし結果と、虚禮を守りし爲めに、遂に彼をして意外の重患に陷らしむるに至りぬ。

▲病狀　此夜嬰兒は大に咳き、呼吸稍苦しきものゝ如く、又た躰温少しく昇騰したるを見しも、さまでの苦痛なかりき。翌朝に至るや彼の元氣は頓に減じ、熱高く發汗また甚しく、呼吸切迫し靜かに横臥し能はざるものゝ如し、依て直に專門醫の診察を請ひしに、兒は實に氣管支カタルに罹りしにて、午後に至りて其左右を犯し、肺炎に變ずる危一髮となりぬ。脈搏百十六躰温三十八度七分。

▲苦惱　かくて彼は一日一夜非常なる苦惱にて殆ど靜止せず、また安眠する能はざりき。此時に於ける父たり母たる我等の心中、己れ病めるよりもつらく、恰も身を裂かるゝの感あり徹宵して看護すれども、彼は未だ言語を發する能はず、唯だ煩悶するのみなれば、殆

ど手の下すべきなく、其經過の如何に心を勞したりき。かくて翌朝に至るや熱度はさまで減退せざれども、意外にも彼は極めて靜穩にして、殆ど一日眠りぬ、こは昨夜の疲勞と病稍閑となりしか。

▲輕快　かくて一日を過しぬ。醫師至り診して曰く意外々々、非常に病勢を減じぬ、これ一は嬰兒の體質健全なるが故なるべけれども、また足下等が我の言をよく守りて看護されし結果ならずんばあらず。入院更に要なし、唯だ靜かに療養せしめよと。肺炎に轉ずる關係を入れざりし嬰兒は幸にして此事なくして止みぬ。我等豈に感謝の情切ならざるを得んや。余は茲で皇天の恩寵の優なるを謝し、且つ親として大なる試錬を與へ給ひしを感謝しぬ。云々

さてこれより、私共の育兒日誌の事や、其折々の祝日、或は我家の嬰兒中心主義なることなどに就ても申上げたいことが澤山ありますが、下手の長談義大に飽かせまつりしを思ひ、いづれ後の日を期することゝして、今はこれ丈に止め、折々嬰兒の傳歌にせんとてゝには もあはぬ文字を聯ねし寐言樣のものゝ一と、經費概目とを記し、一とまづ筆を擱くことゝ致しませう。

△諸經費

經費に就ては遂に詳細に調査する事は出來ませんでしたのは殘念です。併し大抵左の程度で大した差異は御座ひません。

| | |
|---|---|
| 出產準備費 | 十五圓 |
| 出產費 | 三十圓 |
| 內（產婆の謝禮、診察料、車代 | 十圓 |
| 　產婦の藥品、飲食物、其他） | 二十圓 |
| 誕生祝費（配物、及祝筵等） | 十五圓 |
| 雜費（郵便、屆出、小器具等） | 五圓 |
| 臨時手傳人謝禮等 | 二十圓 |
| 合計金九十五圓 | |

嬰兒に關する既往一ヶ年間の費用もまた明確に計算し得べからず、何となれば一家のそれと分つことが出來ぬものもあるからです、併しそれをも見積れば、

| | |
|---|---|
| 嬰兒費（既往一ヶ年） | 八十七圓 |
| 內　飲食物、被服其他 | 四十八圓 |
| 　　玩具費 | 五圓 |
| 　　臨時費（醫藥其他） | 十圓 |
| 　　嬰兒の爲の貯金（一ヶ月二圓） | 廿四圓 |

愛兒は日々智惠づき、月々に變化して行くにつれ愈私共の責任が重くなりますが、私は及ぶ丈勉强して我國の育兒主義即ち「注意して放任せよ」を實行して行くつもりで御座ひます。

（完）




# 錢の足

双美生

今は昔、我が幣政の銀貨本位を改めて金貨本位とせられし頃の事とかよ。

お飾の數を額の皺に疊み込みたる隱居老婆の臍繰巾着を暫時の宿泊と頼み、身を寄せたる二人の男ありけり、一人は壹圓銀貨と呼ばれ年頃三十許、色は雪を欺き、優にやさしき姿は光る源氏の俤も斯くやあらんと思はるゝ美男子。又た一人は一厘錢と呼ばれ生時は寛永と歳經れど皺一筋も寄らで矍鑠な武骨老爺、色炭に似たるは世に謂ふ鐵光の本場か、又の名は一文錢、御鳥目と綽名されしは圓い中に孔あるためなるべし、二個共に其の德の天下に炳然なれば諸人之を天下の寶と崇めて隨喜渴仰、上なきものと難有がりぬ。されど同類相嫉む商賣敵のことゝて銀貨の男は一文錢の老爺を嫌ひ、一文錢の老爺亦た銀貨の男を憎む、斯るが故に曾て同席せしことなく、若し共に蟇口に住むことあれば、銀貨の男は必ず部屋を別ちて曾て夫婦の語ひも念友の契もなし、然るに今や二人が旅寢せる此の巾着は別に坐敷の設もあらぬ荒屋なるに、折ふし憂事ある身の友懷かしく、互に寄添ひ花にもあらず月にもあらで行く春の夜の我にはつれなきを恨み、己がじゝ思ひ

の丈を語らひける。
何と爺殿聞かれずや、この度日本の掟改りて、我等も爺殿も諸共に世に用無きものとなり、淺猿しや來年よりは我等が天下金貨の兄に奪ひとられ、我子の五十錢、二十錢、十錢の三人のみ僅に此の世に生殘りて餘命を繋げど、それさへ黄金の光には肩身が狹く、如何に天下は廻り持とは云ひながら變り行く錢の末こそ悲しけれ、爺殿の樣に寛永に產れて幾久しき長の年月命冥加に生延びたる身は此の世に未練もあるまじけれど、まだ三十に成るや成らずの勘平此世をば見果てぬ夢の醒めてし如く、果敢なく棄てゆく我身こそいとゞ哀しさ遣瀨なさ、されど是れも定まる宿緣の我等の力に及ばねば今更女々しく人も恨まじ世も喞たじ、さりながら冥土の旅出も近きにあれば、我等が是迄渡り歩きし道芝の數々、互に話し話されつ、此世の名殘の語草、いでや我より始めてん。
我等御互に人の手を借り浮世を渡るが職掌なれば、天命ならで賴み難なき人命のまゝに、今日は巾着に宿借るも、明日は誰が店の錢箱やら、その又明日は何處の蟇口やら、行方定めぬ身とは言ひながら、願ふは沈香のにほひ床しき貴人の手にもや觸れて、面白可笑しく暮したやと念じゝ事の徒ならで、天運よくも、粹で高尚で人柄の善い者にいとしがられ、洒落れた所にのみ使はれて、爺殿の樣に道傍に兩手差出す乞食風情を始めとし烏羽玉の暗路を辿る車夫が草鞋の代や蠟燭代、お三諸共に勝手口窃り出でゝ行過ぎむ間の豆腐買など、さる賤しき御用聞きし事なし、一年ある御屋敷に住み込みたる折は、手提革鞄に入れられて何時も若殿の御供となり、表玄關を公然と、走るに騎馬あり、自轉車あり、乘るに馬車あり、腕車あり、四季折々の物見遊山に花車風流を盡し、時に若殿の齒の浮く語も聽きながらも、侍女嬖妾の優姿に眼を喜ばし、世に有る程の氣樂を仕盡せしが、已むなき事の爲め其家を暇取り、御用商人の手に渡りてよりは、それからそれと役者、落語家、藝者、女郎、種々と可笑味ある人の懷のみ經廻りて、芝居、人寄席、待合、船宿は言ふまで

もなく歌舞と管絃の妍を爭ふ廓の內、茶屋、揚屋、粋な家のみ往來して、面白き事の限りに逢ひ、我ながら已が果報に驚き居けるが、不圖田舍大盡に伴はれて、遠き越路に下りて、藏の金庫に押籠められて、さらぬだに雪國の寒く心細げなるを、烏羽玉の暗さは暗し、冷たさは又格別の其中に、五年の憂き月日を詫住居、籠の鳥かや網の魚、牢屋に繋ぐ囚人の苦しさ忍ぶ身の罪重きにや、配所の月さへ日さへ拜まれず、是といふも遊興三昧に贅澤爲過ぎし我身の尤、あな恐ろしの天罰と身から出たる錆をば悔みしが、さりとても馴來し方の花も忘られず、娑婆の風をも偲ばれて、今一たびは出たや此の藏、見たや浮世をと思へど、何と詮方泣く〳〵も憂を堪え〳〵し六年目、藏を破りて押入りし盜人の爲めに救ひ出され、行方白浪北の海、渡るは鳥の舞鶴に、頓て岡目や高見見物賭場の狀、一六勝負チヨボ一や采を伏せたる賽の目の偶か奇かを爭そふ聲の姦しさ、此處を先途と戰ひて虛々實々の秘術を振ひ、勝つて圖に乘る、負けて焦、取るものあれば取らる〻も、荒々しき此の戰場我唯一人縱橫無盡に驅け廻る面白さに、我を忘れて遊び居たるに、チラツと見ゆる巡査の影、パツと散り行く賭博仲間、すんでに我は贜物の嫌疑受くべき危き所を博徒の一人に掻攫はれそこを遁れて玉鉾の道を急ぐに、哀しや我のみ蕀の繁みに辷り落ちければ淋むしき路頭に野末の露の消え入る許の心地にて待てど暮せど、そよ吹く風のそよとだに音づるものも訪ふものも絕えて荒野の虫許、その翌朝やうやくに里の農夫に拾はれて、直ぐに鍬買ふ代となり、舞鶴町の金物屋の店に据はりて嫌に堅氣と聞えたる樫の錢箱に、入婿の身となり、や〻暫らくは辛抱せしが、程なく主人の腰につき、好かぬ錢箱緣切つておさらば〳〵と西京さして旅立ちけり。

されば其より名にし負ふ西京の賑はしさに心も狂ひ身も狂ひ、日中は芝居、夜はお茶屋、藝子舞子の麗しき花の姿に憧がれて、二日程を現に遊び暮したるが原にて、惜しや我身を磨り耗らし、憂き艱難の樣々に零落果て〻、身の振方のよしあしも知らで難波の津に漂

り、道頓堀なる角屋といふ汁粉屋に丸き我身を住込ましぬ、されば餡の加減は甘さうなれど我身は紫蘇の藥味も知らず幾日を其處に、隱居の婆の巾着に納はれて、難波津に咲かで此身は冬籠り、何時かは春に逢坂や、葦分小船の障多きに隔てられ、一年を其家に侘びしく暮しけるが、翌年の夏景色、三度笠横手に被りし富士詣の道者同勢十五人の汁粉の勘定に、我等銀貨の代理人五圓紙幣の釣錢として受出されければ、世に慈悲ある道者の心の忝けなく、嬉しや我も旅の道連となりて東海道の名所々々を經廻るならんと思居たるに、さはなくて奥庭深き縞の財布にくるまりて胴卷の肌臭さ中に衝込められ、暗より暗に連れ行かれ、西か東か夜か晝か我身ながらも無我夢中、さるにても滊車にや乘りたらん、氣笛の聲數々起り、道者衆が折々珍らしい頓狂聲して、琵琶の湖水や、名古屋の城、それ天龍川、大井川、富士は見えたか、など語らひ合ふも我には見えぬ哀しさ、軈て鈴川と呼ぶ驛夫の聲と諸共に滊車は止まり、我はとある宿屋に連れ行かれ、肌に着きたる其儘に一夜の間恐ろしき鼾の聲のみ聞かされたり、明る朝の勘定に初めて胴卷より自由の身となり、日本晴の心地となりいでや是より富士の姿を眺めんと思ふ間さへも無情なる宿屋の亭主に抑へられ、口惜しや又た錢箱の穴より眞倒落しとなりにけり。

いかに爺殿さま〴〵の目に逢へば遇ふものかな、嘸や我身の來歷面白からずと聞飽き給ふべけれど、是からが花なれば兎にも角にも今暫時談話の續聞き玉へ、されば錢箱の底に銀の此身を埋らし、卑しき銅貨と寢起を共にし、玉石混ぜらるゝ口惜しさよ、無念を忍びて偏に亭主を怨み居たりしが、忽ち天運廻り來て五日目の夜といふに宿求めたる西洋人が情に、算盤取つて利を釣錢の亭主の手より救ひ出されて、連れ行から、停車場を一つ宛後に捨てゆく滊車の旅、やがて横濱にと着きにけり。

此の西洋人といふは丈高き男にて髮赤く目は青けれど、顏の色は我等にも劣らぬ白妙の富士の名高き、日の本へ漫遊の客、髯むしやでも我には恩ある命の親、

二には、おはよくば此人の腰に着いて、春風の音にのみ聞く倫敦巴里の繁昌を一見せばやと念じし事も空頼め、横濱にて金貨磅とやらにポンと引替へられ、名殘惜しくも此人のポッケットを離れ去りぬ、それより我は月給となりて銀行員の家に行き、盆の勘定に米屋に渡され、藪入の小遣錢となりて小僧殿に貰はるゝやら種々の可笑しきことにのみ逢ひけるが、終に十六日の朝、一年に二度の休暇と勇み立ちたる小僧殿に連れ出され、乗りてゆく滊車の輪轉の川崎驛に停止りし時、それ掏兒よと車内の騷動に、小僧殿も怖氣立ちけむ、懐に兩手差入れ我をば堅く戒め給ふ心根のいと殊勝しくも難有く、瞬く間に大森、品川も通り過ぐれば新橋や、渡り渡りて八年目、花の都の故郷に歸り來れる嬉しさは飛立つ許りの思ひにて、床し懐かし我等に緣の銀坐街・京と日本の兩橋も我を迎へて人形町、幼稚遊びも慕はれて、淺草橋や厩橋、心の勇む駒形堂を打通り、岩綱の行いては歸る雷門へぞ着きにける。

先づ觀音堂に懐中ながら參拜し、小僧殿と諸共に奧山に玉乘、輕業、犬芝居、都踊を覗きては日の長きをも忘れ、宮戸座の和好一座をも見物し、團菊二人の影坊主、まだ〳〵藝拙けれど久振、我にはいとゞ面白くこれより我は小僧殿の懐を別れ興行主の手に入りしが其夜圖らず小屋師仲間の散財に、此世の惡魔と呼ぶ浮れ女の手に入り、二世を契りし間夫にさへも渡されて簞笥の内の日陰の身、月日に何の關守なく歲つまれば此の身もつまり、永の暇を鳥が鳴く東橋なる呉服屋に住み込む身とはりなりにけり、去ば其より此家の隱居が頭巾求めて其の釣錢に、附き纒ひ來てまつこの如く同居の住ひ、爺殿と計らず逢ひし嬉しさよ、先づは是にて長々しき我が良の上話も舉へたるが、爺殿實にも味氣無の世ならずや、昨日今日變り行く瀨の飛鳥川、昨日よりはその泡沫と消えてゆく、錢の末こそ悲しけれ、これからは爺殿の番、いざ面白き話聞かせて我等が憂苦を慰め給へ、といふに一人は咳一咳しつ。

されば其事、我等の經歷話といふは頭領のやうな面白きにはあらねど、我も今度の改鑄に逢ふて五厘銅貨

に後式讓り世に無きものと成るの悲しみはいかで頭領の嘆きに讓らんや、いでこれから我も經歷話を一通り此の世の語り納めとやせん、我は知らるゝ通り寛永生れ、三百歳の壽命を生きながらへたれば、その間の有爲轉變、幾萬人の手に渡り、幾百回日本國中を經廻りしか、我さへ數へ切れざるを山鳥の尾の長々しきは欠伸の種、我は唯だ身に積み重ねし履歷の一節を夏の夜の短かく話し參らせん。

抑も我は今時の若い方とは素姓も產地も違つてあれば、志も自然と異り、一文二文とあはれはかなき身なれども、浮世を渡り兼ぬる人には重寶がられ、糊買ふ貴人にも便多かり、されば餘裕乏しき下流の人の手にのみ渡りて、頭領のやうに粹な場所にも洒落れた筋にも持囃されぬ代りには、我等を命の次に大事がる非人乞食の小屋には幾度となく出入し、一文と云はれた昔も、一厘と呼ばるゝ今も、權門貴族の玄關を潜る事を厭ひ、好んで多く貧家の敷居を跨ぎて、晩のお菜の鮭買ふ足となされたり、我等を湯水のやうに粗末にあしらふ贅澤者流とは一日も起臥したることなく、塵積れば山、一文から仕上げし儉しき人とは苦樂を共に爲たれど、曾て一度も月給となりて下りし事なく、日給となりて錢箱で投げ出され、賄賂となりて大人の家に往きし事なき代りには小遣錢となつて小供の手に渡り駄菓子買ふことには數々使はれたれど、綾羅錦繡、姬君樣の紙入に肌觸れし事もなく、生來の一酷、管らぬ保養沙汰を讐敵と心得、いつも堅木の錢箱に身を持固めて夢にも浮たる慰を思はず、されば一度も盜賊、掏兒放蕩男、猥連女の心を喜ばせしことなし、唯だ我は淸貧にして樂しむ如き人にのみ持扱はれて、徒草の露ほども身を濁せしこと覺無ければ、十返の松の命も保ち得たるぞかし、我が世渡りの内いとゞ嬉しかりしは賽錢となりて產土神や菩提寺に供へられ信仰厚き爺婆の細き心を安めては又た、汗水たらして稼ぐとすれど追付かぬ貧しき人の苦みを癒し、ばら錢に入りて二合のお米を前掛の蔭に忍ばする功をも知らで、世の人は我を一厘の老婆と蔑視めど些細ながら我が力にて廻らぬ

世帶に油さしたる例は幾何ぞや、富める人にても家の一隅に吊して利金の殖ゆるを喜び、門の敷石に打つけられては福の神の舞ひ込むを待つ、捨小舟寄邊渚に泣き暮らすあはれの孤兒、右や左の合力を祈る不便の不具者、今日は筑紫潟に、明日陸奥に彷徨ふて、身をも心も落着かぬ流浪人や物乞があはれを告ぐる手の內に我等が宿るを撫でつ擦りつ餘念なく、此身を命の綱と頼むぞかし、昔は我身一人にても隨分やつて行けたれど、明治の御代となつては駄菓子屋の鐵砲玉一つがやつとの身上、今に成ては五厘銅貨に切り上げられて果敢なくはなつたれど、我は此世を眞面目に送る志望、頭領は蕩樂三味に月日を重ね、品行定まらで我儘勝手に世を振舞ひたれば、銀貨の相場の下落るも其筈と京童に謳はれて世に用無き身と成り給ひぬ、我は世を辭してもよき年なれど、つれなき人と交りし功德にや、我等はなほも此の世に用あるか、今暫くは假の宿、釣錢となりて山の神、報謝となりて、乞食の手に往來するも主が主なれば窮屈なく、臂を曲げて陋巷に眠る、貧の交り亦た樂しからずや。

此の長物語ありてより一厘錢のみは暫らく此の巾着に殘りて蕎麥代の端錢にも出で行かざりしが、銀貨は何處に行きにけん影さへ見えずなり。巾着の內は間も無く數多の銅貨と交換り居けるとなむ。

## 雛祭人形天皇

乙女記者

花の三月三日は、上巳の節句とも桃の節句とも申しまして、女子ある家庭の祝ひ日であります、此の日、家庭の花の乙女子達に依つて催さる丶雛祭は、如何にも優美な毒氣のない遊で、其の可愛らしい罪のない處に幾多清新の趣味が溢れて居ります。

今、雛祭前後の模樣を御話し致しますと、先づ雛段の飾付、是は普通二月の晦日に致すのですが、若し初めての節句(產れて初めての節句)でありますれば、少

し早めて二月の二十五日に全然飾付を終る定でありま す、而して菱餅を白、草、うこんの三色に搗いて、之を八寸の重に容れ、兼て其の子の初節句を祝つて呉れた家々へ返禮として、贈るのであります、ソコデ三月一日より三日まで、御雛樣に膳部を上げ、尚ほ煎豆やはせ、白酒、菱餅、蛤等の御馳走を供へるのでありま す、而して其が濟むで四日になりますと、最終の御馳走として蕎麥を打ち、胡葱鱠を拵へて雛樣に差上げ、そこで又た來ん年の御爾見を約して、御一統に御退坐を請ひ、器物調度を撤去して、其晩に片付て了ふので御在ます。

却說話戻つて雛壇の飾付を申しますと、先づ天井には家の定紋打つた縮緬の幔幕を掛け、幕の絞には總角に結んだ房を下げ、其の下に五段に刻んだ雛段を設けて、之に赤い毛氈を布き詰め、上段の中央には小さな金屛風一雙を立て廻し、其の前に東帶姿の親王雛と、十二一重の王妃雛を、第一の御主人樣の樣に並べ、第二の段には左大臣、右大臣幷びに樂廳役の五人囃子、第三段には官女と隨身之に控へ、第四の段には各自思ひ〳〵の人形を陳列し、且つ御雛樣の御道具だと稱する簞笥、長持、挾箱、衣桁臺子、其他數々の調度を備へ付け、そこに美しい桃の花などを挿してある、扨て最下の第五段には御雛樣の膳椀盃、飯櫃、火鉢などを秩序よく並べて、豆煎だの、白酒だのが可愛らしい器に入れてあります、こゝで二三の小さい少女達が、御馳走を御雛樣に奉るやら、自分達で戴くやら、又は御客樣に煎豆の皿を出すやら、小さい御膳を薦めるやらして、まゝごとの樣に遊んで居ります、何と可愛らしい遊びではありませんか。左に當日の御獻立を示しませう。

## 雛祭の献立

- 平｛切身　椎茸　長芋　はす　紅蒲鉾
- 皿｛まぐろの刺身　大根の千にぼうふ　わさびの様
- 猪口｛煮まめ　或は　海の胡麻和へ　人参の白和へ
- 燒物｛わかさぎ
- 壺｛白味噌を濃く溶き　白玉に木耳の實
- 汁｛つみ入れ　實に豆腐と薺味を入れる
- 香ノ物｛奈良漬と　茄子の芥子漬
- 赤飯｛あづきめし

處で此の雛祭なるものは、何時の世から初つた事かと申しますに、古く源氏物語などにも此の遊びの事が出て居ります所から思ふと、平安朝の頃から有つたものと見えます、併し其頃のは貴族社會にのみ行はれたので、衣裳や何ぞにも仲々立派な物があつたらしいです、けれど今日の樣に三月三日といふ定はなく、何時でも勝手の時に取出して玩んだものでしたが、後世、陰陽師が三月上の巳の日に、紙の人形を造り、其で人の体を撫で擦り、罪穢を祓ひ淨めて後、河へ流す事が行はれました其が、戰國時代には一種の迷信より益々盛に成て來た爲め、遂に此の上巳の人形と雛祭の人形とが混淆して了つて、三月の雛祭といふ事が起つたらしいです、それから德川家が天下を戡定して國家安泰風俗華奢となつたにつれて、雛祭も盛大になり、立派な内裏樣だの、松竹梅の金屛風だの、金卷繪の御重だのが出來て、今日の樣に華美を極めるやうに成たのです。

一体此の雛祭りに就ては古くから、是は女が成長して後、善い夫を持つ樣にする爲の御祭である、又た其へ膳部など供へるのは、世帶を持つ時の素稽古であるといふ說が行はれましたが、私は此の意味に於てする雛祭を喜ぶのであります、即ち此の雛祭なるものは、儘事の大游ひとも云ふべきものであつて、女子教育に恰好の機會を與へて居ります、雛壇の上を細かに見ますと、その飾付は室內裝飾の事を教へ、その膳部供物は食品調理の事を教へ、その衣服は裁縫の趣味を養ひその他器物の扱方、整理方、禮節辭令等を教へて、家事に要する萬般の智識は皆な此の知らず識らず面白く遊ぶ雛祭の中に養成されてゆくのですから、家庭教育を助くることは何れ程だか知れません、故に大方の父兄方も愛子の爲めに此の趣味あり而も實益ある雛祭を盛んに行ひ玉はんことを望むのであります、教育的の意味を外にしても、家庭に華やかなる趣味を加へて、什麽に宜しいか知れませぬ。

總じて五節句（一月七日の人日、三月三日の上巳、五月五日の端午、七月七日の七夕、九月九日の重陽）

などいふものは、皮相の見を以てすると、管らないもの、詰らぬ舊習一遍のもの丶やうに思はれますが、よく深く稽へますと、昔の人が今日の大祭日の樣に、否な寧ろ其よりも家庭的に業を休んで樂しんだ程丈あつて、仲々面白い味のあるものです、其故家庭の趣味といふことを重んずる私共は、雛祭と倶に永く此等の節句をも保存したいと思ひます。

# 衣食住 由來の聞書

考古博士

△木綿の由來

木綿は恒武天皇延曆年間に崑崙人(今の印度人)三河の國に渡り、この物の實を持ち來り、綿實といふ、之を植へしむるなりと、然ろに中世この種絶たり。

敷島の大和にはあらぬ唐びとの
植へてし綿の實は絶へにき
衣笠内大臣

然るに其後八百餘年を經て元錄年中に又其種を傳へ、其製法を習ひ、道具をとゝのへ、以て世の至寶となりて今日に至る。そのむかしは卑賤の者は蠶の綿を衣ること能はず、麻布に蘆蒲の穗綿を入れて衣、以て寒を防ぎたりといふ。

△御所染の由來

寛永の頃(今より二百八十年前)女院の御所にて好ませられ、多くの絹を染させられ、宮女、官女、下つ方までに賜はる、此の染は京田舎に流行して御所染といふ。

△紅染の由來

承應年間(今より百五十年前)京都の長者桔梗屋甚三郎といふもの茜を以て紅梅に等しき色を染め出す、又中紅絹といふ。

世俗にいふ、この甚三郎なる者、貧乏神を祭りて富貴となれり、其神像は、藁にて作り、紙を以て冠、衣服となし、且暮に之を祈りしといふ。

案ずるに、是れ即ち福の神なり、金銀の箔にて作る

を業にて拵らへ、錦繍を、覆ひ飾る處ろを紙にす、謙りて奢らぬ戒しめなり、世に福神と稱する大黒是れなり、頭にかぶる處ろの者は上に示すものありて我儘にせざるの心、色の黒きは、美を飾らず、背低きは高ぶらぬ形、其持つ處ろの袋は財寶を藏す、槌は業の具にして須臾も手を放つことなかれ、職人農の手は即ち打出の小槌なり、又其踏む處ろの、人米俵は命を完ふする基なり、是を以て心に祈らば必らず幸福來るべし。

△暹羅染の由來

暹羅染はシヤム國より渡りたるものを日本に模して染めたるものなり、又更紗(華布)といふ、支那より渡りしものを唐更砂といふなり、唐更紗は洗へども文彩落ちず、和染は落つるなり、又和染を支那へ渡して洗ふに文彩落ちず依て珍とす、唐染などにては落つるなり其所の水によるものなり。

べにがら染は、今の印度のベンガルより來りしもののうる織は、今の土耳其斯より來るもの。

△朧染の由來

寛文の頃(今より二百四十年前)京都祐乘坊の辻なる紺屋新右衛門といふもの始めて之を案出す、この者、箕面の富突に詣づ、群集の中にて一の富の札を拾ひ得たれば歡喜身に餘り、宅に歸へる折から、初春の月色古人が千金にも代へずと言ひしも斯る時ならん、と行く行く不圖この染を工風して染め出したり、世間甚だ之を稱美したれば大に利を得て富貴の身となれり。

△上下の由來

足利三代將軍義滿公の時、内野合戰正月元日に起り殿下賀會の輩、素袍の袖と、裾を取りて軍に從ふ、之れ吉例となる執權職細川頼之の爲す處ろなり。又一說に信長公の時、松永久秀之を始むといふ。

△綿帽子の由來

綿帽子は、官女の老たる人、寒風を凌がん爲め、額に綿を被る、之を額綿、被綿ともいふ、藤原雅世の富士の紀行に(雅世は足利の中世の人)

雲や、それ雪をいたゝく富士の根も

ともに老せぬ綿帽子かな

△女の前帯

これは明暦、萬治（二百四十年前）の頃より起る、京都祇園清水寺邊の茶屋女、參詣人の數多ありし時は、帯の解けたるを結びて後ろへ廻すいとまなく、前にて結びたる儘にて、茶、酒の給仕をなしたり、一人より二人へ移りて、いつとなく、島原の傾城、或は茶屋遊女等、前にて結ぶに至り、京都の町女より漸々田舍に渡りて世間一統にこの風を學ぶに至れり、大なる略儀なり、されど禁中、並に、大名の奥方にて老若共に前結びにする事は曾ってあらざる處なり。

△足袋の由來

足袋はむかし、踏皮といひて、皮にて作る、女は晴 紫皮を用ひ紫足袋とて下々の女は得がたかりし、この紫 足袋は寛文、延寶の頃まではやりしなり。

△眞田紐の由來

天正年間、眞田安房守の（幸村の父）浪人の際、大小の柄を木綿の打糸にて卷きたり、或人之を笑ふ、安房の守いふ、たとへ上に錦を着たりとて心鈍きは用に立つまじ、此の魂を見るべしと脫室たるを見れば、兩腰共に相州正宗にぞありける。世人其の木綿の紐を呼びて眞田打といふ。

△夜着の由來

慶長元和の頃（德川初代）の頃より專ら流行せしものなりといふ、むかしは小寐卷とて常の衣服の少し大なるを下に卷きて其上に布團をかけて上つ方も之を召したり。

△蒲團の由來

ふとんは蒲にて作りたる圓坐なり、今いふ蒲團にはあらずといふ者あり、されど木綿の渡らざる以前は庶人の冬の衣服は布に蒲、蘆の穗を入れて着たり依て布子の名あり、蒲團も又同じ、蒲の穗を圓めて入る故に蒲團の名あり、古へ貴人は眞綿を以て作りこれを衾といふ今の蒲團即ち是なり。

△綿貫と引解

いにしへは今の如く、四季折々の衣服なく、綿を貫て

袷となし、又解き放して解分衣といへり今日いふ引解なり。

夏來れば、賤が麻衣ときわける
片田舍こそ心やすけれ

△干菓子の由來

菓子は今いふ水菓子の事なり、よつて菓子の字を用ふ往古は今の如く砂糖を以て製したる菓子なし、桃、柿柑類を用ひたり、干菓子は、本草に出でたる白雪糕に基き之を製す、中古アルヘイ糖、金平糖の類渡來す、之に習つて數品の干菓子を製したり。

△香物の由來

香の物は漬干より出たるものなり、薫物の中へ龜木を薄く片ぎ三四分の大さにして漬浸し、その香氣をうつして之を薫く、つけぼしといふなり、之にもとづき瓜茄子、大根等の野菜を糟粕に藏し、其香味をうつして茶菓子に用ひたるものなり、合せ香につけたるより起りしかば香の物といへり。

△澤庵漬と納豆

澤庵は品川東海寺の開祖、澤庵和尚のつけ始められしを以て言ひ、又納豆は大德寺の納豆一休和尚の製法なり、支那にては納豆の事を豆豉といふ。

△這入口の由來

居宅の戸口を這入口といふは神代の遺習なり、上古は穴居にして入り口を這ふて入りたるなり、今諸國山野の陰に穴のある所多く有り、これむかし穴居の跡なり

△厄年の由來

男子は少陰の數を以て形を成す、故に八歲より血氣定まり、十六歲にして精通じ、斯くて八年毎に血氣變じ（古說の血氣の變するといふは今の組織の變するをいふなるべし）五八、四十にして血氣充滿し、四十一歲より血氣衰ろへるを以て、初老の域に入る故に四十一を大厄とす、これより血氣變じ八八、六十四にして精盡くるなり又女子は少陽の數にて形を成す故に七歲にして血氣定まり、十四歲にして經水いたり、五七三十五にして血氣滿ち、それより漸々衰へ七七、四十九にして血氣つき、經水絕て懷胎する事なしといふ、附會

の說ながら多少の道理を含むものなり。

△門松の由來

松は千歳を契り、竹は萬代を契るものなれば年の始め祝ひ事にたつるなりといへり。

△藪入の由來

むかしは正月十六日に限りしが後春秋二季にす、常の暇なき雇人等此日は父母の家に來り、寺院に詣で、先祖を拜するなり又孤獨の者は依るべき宿舍なく唯叢林の中に遊びて一日を樂しむ故に斯く名づけたるものなりとか。

△雛祭の由來

雛は元鳥の子の總名なり、鳥の子は愛らしきもの故名とせり、少女これを翫ぶは女は世帶の業を元とするの敎へなり、近世内裡雛とて公卿禁裡の形につくるも、其むかしは紙雛なりし。

△紙鳶の由來

古代の衛生法を說きたる書に、小兒は内に陽熱さかんなる故春陽の時季、その氣いよ〳〵盛なれば、紙鳶を作りて高く飛ばし兒童に見せて口を開かしめ、内熱を上に洩らせ病を生せざらしめんが爲めなりとあり。

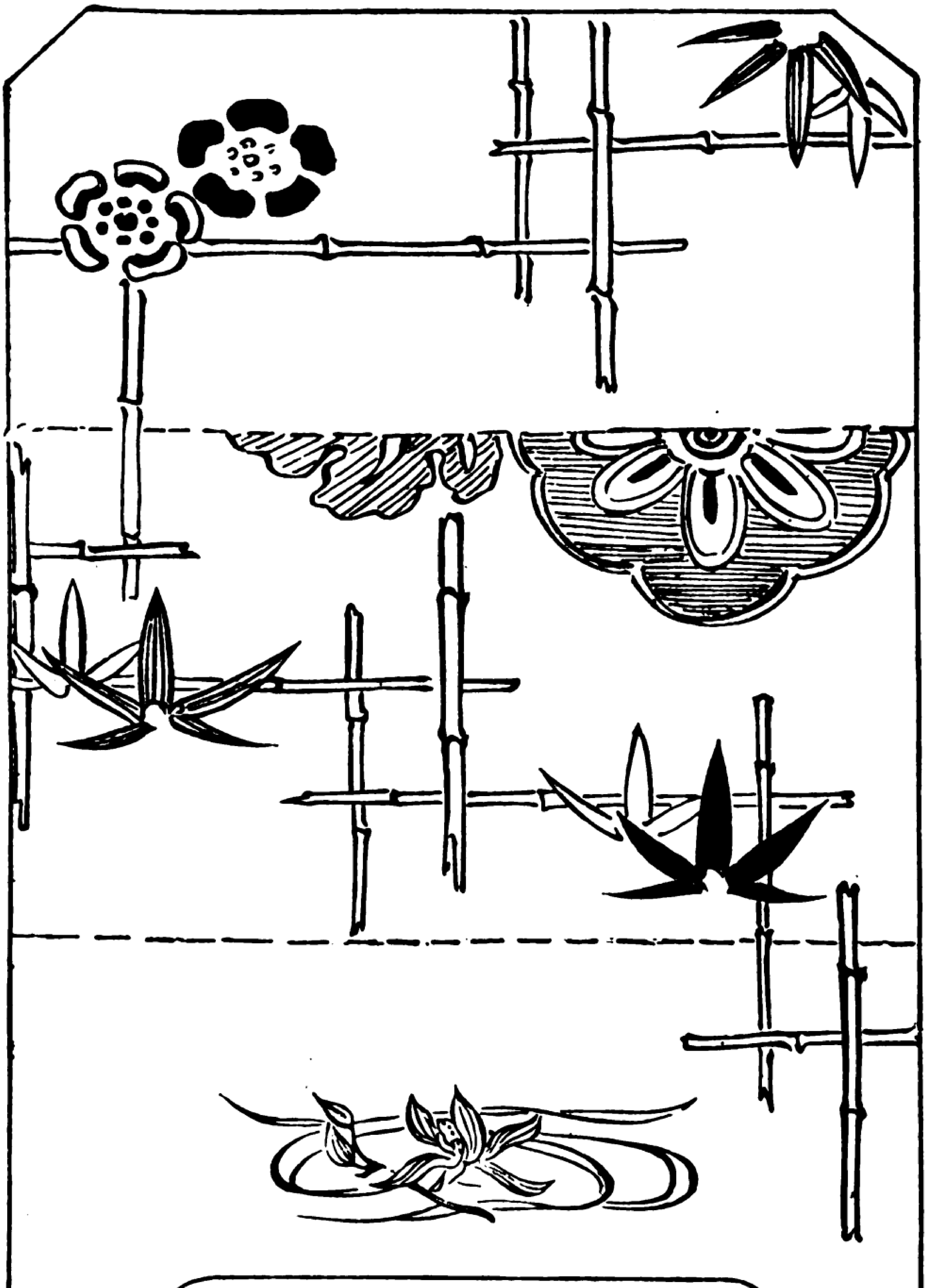
△五月兜の由來

龜山天皇の時蒙古の師、西海に寇す、時の執權北條時宗、多々良の濱に逆へて之を擊ちて、敵を鏖にす、時に五月五日なり故に此日兵器を飾りて戰勝を祝すとなり。

## 口繪解

卷頭に掲載せし白馬會出品和田英作氏作の「あるかなきかのとげ」は、俗諺で名高き「八百屋お七」を材料としたるものにて意匠は西鶴の五人女より取りたるものゝ由開會前よりの評判もの丈けに中々に人の注目を引きたりこの畫に就て批評は様々なりしが尤も穿ちたるは時事新報の評なり、曰く第一人物の表情が寫されて居らぬ人體の割合も怪しく殊に椽側の遠近が間違つて居る抔は、是丈の作として餘りに不用意の甚敷もの、着彩の艶麗なるは善く畫題に適應せる方法として可なる可くも、兩者の衣服に全然反對なる色を用ひたる爲め、穩當なる調和を欠けるが如く上部に掛かれる衣類は、其色豔麗と調和せず、寧ろ無用のものである云々。

金侑入刺繡用



四君子




## 菊、秋行路、天長節

●此春を老いのちゝはゝ扶けつゝ根分けし菊のけふやかほらむ　東京　松原はつ枝

●玉鉾のみちの行ての秋かぜを袖にしめつゝかへるすゞしさ　本所　大野千代子

●戰死せし夫の御靈に手向けんと袖濕はして庭の菊つむ　大坂　上田とり子

●咲き揃ふ大和島根の菊の香を分けてきかせんとつ國の民　下野　土生つれ

●大君の八千代を色に見するかな雲井の庭の白菊の花　宇都宮　大和田俊

●何となうあくがれ出でし秋の野にそばの花白く入日さすなり　麹町　加藤やす子

●踏まよふ山路を一人旅僧が超ゆる衣に秋風ぞ吹く　東京　中村綾子

●手折らんとすゞみて又もためらひぬまがきの菊のさて美しき　三重　ゑい子

●内外の人もまじりて祝ふなり御旗かゝげて君の八千代を　丹波　松尾琴子

●里遠きすゝき野の道人たえて夕雨細う萩の花ちる　福岡　豐田花子

●墨染の衣ぬきかけし尼が庵の垣にかぐはし白菊の花　長野　恩田とし子

●何となくただ何となく悲しきは暮れ行く秋の萩の下道　駿州　齊藤しん

●つくろはぬ垣根の菊もなき妹がかたみといとゞなつかしきかな　京都　政子

●尼一人淋しく行きて日なゝめに名もなき塚べに野菊みだれ咲く　神戸　脇屋とみ子

●玉ほこの道の行くてに穗すゝきの招くを見れば秋たけにけり　愛知　尾關重子

●思ひいづる三年のむかし亡き友が手植えし菊は今朝さきそめぬ　三重　秋子

●大君の大みしるしと榮えつゝ散るてふこともしら菊の花　新潟　坪井わか

● 近江　馬淵波子
日の御旗あだのにまでも輝やきて君が千歳を祝ふけふ哉
● 長崎　塗谷すみ子
東の君の御稜威を仰ぎ見てことほぎまさむ西の君たち
● 大坂　露草
齢待ちわびたりし孫子ども作りし菊は今盛りなり
● 陸前　赤井かめよ
柴の戸も玉の臺もおしなべて君が八千代を祝ふ聲々
● 大坂　中島磯子
いたで負ふ友やいかにと訪ふ道に物思へとや雁なきわたる
● 備後　秋島はぎえ
彩雲のたなびくあたり日や入りし夕風さむく尾花ゆらめく
● 熊本　高島千代子
置渡す霜にもあせぬ白菊はいく秋かけて咲き匂ふらむ
● 和歌山　湯川俊文子
日の御はた高くかゝげてもろ人の君が八千代を祝ふけふかな
● 和歌山　谷井清子
松風に千とせのつゆもかをるなり菊の花さくすみよしのはま
● 群馬　とよ子
あれましし今日のよき日を勝軍のむしろに祝ふ人もありなん
● 横濱　三島洋子
いく千代の秋をちぎりて月かけのよな〳〵やどる菊の白露
● 京都　愛子
秋たけて人目かれにし山里の賤がまがきに匂ふ白菊
● 岡山　笹原貞子

秋ふけて訪ふ人もなき山寺のまがきにかほる白菊の花
● 三重　中津喜美子
朧の月淡く嵯峨野に花香る萩の細道若き尼行く
● 栃木　矢部榮子
紅葉せる山路ふみわけ行見ればこがら山から鳴しきるなり
● 越後　佐藤榮子
君が代を萬代かけて祈るなり率土が濱邊も御旗かゝげて
● 越後　武敬子
白萩の狭き野路を君と我並びて行けば露散り亂る
● 芝　[illegible]なばな
やま人かかきなす琴の音もきよく庭もせに咲く白菊の花
● 日本橋　高田梅子
軒毎に御旗揭げて日の本の千代田の宮を仰ぐ今日哉
● 前橋　清美子
霜深き枯れ野の道の右左笑みてむかうる秋の草花
● 静岡　梅子
賤が家の軒にもなびく日の御旗いよゝ榮ゆる御代ぞうれしき
● 下野　園子
友よびて花見る時をいつにせんけふさきそめし庭の白菊
● 熊本　安田文子
大君のあれましゝ日と菊の酒くみかはしつゝ千代祝ふなり
● 信州　錦織幸子
大君の千代を祝ひてかしこみて尊きみいつ歌ふ今日かな
● 三重　佐々木らく子
うつりゆく世のならはしをよそにみて盛久しき園のしら菊

露霜みなれ伏す枝も八重垣に八重かさなれる白菊の花　筑前　波多野かつよ

心なき里の童もあはれとや刈りのこしたる菊のひともと　神戸　藤貞清枝

背の君がめでし白菊文にそへて送りやらまし満州の野に　東京　白井まき

蟲の音も千草も枯れし荒園に咲きのこりけり菊のひともと　神戸　森本女

十六夜の月は御空にすみ行きて秋の行路に露おきまさる　鎌倉　大野君子

遠東に在ます兄への玉章に一枝そへん白菊の花　京都　林戸多美子

亡き夫が遺愛の酒盃とりいでゝさしてもみたりしら菊の花　山城　今村しやう子

美しう今日は東に富士晴れて稲刈る乙女等の歌面白き　大阪　菅谷倹子

朝ごとの霜にもかれずちりもせずさかり久しき白菊の花　東京　伊東葉子

唐国のひろのはらひて日のみこの祝ひのみ旗かゞやきわたる　神田　高宮安子

とふ人もなき賤が屋も秋来れば所得がほににほふ白菊　江州　ゆたか

旅人のたどる山路に日はくれて秋風寒く月さわわたる　大村　朝野登美子

　東京　三の宮つゆ子

---

青草のむしろの上に小瓶もてたはれられたる白菊の花　周防　林たけ子

ことさらに淋しかれとや鹿ぞ鳴く紅葉ちりしく夕暮の道　本郷　服部倹子

鎗の匣にほゝゑみそめし白菊を夫におくらむ満州の野に　神戸　境野ふじ

君まさず木の葉散り敷く裏庭に咲き出でゝけり黄菊白菊　牛込　岸崎いと子

八千草のかれゆく野邊にさき出て其の香も高し白菊の花　和歌山　山口順子

ひげ白き翁こも編む門口に黄菊花咲き寛靜なり　東京　船越露子

みいくさに主は出でゝ此の秋は黄菊白菊只秋の風　名古屋　しげ子

なき夫をしのひて妻の手向たる白菊の花露けくみゆる　横濱　幾葉

山里のしづが伏家に咲きにほふながめゆかしき白菊の花　陸中　田口久恵子

霜かれし賤か垣根もうづむまで咲きみたれけり黄菊白菊　芝　澤井米子

大御代は千代はものかは天地と共にかきりはあらじとぞ祝ふ　尾張　井口豊子

秋の野ににほひこぼるゝ菊の色いざや手折りて家づとにせん　東京　田中千賀子

あすありと思はぬ身にも大君の千代萬代を祝ふますらを

●東京　鶴子

戦場の露と消ぬにし兄君の愛でし白きく形見となりぬ

●和歌山　木本かよ子

さし昇る朝日の御旗なびかせて君が代祝ふ今日もあるかな

●小樽　篠原美登利子

吾背子が植しまがきの白菊は手向けの色となりにけるかな

●高知　田村まさ子

咲き薫る菊の御園に今日はねて小女二人の笑み美しき

●周防　石田千代子

夕月に八千草かぼる秋の野を西によこぎる小羊の群

●岡山　田鶴子

朝まだき小野の萩原わけ行けばこぼれかゝりし花の白露

●佐賀　立石数子

大君のみいつを旗の色にみせて御代をことほぐますらをの友

●伊豫　永井きち子

二つ三つ風横ふ渚洲の月薄き野に小さき菊咲く

●栃木　東しき子

我が宿の籬の菊のさきしより招かぬ人の影も見えけり

●石川　福田はつ

高貴人も庶民人も祝ふなり我大君のあれましゝ日を

●備前　藤原栄子

美はしの笑顔半を月にむけてかきねに匂ふ白菊の花

●兵庫　嵯子女史

ふみにそみて遠征の背子に送なむ香りゆかしき庭の白菊

●青森　まち子

---

うなひ子の遊びのにはに育つとも君が八千代を祝ふけふ哉

●姫路　俵なでしこ

天地のあらむかぎりは大君のいでましゝけふを祝はむとおもふ

●周防　中村てる子

少女子の袴のすそもかほるらん花露しげき秋の野の路

●因幡　名越咲子

菊の秋はともにめでんとうえにしを君はめされて菊ひとり咲く

●能登　森田みつ子

年毎に今日のよき日にながらへて限りなき世をいはふたのしさ

●備後　佐藤篤子

あいぬ等が鮭とりに行く天塩川の岸べにえぞ菊の花

●長崎　すみえ

ありとしも人に知られぬ賤が家の籬垣つゞききくさかりなり

●山口　野村静子

秋たけておく霜しろく見ゆるまで咲きまさりけりにはの白菊

●長崎　あき子

人し住む小屋とも見えぬ賤家に今日新らしき日丸の旗

●伊豫　岡田いの

家ごとに日の大御旗なびかせてあれましゝ日を祝ふうれしさ

●愛知　尾関喜松女史

移し植ゑし君世にあらず菊の花君のみ墓にまづ手向けばや

●岐阜　坪内清枝

山そひの墓場の小路細うしてすゞき交りに野菊花咲く

●大隅　島江みえ子

日は落ちて虫のねしげき夕まぐれ[illegible]ぐ古城のあたりさびしも

# 女學界彙報

## 女子大學秋季運動會

女子大學第四回秋季大運動會は去月二十二日を以て同校構內に開かれ、頗る盛會なりし、例によりて記者の參觀せる所を記さんに、當日は朝來曇天にて、生憎の雨さへ降り出でしが、其も同校生徒の折角の心づくしを酌みてや、九時の開會に先ちて、拭ふが如く晴れ渡り、茲に芽出度く開會の準備は整へられぬ、さて構內の光景を見めぐらすに、さすが優美と活動と眞善美とを理想とする全校だけありて、我等の心ゆく許りよろづに能く整ひたるは、何よりも嬉し、先づ入る門は紅白の布をもて卷かれ、「善學善遊」の四字を黃菊もて表はせる額を掲げたり、門を入れば直ちに「晝食引換券發賣所」と墨黑々と書い記されたる札あり、傍に「家庭週報號外」と筆太に記して「運動の狀景一目瞭然」なんどゝパノラマの口上めきたる、貼札の見ゆるも一興なり、號外は特に觀覽者の爲にとて運動の性質由來等を說明し、且つ之に唱歌を添へ、案內の地圖を掲げて便利を計りたるもの、之を求めて紅白の幔幕に沿ふて凡そ二十四五步行きたる所に綠門あり、場內の裝飾としては各國々旗を飜へし、天幕を張り、生徒の出入するあたりには本校徽章の花紅葉を白地と紫地とに染め出せる旗を交叉したり、會場の中央にはメーポールマーチ用の柱を立てゝ紅白の布を垂らし、傍にピヤノを据え、又た西手の方には陸軍々樂隊及び本校生徒の組織に係る櫻楓音樂隊之に控へたり、尙ほ場內には大輕氣球を飛揚し、之に番組の報告、勝敗を一々掲示して參看者の觀覽に便したる、用意の程行き屆きたるものなり。

かくて九時三十分といふに、嚠喨たる奏樂の音起りて、開會を告げ、高等女學部第一年生の啞鈴体操によつて運動の火蓋は切られぬ、其より白井敎授の考案に成れる孤鶴、露西亞式競走、家政部の結合体操、自由体操、輪体操、英文學部のホッケー、旦暮鈴、カーメ

ン等次々に演ぜられて、益々佳境に入らんとする時、號砲響きて正午休憩は報ぜられぬ。

休憩中は西手の校舍前に設けたる辨當引換所に集る人、立食場をさして往く人歸る人入り亂れて雜沓混雜を極めたり。

午后よりは土曜日の事とて、俄に來觀者の數を加へ場内は十重二十重の人垣を築くに至り門前に主人待つ車馬は市をなして、一時は通行をも杜絶せん許りなりき。

來觀者の中には、德川公、近衞公、大隈伯、同令夫人、松平伯、樺山伯、同令夫人、松平伯、松平子、福岡市、澁澤男、前島男、岡部子令夫人、森村一家、三井一家、原六郎氏、同令夫人等あり、其他朝野の紳士淑女及び外國人、男女學生等無慮八千名と註せられ、我邦運動會ありて以來の盛況を呈したるは、偏に同校生徒の熱心によることにて、女子躰育界の爲めに喜ぶべきの現象と云ふべし。

扨て當日の運動三十二番の中殊に來觀者の眼に止りて感興を惹きたるもの數種を擧げんに。

○露西亞式體操　高等女學校二年

同級生の考案に係り、各隊、「豫定行動」と記したる建札を持ちて進みいで、一定の場所に之を建つるや否や、引渡したる一本の綱をたよりに、爭ひて後方に退くもの、是れぞ有名なる露西亞式なりと。

○障碍物競爭　高等女學校第四年

各隊山を越へ水になぞらへたる網を潜り、百難を排して目的地に旗を立て、最後に、大將と覺しき二人の者、同じ難路を通じて、鐵條網を切拔け、先着の者先に建てたる旗の中央に吊せる籠を旗竿もて、衝破れば一羽の黑鳩悄然と逃げ出で、稍しばしは軍樂隊の天幕の上に止りしが、頓て何れともなく落ち行きし趣向には、最も喝采を博したり。

○假裝兵式體操　高等女學校第四年

次の唱歌うたひつゝ、箒を銃とし右に左に薙ぎ立て薙ぎ倒すかと見るまに機を伺ひて突貫するさま勇しくも勇まし。

初瀬　作歌　天野某氏
作曲　白井規矩郎

初瀬は紅葉、吉野は花、
波これよりや、とはにくれなゐ。

一、帆をいざ正せ、健夫ら、管把りて奏せや、樂師。
刻々と潮はおそひ、我艦の命いくばく。
さば、紅楓、風に散れとて　誰がつけし初瀬てふ名ぞ。

二、大東の榮えことほぎ、諸共にあげよ、水盃、
朝汐にあらぶれたける、戰神の怒りの御前、
實と沈むさだめも、國のため何悲しまん。

三、人柱、天の實とて、さつきけふ、笑みつゝゆくを、
など慨く、妹敷嶋！　敵の艦いくた碎きて、
海こゝに、我が墓築き、　姉朝日！、あげよ勝鬨。

四、いざ正せ、　健夫ら。　面あげて、我れに見せすや。
神八州ふたゝび荒れて、　あふまでの暫しの別かれ。
鬨哦と響く君が代。　あはれ、今、怒濤に消ゆる
　　　　　　　　　　　　　國文學部第一年

○提燈行列

手に手に丁字形の上端に、四箇の提燈を吊りたるものを持ち出で、軍樂につれてマーチを行ふまに〳〵、時ならぬ白雪の　行途をかくし道をうづめ、提燈の赤きにはえては彌よ白く、彌よ赤し。時節柄とて喝采を博したることとも一しほなりき。

○ヴオトン、サンチ　　　　家政學部第二年

佛國に行はるゝ凱旋舞なりと、連戰連勝の今日最も人意を快うしたり

○春秋競爭　　　　普通豫科

本校の徽章櫻楓に因みて考案せるものにて、其の一組は櫻の枝を手にし、他の一組は紅葉の枝を手にして夫々一定の場所に控へ、一人づゝ爭ふて走り、彼方に支へ持てる輪の周圍に結付けて、歸るや否や次のもの又た同じく走りて結付け、櫻と紅葉と何れの輪が早く作らるゝかを爭ふ面白き競伎なり。

○アマゾン　　　　家政學部第一年

一隊の娘子軍白鉢卷甲斐々々しく進みて出でゝ舞ふさま勇壯にして優美なり。

○自轉車

自轉車の一隊隊の花輪をかざしマーチを行ひつゝ退くや、自轉車隊の白眉と目されたる一組のもの靜に乘り出で、中央の柱に垂れたる紅白の布の一端を持ち互み交りに出ては潜り、潜りては出づるに、柱はいつしか紅白の布もて織られぬ、其よりマーチに合せて互の手を組み、或は合して四列となり、或は分れて二列となる樣、平素熟練の功とはいへよくも矯捷にものせられたるものかな。

## 東京に於ける清國女學生

同文書院(小石川高田)弘文學院(牛込西五軒町)を首めとし、其他各種の官公私立學校に現學する清國留學生の數は今や四千を以て數へらるゝ中に戰捷國の餘榮として同國女學生の留學するもの漸く多きを加へ遊行の花月卷に花のリボンを靡して海老茶の袴優にやさしく我國女學界の美風に染まんとしつゝあるは洵に賴もしき次第なり、さて彼等は奈何なる境遇よりして所謂翠帳紅閨裡を離れて遙々と我國に留學せしが、彼等の郷黨に於ける位置は奈何、而も日常奈何なる生活を我國に來りて營みつゝあるかを記すに當り、まづ記事の順序として我國渡來當時の狀態よりして記さんが、勿論數ある中には單獨に渡來するものもあれど多くは男學生と共に船を同うするが多く豫定の旅宿に着けば支那會館(后段に詳記す)より新橋停車場に出迎ねたる當番の幹事專ら斡旋の勞をとりて便誼和服を新調せしむるを例となせり、專らこれが任に當れる我國の婦人には下田歌子女史の門下生にて、伊藤イ子といへるがあることは能く同國人の知るところなり、さて

### ▲女學生の種類

は言へば目下東京に遊學中なる二十九名の中尙は未だ日本語に熟せざるは自分の旅宿若くは其他に日本語　の教師を聘して專ら練習中なれど、其他既に語學に通じたるは實踐女學校(中澁谷西須賀町)を首め女子大學、東亞女學校、二葉裁縫學校(牛込東五軒町)三輪田女學校、女子美術學校、富士見小學校等に學びつゝあり、而して前者の尙は日語に押れざる女學生の志望を聞くに、女子高等師範學校西ヶ原農事試驗塲、音樂學校等に入學せんとするものにて現に本鄕區西片町十番地小博印方に止宿する吳哲(二十六)の如きは歸朝の上は幼稚園を開かん目圖なりとて專らこれが究窮に努めつゝあり、又潘英(二十七)の如く良人と二名の小供と一名の下女と共に渡來し一家五名の世帶を構ねて夫妻とも支那會館に通ひて專ら日本語を攻究しつゝあるもあり、扨また斯る女學生の鄕里に於ける有樣はと言へば何れも　富豪の娘とか高級官吏の妻君連にて東京に現學する中の八九は

### ▲夫ある女學生

とも見る可く何れも鄕里に夫と小供とを殘せるが多し、而して其夫あるは殆んど皆すべて官吏の細君とも見るべけれは他の女學生が年齡の若きに反して二十二三才より、二十七八才までが最も多し曾汝錦(二十)曾慶雲(十八)の如く姉妹うち揃ひて遊學し、姉は本鄕元町の美術學校に妹は同區西片町十番地なる同鄕人の許にありて、專

心日本語を研究しつつあるが如きもあり、又夫妻打揃ひて留學しながら更に信書の往復もなさず適々月に一二回の訪問を以て互ひに意を慰めたる錢覲圓常（時任タケ子の實踐女學校在學）といへるもあり如上の有樣にて獨身の女學生と稱するものも既に定まれる夫はあり素と支那にては極幼少の頃より早く

**▲娘に許嫁**　の夫を定め置く風習あり早きは十二歳ころより結婚するを習となし、十五歳ごろ夫の無き娘は何か瑾でもあるかの如く世評する位なるを近ごろ或る一部間に此の弊實を打破せんと努むるもありかたく〳〵既に東京に遊學中の女學生中十九二十となりて尚ほ夫なきものゝあるに至れるにて是れとて定まれる許嫁の夫はあるも未だ結婚せざるまでなりとは檀女先が親しく記者に對つて語れるところなり。

**▲官費生と私費生**　最初男學生の我國に留學するものは悉く官費生なりしが近頃は殆んど無きまでに其數を減じ總べて皆私費の留學生到來しつゝある中に、女學生中官費生は殆んどなく此后とても官費生を派遣するが如きは無かる可しとは某支那留學生の語る處なり、而して

**▲女學生の讀書**　はと問はゞ悉く女教員たる可き目的にて中にはは歸朝后は女學校を創設せんといふものもあり幼稚園を開かんといふものもあり。

**▲音樂と女學生**　彼等は殆んど總べて相約したるものゝ如く音樂を學びつゝあり、而かも一個のオルガンは順序なき而して秩序なき彼等の居室に備へられたり

**▲女學生の讀書**　言語の充分通ぜざるものにても我國の新聞紙を讀むは極めて稀れにて多くは「黑獄紅蓮」。「警鐘月報」。「列女傳」。など愛讀しつゝあり然れど我が時局に關する新聞の號外は必ずこれを購めて閲讀しつつあり若し自ら讀み能はざる向は他に需めてゞも强いて其の意を解せんとしつゝあり、男學生は比較的外出を好めど女學生は故國の風を守りて容易に出外せず讀書と音樂とにて日を送りつゝある中にも毎日曜日には必ず、神田區駿河台鈴木町なる支那會館に集まりて

**▲淸國女學生の演說會**　なるものを開き各自に議論を弄しつゝあり、これが會長には秋瑾（二七）とて明年女子高等師範學校に入學せんとするが當り居り、而してこれが機關として白話なる一雜誌を刊行しつゝありとて秋孃が記者に示せるものを見るに左の目次あり

論說　救中國的衰弱必以敎育爲急務演說的好處
敎育　男女不平等原因
歷史　中國歷史的撮影
地理　奉勸大家學地理
理科　理科思想的長進〇說電
時評　日人勝俄占領我土〇各國對中國的主義〇日本新設的敎育會
談叢　中國人及犬不許入內〇愛國報音〇頭髮年紀大些
歌謠　馬蟻〇萬里長城〇十八省
戲曲　改邪歸正
其餘門類繁多因此期限於頁數不全見一班殊爲憾事閱者諒之

## 流行の海老茶袴

### （其品柄と價格）

年々歳々流行の情勢同じからず品柄の好み〳〵は一に社會の風潮に投ずるものゝ榮ふるが中に女學生の海老茶袴は近來一般の常裝となれるが夫さへ染色の濃き薄き地質の種々樣々あり是に就き目下の流行を紹介せんに

△先づ普通仕立にて並物一着壹圓五十五錢以上三四圓迄尤も其他に勸工場と稱する物には壹圓位の下等物もなきにあらず△地質は大低瓦斯、唐縮緬が通例なり△上等物に至つては六圓以上種々あり是等の質はカシミヤが一般の流行なり、是より以上は緞子繻子等好み次等なるが言ふまでもなく是等は上流社會の令孃用にて贅澤の注文好みと謂ふべし△色合は一般海老茶なるも間々好みによりて紫若しくは紫紺などあれど就中上品にして最も流行せるは牡丹色なり△又裾に白の筋を縫ひ入れしもの昔て一時は流行の兆ありしかど目下はトント需用者なく且つ學校によりては前記白筋入を許さぬ向きもありて更に流行に至らず、偶々學生が好みにて自身が勝手に白き筋を縫ひ付けるに止まり　袴屋の店頭

には絕へて白筋入りを見ざるなり　△尙又裏付きは除り流行せざるも上等物に至つては是れ有り地質は大低とヮ色の海氣なるが中には白、淺黃などの好み色も間々なきにあらず(婦女通信)

▲女子美術學校卒業式　本郷弓町の女子美術學校にては去月三十日午前九時撰科卒業生の爲めに第六回卒業證書授與式を行ふ、今回の卒業生は編物科、同速成科、造花科、刺繡科、にて合せて四十五名なりと

▲成女學校開校紀念會　麹町區下二番町なる成女學校にては去る三日正午より開校紀念會を擧行したり、唱歌、遊戯、英語唱歌、英詩朗讀等十數番の催あり、了つて生徒製作品のバザーを開き、仲々の盛會なりし。

▲戶板裁縫學校落成式　此程芝區三田四國町に新築の工を竣へたる戶板裁縫學校にては、去る三日の天長節を卜して、其の落成式を擧行し、且つ生徒の手藝品なる造花、編物、摘細工、袋物、小間物等の展覽會を開きたり。

▲女子美術學校成績品展覽會　芝公園內なる同校にては十一月三日より六日まで四日間生徒の製作に係る造花、刺繡、編物、摘み細工裁縫圖畫等の展覽會を開きて一般公衆に縱覽を許したるが、孰れも平素學習の技術を以て製作に心を籠めたるものとて、觀工場などゝは違つて中々に目留まるものゝ多かりしは喜ぶ可し、因に同校は今回嶋崎海軍少將夫人とく子刀自が、老后の事業として女子敎育に盡さん特志より保護を與へらるゝことゝなりたれば、大に設備を擴張して、所期の目的を貫徹すべしと云ふ、われらは斯る特志の婦人を我が女學界に得たるを喜ぶと共に切に同校の成功を望むものなり。

▲紀念運動會　東京府女子師範學校及び第二高等女學校（小石川竹早町）は共に其の創立四週年紀念の運動會を十一月七日午前九時三十分より開會したるが、來賓塲に溢れて頗る盛會なりし。

▲昨今の料理法　儀式的の本膳ものは惜置きて家庭に於ける日用の臺所料理に就き昨今の材料を紹介すべし先づ　▲魚類は甘鯛（味噌漬用）鯖、鹽鰹、秋刀魚、生鰈、鯔、鰤等▲野菜ものは漬菜(三河島產)大根(練馬產)唐菜(砂村邊のもの)葱(岩槻產)八ッ頭、人參、蓮根、唐の芋午蒡、小蕪、等▲又菓物にては紀州蜜柑、葡萄(甲州產)樽柿(大宮產)など尤も多く家庭料理の材料として用ゐらるゝものなり、尙贅澤向きの料理にて期節の食鳥類は雁、鴨、山鳥、雉子、鶉、鴫等なるが本年は是等鳥類の豐富なるにも拘らず、時局に遠慮して銃獵家の出勤せざるより隨つて品不足の傾きあるにぞ例年に比して稍々高價なり。

## 紹　介

▲婦女通信
神田三崎町に開業せる同社は婦人社會に關するあらゆる事項を探聞紹介するを以て其本務となし各女學校の消息等有益の事項を每に供給せり、本誌に收めし支那の留學生記事の如き其一なり。

▲はがき文學
繪葉書の圖案と短文學の研究とを目的として產れたる月刊雜誌なり口繪には意匠斬新の泰西繪葉書數葉を鮮明なる寫眞版にして收め、記事には諸名家の葉書に對する意見を始め、短文、短歌、新體詩、俳句等數百篇を載せたり、體裁瀟洒、內容簡潔にして而も趣味盡きず、手紙雜誌と合せて文界の双珍たり。發行所小石川區久堅町百八番地日本葉書會定價一册六錢郵稅五厘

▲少年動物畫談　博文館發行
少年世界の記者武田櫻桃、木村小舟二氏の手になりたるおもしろくやさしき動物のおはなしなり。

▲セーラクルー物語　內外出版協會發行
歐文飜譯に一種の妙技をもたれたる故若松しづ子の譯を對して英文を學ぶものゝ栞とせり飜譯だけ見てもおもしろき物語なり。

▲歐米名士の家庭　同文館發行
女子大學英文教授松浦政泰氏の編まれしもの、女學生の敎科用として適當の書なり。

# 記事豫告

女學世界第十六號 十二月五日發行

| | |
|---|---|
| ▲生活狀態の改良 | 柳澤伯爵 |
| ▲家事經濟 | 棚橋絢子 |
| ▲世態說法 | 水原翠香 |
| ▲松村中將夫人 | 中村鈴子 |
| ▲藤井少將夫人 | 中村鈴子 |
| ▲女子と職業 | 羽仁もと子 |
| ▲家政二十四時 | 河西璞 |
| ▲小兒の食物 | 川瀬元九郎 |
| ▲將軍と兵士の妻 | 小野田花子 |
| ▲源氏十八人女鵬 | 田中夕風 |
| ▲支那史上の婦人 | 大町桂月 |
| ▲雪國の有樣 | 茨城藤葉 |
| ▲家庭夜話 | 報國生 |
| ▲動物の雌雄淘汰 | 紫苑女史 |
| ▲熱の話 | 高田濱子 |
| ▲攝生法談話會 | HO生 |
| ▲社會百生活 | △△△ |


## 毎月五日發行

### 定價表

| | |
|---|---|
| 一册(紙數二百八頁) | 金二十錢 |
| 四册(三ヶ月分) | 前金七十五錢 |
| 八册(半ヶ年分) | 前金一圓四十五錢 |
| 十六册(一ヶ年分) | 前金二圓八十錢 |

内 定刊數……十二册 增刊四回……三、六、九、十一月價格同一

郵税 一册 二錢

### 改正 廣告料

| | 特等 | 一等 | 二等 | 三等 |
|---|---|---|---|---|
| 二十四字詰一行 | …… | 五十四錢 | 四十四錢 | 三十七錢 |
| 半頁(卅二行) | …… | 十七圓二十八錢 | 十四圓〇八錢 | 十一圓八十四錢 |
| 一頁(六十四行) | 四十圓 | 三十三圓 | 二十七圓 | 二十三圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

### 注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅七年十一月十五日發行 第四卷第拾五號

編輯兼發行人 松原岩五郎
印刷人 水谷景長
印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地 合資會社博進社工場
發行所 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

電話本局 三百三番 三千十八番 二千六百二十番 三千二百二十九番

中島義弌君著

# ▲新撰女子作法書

●全壹冊洋裝菊判美本
●正價金二十五錢郵稅六錢

從來學校に於て作法の教授を受けし人其修業後に於て禮節を實踐せざるもの多きは夙に識者の慨する所なり、之を要するに斯る失体は作法を以て單に教場に於ける一種の技藝として修練するのみにして平常の動作行步の間に之を活用せざるに基す中島先生玆に見らるゝ所ありて此著あり淑女諸君是非就て一讀せられたし。

博文館發兌

中島義弌君著

# ▲新撰小學女禮式

●全壹冊洋裝菊判並製
●正價金二十五錢郵稅六錢

世の開明に連れ時の文化に伴ふて淑女の禮風又改善の域に進まさるべからず中島氏本書を著はして婦女家庭の要義たる禮式を新撰し以て女子教育の軌範を網羅せり貴女令孃には素より其他の家庭にも欽くべからざる禮書なり。

博文館發兌

岡崎淵中先生著

# ▲各傳比較點茶活法

●全壹冊和裝上製帙入
●正價貳圓五拾錢小包二十錢

此書は篇を客法主法手前置合器物床飾露地茶室等に分ち附するに各傳々統の系譜を揭げ首めに斯道の總論を擧げ茶道は遊戲に非ずして修身齊家の法たる事を辨じ各編毎に亦事を細論して事理合一の旨を示し且つ諸流の傳を列記して其の異同と理義の在る所を知らしむ初學の人は此書によりて容易に獨習自得せられ師範の人は此書によりて教導の際講義の參考となること鮮からざれば何流何派に論なく必一本を座右に備へ置かざるべからざるなり。

博文館發兌

（後付の一）

# 家政學

全二冊 和裝　總紙數四百卅頁

家事内政を整理するは婦女生涯の本分にして衣食住等より始めて金錢の出納公私の交際賓客の應接子女の教養婢僕の雇使に至るまで此等責務にあらざるなし然るに近來其教育の風潮一變し天下の父兄は遂に女子の修學を逡巡する者あるに至れり此書は下田歌子女史が東西古今に通貫するの新案を考へ女子教育に對する綱要を網羅して女子德操の志行を養生するにありて疎放の習慣を矯正し實際良母賢妻を得るの捷徑を示さる實に是れ齊家の韜畧なり。

正價一册三十錢　郵稅六錢

下田歌子女史著

---

下田歌子女史著

## ●料理手引草

全壹冊洋裝菊判　紙數三百三十頁
正價金三拾五錢　郵稅金八錢

---

藤本藤蔭君著

## ●實用料理法

全壹冊洋裝菊判　紙數二百八十四頁
正價金二十五錢　郵稅金六錢

料理法の女子に必要なる忽にすべからざる研究科目の一たり必ず一讀あれ

---

發兌元　東京本町　博文館

---

吉田調子君著

## ●裁縫と編物

全壹冊洋裝菊判　紙數二百六十二頁
正價二十五錢　郵稅六錢

---

博文館編輯局編

## ●衣服と流行

全壹冊洋裝菊判　紙數二百三十六頁
正價金二十五錢　郵稅金六錢

右は婦女諸君が時流と手藝に心を注ぐべく是非閲讀せらるべき要書也。

---

# 家政案内

全壹冊洋裝菊判　紙數二百五十六頁

●家政　●僕婢　●火災
●家政の掟　●經濟　●容儀
●主婦　●貯蓄　●時間
●衣食住
●社會　●藝術　●世帶論
●保育　●家計簿記　●運命

正價金二十五錢　郵稅六錢

岸上操君著

（後付の二）

# 家事要訣

全壹冊　和裝菊判　紙數二百五十頁

本書は衣服の取扱方裁縫洗濯染物等の簡易法及び住居の選定搆造等に就きての注意は勿論殊に室內裝飾清潔法及び金錢出納家事經濟の概略を敘述せり

正價金三拾五錢――郵稅金八錢

下田歌子女史著

下田歌子女史著

## ●女子手藝要訣

全壹冊和裝菊判紙數二百六十二頁
正價金三拾五錢　郵稅金八錢

飯田呉服裁縫主任
小岩井現太郎君
同副主任鹽田眞三君合著

## ●實用裁縫全書

全壹冊和裝紙數二百六十六頁
正價金五拾錢――郵稅八錢

婦女諸君几上欠くべからざる要書也

發兌元　東京本町　博文館

刺繡術專門磯村大次郎君著

## ●實用刺繡術

全壹冊洋裝菊判　紙數百廿四頁
正價金二拾五錢　郵稅金四錢

山田興松君

## ●實用造花術指南

全一冊洋裝菊判　紙數百十頁
正價金二拾五錢　郵稅金四錢

家庭に於ける婦女諸君は勿論學校に於ける學生諸君の必讀書

最新

# 家計簿記

全壹冊洋裝菊判　紙數百卅四頁

第一章●帳簿
第二章●簿記
第三章●勘定科目
第四章●誤謬訂正の方法
第五章●豫算の編成
第六章●決算
第七章●帳簿記入の練習
第八章●女學生の會計簿記
第九章●公債株券及手形
第十章●預金

正價金二拾五錢　郵稅六錢

曾我部純一君著

（後付の三）

西田敬止君著 ●帝國女子修身鑑 全四冊 和製本 正價一冊金拾錢 郵税一冊金貳錢

江刺家協一君著 ●茶の湯大全 全一冊 洋製本 正價金六拾錢 郵税金八錢

博文館編輯局編 ●茶の湯と生花 全一冊 洋裝本 正價金貳拾五錢 郵税金六錢

大露庵河村一洗君選 ●新撰活花圖式 全二冊 和製本 正價金四拾錢 郵税金六錢

# 婦女家庭訓

下田歌子女史著

此編には其母なるべき人の注意衛生の點より幼兒が漸々發育して小學に在る程の事及其翫具遊戯の有益なるものを丁寧懇切に擧げ示したる要書なり。

全壹冊和裝 正價卅五錢 郵税八錢

# 女學生の栞

松原岩五郎君著

此書は女學世界の責任者松原氏が女子教育に對する多年の抱負を公にしたるものにて立言の根據は專ら婦人をして獨立自營の氣象を養はしむるに基す、文章は平易流暢を旨とし、丁寧親切よく利害のある處を辨識して聰明なる婦人の智識に訴ふ、書中マヽ諷論諧謔の筆を弄して時弊を刺し、或は毒筆を以て單刀直入婦人の弱點をゑぐる處あり。世間未婚の婦女子は勿論、花嫁、主婦、母親いづれも新日本の淑女たらん人は一讀して著者が萬斛の涙の如何なる點に向つて濺げるかを知りたまふべし。

全壹冊和裝 正價參拾五錢 郵税六錢

秀貫齋月一珣編 ●挿花盆石 正風花鏡 全三冊 和製本 正價金五拾錢 郵税金六錢

壯月齋惠一鳥編 ●挿花盆石 四時の談 全三冊 和製本 正價金五拾錢 郵税金六錢

榮雲齋先生編 ●挿花大樂抄圖會 全二冊 和製本 正價金四拾錢 郵税金六錢

順石軒翁編 ●盆山百景圖 全四冊 和製本 正價金壹圓 郵税金拾四錢

(後付の五)

内山幻堂君著

## ●明治書翰文大全（全壹册）

正價金五十錢
郵税金十錢

本書は農工商貴婦女學生其他普通に亘つて詳かに作法作例を示し、各種數百題全編四百四十頁に及ぶ、且つ前編には沿革、心得、組立、式法等を掲げ、附錄には改正戸籍法に準し諸種の願屆書式等を載せ鼇頭にはいろは引書翰文熟語を掲げたれば其便利の多きこと坊間流布用文の比にあらず實に是れ用文書類中無比の寶鑑なり。

# 女子書翰文

華族女學校々長細川潤次郎先生序文
華族學校學監下田歌子女史著

（第拾八版）

**書翰文かきかたの注意** （一）文章の起原及女子の消息文（二）書翰の文章及字句（三）書式及び用紙（四）書翰の封じ方及取扱方

**作例及各種の注意** （一）慶賀の文書く心得（二）哀悼の文書く心得（三）慰問の文書く心得（五）依頼の文書く心得（六）請求の文書く心得（七）報知の文書く心得（八）誘の文かく心得（九）紹介の文書く心得（十）謝禮の文かく心得（十一）謝絶の文かく心得（十二）忠告の文かく心得（十三）羇旅の文かく心得（十四）音物の文かく心得（十五）貸借の文かく心得（十六）口上書認むる心得（十七）屆伺願書認むる心得（十八）受取願證等を認むる心得……尚鼇頭には歴代女子消息文、材料等女學生必讀の要書。

全壹册和裝美本　正價金三十五錢　郵税八錢

博文館發兌

大和田建樹君著

## ●書翰文組立法（全一册）

正價金拾五錢
郵税金六錢

曰く書翰文書き習ふべし、曰く書翰文たやすく書くべし、曰く書翰文は他の文体と異なり、曰く漢文等に偏すべからず、曰く男女性を異にすべし、曰く四つの性質を備ふべし、是此書の書翰文の書き方を敎ふる目錄の大要なり、其稱呼のことあり、はし書きのことあり、封紙の書式あり、單簡文の種類あり、參考以て日用便利の書たるを得べく依て男女坐右の鑑たるべし、終に文例を擧けて、其摸範を示し、參考文を掲げて徳川時代の作例を載せたり。

（後付の八）

中學世界冬期增刊

第七卷第十五號　十一月廿日發行

# 處世百法

正價金二拾錢　郵稅金二錢

將來社會に活動せんとする青年諸氏が第一に解決すべき問題は處世上の方針なり。此競爭劇烈なる社會に處して、如何にせば某の職業に成効し得べきか如何にせば某の地位に到達し得べきか、是最も愼重なる攻究を要すべき所とす。而も社會の複雜多面百般職業、生活の内情案外に知り易からず。若し之を究むるなく輕卒に職業を撰ばんか、或は失敗を招くの虞あらん。諸氏は職業を撰定するに先ち豫め此内情に通ずるを要す。茲に於て本誌は青年諸氏が處世の手引に供へん爲め冬期增刊として「處世百法」を發行し、政治家、法律家、軍人、實業家、學者、文藝家、官吏、會社員等を始め、現時百般の職業者其他各方面の有力者が青年の處世上に關する意見に實地生活の狀況及び之に到達する徑路等に就き二十餘家の寄稿を收め、諸氏が職業の撰定及び準備上の指針たらんことを期す、尚附錄として全國各地の青年諸氏の投稿に係る論文、抒情文、敘事文中其尤秀なるものを撰錄して誌上を飾れり、學生諸彥は研學精修の餘暇一讀再讀一には修學の傍處世上の方策を講し、二には大方同好の秀才と其見る處知る處を鬪はさば其間無上の興趣存するものあらん

東京市日本橋區本町三丁目
發兌元　博文館

女學世界定期增刊 家庭十二ヶ月
(毎月一回五日發行)
(明治三十七年十一月十五日發行) 第四卷第拾五號 (明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可)

娘を持てる親、妻を持てる夫、母を持てる子、女と云ふ女は見よ

姉妹を持てる兄弟は繰り返しくて此廣告を讀み玉へ讀みて記憶し玉へ日本國に中將湯と云ふ靈藥あるとを、

家庭十二ヶ月之愛讀諸君よ、諸君の知り邊に於て若しも子宮血の道さん前さん後の諸症にて種々の藥を用ひても其効なく困難ずる人あれば試みに此中將湯を服用せしめ……百發百中……

## 中將湯の名譽

- 産科婦人科專門諸大醫の稱贊を得たるのみならず、畏くも上宮樣方の御用を蒙るに到る誠に本劑の名譽と云ふべし
- 醫學博士慈惠病院長 高木兼寛先生(東京)
- 産科婦人科專門醫學士櫻井病院長 櫻井郁治郎先生(東京)
- 産科婦人科專門ドクトル 木村順吉先生(東京)
- 婦人科專門獨逸ドクトル 朝山義六先生(橫濱)
- 産科婦人科ドクトル 佐伯理一郎先生(西京)
- 大阪緒方病院婦人科醫長ドクトル 緒方正清先生(大阪)
- 産科婦人科專門ドクトル 小林山卿先生(大阪)
- 愛知病院婦人科醫學博士ドクトル 柴田耕一先生(名古屋)
- ドクトル婦人科專門グランエト、ハアマシー 大月文先生(福井)

右の外三十餘名の大醫諸君より最も名譽ある稱贊を忝ふしたれども略す




## 中將湯

●十年前のちの道三週間に全治す●

子宮病血の道産前産後の長き患ひ●下腹子宮腰足引つり痛み●下腹より胸先へ差込み或は正氣を失ひ息切れ動氣強く腰より足部へ冷込み●手足しびれ●浮腫

●月經不順 年頃になりて月經なき人●逆上頭痛眩暈甚しく●又物事を苦にし氣分惡しく常にふさぎ勝の人殊に子宮出血白血長血帶下にて久しく患らひ身體衰弱せる病にても全治すること請合なり(論より證據早々試よ)

| 定價 | 郵送料 |
| --- | --- |
| 五週間二圓 | 十五錢 |
| 三週間一圓廿五錢 | 十錢 |
| 二週分八十五錢 | 六錢 |
| 一週分四十五錢 | 四錢 |
| 三日分二十錢 | 二錢 |
| 一日分七錢五厘 | 二錢 |

●中將湯は各國藥店にあり無くば本舖へ申込あれ●東京市は配達し●遠國は配送すべし 本舖へ御注文の御方は病人の容体詳しく申込あれ●切手代用一割増の事

本舖 東京市日本市區通七丁目七番地(電話本局千九十七番) 津村順天堂本店

本舖 大坂市堺筋大寶寺町南入(電話東二百七十八番) 津村順天堂支店